

男は 痛い !

國友万裕

第1回

悪人

今号から連載に参加させていただくことになった。簡単に自己紹介をしておくと、ぼくはもうすぐ48歳。独身。職業は大学の非常勤講師。専門はアメリカ文学・映画・ジェンダー。ぼくは少年時代に重いトラウマを負い、いまだにそこから立ち直ってはいない。あえて、定職を見つける努力もせず、結婚もせず、女っけのない生活をしてきたのも、少年時代のトラウマを乗り越えることができないことが、ひとつの原因だった。自分を変えようと努力しなかったわけじゃない。ぼくは30過ぎてからの18年間で、10人以上のカウンセラーにつき、心療内科で薬もらい、男性運動にも参加し、念願になって、本も出した。人づきあいもたくさんしてきた。ぼくを可愛がってくれる先生も何人もいるし、一緒に飯や風呂に行く、友達も何人もいる。

とりわけ、大親友とは10年以上のつきあいだ。でも、その彼にさえ、ぼくはまだ少年期のトラウマを具体的には話していない。彼は援助職ではないし、一流の高校から一流大学に入り、エリートコースを生きてきた人だ。ぼくの過去を知ったら、もう友達ではいてくれないのではないかと、という心配がよぎる。ぼくは、少年時代に重い十字架を背負わされた。それが原因で、ぼくは、自分は半端者だという低い自尊感情から抜け出すことができないのだ。

今更、新たなカウンセラーを見つけても、もう得られるものはないだろう。心療内科の先生からも、「あなたはもうクライアント経験のプロだし、カウンセリングの限界だよ」と言われている。これからは自分に頼るしかない。援助に関連しているものだったら、条件は問わないとのことだったので、ぼくは、この連載を続けていくことで、自分を援助していきたいと思っている。

自己援助の方法として映画を使おうと思う。気

に入った映画、とりわけ男性主人公に同一化できた映画を主として使っていきたいと考えている。男性主人公に同一化できる映画は、ぼくの抱えてきた問題を、その主人公も共有しているということで、「つらいのは、俺だけじゃないんだ」という気持ちにさせてくれるからである。

さて、第一回は『悪人』（李相日監督 2010）を見て思ったことである。

ぼくが生まれたのは九州の熊本市。ぼくは京都の大学に入るまでの19年間、この土地で過ごした。『悪人』を見て、何よりも思ったのは九州の風土だった。これは僕が九州を背負っているから感じるのだろうか。ここには確実に九州の匂いがある。とはいっても、この映画の舞台となるのは、佐賀と長崎で、同じ九州でも、熊本や鹿児島ほど九州的な土地柄ではないと聞いている。佐賀は都会である博多に近いし、長崎は港町でバタ臭いイメージだ。

でも、これは九州らしい話なのである。原作・脚本の吉田修一も長崎の出身だし、製作者側も、九州の風土を描くことを意識していたのではないと思われる。主役の妻夫木聡（福岡出身）、深津絵里（大分出身）を始め、三石研（福岡出身）、宮崎美子（熊本出身）など、脇役も九州出身の俳優が多く出演している。

1. 男尊女卑という名の男性差別

ぼくが九州の出身だというと、たいていの人は、「じゃあ、九州男児なんですね。そうは見えないけど（笑）」と反応する。実際には、九州の人は、自分のことを九州男児なんて言わない。他の地方の人たちが勝手にイメージしているだけのことだ。男尊女卑的で、日本男児的で、寡黙な男というイ

メージがまず頭に浮かぶのだろうか？ 九州が男尊女卑であることは、ぼくも認めるのだが、しかし、ぼくが問いかけたいのは、「男尊女卑が、男にとって、良いことなの？」ということだ。

ぼくは、自分が男だってことを受け入れるのに膨大な時間がかかった。

普通の人は、そんなことは意識しないで生きている。人間の人生には、その人の素因と環境、それから運命が影響するとぼくは思っている。ぼくの場合は、たまたまジェンダー・センサティブな素因をもち、たまたま生まれ育った環境が超ジェンダー主義的な環境で、さらに悪い時には悪いことが重なるという運命で、ジェンダーにもがき苦しみ、結局、まだ引きこもりや不登校という言葉もない頃、自分の殻に引きこもってしまった。

ぼくは物心つく頃から、スポーツや喧嘩ができず、女の腐ったような子だと言われ続けた。しかし、小学校3年までは曲りなりに普通の男の子だったと思う。仲良し4人組で遊びまわり、仮面ライダーやウルトラマンに夢中になっていた。

そのぼくが、自分が男だということを理不尽に感じ始めたのは、小学校の4年生ころからだった。4年生になって組替えがあり、担任の先生が変わった。30代半ばの女の先生で、「男の子は将来、一家の大黒柱にならなきゃいけないのよ」が口癖。当然のように女子よりも男子に厳しくする。男子にのみあたえられる厳しい体罰の日々。顔が腫れあがるまで殴られた子もいた。一方で、女子はどれだけ反抗しても、殴られない。男はわずかなことでも、彼女の気分次第で殴られる。しかし、彼女に悪気はない。彼女は、「女よりも男のほうが大事、だから男子には厳しくしてあげているのだ」と思っている。「女はどっちみち、男にのっかっていればいいんだから、適当に甘やかしていればいい

のだ」と……。

運が悪いことにこの先生の担任は6年生まで3年も続いた。5年生の頃からだろうか。ぼくは次第に男子の仲間から外れ始めた。男子と遊んでいると殴られる危険性が出てくる。いつしか僕は女子たちと遊び始めた。女子と一緒にいたら、ちょっとくらい悪いことをしても殴られる危険性はなかった。まさか同じことをしているのに、男のぼくだけ殴って、他の女子たちは殴らないなんて、そこまで不平等なことは、さすがのこの女の先生でもできなかった。あの当時のぼくには、女の子たちがシェルターだったのだ。しかし、女子とばかり遊んでいるぼくを、他の女子たちは「おかま」とからかい始めた。確かに、あの当時のぼくは、半分は女子に同一化していた。

そして中学へ。中学になると、一気に雰囲気は変わる。女の世界から男の世界への移行。女性の先生が過半数の小学校から、男の先生が支配する教育へと変わっていく。男子生徒たちも、一気に男になっていく。そのなかで、女子に同一化していたぼくは、もはや女子の仲間にも入れない。他の男子とも同一化できない。自分の夢想の世界の中で遊ぶしかなかった。

ここで、また不幸な出会いがぼくを待っていた。中学2年の時にやってきた体育教師だ。大学を卒業して、教員採用試験に落ち続け、5年くらい浪人したらしい。まだ20代後半で、この時が初めての正式な教員としての就任だった。この人を始業式で見たときから、何らかのトラブルが起きそうだと予感していた。見ただけで怖いような番長のような風貌。人の気持ちを理解する気はない。俺が一番なんだ。俺のルールはお前のルールなんだという態度。

この教師が、男子全員上半身裸で体育の授業

ををすると言いだしたのは、受験を間近にひかえた中学3年の秋のことだった。ぼくは、女子に同一化していたので、元々、肌を見られるのは恥ずかしかった。プールの時間は仕方ないけども、普通の体育の授業まで上半身裸でするなんて、何の必然性があるのか。この先生曰く、「受験にそなえて、身体を鍛錬するため」とのことだが、これは何の根拠もない言い訳に過ぎないことは、中学生のぼくにもわかっていて。この先生はマッチョ・フリーク、男子全員を裸にして自分のマッチョ大好き欲望を満たそうとしていたのだ。

九州でも冬は厳寒だ。寒いつらさもあるが、何よりも、全員裸なんて言う状況は、恥ずかしいを通り越していた。男子校ならまだしも、女子たちの目がある。極めつけは、学校のグラウンドではなく、学校の外を裸で走らされたことだ。「いくらなんでも、行き過ぎだよ」と他の男子たちもぼやいていた。でも、彼らは恥ずかしいという感情よりも、男の一員でいたいという思いのほうが勝っている。それでやむなく教師に従い、上半身裸のまま外を走らされることになった。通りかかったおばさんたちがあきれ顔で見ていた。ぼくはというと、断固として裸になることを拒否し、必死の思いで教師に嘆願し、シャツ一枚を着用させてもらった。男であることを拒否したのだ。あの時のぼくを嘲笑う教師の顔。あれは教育者の顔でも、人間の顔でもなかった。男性的な支配力で周囲を威圧できる男は、どれだけ非人間的なことをしても、許されてしまうのだ……そのことをあの教師から教えられた。

ぼくは一気に自分の心のバランスを崩していった。受験前だというのに成績は一気に下降し、何度も職員室に呼び出される日々。母には悲しい顔をされる。クラスメートたちはますます遠い存在となった。志望ランクを落として、高校には合格し

たものの、ぼくは学校に行くことができなくなった。当時はまだ不登校なんて言う言葉はない。近所の人たちからは白眼視された。精神科に行っても話にはならず、地元の公立の相談所に通った。

ここでまたも不幸な出会いが起きる。担当のカウンセラーである。当時、30過ぎの男性。地元の高校から熊大を出て、そして、公務員になったみたいだ。おそらく、最初からカウンセラーになりたいなんていう気持ちはなかったに違いない。配属されてから、心理の勉強を始めたのだろう。頭もよくて、スポーツマンで、鈍感で、間違っても不登校になるような性格の人ではなかった。

ある時、ぼくはこのカウンセラーに、「ぼくは映画が好きだから、脚本家になりたいんです」と話した。もちろん、脚本家なんて誰でもなれる仕事ではないことは、ぼくだってわかっている、ただ夢として言ったことだった。ところが、思わぬ反応が返ってきた。このカウンセラーは、真っ青になって、「大人になったら、女房子供を食わせなきゃいけないのに、そんなバカなことを考えて」と必死になって、ぼくの夢を壊そうとするのだ。夢を持つこと自体が罪悪だとこの人は思っているみたいだった。ぼくは、この先生にスリッパを投げつけた。この先生は夢を見ることの価値をまったくわかっていない。そんなものは時間の浪費だと思っている。そして、「食わせんといかん」という言葉。この人は、「男子、扶養者たるべし」という考えを、何の疑問も感じずに受け入れていた。こんな人にぼくが心を開けるわけがなかったが、当時は熊本で他に少年のカウンセリングをやってくれる場所はなく、仕方がないから、2年ほど、ぼくはこのカウンセラーのところに通うことを余儀なくされた。

体罰に耐えろ！上半身裸になれ！！ 家族を食わせんといかん！！ こんなことを女子が言

われるだろうか。男であることは理不尽だ。九州が、男尊女卑であることは事実だと思うが、男尊女卑であることはむしろ男にとって悲劇だ。男は家畜のような扱いを受けるのに、一方で、男は女よりも偉いんだという価値観を内面化していなくてはならない。なんという矛盾。

ぼくの九州での体験を話すと、「やはり九州は保守的だねー」「一体、いつの時代のことなの？」「ぼくたちの頃は体罰なんてなかったよ」「皆の前で、裸になれてー。熊本ってそんなとこななの？」「そのカウンセラー、ちょっと変だよ。カウンセラーとしては下の下だよ」と驚きの言葉を漏らす人は少ない。

もちろん、ぼくの経験は個人的な経験だ。九州に育った人が必ずしも同じ目にあってきたわけじゃない。他の地方であっても、同じような体験をした人はいるに違いない。また人間の心というものは変わるもので、出会う時期が違っていたら、ぼくは、九州の人たちを受け入れることができたのかもしれない。そのことがわかっていながら、九州を未だに蔑視しているぼくは大人げないのかもしれない。自分の世界を狭くしているのかもしれない。しかし、ぼくの九州に対する憎しみは今も消えてはいない。ぼくの九州での少年時代は、不幸な出会いにばかり満ちていて、幸せな出会いは思い出せないくらいに少ないのだ。

2. 怒ることしか許されない男たち

ぼくは、子供の頃、「男は三年に三口」という言葉を教えられた。これは全国的な言葉なのかと思っていたら、そうではないらしく、関西の人たちは、そんな格言聞いたこともないという人もいる。

九州では、男は寡黙でなくてはならない。一般

に九州の男は、感情表現が下手だし、それを禁じられる。「男は泣いちゃいけない」「へらへら笑っちゃいけない」……『悪人』で、まず九州らしさを感じたのは、主役から脇役の人物にいたるまで、男たちはほとんど泣かない・笑わないということである。

娘の佳乃(満島ひかり)が殺された後、父親の石橋佳男(柄本明)は、いつまでも取り調べられない警察を激しく怒った後で、男泣きにむせぶ。また、1シーンだけ登場するバスの運転手は、殺人者・清水祐一(妻夫木聡)の家族としてマスコミに追いかけられる祖母房枝(樹木希林)に、「あんたが悪いわけじゃなかったけん。しっかりせないかんよ」と言葉をかけ、思いやりを示しながら、顔は彼女のほうを見ようともせず、厳しく叱ったような言い方をする。男たちは、泣きたくても、やさしい感情をもっている、表向きは怒るという表現しかできないのだ。もっとも、普段は怒ったような顔の男たちだからこそ、男泣きや思いやりのある言葉が、よりいっそうに真実味を帯びて感じられることは確かで、九州男児が、男性からも女性からもかっこ良いと見られてきたのは、そういう部分なのだろう。運転手の横顔に既視感があって、「九州は相変わらずだなあ」と苦笑いしてしまった。

映画の男性登場人物のなかで、わずかに泣いたり、笑ったりの場面が出てくるのは、佳乃が好きになる、金持ちの大学生・増尾圭吾(岡田将生)だが、彼が泣くのは、警察に佳乃殺しの容疑者として捕まる場面であり、「男のくせにみっともなく泣きやがって」というセリフが出てくる。一方で、彼が楽しそうに笑うのは、容疑がはれて、死んだ佳乃を「あんな女……」と嘯きながら、仲間と盛り上がっている場面である。死人に平気で鞭を打つ、彼の無神経さに思わず激しい反発を示す同級生が

描かれる。すなわち、彼の泣く・笑うという行為は、むしろ軽薄な泣き笑いとして描かれているのだ。

主役の祐一の台詞もきわめて少ない。妻夫木聡といえば、息子にしたいような、可愛らしい好青年というイメージがあって、『ウォーター・ボーイズ』(矢口史靖監督 2001)『ジョゼと虎と魚たち』(犬童一心 2003)など、他の映画では、むしろ饒舌で表情豊かな役が多いのだが、この映画に限っては、例外的に無口で無表情である。彼にとってはイメージチェンジの役であり、この話自体も、彼の他の映画でのキャラクターがその背後に見えるからこそ成り立つ。妻夫木は悪人には見えないし、怒ったような顔を男の美学とする男にも見えない。彼をこういう表情にしてしまったのは、やはり、九州なのではないかと、アンチ九州のぼくは、考えてしまうのである。

3. 遠い東京

主役の祐一と光代(深津絵里)を結びつけるものは、出会い系サイトである。しかし、2人とも出会い系サイトで出会った相手と遊ぶような性格の人物じゃない。男のほうは仕事が終わると、風呂と飯と病気の祖父のために病院通いするしかない土木作業員。女のほうは、同居している妹は彼氏がいるのに、自分はひとりでケーキをかじるしかない紳士服店勤務の女性。いまだき珍しい大和撫子風のしとやかな女性として登場する。この2人がなぜ出会い系に頼るかというと、2人とも自分から積極的に異性と付き合えるような性格ではないからである。

映像的に印象的なのは、1人でケーキをかじっている光代の表情が、アップで丁寧に撮られ、ふと妹の部屋をみると布団がよじれている。すなわ

ち、彼女の留守中に妹が彼氏とセックスをしていたことがわかる。パシッと障子をしめる彼女。この一場面で彼女が性体験が少なく、古風な女性であることが示される。

祐一を描く場面で印象的なのは、祐一の大叔父である憲夫(三石研)とのやりとりの場面だ。パンツ一枚の祐一が外風呂へ向かおうとしていると、憲夫から声をかけられる。恥ずかしそうに身体を隠しながら、祐一は俯きがちに風呂へと向かう。頭はヤンキーふうに金髪に染めておきながら、自分の貧弱な身体を隠す祐一は、シャイな大人しい青年であることが示唆される。また外付けの風呂がついているところも、九州らしいのではないかな。

光代は妹を世話する立場にいる、祐一は祖父を世話する立場にいる、すなわち、家族の犠牲になっているような存在だ。この2人が恋に落ちるのは、何よりも同じような境遇であるがゆえにシンパシーを感じるからだろう。

2人が駅で初めて会う場面では、いきなり、祐二から「ホテルへ行こう」と誘われ、光代は戸惑いながらもそれに応じてしまう。この時、祐一は、佳乃を殺した後なので、どうすることもできない思いをセックスで紛らわしたいという気持ちもあったに違いないが、それと同時に、九州男児らしく口下手な彼は、光代のお喋りに上手く付き合っていく自信がないように見える。出会い系サイトに頼るのも、出会い系に登録するような女性だったら、セックスを求めても、文句は言わないだろうという思いもあるからだろう。また一方の光代も、これまでの大人しい生活からどこかで抜け出したいという願望をもっていたがために、受け入れてしまう。彼女自身も迷ったように、真面目な交際相手を求めて、出会い系サイトに頼るなんて、「ダサい」のだ

が、そうでもしなければ、友達も見つからないのが彼女の現実なのである。

車のなかでの2人の会話は2人を心情を見事に表現している。

光代:私、金髪の人と付き合うなんて思わなかった。

祐一:いや、鏡見たら、急に变えたくなくて。

光代:その気持ちわかる気がする。

2人とも閉塞的な生活から抜け出せない自分から脱皮したい。その思いが胸に鬱積しているため、突然、火種に火がついたように柄にもないことをしてしまうのである。出会い系サイトや金髪は、逆説的に彼らの抑圧された生活を物語ることになる。

この映画では、祐一が佳乃の下着姿の動画を見つめている場面や、光代からのメールを受け取る場面などに携帯もひとつの重要な小道具として使われている。今は以前にも増して、コミュニケーションや情報が伝わるのは速くなっていて、地方にいてもすぐに情報が得られることは事実だ。しかし、その一方で、地方には文化イベントや娯楽施設が少ないため、文化を十分にエンジョイすることもできない。また九州の場合は、中央から離れているため、東京の情報は知っていても、東京まで頻繁に行くことはきわめて難しい。

ラブホテルでセックスをした後、ふたりはこういう会話を交わす。

光代:ねえ、ここに来る途中、安売りの靴屋があったやろ。あそこを右に回ってまっすぐ田んぼの中を進んだところが私の高校だったとよ。そのちょっと手前に小学校と中学校……今の

職場もあの国道沿い………なんか考えてみたら、私って、あの国道から全然離れんやっとなねえ。あの国道を行ったり来たりしよっただけで………。

祐一：俺も似たようなもん

光代：でも、海の近くに住んどっとやろ？ 海の近くとか羨ましかあ。

祐一：目の前に海のあったら、もうそん先どこも行かれんような気になるよ。

光代が勤務先のウインドウから、ふと雨のなかに放置されている一台の自転車を見つめる場面が挿入されるが、この自転車は光代や祐一の状況を物語る指標である。人通りもないところにボツンと置かれて、雨に濡れながらも、動くことはできない自転車……それは2人に似ているのである。

もう20年以上前に、根岸吉太郎監督の『永遠の1/2』（1987）という映画があった。これも九州の話だが、今でも覚えているのは、大竹しのぶが津田塾大学卒業後、九州に戻ったという設定になっていて、そのことを彼女が恋人の時任三郎に話すと、「すごいなあ」と彼が言う。「東京出るなんて」と……。「大学のことじゃなくて……」と大竹。

彼女は、おそらく優等生で、東京の大学に出してもらえたのだろう。しかし、それほどの優等生でもなかった彼のほうは、東京なんて夢の夢なのである。

思えば、地方分権は、ぼくが学生の頃から訴えられていた。なのに、東京一極集中は緩和されるどころか、拍車がかかるばかりだ。埼玉や千葉、栃木や茨城は東京のサテライト。さらにサテライトは広がっていて、今となっては、山梨や長野から

東京に仕事で通っている人も少なくない。しかし、九州は東京のサテライトにはなり得ないだろう。『悪人』では、都会と地方の対比は描かれてはいるが、東京ではなく、博多との対比ということになっていることに注目してほしい。東京や大阪は距離的に遠いため、九州人には博多が東京に代わる華の都会である。

そうそう、ぼくが大学に入るときのことだ。予備校の先生は、保護者も一緒に進路指導面談で、母に言ったものだ。「博多の西南学院大学でもいいんじゃないんですか？ 東京や関西に出るよりも、博多くらいのほうが安心ですたいね」

4. 男性被害！？

『悪人』というタイトルがついたこの映画だが、主役の殺人者・祐一は、同情的に描かれる。彼が「悪人」でないことは言うまでもない。それでは、一体、誰が悪人なのか？ 誰とも言えないだろう。おそらく原作者も監督も、誰を悪人だとも思っていない。人間は誰しもある面で加害者（悪人）であり、ある面で被害者でありうるということが、『悪人』の描きたいところではないかと思われる。

この映画の優れたところは、脇役にいたるまで、ひとりひとりの登場人物を存在感たっぷりに描きこんでいて、それぞれの人物の生活感が垣間見えるような演出と演技がされるため、誰が悪人とも断言できないようなニュアンスを残しているところである。

強いて言えば、おそらく多くの観客たちは、殺された（ということは、もっとも被害者であるはずの）佳乃が一番悪いと感じるだろう。あるいは、彼女を夜道に放り出してしまった圭吾に批判の目を向けるかもしれない。

事件の起きた夜。祐一と会う約束をしていた佳乃は、偶然、圭吾と会って、祐一はほったらかしにして、圭吾の車に乗ってしまう。佳乃は圭吾が好きなので、助手席から運転している圭吾にあれこれ話しかけるのだが、圭吾は彼女の態度がなんとなく気に入らない。「にんにくの匂いがする」と餃子を食べてきたばかりの佳乃を咎め始め、「アンタなんか安っぽか。アンタ、なんでよう知りもせん男の車に、こうやってひょこひょこ乗ってくるわけ？ 女なら、普通断るやろ。アンタみたいな女、正直、俺タイプじゃないっていね。降りてくれん？ 自分で降りんなら、俺が蹴り出しちゃうのか？ その変にたっとれば、誰か乗せてくれるさ。アンタ、誰の車にでも乗るんちゃろ」と、彼女が女性でありながら、性的に放逸で、男への警戒心などが全然ない女性であることに嫌悪感を催し、強引に彼女を車から降ろしてしまう。

夜道でひとりしゃがんでいる佳乃を車で追ってきた祐一が、「大丈夫？」と自分の車で送ろうとするのだが、佳乃は、「人殺し！ 警察に言ってやるけん！ 襲われたって言ってやる！ 拉致されて、レイプされそうになったって！ 私の親戚に弁護士おるっちゃけん。馬鹿にせんでよ！ 私、あんたみたいな男と付き合うような女じゃないっちゃけん！！ あんたなんか誰が信じるもんか」と冷淡に突き放す。その後、怒りにかられた祐一は、佳乃ともみ合いになった末、心ならずも彼女を殺してしまう。

佳乃はセックスを楽しむことに対しての罪悪感がまったくない女性で、祐一は、佳乃に言わせればセックスが上手いことだけが取り柄なので、セックスフレンドと割り切って付き合っていたのだ。かつては、男は愛がなくてもセックスができるが、女はセックスだけを切り離すことはできないのだと言

われたものだ。しかし、『婚前特急』（前田弘二 2011）など、最近の映画では、心と身体を切り離して考える若い女性は、むしろ現代的に肯定的にとらえられたりもする。フェミニスト的に考えるならば、男は複数の女性とセックスを楽しむことが許容されるのに、女には許されないというのは、男女不平等である。佳乃は性に対する考え方が自由奔放なだけのことで、何も悪いことはしていない。むしろ、上にあげた圭吾の台詞には、彼の男尊女卑的な古い女性観がくみ取れて、彼が事件の原因をつくった人物であると思う人もいるだろう。

しかし、祐一は、どうだろうか。彼は佳乃の奔放さを咎めてはいない。彼は、むしろ、彼女が安易に約束をやぶったことに傷ついてしまったのだ。

祐一は、子供の頃に、両親が離婚し、母からはほったらかしにされ、祖母に育てられたという設定になっている。幼い祐一は、母親との約束通り、灯台を見ながら、母が戻ってくるのをひとりぼっちで待ち続けた。しかし、母は結局、彼を迎えにはこなかった。祐一は、「お母さんは戻ってくる！」と大人たちに訴えたのだけど、誰も信じてくれなかった。そのトラウマがいまだに彼を苦しめている。一番、自分を愛してくれるはずの母から捨てられる、さらに誰からも信じてもらえない、俺は誰からも愛されない人間なのか……その孤独感は長い間、彼のなかに亡霊のように住みついていたに違いない。そのため、祐一との約束を平気で破り、さらに「あんたなんか誰が信じるもんか！」と叫ぶ佳乃に、祐一は母に捨てられた記憶をオーバーラップさせてしまい、激しいフラッシュバックの末に彼女を殺してしまうのである。言いかえれば、祐一は、女性から2度の精神的なレイプを受けてしまったのである。

ぼくは、以前、あるフェミニストから、「被害者の

権力」という言葉を教わったことがある。「私たち(女)は、被害者なのよ。あんたたち(男)は加害者なんだから、文句を言っても信じてもらえないのよ」という理論だ。上にあげた佳乃の台詞は、まさしく被害者の権力の濫用の一例である。もっとも、九州の女性の場合は、被害者の権力というよりも、「弱者の権力」を悪用するケースが多いように思える。なるほど、確か長崎出身の村上龍も言っていたと思うけど、九州の女は「男でしょ!」「男のくせに…」という言葉が頻繁に口にするし、男にプレッシャーをかけようとする傾向が強い。九州は、表向きは男が威張っているように見えて、実は女も男尊女卑を利用しているというのが実情なのだ。

フェミニズムを批判するわけではないが、フェミニストが「男・加害者 女・被害者」という図式を広めてしまったため、「女・加害者 男・被害者」というケースはなかなか認めてもらえない。それを真正面から描いている映画は『それでもボクはやってない』(周防正行監督 2007)だが、『悪人』にも、女性に対する批判が垣間見えてくる。日本は欧米に比べれば、ジェンダー意識が遅れていると言われるが、日本でも徐々に男性被害は映画に描かれるようになってきているのである。

祐一の母親・依子は、映画では1シーンしか出てこないが、余貴美子が存在感たっぷりに演じている。祐一は、房江たちの目をしのいで、時々、彼女と会っていた。「私だって、祐一には悪かことしたと思っている。だけん今でも会うたびに、涙流して謝っとるよ。あん子はお金せびるとやけんね。ぎりぎり生活しよる私から1000円でも、2000円でも!!」と久々に房江の前に現れた彼女は、自分もつらい思いをしているのだと訴えるのだが、実は、原作には、さらに説明が加えられていて、

祐一が母にたまに会って1000円、2000円せびるのは、母を被害者に見せるための彼なりの思いやりであることが語られている。「どっちも被害者になれんですから」と……。祐一は自分から加害者の役を買って出てしまっていたのだ。

映画の終盤、警察に追われる祐一と光代だが、ここで、祐一はなぜ、衝動的に光代を殺そうとするのか? それは彼女を共犯者にしたくないからである。ここでも、祐一は、自分が加害者になろうとするのだが、それは何故なのか? 深読みをするならば、九州の男尊女卑的な教育のせいで、無意識のうちにそういう選択をしてしまうのではないか。九州は、男が被害者になることは許されない。そうであるのならば、光代には迷惑をかけたくないと……。

祐一は、光代と初めてホテルで過ごした後で、「これしかないんだ」とすまなさそうに彼女にお金を渡す。この場面でのセックスは、彼女の合意のうえでのことであり、お金を払わなくてはならないということはない。むしろお金を払うと、彼女を娼婦扱いしたことになり、彼女の自尊心を傷つけてしまう。しかし、祐一が律義にお金を払ってしまうのは、自分に自信がないからだ。俺みたいな男は、お金を払わなければセックスはさせてもらえないのだ……。

要するに祐一は、自尊感情が低いのである。そして、祐一の自尊感情の低さは、母に捨てられたトラウマが根源的な原因であると思われる。そうであるのならば、この映画の悪人は依子とすることもできるかもしれない。「早くに、光代と出会っていたら……」というセリフを祐一は口にするが、男に自己肯定感をつけさせるのは女性(光代)であり、またその肯定感を潰してしまうのも女性(依子・佳乃)なのである。そのことを女性たちに考え

て欲しいなあ。

男性ジェンダーの被害者であるぼくは、基本的に女性に対して厳しい。したがって、すぐそういう解釈をしてしまいたくなる。でも、それを言うとフェミニストから、「あなたが女性を下位の者であるべきと考えているから、そう感じるんだ」と怒られてしまう。「別に下位の者とは思っていないよ」と訴えても、納得してもらえない。フェミニストを怒らせずに、ぼくの気持ちを訴えていくには、「男は痛い！」ということ、映画という多くの人が共有する媒体を通して、あの手この手で語っていくことだろう。

次号でも、そういう作品をとりあげてみたいと思っている。本当に男は痛い！！

(この文を書くにあたって、映画の他に『悪人(上下)』『悪人 シナリオ版』(朝日文庫)を参照した)

。





1. 男たちのジェンダー依存

大学の頃だ。飲み会で、他の大学生たちと話した時に、結婚の話になった。その時、京大3回生のある男子学生がこういうのだ。

「ぼくは、結婚したら奥さんには働いてほしくないんや。給料が安くても、安い中でやりくりして欲しい。『俺が食わせてやっているんだ』という気持ちを持っていたいからね」

立命大の5回生は、大学を出たら、故郷の北陸に帰って、お父さんの仕事を継ぐことになっていて、「俺は、大和撫子が好きだからね。だから働いて欲しくないし、俺が稼ぐから、テニスだったり、料理したりして、過ごして欲しい」

ぼくは、話を聞きながら、「男って、健気だなあ」と感心してしまった。ぼくは当時からジェンダーに囚われていたので、男が女子供を扶養しなくてはならないという考えには反発していた。しかし、彼らの前で、そのことを口にすることはできない。「俺は、やっぱり男じゃないんだなあ。オカマなんだ」と思って、悩んだものだ。時は、華の80年代。今みたいな就職難でもないし、皆、楽天的だったということもあるのだろうが、ぼくはそういう考えには絶対になれなかった。というか、そういう考えができる男に憧れながら、同時にそういう考えに激しく抵抗するアンヴィバレンスを抱え込んでいたのだ。

結局、ぼくは、その抵抗をずっと持ちこしてしまい、結婚どころか、ほとんど女っ気のない、かといってゲイになるわけでもない、性的不能者のような人生を歩んできた。

社会はその間に変わって行った。バブルがはじけ、不況が長引いて、先行き不透明な世

の中になり、女性が仕事をしなければ、やっていられない家庭が今では大半だろう。とはいうものの、今でも男たちの男性ジェンダー依存（男らしさを演じる自分に依存すること）は終わってはいない。

ぼくが社会運動で出会ったある30代の女性は、若くして結婚して、子供が2人。夫さんは仕事を真面目に頑張っているのだが、それでも生活は苦しい。「じゃあ、私が働くから」と彼女がいうと、「俺は女には働かせたくないんだ」と言われるのだそうだ。「でも、頑張ってはるからね」と彼女ももうそれ以上夫を咎めならしい。

また、同じところで知り合ったある40前の女性は離婚経験あり。女手一つで子供を2人育てている。別れるまでは大変だったらしい。「私がどれだけ、彼の身体をゆすぶって、彼の心を聞き出そうとしても無駄なのよ。女を殴ったり、荒っぽく扱ったりしちゃいけないだと思ってはるから、私がどれだけ酷いことをしても、反応してくれないし……」と彼女は訴えていた。彼女は殴ってくれるくらいの男のほうがよかったのだろうか。

もう一人、50くらいのフェミニスト女性とも会ったのだが、彼女は多少の内職はしているもののほとんど専業主婦。夜は原則として外出禁止だと言っていた。旦那は学校の先生なのだが、家に帰ったときくらいは、良い奥さんでいて欲しいらしい。3人子供がいるのだが、もう皆、大学生くらいの年になっているみたいだし、夜出歩いても問題はないようにも思うのだけど……。やはり、女は家にいるものと思っているのか。「男は大変だからね」と彼女は、フェミニストでありながら、

そういう夫を受け入れている。

男たちのジェンダー依存。皆、つらいくせに、「俺は男だから」と虚勢をはって、頑張っている。女子供を養ってやっている。女に暴力は振るわない。ぼくには、こういう考えは理解できない。女性が働いてくれるんだったら、生活は楽になる。夜、家にいるから、良い奥さんというものでもないだろう。むしろ、家に帰ってからまで、うるさく言われたんじや、自分の時間は全然なくなってしまう。逆DVされても、女は殴るべきじゃないと思っているなんて、マゾなのかよー。俺だったら、女から殴られたりしたら、その時点で別れるけど…。

ある男性が、「幸せは、女と子供のためのものなのだ」と言っていたけど、本当にそうだなあ。昔、「酒と涙と男と女」という歌がはやったけど、ぼくはあの歌には虫唾が走る。明らかに女よりも惨めなのに、虚勢を張ろうとする男の歌だ。そして、この男は、虚勢をはるのがイコール男だと思っている。

ぼくは、こういう考えは大嫌いだけど、その一方でこういう男になっておけば幸せだったんだろうなあと思う。逆説的だけど、女子供が幸せならば、男はどうでもいいんだと虚勢をはることが男の幸せなのかもしれないのだ。ぼくは、生まれてこのかた虚勢を張ったことはほとんどない。そして、ぼくは、決して、幸せではなかった。

2. 男のためのメルヘン

『象の背中』（井坂聡監督・2007）はそれほど評価の高かった映画ではない。ぼくが、これを見たのは、ご最良の役所広司の主演だ

からだった。彼の主演作はほとんど見ている。特別美男子でもないけど、なんとも人間味があって、俺もこんな男になりたいなと思う。この映画でも、風呂に入る場面やベッドシーンで、役所の裸の場面があるのだが、決してシェイプアップされた美しい身体というのではなく、普通のおじさんの身体だ。そこが彼の魅力だ。

ぼくは渡辺淳一の世界が苦手だが、役所が主演した『失樂園』だけはよかった。先日亡くなった森田芳光の演出のおかげでもあるのだけど、渡辺の作品が苦手な人にも見れる映画になっていた。『失樂園』は言ってみれば、中年男性の性愛のメルヘンである。ぼくの知り合いの女性は、渡辺淳一の作品のヒロインは男がつくりだしたお人形だという。あんな女、現実にはいない。男の都合でつくられた女たちなのだ。でも、仕事に疲れた中年男がひと時のカタルシスを味わうには、それはそれでいいのだろう。映画は娯楽なのだから…。

『象の背中』も中年男性のメルヘンである。『失樂園』のようなエロティックな話は苦手なタイプの中年男性向けメルヘンとでも言うべきか。こんな作り話があるのかと思うくらい綺麗事だけど、ぼくは、役所に感情移入して、楽しい気持ちで映画を見ていた。映画は、役所が演じる主人公・藤山幸弘（これも平凡な名前だねー、笑）が、肺がんで、余命半年と宣告されるところから始まる。

彼は、不動産会社の部長で、妻・美和子（今井美樹）と、息子（塩谷瞬）と娘（南沢奈央）の4人家族。東京の閑静な郊外の一戸建てで暮らしている。注目して欲しいのは、会社と

一戸建ての家の外観が、見上げるようなショットでとられていることだ。東京の大きな会社、坂を登ったところにある一戸建てのお家。この人は社会的勝ち組であり、エリートコースを歩んできた男性であることが示唆される。

この後、映画は、彼が残された半年の間に、これまでの自分の人生で意味のあった人たちに会っておこうと、初恋の女性やら、高校の時の友達やら、1人ずつ会いにいくエピソードが積み重ねられていく。

「俺だったら、誰に会うだろうなあ」と映画を見ながら思った。ぼくは、過去の人で、あまり会いたいと思う人はいない。いや、どっちみち死ぬんだったら、会って、殴ってやりたいと思う人は何人もいる。だけど、昔好きだった女性や友達ということになると、何年かたてば忘れてしまう。どれだけ好きだった人でも、自分とは関係ない人になってしまう。人間は薄情だし、愛よりも憎しみのほうを覚えているものなのではないか。

しかし、そう思うのは、ぼくが不幸な出会いにばかり満ちた少年時代を送ったからで、普通の男性にとっては、少年時代は甘酸っぱいは幸せな思い出なのかもしれない。羨ましいなあ。

（1）中学の時の初恋

最初に、幸弘は、中学の時に淡い恋の告白をした女性（手塚聡美）にもう一度会いに行く。戸惑いながらも、彼に優しく接してくれる彼女。

この場面だけでも、ぼくは何やら胸が痛いような、嫉妬の思いにとらわれる。ぼくは、中学の頃、女の子たちから激しい苛めにあっ

た。ぼくが不登校になったのは、前号でも書いたとおり、先生たちとの確執のせいもあるのだが、ぼくの自尊感情をつぶしていったのは、クラスメートの女の子たちだった。ぼくは今で言えば発達障害のような子で、女の子たちから「気持ち悪い」と言われ続けた。どういうわけか、ぼくは男の子からいじめられたという記憶はほとんどない。もっぱらぼくを嫌っていたのは女子だった。「気持ち悪い」と言われても、自分ではどこがどう気持ち悪いのかわからない。ぼくが女性全般に憎しみを抱くようになったのは、男子からは「気持ち悪い」なんて言われたこともないのに、女子からは執拗に「気持ち悪い」と言われ続けたからである。女は冷酷だ。女子から「気持ち悪い」なんて言われることが、そして白眼視されることが、男の自尊心をどれだけ傷つけるのか。中学生にもなれば、それくらいのはことはわかりそうなものなのに……。

これを訴えると、たいていの女性は、「それは一部の女性でしょう」と反論するのだが、ぼくを苛めたのは一人や二人ではない。複数だ。ぼくが男よりも女のほうが性質が悪いと思うのは、女性の場合だと、誰か一人から嫌われると、他の女性にまでその思いが伝染して行って、共同妄想になっていくからである。女たちの団結は怖いのだ。

だけど、おそらく幸弘はそういう経験もないのだろう。

（２）高校時代は野球部

幸弘は、高校の時は野球部で、この映画ではかつての野球部仲間、今は酒屋のおじさんとなっている同級生（高橋克美）とキャッ

チボールしながら話をする場面が、カメラを引いて、両者を画面に収めながらかなりの長回しで描かれる。幸弘のほうがレギュラーで有能なメンバーだったことも台詞で語られる。

この場面なんかは、ぼくはもう羨ましくて、心がはちきれそうになってくる。「俺も、こんなふうに友達とキャッチボールを、一度でいいからやってみたかったなあ」という切ない思いがこみ上げてくるのである。

ぼくは運動神経ゼロで、キャッチボールなんて未だにできない。ぼくはつくづくスポーツが人並みにできるように生まれついていたら、こんな人生を歩むことはなかったと毎日のように思っている。高校くらいまではスポーツができるやつのほうが何かにつけて得だ。子供時代に男のヒエラルキーをつくるのは、主としてスポーツ能力である。

社会に出てしまえば、スポーツ能力は関係ないかもしれないが、ぼくは中学まで、そのことで苦しんで、結果、高校に行かれなくなってしまった。スポーツができなかったゆえに、社会に出る以前に挫折してしまっているのだ。スポーツが得意だった人には、スポーツができない男がいかにかンデを背負わされるかはわからない。男は、スポーツで男の世界を学んでいく。チームプレイや友情、上下関係やホモエロス。それは社会のホモソーシャルイズムに相通じていて、スポーツの経験のある奴は、男同士の関係を自然な形で学んでいるので、男社会のなかを渡って行きやすい。また自分の男としてのアイデンティティも、スポーツをする中で生まれていく。

ぼくは子供の頃、スポーツの塾があればなあと思ったものだった。国語や算数だったら

苦手ならば、塾でどうにかある程度はカバーできるだろう。だけど、スポーツは、塾もないし、参考書もない、できない子に手とり足とり教えてくれる人なんて誰もいない。学校の体育教師は、ただ威圧的に怒鳴って、できない子の自尊心を傷つけるだけだ。だからこそ、できる子とできない子の差がどんどん開いて行って、ぼくのような男の子集団の落ちこぼれを生み出してしまうのだ。

でも、幸弘はおそらくスポーツも得意だったのだろう。

（３）息子と男同士の会話

幸弘の家族は、妻と子供が２人。しかも、子供は、息子と娘が一人ずつ。本当にバランスのとれた絵にかいたような家庭だ。

幸弘が最初に自分のがンを打ち明けるのは息子である。「お母さんたちには言わないでくれ。お前には話しておく。男同士だからな」というセリフが出てくる。男同士ねー。ぼくも父と息子の男同士の絆には憧れるけど、現実には、フロイトのエディプス・コンプレックスを引き合いに出すまでもなく、父親と息子は上手くいかないというケースのほうが多くて、ぼくも、２０歳くらいの頃までは、父に反発していて、ほとんど口もきいていない。こういう心のつながり合った父子になれるなんて、羨ましいなあ。

娘も、お父さんに対して、従順で素直。彼女は、父の様子がちょっと変だということに気づいて、「何かあったの？」と聞き出そうとするのだが、幸弘ははぐらかして、教えようとしな

妻や娘、すなわち女には自分の悩みを打ち

明けない。男同士だけで処理しよう。こういうのってカッコイイと思うけど、ぼくは、引きこもりだったから、つい最近まで、母ぐらいしか話を聞いてくれる人はいなかった。いい年をして、マザコンみたいだけど、仕方がなかったのだ。

幸弘は本当に幸せな人だ。

（４）敬語で話す妻・ため口で話す愛人

また妻の美和子が、幸弘に対して、敬語を使うのもすごいと思う。「……だったんですね。」「私、あなたがいなかったら、どうすることもできません」等など。今時、こんな女が本当にいるのかねー。また、この２人は寝る時も、狭いシングルベッドで２人で寝ているのだが、ぼくが結婚するとしたら、妻とは別々のベッドで寝たいと思う。だって、寝る時まで一緒に息詰まっちゃうし……。身体も動かせない。喧嘩しているときなんかだと、こんな状態じゃつらいだろうなあと思う。

さらに幸弘には愛人がいる。彼女は敬語ではなく、ため口で話すのだが、それでも、今時の女性としては、女性的な礼儀正しい話し方だ。彼女は彼に安らぎをあたえ、なおかつ何も要求しない天使のような愛人だ。

普通だったら、「あんた、愛人とは別れてください！」「早くに奥さんと離婚して！！」と妻と愛人が喧嘩しても可笑しくはないのだけど、この映画の場合は、奥さんも愛人も、彼のことを理解していて、お互い愛人や妻の存在を知っていながら、そのことを追求しようとしな

愛人と妻がホスピスで対面する場面、「ミネラル・ウォーター切らしているから、買ってくるわ」と妻は席をはずす。その後、海を見つめながら、佇んでいる彼女の後姿が写される。彼女は夫の愛人が来ているのに、見ないふりをして、自らの愛を保とうとするのである。こういう女性はしばしば存在する。嘘をついてでも、愛人のことはないことにしてしまうのである。

(4) 泣いて馬謖（ばしょく）を斬る

仕事の関係者とはどうか。彼は仕事で、立场上仕方がなかったとはいえ、他の小さな会社の男・高木（笹野高史）に非情なことをしている。彼とたまたま会い、2人で食事をして語り合った後、「許してくれ」と路上で土下座して謝る幸弘。本当に男は悲しいなあ。自分の保身のためには時として、罪のない人を切り捨てざるを得ないときがくるのだ。ここで幸弘は路上で何度も蹴りつけられる。しかし、ここでも、高木は幸弘のつらさも理解したうえで、でも自分にとっては幸弘は悪い男であったがゆえに蹴るわけで、これは報復と言うよりも、贖罪の蹴りなのである。男の世界では、しばしば、「泣いて馬謖（ばしょく）を蹴る」ことをせざるを得ないときがでてくるのである。同じ男だから、そのことも高木は理解している。

会社の上司や同僚も、2人で食事をしたり、彼の希望をとおしたり、実際の管理職の世界はもっと汚いんじゃないかと思うけど、情の部分の失っていない。しばしばサラリーマンは企業戦士と言われるが、企業に勤めるサラリーマンの男同士って、戦友愛のようなもので結ばれていて、そこはかたない男同士の優

しさやホモエロスが漂ってくるのである。

(5) 父への反抗

幸弘は、次男だが、父に反抗して、12年間実家に帰っていない。父の命日にもずっと顔を出さず、代わりに妻の美和子が、幸弘には内緒で命日にいっていたということが、兄（岸辺一徳）との会話の中で語られる。ここも長回しで、スイカを食べながらベンチに並んで話している2人をたつぷりと見つめていく。キャッチボールの時と同じ演出だが、違っているのは、先のキャッチボールでは、男2人が（当然のことながら）向かい合っているのに対し、ここでは2人が同じ方向を向いて、時々、チラリチラリとお互いのほうを見るという演出になっていることである。これは2人が愛し合っているのだけども、ちょっと気まずい関係であることを示す演出である。

ここで交わされる会話で、幸弘が、外に愛人をつくっていた父に反発していたことが明るみにでるのだが、そういう幸弘自身も父に似て、愛人をつくってしまっているのである。心理学的に言えば、親と同じ脚本を生きているとでもいうべきだろうか。

愛人をつくって、親に反発しているなんて、男の身勝手だなあと思う人もいるだろうか。いや、そんなことはない。男の場合は、ちょっとぐらい不良のほうが、魅力的なものだ。最近になって小谷野敦が『昔はワルだった』と自慢するバカ』という本を出した。まだ読んでいないのだが、このタイトルだけで、小谷野さんが言わんとすることはなんとなくわ

かる。

ぼくは子供の頃、スポーツや喧嘩ができないうえに、気が小さかったため、悪ガキではなかった。しかし、悪ガキになれるやつが羨ましかった。そういうやつのほうが、先生からは怒られるが、男としての魅力はあるからだ。全然、ワルな要素のない真面目一徹なんて魅力がない。もちろん、極度のワルはそれはそれで困るが、適度に愛人と遊んで、適度な不正もして、適度に親に反抗して、しかし、家族の前ではいい夫、いい父親を貫いている幸弘はむしろ何も影のない男よりも、好いたらしい男である。

「俺、本当は怖いんだ」と兄の前で泣く幸弘。この人、考えてみると、女性たちの前では泣かないし、自分のつらい気持ちを打ち明けるのは、息子、兄、ホスピスの他の男性患者など、もっぱら男である。これまた綺麗事というか、現実には女性のほうが気持ちを受け止めてくれるので、女性相手のほうが愚痴を言いやすいようにも思うのだが、図柄から言った場合は、男の前でつらい気持ちを吐露する男のほうがかっこよく見える。女には甘えていない、余計な心配をさせていない。そういう男気を感じさせるからである。

(6) 煙草

幸弘は、喫煙者だ。いくつかの場面で、煙草を吸う人物であることが示唆される。彼の病気は肺がんだが、肺がんは煙草が原因になることが多いことは知られていることである。煙草は、ストレスがたまるから吸うわけで、男の人生を全うするには相当のストレスに耐

えなくてはならない。耐えられないやつはリストラ、あるいは出世コースからはずれることになり、一方、耐えられても、幸弘のようにガンになって、早死にするという結果にもなる。

男の人生は本当に痛い！のである。

末期、ホスピスのベッドに寝ている幸弘の脇の床に、妻、娘、息子の3人が布団をひいて、川のように眠っているショットは、なんとなく面白いショットだ。幸弘だけが縦（画面の上から下）に眠っていて、他の3人が、その隣に、横（画面の右から左）のポーズで眠っている。

幸弘は、住宅会社の上役でもあるし、この映画のテーマは「家族」ということなのだろう。美しい海をバックに家族に囲まれた幸弘の最後の姿が描かれる。結局、男は家族へと戻って、至福の死を迎えるのである。

4. 悲劇は男の証明なり

まあ、本当に歯が浮くような綺麗事の物語。しかし、この映画のよさはそこなのである。

佐藤忠男さん曰く、「映画は自惚れ鏡」だ。悲惨な現実とは世の中にたくさんあるのだから、映画見ているくらいは、夢物語にひたりたい。

おそらく、サラリーマンの多くは、この映画ほど綺麗事ではないにしても、本質的にはこれと近い人生を歩んでいる。そうでなかったら、男なんていう理不尽な役割はまっとうすることはできない。今の世の中、男が仕事に生きがいを見出すことは難しいだろう。それに稼ぐのが男の使命だと頑張って稼いでも、妻や子供に吸い取られる。部屋は子供に撮ら

れるから、家にいても居場所はない。離婚なんてことになれば、子供は普通は女性のほうにつくわけで、まして日本では子供と定期的に会うことも保障されていないため、男は送りだけさせられて、会わせてもらえないということになる。ぼくの知り合いの男性などは、「俺は、ATMか！」と怒っている。

幸弘は病死だが、他にも過労死、自殺、いずれも男のほうが女よりもはるかに危険率は高いはずだ。おそらく原因は仕事であるケースが多いのだろうが、しかし、男はどうしても男であること（社会中心であること）を捨てることができないのである。これは生物学的な議論になるが、ぼくのこれまでの経験から言うと、男は女に比べて、二つのことを同時にやっていくことができない。したがって、偉大なことを成し遂げるのも大抵は男だが、とんでもないことをしてしまうのも大抵は男である。男は一つのところにエネルギーが集中してしまうため、いったんエネルギーのチャンネルを仕事に合わせてしまい、それに熱中してしまうと、他のことが見えなくなっていくのだ。また今の世の中は、男性は女性よりも生きる選択肢が少ないということも問題にしておかなくてはならないだろう。

おそらく、この映画を見た男性観客たちは、綺麗事だとはわかっていながらも、ひと時の快感に酔うのだろう。男は痛いけど、痛みに苦しんで、そして戦死するのが男の運命なのかもしれない。これだけ綺麗に描いてもらえば、死ぬのも悪くないことのように思えてくるからである。

ぼくはというと、快感によいながらも、ぼく自身が、これとはあまりにも違った人生を

歩んでしまったため、取り返しのつかない思いがあふれてきて、つらくなった。普通の人だったら、皆、若い頃から、ある程度、この映画に近い幻想を抱くのだろう。だけど、女子に苛められ、不登校になり、スポーツができなくて、男の仲間に入れなかったぼくは、普通の男子たちができることをできないがために普通の男の人生に早くから反発を抱くようになってしまった。ぼくは、大学に入ってから、失われたときを求め続けて生きてきたように思う。これからは普通になろうと思って生きてきた。しかし、ぼくは少年時代に失ったものが大き過ぎた。いくら頑張っても亀の歩みで、なかなか他の人に追いつくことができないのである。

そのため、結婚もせず、仕事も非常勤なため、自由はもっている。しかし、これで本当に幸せなのかな？と考える時がたびたびである。

結論として思うことは、男の人生は、やはり、痛い！ということ。普通のコースをたどっても痛い！し、ぼくみたいなはみ出し者も、それはそれで痛い！痛い！のが男のアイデンティティなのだろう。

本当に男は痛い！！

男は 痛い !

國友万裕

第3回

ノルウェーの森

1. 僕の水モエロス歴

最近、ある先生にしつこく頼んでいる。「俺を男にしてください」と……。

断わっておくけど、僕はゲイじゃない。男の人とそこまでの関係になったことは一度もない。でも女性恐怖なので、女性ともほとんどつきあってこなかったし、水モエロスな感情を男の人に抱いたことは何度もある。

不登校で、3年くらい引きこもった後、僕は大学に入るために予備校に通った。予備校とは言っても小さな塾みたいなところで、入学する学生はわずか40人くらい。しかも、どんどん抜けていくので、最終的には20人足らずの人数になってしまったと記憶している。大手の大学に入ろうと思っている奴は、もっと有名な予備校に行こうとする。僕はそれまでが学校にも行けず、勉強もしていなかったので、大手の予備校に通う自信はなかった。

幸いなことに、中学時代に一緒だった子、すなわち、僕の過去を知っている子は、この塾には一人もいなかった。熊本市の中心地にある塾なのだが、国鉄の駅が近かったせいもあって、熊本市の外の田舎の学生たちが主だった。

そこで毎日、顔を見ていた男の子に僕は明らかに恋をしていた。結局、1回として話もできなかったのだけど、彼を見ているだけで励まされた。彼と同じ学校に通っているのが楽しくて、ほとんど休まずに学校に通った。

高校は東京だったらいい。親が急に熊本に転勤することになって、それで熊本で浪人生活をするようになったみたいだった。結局、

彼は熊本の小さな私立大学に行くことになって、もう思えば、30年近く会っていない。もう会う術もないだろう。彼も僕のことなんかとうに忘れてるに違いない。

京都の大学に入って、そこでも好きな男の子はできた。彼には積極的に何度もトライした。狂おしいくらいの熱愛だった。ストーキングまでしていた。彼は、僕を疎ましく思いながらも情にほだされて、3回生くらいの頃には、どうにか飯くらいは一緒に食べてくれる仲になってくれた。彼は大学の付属校からエスカレーター式に大学まで来た人で、体育会系だった。僕が彼にホモセクシャルな感情を抱いていることにも気づいていたが、それでも付き合ってくれた。思えば、彼とももう25年会っていないなあ。四半世紀だ。

僕は基本的におっとりしたやつが好きだ。これまで好きになった男の人は、大抵、お坊ちゃんタイプであり、ひねくれていない、貧しさを感じないタイプだ。これは、類は友を呼ぶということなのかもしれない。僕自身も、お坊ちゃんタイプだ、素直だ、ナイーブだ、垢が付いていないと言われる。

前にどういう自分になりたいかという心理テストを受けたことがあるのだが、僕は自分を少しスライドさせた自分になりたいのだという結果がでた。まったく違う自分になりたいというのではなく、自分と似ていて、でも少し違う人。似て非なる人というところだろうか。そして、僕はそういう男性に恋してしまうのだ。

おそらく、僕は10歳の時点で、男としての成長が止まってしまっている。10歳くらいから男らしさ恐怖症になってしまった僕は、自分が男であることを受け入れることがずっと

できなかった。そのことで、僕は、普通の連中が、男同士で楽しくやっている中学・高校のときに、友達もできず、欲しいとも思わず、自分の殻に引きこもっていったのだ。

思えば、入った中学が僕にはあっていなかった。家の近所の公立中学だったのだが、市内でも一番柄が悪いとされていた中学である。周りは不良っぽいやつばかりで、先生のほうも、生徒を威圧できるような先生でないとやっていかれない。まるで少年院のような雰囲気だった。

そのなかにあって、気が小さくて、苛められっ子の僕は自分が同一化できる男子が見つからなかったのである。僕は次第に自分の殻にこもり、小説や映画の世界に出てくる男性たちに恋をするようになっていた。生身の友達はいらなかったのだ。

18歳の時に予備校時代の彼と出会って、「生身の友達が欲しい」願望が大きく刺激された。コペルニクス的な僕の心の大激変だった。しかし、10代、20代と友達是一向にできなかった。僕は、不登校になったことで、間違っただストーリーを生きてしまったのだ。不登校の子が珍しくなくなってきたのは、比較的最近のことである。今では大検に合格したとかフリースクールを出た子は多くいるし、そういう子の存在が認知されているが、僕が20代の頃までは、よほど変わったやつと見なされていて、そんな過去を知ったら、周りの連中は引いてしまう。日本人は集団主義。自分と同じストーリーを生きてきた人間でなければ、心を開こうとしない。違ったストーリーを生きてきた僕は、自分の過去に触れられるのを恐れて、極力誰とも付き合わずに20代を生きた。

30 になって、自分の人生を見つめなおさざるを得ない出来事が起きた。僕は、心療内科に通い始め、カウンセラーの先生たちにも、「どうしても男の友達が欲しいのだ。とっても仲のいい友達が……」と話していた。34 歳で、メンズリブ(男性解放運動)に参加した。しかし、そこで出会った男性たちは僕のイメージしていた男性とは違っていた。一向に男友達はできなかった。

友達をつくることはほとんど諦めかけていた僕に、突然神様が贈り物をくれたのは 37 歳だった。36 歳でメンズリブの幹部の男性と確執を起こし、グループから締め出された頃だった。まさに捨てる神あれば、拾う神あり。しかも、それまで求めていたような男性が僕の前に現れた。一流大学の付属高校から大学へと進んだ人だから、おっとりしたお坊ちゃんタイプ。僕と波長はピッタリだった。普段は仕事で一緒になるわけでもないのに、最初のメール交換から交際は着々と進んでいき、男同士のエロティックな関係も味わってきた。会うと必ず、大阪のスパワールド。2 人で風呂に入り、プールに入り、飯を食い、マッサージを受けたりして、たっぷり 3、4 時間過ごす。そういう付き合いがもう 10 年以上続いている。彼とは他のところでも一緒に風呂に入っているの、もう何 10 回もお互いの裸を見ていることになる(笑)。

それから、以前、同じスポーツクラブに通っていて、今は東京に行ってしまった 30 過ぎの友達とも、彼が京都にいた頃は、二人に汗をかいた後、クラブの風呂に一緒に入ったものだ。それと東京に移って行かれた鍼灸の先生とも東京の銭湯で風呂に行った。

また大学の先生で、僕を可愛がってくれる

先生も徐々に出始めた。教え子の男の子たちのなかにも慕ってくれる男の子はいる。そんなわけで、今は男に不自由していない(！?)。僕の悩みを受け止めてくれる男の人は大勢いるからだ。

僕は男の人が好きになると、その人と一体になりたいと思う。予備校の頃の彼の時は、彼が勉強しているんだから、俺も勉強しなきゃと思って、勉強したものだ。大学の頃の彼は体育会だったから、俺もスポーツができるようにならなきゃと思って、3 回生の頃からプールに通い始めた。僕は、男性とセックスをしたいとは思わないけど、男の人の体にそえられることはあって、でも、一緒に風呂に入ると、その欲望は解消される。お互いの裸を見せ合うと男の友情は深まる。俺たちは、男同士なんだという気持ちになって、いつの間にか、恋が友情に変わっている。

いま、ある男性を口説いているのは、その人は、これまで付き合ってきた男友達と違って、ジェンダーやセクシュアリティの勉強をしていて、その部分で、僕のことを理解してくれているからだ。ジェンダーの抱え込みは普通の人にはなかなかピンと来ないので、他の男友達にはその部分だけは打ち明けられない。しかし、その人だったら、理解してくれるから、その人に友達になってもらえれば、俺もいよいよ一人前の男になれるという思いがあるからだ。

上手くいけば、女性とも交際できるようになるかもしれない。

2 . 男はみんな、男が好きだ！

男が男を好きになるという感情は決して、

異常なものではない。

村上春樹原作の映画『ノルウェイの森』も、最初に、高校時代のキヅキ（高良健吾）と主人公ワタナベ（松山ケンイチ）がフェンシングのような遊びをしていて、それを直子（菊池凜子）が真ん中で見ているところから始まっている。すなわち、最初に向かいあい、見つめあっているのは、男2人である。この後、直子とキヅキは幼なじみで、恋人同士だということが語られる。さらに男2人が並んで下校する様子、ビリヤード場に遊びに行く様子が描かれ、それに並行してプールで泳ぐキヅキ、彼の濡れた背中に身体をよせる直子の仲が描かれていく。とても幸せそうな高校生3人に見えるのに、ある時、突然、何の前触れもなく、キヅキが自殺してしまう。それがこの物語の発端である。

その後は、大学生となって東京に出てきたワタナベと心を病んで田舎の療養所に入院している直子の関係が描かれていくのだが、キヅキがすべての始まりとなっていることはきわめて示唆的と言っていいだろう。フロイトのエデップス・コンプレックスでは、父殺しが、男子が女性との恋愛関係に入る前の成長のステップとなるわけだが、ここではキヅキという友人が死んでいなくなることが、主人公たちの大きな出発点となるのである。

キヅキが何故自ら死を選んだのか？ そのことについては詳しくは語られない。しかし、語る必要もないのかもしれない。僕が注目したいのは、ワタナベは最初、キヅキのほうと親しくて、キヅキの彼女だからということもあって、直子とつきあうことになることである。

3．裸になるのは、男らしさの証明！？

僕は、中学くらいの頃、身体の性と心の性の違和感に悩んでいた。

僕は、4年生くらいまでは女の子の前で裸になることも、母親と一緒に風呂に入ることもまったく平気だった。

今でも思い出すのは、3年生の夏の頃だ。あの当時までは曲がりなりに男の子だった僕は、プールの時間が終わると、仲良しのユキちゃんと教室まで走ったものだった。当時、男子たちは、プールの時、おちんちんを隠さずに着替えすることを「むちん」と言っていた。女の子が教室にいと、腰巻きをして海水パンツを脱がなきゃいけない。「女子が戻ってくる前に、教室に戻って、むちんしようぜ」と、男の子同士で廊下を走るのが楽しかったものだ。思えば、あの頃は一番幸せな時期だった。

それが5年生くらいになって思春期になると、僕は男らしさに疑問を持ち始め、男の友達は少なくなり、身体を見られることを極端にいやがるようになっていった。とりわけ嫌だったのは、夏場の身体測定のときた。前々号にも書いたが当時の担任の女の先生は、マッチョ好きで、男子に男らしさを強いる人だった。毎月、身体測定があるのだが、この先生は、女子には何も言わないのに、男子には、夏場なんだから、教室で上半身裸になって、保健室まで歩いていけというのだ。

僕はこれが死ぬほど嫌だった。同じ裸になるのでも、プールとはモードが違っているからである。プールは、上半身裸が規範だけど、必然性のないシチュエーションでの裸は男らしさの誇示なのである。しかし、他の男子は

平気みたいだ。やはり俺は異常なのか・・・・・・・・？

男が裸になることを恥ずかしがるのが、決して異常な感情ではないことに気づいたのは、大人になってからのことだった。10年ほど前に、男性問題の分科会に参加したが、そこで、当時40くらいだった男性が、次のように語っていたことを記憶している。

「高校の健康診断の時に、保健室で体重をはかった後、上半身裸のままレントゲン車まで行けて言われて、ほんのちょっとの距離だったんだけど、女子たちとすれ違ったんです。今だから言えるけど、あの時は、やはり恥ずかしかったんですね。男だから、恥ずかしがっちゃいけないって思っていたんだけど・・・・・・・・」

また何年か前にある男子学生からジェンダーについてあれこれ質問を受けた。彼は、どうみてもマッチョ系だから、男尊女卑的なことを言うのかと思っていたら、そうではなかった。いろいろなことに問題意識を持っているみたいだったのだが、その1つは、やはり羞恥心の問題だった。

「プールの時間、僕の行っていた学校では、男子は廊下で着替えさせられるんですよ。女子はちゃんと着替える場所があるのに、皆、ブーブー言っているんです」

女子の更衣室をつくるんだったら、男子もつくって然るべきなんだけど、おそらく予算の関係なのか。なぜか、今でもプールの更衣室は女子のみというところが多いみたいである。この頃は、男子だけを特別扱いしたら問題になるのだけども、女子を特別に扱うことは依然として問題にされない。

そうそう、10年ほど前だ。新聞に、「体育

祭の棒倒しを男子全員上半身裸でやらされて、それを女の子たちが楽しそうに見ているのが恥ずかしい」という男子高校生の投書がのった。それに対して、「男は人前で肌をさらすことが許されているのに、今は男が細かいことを気にするようになった。男が弱くなったと言われても仕方がないだろう」という女性読者からの投稿が出たと記憶している。

「本当に女ってやつは、困ったもんだなあ」と思ったものだった。女が差別されると怒るくせに、男を差別していることにはまったく気がついていない。「女性は羞恥心をもつことが許されているのに、男性は許されないのだ」と解釈せず、「男は肌をさらすことが許されているのに、女は許されていない」と解釈してしまうのである。

もちろん、僕も男同士で風呂に入るのは好きだし、男同士で裸になるのは楽しい時もある。しかし、自分が好きで裸になるのと、学校の先生から強制されるのとでは別問題である。ジェンダーはセックスと一緒だ。好きな相手とセックスするのと、嫌いな相手から無理矢理レイプされるのとでは、同じセックスでもまったく意味が違ってくる。

肌をさらすことを強られることは一つの男性問題である。僕は裸を女子に見られるのが恥ずかしいと思う性格だったから、俺は男じゃないんじゃないかと思い始めたのだった。同一性障害である。どうにか治さなきゃいけない。

僕が大学の頃、スポーツを始めるのにプールを選んだのも、プールだと、自分の上半身を露出するということになるから、そうしていくうちに男になれるのではないかという思いがあったからだった。公の場で、乳首を露

出するのは（笑）男らしさの証明である。

そんなわけで、僕のプール歴は、もう27年に及ぶ。プールで裸になることにはすっかりなれたので、今では普通の男性よりも、肌をさらすことに抵抗はないと思うが、だから男らしくなれたかというとは別問題だ。

僕が男らしさ恐怖症に陥った大きな原因は、女の先生から「男らしさ教育」を受けたせいである。その先生に悪気はなかったのだが、僕には、「男子を女に都合のいい男に教育しようとしている」女性教師にしか見えなかった。これでは、女から男へのセクハラである。やはり、男らしくなるためには男性の力が必要だ。僕は男の友達が増えるに連れて、相手から男の部分の吸収して、男になっていくんだなあと思っている。いろいろな男性と同一化することで、少しずつ、自分の男としてのアイデンティティが築かれていくのである。おかげさまで、男の友人は増えたので、もう一息で、俺だって男になれる。今、先生を口説いているのも、その先生が最後のステップだという予感があるからである。

僕はもう48だし、50代くらいは、「俺は男だ」という確信を持って生きていきたい。「あと2年の間に男にしてくださいね」と僕はその先生に懇願しているのである（笑）。

4．男は構築されるもの

『ノルウェイの森』で面白いのは、女性との恋愛と男らしさの構築の場面がほとんど交互に現れるということである。

ワタナベは直子とセックスをする仲になりながらも、同じ大学の緑（水原希子）とも交際し始めるのだが、直子や緑との交際のシー

ンの後、ワタナベがプールで泳いでいる場面、あるいはバイトで力仕事をしている場面が挿入される。また長沢さん（玉山鉄二）という先輩の男性との交際の場面も挟まれる。

これは男が女と交際するためには、その一方で、男らしさを構築することが不可欠であることを示している。これは、バダンテール、渡辺恒夫、ギルモアなど、さまざまな学者が言っていることなのだが、男であることは女であることよりも不安定なのである。男は元々染色体の関係で女よりも弱い。男として生まれた時点で、男は負け組だという言う人もいる。

したがって、男は常に、自分の男らしさを確認していなくてはならない。僕は、不幸なことに、10歳でジェンダーの問題に目覚めてしまったため、それを意識せざるを得なかった。しかし、そのことを知っている人が世の中にどれだけいるだろうか。女性はもちろん分らないだろうし、男性でも、男性ジェンダーを受け入れていくことに苦労しなかった人は、男のアイデンティティが女よりも不確かだということを意識していない。実際には、男が男らしいことをしようとするのは、男のアイデンティティを立て直す欲求が深層心理にあるからなのだけど、そのことを普通の男性は気づいていないのである。男性学や男性運動がいつまでも広がっていかないのはそのせいだ。男のほうで性のアイデンティティが弱いということを、まずはわかってもらわなくてはならない。

ワタナベは友達を作りたくないという学生で、言ってみれば、引きこもりである。僕もこの心理はすごくわかる。僕などは、男の友達が欲しいと思う反面、男の友達ができると

心が乱れるという思いがあった。僕は自尊心が低いので、周りの男子たちのほうが遥かに幸せそうに見えたし、自分の劣等感を刺激される。それが怖かったのだ。僕が 40 くらいになって、やっと友達ができるようになったのは、ようやく僕が、それまでの長い遅れを取り戻してきたからである。

ワタナベを演じる松山ケンイチは少年のようなあどけない顔で、この役を演じるのは彼以外には考えられない。また映画全体の澄みわたったような雰囲気にも注目してほしい。この映画はプールの水や山の雪が美しく描かれ、冷たい触感がある。それは男っぽい汗や臭いがしない世界であり、それが松山のキャラクターにもぴったりはまっている。これから男になっていく、さなぎのような持ち味が彼にはあるからだ。『ウルトラミラクルラブストーリー』(2009)で、彼が演じたのはアスペルガーの青年役だが、アスペルガーや不登校も男が 8 割だということを、世間の人は知っているだろうか。

松山ケンイチは、今やすっかり売れっ子で、日本の若手男優の代表的存在になりつつあるけども、これは彼が、アスペルガーの役を演じて、じっくりくるキャラの持ち主だからである。現代の男性問題を訴えるのに、もっともふさわしい男優と言えるかもしれないのだ。

5. 女性とのディタッチメント(分離)

『ノルウェイの森』では、ワタナベの女性体験に必ず他の男が関わってくる。まず、直子との関係にはキヅキが関わっている。2人はセックスの最中でも、死んだキヅキのこと

を思い出している。緑との関係にしてもそうだ。「私、彼氏がいるの」と緑。「何となくいると思っていた」と言うワタナベ。

この映画で描かれる恋愛は、基本的に三角関係なのである。これも、男の立場から考えた場合は、同一化の問題である。ワタナベは、他の男性と同一化しつつ、女性と付き合っている。他の男性と女性を共有しているということになる。

「お前もつらかったんだろうけど、お前が直子を残して死んでいったから、俺だって苦しいんだ」と死んだキヅキに語りかけるワタナベのモノログ。しかし、ワタナベがなぜ、ここまで直子にこだわるのか。彼女は、単なる友達の彼女だった人に過ぎない。なのに、彼は彼女を愛し抜こうと努力する。これはとりもなおさず、彼がキヅキに同一化の欲望を抱いていて、キヅキを内面化するには、直子との愛を貫く手段しかないからである。直子を知れば知るほど、キヅキにも近づいていくとワタナベは思っている。直子を求めることでキヅキを求めるという、欲望の三角形がここに存在するのである。

村上春樹の小説について研究された本を読んでいると、「ディタッチメント(分離)」という言葉がしばしば出てくる。

ワタナベと直子や緑との関係には、彼女たちが他の男にもとらわれているとせいである種の距離感が生まれる。さらに、ワタナベ自身も、直子と緑、両方とつきあっているのに、ここにも距離感が生まれる。この映画で描かれるのは、男 1 人と女 1 人がべったり愛し合うような関係ではないのである。

緑との交際の場面で、緑とワタナベは雪の中を歩いていくが、2人は腕を組むわけでも、

手をつなぐわけでもなく、離れて平行に歩いていく。これが、この映画の男女関係を象徴する場面である。分離しながらも、女を愛す……それが、この映画のテーマであると思えるのだ。

僕が大学に入って1週間くらいたった頃だ。朝の大教室。僕は一人で座っていた。教室は閑散としていて、僕はそこで授業が始まるのを待っていた。すると、突然、右側から声が聞こえた。女子学生が立っていた。

「ねえ、通てんの？」と彼女。

「いや、下宿です」と僕は、なんだ！？この女は？？と思いながら答えた。

「どこから来てんの？」

「九州です」

「九州のどこ？」とさらに彼女はプライバシーに踏み込んでくる。

「熊本市……」

「そんな感じー」と彼女は予想が当たったという顔で言った。

だけど、僕は不愉快だった。一体、俺のどこが「熊本」なんだ？ 後になって、この彼女が、同じクラスの女の子だということがわかった。しかし、この時点で僕は、まだ彼女の顔も名前も記憶していなかったのだ。彼女は、僕のプライバシーを探っていたのだろうか。

僕が女性を怖いと感じるのはこういう時だ。女性と付き合っていると、女性のペースに巻き込まれるような気持ちになってくる。女性のほうが親密さへの敷居が低いし、他人のプライバシーを詮索したがるからである。

これを回避するためには、ある程度、女性とは距離をおいて付き合わなくてはならないと僕は思っている。とりわけ、僕みたいに男

としてのアイデンティティに自信のない男は、女性と近くなり過ぎると、自分の男の部分が脅かされるような気持ちになってくる。女は男を去勢するのである。

おそらく、ワタナベも、まだ男としてのアイデンティティに自信がないのではないか？ だから一人の女性に深入りすることを躊躇しているようにも思えるのだ。

6．一人の女性と付き合うために。

ワタナベの先輩の松村は初美（初音映莉子）という恋人がいる。外務省に就職が決まり、海外に赴任されることになった松村に、初美のことはどうするのかと尋ねるワタナベ。これに対し、松村は、「俺は結婚はしない。俺が海外にいく間、他の男と付き合うか、俺を待つかは、俺の問題じゃない。彼女の問題だ」と語る。松村は、たくさんの女たちと関係をもった経験のある男である。一方の初美はそれを知りながらも、松村への愛を捨てることができない。

初美は、3人で会食した際に、ワタナベが他に好きな女性がいながら、松村と一緒に女の子を取り替えて遊んだことがあると聞いて、ワタナベに激しく詰め寄る。「あなたは、そういうタイプの人じゃないと思うけど」と。「僕もそう思います」とワタナベ。初美の言うように、ワタナベは、松村のように遊びで、たくさんの女性とセックスをするような男ではない。しかし、ワタナベには、一人の人を愛し抜けるという確信も持てないのである。

「あなたみたいに確信をもって人を愛せるってすごいなあ」とワタナベは語る。しかし、初美は、この数年後に自殺したという設定に

なっている。やはり、確信をもって人を愛することは不可能だったのだろうか。

とりわけ、男の場合は、これまで述べてきたような同一化の問題が絡んでくるので、余計、女性を愛するまでの段階にたどり着くステップがややこしくなる。僕が女性を受け入れられないのも、この年になってお恥ずかしいけど、やはり、男としてのアイデンティティが未熟だからだ。男性との関係の方が楽しいと思うのは、男の人は、僕の男のアイデンティティを高めてくれるからだ。しかし、女はそれを侵食しようとするのである。

男の友達は何人いてもかまわない。僕が何人の男と付き合おうが、そのことで他の男の人との関係がくずれるわけじゃない。しかし、女性だとそうはいかないだろう。また女性の場合は、往々にして、一人の男を所有しようとするし、一人の男に依存しようとするので、それを疎ましいと僕は感じてしまうのである。

映画では、この後、直子が自殺し、直子と同じ療養施設に入院していたレイコ（霧島レイカ）がワタナベの元を訪れて、レイコの誘いで、2人はセックスをすることになる。彼女は自分のなかに直子を内面化するために、ワタナベとセックスすべきだと考えるのだ。「直子や私の分も幸せになってね」と彼女は去っていく。

その後すぐにワタナベは緑に電話をする。すなわち、ワタナベが緑と真面目に恋愛しようとする決意にいたったことを示唆して、映画は終わっていく。

この映画、死と女がテーマだ。僕の感想は、それを強引に男の自己構築の問題にこじつけたものと思う人もいるかもしれない。しかし、男にとって死イコール女であることを忘れち

やいけない。これは世界的に有名なフェミニストのシクスーも言っていることだし、シェールがオスカーをとった『月の輝く夜に』（1987）という映画を覚えていらっしゃるだろうか。あの映画で、イタリア系アメリカ移民の母が、夫の浮気に疲れて、ある男に尋ねる。

「なぜ、男は女を追うの？」

「さあ、死が怖いからかも」

「ありがとう。私の質問に答えてくれて」

そう、男にとって女は、死が怖いものと同じくらいに怖い。だから、ある種の男性は、常に女性（死）とセックスしていなければ、その恐怖から逃れられないのである。僕は、その逆パターンで、女が怖くて、まともに付き合うこともできない。ワタナベは、様々な葛藤を経て、どうにか女性との恋愛にたどり着いたみたいだ。俺も、こういう日が来るのかなあー。50 近くにもなって、何を言っているんだ？ と言われるかもしれないが、キヅキや直子が死を選んだのと同じで、心の病気はなかなか治らないのだ。

そして、同一化の問題に関して言えば、女よりも男のほうがはるかに苦労するということ。そのことを世間の人に分かって欲しいよね。

本当に男って、痛い！ よね。

男は 痛い

！

國友万裕

第4回

フライ・ダディ・フライ

1. 上裸で散歩

8月のある朝。僕は鴨川沿いにある30過ぎの男性と上半身裸で散歩していた。

「楽しいなあ。こうやって男同士で裸になると、男同士って感じするものね」

「女にはできないことですものね」

と話しながら、1時間くらい半裸のまま、2人で歩いた。朝の鴨川沿いの空気を素肌に感じるのとはとても気持ちがいい。通りすがりの人も何人かはいた。一人だと、女性から見られるのはちょっと気になったかもしれない。いくら川べりとはいえ、裸になるのはちょっと恥ずかしい。しかし、2人だと、まったく恥ずかしさを感じない。むしろ、男の友情をたっぷり感じて、この時間がずっと続いてくれればいいなあ、と鴨川の流れを見ながら感じたりもした。

彼と僕は、「お互いの乳首を見せ合う仲」だ（笑）。「乳首」なんて卑猥に感じる人もいるかもしれないけど、日ごろ、大学生と接していると、今の男子大学生は、頻繁に乳首という言葉を使っていることに気づく。しかも、女性の乳首ではなく、男の乳首だ。僕は専門学校でも教えているのだが、専門学校は大学に比べると先生と学生の距離が近いせいもあって、服の上からではあるが、もろ僕の乳首に触ってくる男子学生がいる。「先生、こんな着ているのに乳首出ていますよ」と僕の乳首を指で弾いてきた男子もいたし、「先生、乳首、すけてますよ。セクハラですよ」とギョッと乳首を摘ままれたこともあった。

昔は男の乳首なんて、大した意味はもたなかったのだろうけど、今は、ダウンタウンや

らお笑い芸人がネタに使うせいか、一つの記号のようになってしまっている。女は乳首があるから胸を隠す、しかし、男は乳首があるのに胸を隠さない……これはジェンダー的に考えても面白い事実なのである。男の子が、男の乳首の存在を意識する。なんとなく男の子が女っぽくなってきたみたいで、僕みたいな男には結構嬉しい。

1 時間あまり、たっぷり乳首を出して歩いた後、「最後に鴨川ファイトクラブをしましょうか」と彼が言い出した。『ファイトクラブ』はブラッド・ピットとエドワード・ノートンが主演の映画で、男たちが上半身裸で殴りあうクラブの話だ。「殴りあうんじゃないくて、国友さんが俺を殴ってくださいよ。俺は逃げるから。ちょっとでも俺の身体に触れたら、国友さんの勝ちですよ」と彼は言った。で、それから 5 分ほど、逃げる彼を、僕が拳を掲げて追いかけて、走り回った。もちろん、身体の動きの迅速な彼に俺の拳があたるわけがない。散々振り回されて、息はぜいぜい。「結構、頑張りましたね(笑)」と彼は言ってくれた。

たっぷりと男の喜びを満喫した時間だった。

2 . 救世主が現れた！

この 6 月頃、FACEBOOK で毎日のようにぼやいていた。「腰が痛い！！！」。。。。
整骨院には通っていたのだが、異常に痛いので病院にも行った。ついには、仕事を休んで、ちょっと遠いところにある整体院にまで足を延ばしてみた。しかし、痛みはおさまらない。僕は元々、猫背で、それを治そうと意識していたため、そり気味の姿勢になってしまった。腰に激痛が走るようになったのは、それが一

つの原因だったようだ。

そんなある日。FACEBOOK にメッセージが届いた。友達登録をしている男性からのメッセージだ。「僕は今、出張マッサージをやっているんです。よかったら治療させてくれませんか。最初はお試しだから、料金は要りません。代わりに飯をおごってください」という内容のものだった。

彼は以前、僕の通っているスポーツクラブでインストラクターをやっていた人だ。偶然彼の FACEBOOK を見つけて、僕のほうが友達リクエストを送り、承認してもらった。といっても、彼と再び会うことはないだろうと思っていた。彼は 3 年ほど前にスポーツクラブをやめて、それ以来、会う術もなかったし、何よりも、彼と僕の関係は、顔見知りという程度で友達というほど深いものではなかったからである。

彼が僕の部屋に初めてやってきたのは、6 月の半ばのことだったと思う。1 時間たっぷりマッサージをしてもらった。予想以上に気持ちよかった。相性もいい。僕は、ちょっとしたマッサージ通で、さまざまなところでマッサージを受けてきたが、マッサージは上手い下手もさることながら、相性の問題がある。生理的にいやな人に触られるのは気分が悪い。あれこれ世間話をしながら身体を押してもらうわけだから、性格的な相性もある。彼は、どの角度から見ても最高に相性がよかったし、これはしばらくやらしてもらおうかと思った。

その後、2 人でイタリアン・レストランに行き、飯を食いながらあれこれ話した。てっきり僕は、彼は 3 年前までスポーツクラブの正社員だったのだと思っていた。ところが、彼曰く「一番正社員らしいバイトだったんです」。

考えてみれば、彼はあの当時、20代後半。バイトの子は、大抵は大学生だから、年が他のバイトの連中よりも上だった分、正社員ぽかったのだろう。彼は、脱ぐとヘラクレスだが、性格はやさしいタイプ。怖い奴が苦手な僕は、優しいタイプの男の人としか友達になれない。彼の裸を始めてプールで見た時、驚いたものだ。顔はかわいいのに、身体は鍛えに鍛え抜かれている。プールサイドで体操をしている彼に思わず近づいて、「いい身体なってますねー」と言ってしまったのを覚えている。

彼が担当していたクラスで印象に残っているのは、水中ウォーク。上半身裸のままプールサイドにたって、指導してくれた。他の指導員の人は、上裸にはならないのだが、彼は「筋肉の動きを見てほしかったんです」と言っていた。お客さんは、おばさんがほとんどなので、汚い男の先生だったら、「シャツの一枚くらいつけてくれ」とクレームがついていたところだろう。筋肉隆々の男の裸は、女性に威圧感を与えるし、間近に見て気持ちのいいものではないらしい。しかし、彼は顔がかわいいし、物腰がソフトなので、なんとなく身体とアンバランスで、魅力的だった。清潔感があった。

しかし、その後、いつの間にか彼はいなくなっていた。僕の通っているスポーツクラブは、正社員の人でも他の店舗に転勤したり、退職したりで、しょっちゅう移動があるし、バイトの子は、いつの間にか辞めていたりするのだ。なんとなく、寂しかった。

男同士でも、どうしても友達になりたいと思うタイプのひとと、握手するのも嫌だと感じる人がいるものだが、僕にとって彼は間違いなく前者だった。しかし、彼と友達になれる

わけがない。ただのインストラクターとお客さんの間柄だし、じっくり話す機会もない。どっちみち、友達になれるはずもなかったのだ。

その彼から突然の連絡。運命的なものを感じた。ひょっとすると、この人は俺の救世主なのかも知れない。

3．やはり、救世主！！

果たして、その通りだった。

それから何度か続けてきてもらったのだが、友情はトントン拍子に進んでいった。2度目の時は、「まず、部屋の掃除をしましょうか」と本と書類で埃だらけの僕の部屋を箒ではいてくれ、それから、いらないものは手際よくどんどん捨ててくれた。若さの自信なのか、人の部屋に来て、これだけ自分の判断で捨てていいのかと思うくらいだったが、彼の捨てる技術は大変なもので、僕の部屋は、みるみる綺麗になっていった。

さらに「ベッドのシーツを洗濯して、コインランドリーで乾かして、気持ちのいい状態で、マッサージしましょう」と、洗濯が終わった後、2人で近所のコインランドリーに行った。僕はコインランドリーなんて行ったこともなかったのだが、2人であれこれ話をしていると、乾燥するくらいの時間はすぐに過ぎる。彼はマッサージというだけでなく、ボディ・メンテナンスをやりたいんだと言っていて、そのためには環境も大事だと考えているみたいだった。

さらに、3度目の時だったと思う。今度は彼のほうから「僕の部屋の掃除ができたので、今日は僕の部屋でやりましょう」と連絡がき

た。彼が車で迎えに来てくれて、行ってみると2ルームの小さなマンションだが、こざれいに片付いている。彼は、マッサージのバイトをしばらくしていたことはあるみたいだが、個人で始めたのは最近みたいで、「まだ今のところ、自分と相性のいい人や僕を可愛がってくれる人にだけやっているんです」と言っていた。

彼と僕の友情は加速度的に進んでいった。その後、2人で、船岡山に登り、写真を撮り、それから船岡温泉に入りに行った。船岡温泉は有名な銭湯で、スーパー銭湯ほど大きくはないけども、町の銭湯の割には大きくて京都らしい風情がある。すっかり気にいってしまった。鏡の前で、彼と並んで、お互いの裸を見比べた。「やっぱり、お腹が全然、違っていいよね。俺は、胸より腹のほうが大きいもんなあ(笑)」と僕は言った。2人で、話をしながら、サウナに入り、水風呂に入り、露天に入り、電気風呂に入り、たつぷりと男同士の裸の付き合いを堪能した。その後、彼の部屋でマッサージを受けたのだが、マッサージの終わりがけに、「カレーをつくったんですけど、食べていきます？」と飯まで出してくれた。サラダもつけてくれて、味も上手い。

7月になると、僕は急に引越しが決まったため、荷造りやらなんやらで忙しかったのだが、彼が何度もプライベートで手伝いに来てくれて、大助かりだった。今、思えば、無茶な引越しの計画だった。一番、暑い時期だし、僕の仕事も一番忙しい時期だった。疲れもたまっていた。彼がいなかったら、引っ越しは終わっていなかっただろう。本当に神様がくれたプレゼントのような人だ。

そして、鴨川の上裸散歩。たったの2か月

の付き合いで、彼は僕の人生になくってはならない人になってしまったのだった。

4.『フライ、ダディ、フライ』

彼と俺は、まるで『フライ、ダディ、フライ』(2005)のような関係だなあと思った。これは娘を傷つけられたおっさん(堤真一)と彼を鍛えなおして対決させようとする高校生グループのスンシン(岡田准一)の奇妙な友情を描く映画だ。

年の差からしてそっくりだった。僕は堤真一とほぼ同年だし、彼は岡田准一とほぼ同年。16歳違いだ。服装も、彼は、夏場は大抵タンクトップ姿で、映画の岡田准一そのものだ。映画ではスンシンがおっさんにあれこれ身体を鍛える手助けをしていくのだが、この主人公のおっさん、堤真一が演じているから、それほどカッコ悪くは見えないが、原作ではもっと無様なおじさんと描かれているらしい。まさしく僕と似たタイプだ(笑)。

映画では、このおっさんが、スンシンと出会ったことで変化していく様子が描かれるのだが、僕も彼と出会った後、どんどん変わっていった。

引越しが終わった後、「前のところのままだったら、国友さん、10年ぐらい寿命が短くなっていたはずですよ(笑)」と彼は言った。そう言われてみれば、そうだなあ。俺は、掃除が嫌いだし、引っ越すとなるとお金がかかるので、同じ賃貸のマンションに18年以上も暮らしていた。こういう賃貸のマンションだと、皆、2、3年で気前よくでていくのだが、お金かかるのによくやるなあと思っていた。しかし、実際にやってみると、引っ越しはお金に代

わるものを与えてくれる。新しいマンションに移って、気分はさわやかになったし、18年もたまったほこりからおさらばする生活は何ともいいものだ。

また彼の影響で、ダイエットも本格的に始めた。食事は間食にヨーグルトを食べることにした。まともに食べるのは一日に一食だけにとどめ、後はヨーグルトと軽いものですませる。この甲斐あって 85 キロくらいあった体重が、今は 78 キロだ。

それから運動。彼が僕に教えてくれたことは、スンシンのおっさんへの台詞に似ている。スンシンは、おっさんに「まずは基礎づくりだ。おっさんの頭の中には余計なものがこびりついている。それをそぎ落とすんだ。要は走ればいいんだよ」という。僕も基礎づくりの段階なのだが、彼は、僕に、「できないという思い込みをなくすんですよ。そうすれば、できるようになります。ウォーキングが一番いいんです。まずはスポーツクラブでウォーキングを始めてください」と言ってくれた。

僕は、これまでスポーツクラブに行っても、ただ遊びに行っているようなもの。プールに入るのは気持ちがいいし、たまに音楽に合わせてスタジオのプログラムで身体を動かすのは楽しい。ウォーキングマシンなどは使ったこともなかった。しかし、彼に言われて、僕はウォーキングマシンに初挑戦し始めた。遅すぎる。もうクラブに入って 6 年もたっているというのに……。しかし、彼の言うとおりだった。1 度にマシンを使える制限時間は 30 分なので、大して歩くわけではない。しかし、黙々と 30 分歩き続けると、終わったあとが爽快だ。身体が軽くなったような気持ちになる。

「俺はこれまで歩いてこなかったわけじゃないよ。重い荷物を抱えて、仕事場に向かうのもそれなりにしんどいからね」と僕が言うと、「仕事の移動で歩くのと、運動で歩くのでは違うんですよ」と彼は言っていたが、本当にそうだった。歩くことに集中する。一定のリズムで歩く。これは思っていた以上の運動で、やってみると楽しいものでもあった。考えてみると俺は、せっかちなので、仕事場に早め早めに出かける。遅刻したことは一度もない。他の人たちよりも早くに仕事場に着いている。しかし、これは良いとばかりも言えないのかもしれない。僕は時間のゆとりをたっぷり持って行動するため、約束の時間に遅れることはないが、急ぐということがない。歩くのもガラガラした歩き方だ。電車の時間も調べたりはしない。これからは、「何時の電車にのるんだ」と時間の目標を持って行動することにしようと思われた。

映画では、スンシンがおっさんに「感情なんだよ。恐怖の先にあるものを見たくないのかよ」と諭す場面が出てくる。彼も僕にこれと似たようなことを言ってくれた。「国友さんは、結果をおそれて、外に出ようとしませんよ。地震が来るのを恐れて、部屋から出れないのと一緒になんです」。うーん、耳が痛い！ 確かにそうなんだよなあ。僕は、いったん思いこんでしまうと、なかなかそこから抜け出すことができない。

僕が不登校になったのは、スポーツができない、男らしくないという問題が大きかったのだが、今の僕は、プールだったら体力の続く限り泳げるし、彼に言わせれば、「国友さん、自分では男らしくないと思っているみたいだけど、他の人から見たら、十分、男らしい人

に見えますよ」とのこと。同じことは、何人もの人から言われた。俺は、子供の頃、「おかま」とか「女の腐ったような子」だと言われ続けたため、それから40年近い月日がたっているのに、いまだに、自分が女っぽい男だと思い込んでいる。しかし、そういえば、大学に入って、京都に出てきてからは、女っぽいなんて言われたことは一度もないのだ。だけど、僕は、自分が女っぽいと思ひ込み、そして、それを意識し過ぎて、男っぽいことをするのは柄に合わないから恥ずかしいと極力男っぽいことをすることを避けてきた。俺だって男だから、心の奥底には男性性が眠っていたのに、それを必死で抑圧してきたのだ。

だから今となって、少しその呪縛がとけて、彼と半裸のまま歩きまわったり、ファイトクラブごっこしたりするのが、なんとも言えず楽しい。自分の中の男性性を解放する。これもある意味で男性解放である。

5. ピンタ

僕は、彼に何度かピンタもくらわしてもらっている。僕は尊敬する男の人からだったら殴られてもいいし、殴られたいというマゾヒスティックな欲望があった。子供の頃、殴り合いとか、男っぽい喧嘩をしたことがないから、そういうものに憧れたのだろう。しかも、僕は本質的にMなので、相手を殴りたいとは思わない。殴られたいのだ。

しかし、この欲望も、なかなかかなわなかったし、これからもかなわないだろうと思っていた。いくらなんでも大人になって、相手を殴るなんてことをしたら、犯罪と見做される。だけど、彼には素直に僕の欲求を話した。

「男のドラマなんかだと、『俺を殴ってくれ』という場面が出てくるだろう？俺はああいうのに憧れるんだよね。韓国映画の『クライング・フィスト』って、大好きな映画なんだけど、この映画では主役の中年男が殴られ屋という設定になっているんだ。今度ピンタしてくれるか」。

彼もこのお願いにはさすがに戸惑っていたが、しばらくたって、僕の性格がわかってくると、殴っても大丈夫だと思っただけで、結構痛いピンタを何発か浴びせてくれた。一度、左の頬にピンタされた時はマジで痛くて、「左だけ痛いって何となく気分悪いよ」というと、今度は右の頬をピシャリとピンタしてくれた（笑）。「俺たち、変な関係だよね」。だけど、変なことでも許しあうのが友情というもの。

彼と僕の間には固い友情が芽生えていって、彼は他の人に打ち明けられないことも、僕には打ち明けてくれるようになっていった。

『フライ、ダディ、フライ』でも、スンシンがおっさんに「殴ってみよう」という場面があるのだが、殴るっていう行為は、一つのホモエロスだ。男同士の友情の証なのである。

彼と僕は、今は頻繁に会う仲だが、別れるときは必ず、男同士の固い握手を交わす。「国友さんの握手は強くて痛いくらいですよ」と彼からは言われる。僕も彼のマッサージやトレーニングの時に痛いと感じるときはたびたびだ。しかし、その痛みがなんとも気持ちいい。

映画のDVDのパッケージでは、スンシンがおっさんを殴っているところが使われているし、映画の中で、「頭殴られ過ぎて、いい感じになっているんじゃないんですか？」と訊か

れて、「かもね。」とおっさんが答える場面がある。もちろん、おっさんは、殴られるのが不快だとは感じていない。

こう考えてみると、「男は痛い！」っていうのも、悪くないことに思えてくる。男は痛いけど、それを分かち合える男の友がいれば、痛みがホモエロスとなるのだ。

6．ギブ&テイクの友情

彼と僕には、16の年の差がある。父子というには年が近過ぎるし、兄弟というには離れ過ぎている。友達というにも離れ過ぎているのかもしれない。したがって、一番親密になれない年の差のようにも思うんだけど、僕は彼から多くのことを学んでいった。つきあっていて楽しいし、まったく疲れない。

マッサージの後、トレーニングも教えてもらうのだが、時々、厳しいことを言われたりもする。僕は厳しくされると反発する性格なのだが、しかし、16歳年齢が下なので、それほど腹が立たない。スポーツの面では彼のほうが上だから、上から目線になるけれど、年や僕のほうが上だから、上手い具合に緩和されるのである。彼から若さをテイク、代わりに僕は人生経験と知識をギブするのだ。そうそう、時々、彼に飯をおごってあげたりもする。彼は、さすがに男っぽくて、王将とかが好きなので、おごってもそれほどお金はかからない（笑）。

『フライ、ダディ、フライ』では、夕焼けをバックに、木の大きな枝の上に座った、スンシンとおっさんが身の上話をする場面が、メルヘンのようにきれいで、一つのハイライトだ。2人はお互いの頭を抱きしめ会ったり、

腰を抱いたりする。男同士の心が通い合うスキンシップの瞬間だ。

「早く強くなって、俺を守ってくれよ」というスンシン。一見、スンシンのほうが腕っ節が強くて、おっさんを守っているように見えるのだが、彼もどこかでおっさんに頼っているのだ。友情っていうのはこうでなきゃいけないよね。

「自分を信じることができなくなった時、恐怖が入ってくる。どんなことがあっても自分を信じるんだ」とスンシン。「君を信じるよ」とおっさん。なんとなく、涙が出てくる。僕は、若い頃に男同士の友情を経験できなかったため、こういう友情ものに弱いのだ。。。

7．心の傷を抱えて……。

彼と僕には共通点があることも、つきあっているうちに分かっていった。彼は大学を出た後、肉体系フリーターで、定職についたことはないらしい。「周りからは大学まで出ているのに、なぜ、そんな仕事ばかりするの？」と言われるけど、「身体を動かすのが好きなんです」と言っていた。どおりで、彼は身体のことには知り尽くしていて、マッサージの腕は生半可じゃない。

僕も、48にもなって定職についたことのない非常勤講師だ。周りからは、「あなたみたいに能力のある人が、非常勤のままなんてもったいない」と皮肉をこめた、意地の悪い言い方で言われることがあって、カチンとくることがたびたびだ。俺だって、何も考えずに非常勤を貫いてきたわけじゃないよ。俺はトラウマを背負っているから、どうしても自分の殻をやぶることができなくて、もがき苦しん

だ。そして、もう運命にまかせよう、よい仕事めぐってきたら、そして、そういう気分になったら、専任になってもいいし、そういう巡り合いがなかったら、一生非常勤でもいいと開き直るようになったんだよ。長い葛藤の末に……。

フェミニストは、「結婚すると女は檻に入れられる」と言うだろう。そうであるのならば、「就職すると男は檻に入れられる」と言うことなんじゃないわけ……。棚からぼた餅を待っているなんて、考え方が甘いと言われるかもしれないが、僕は自分にふさわしい檻がやってくるまでは、放浪の旅を続けようと思う。幸い、一緒に旅してくれる相棒も見つかった。

男は痛い！けど、でも、痛がることを楽しみながら生きていきたい。その支えとなってくれる人が、一人現れた。男は痛い！のならば、その傷を癒してくれるのは、女ではなく、男なのだ。

でも、そういう友はなかなか見つからない男が大半なんじゃないかな？ やはり、男は痛い！！！！よね。

男は 痛い !

國友万裕

第5回

僕達急行
A列車で行こう

1. さようなら、おじさん型男性学

実は、僕は2年ほど前にある男性解放を訴える社会運動家の男性と喧嘩している。

その人のことはかれこれ14年前から知っていたのだが、付き合いが本格化したのは5年ほど前からだったと思う。その男性が中心となる団体で、ミニコミをつくることになって、筆が速いことでは定評のある僕に白羽の矢が立った。その男性のほうから、「一緒にやってくれないか」と声をかけられたのだ。ミニコミは季刊だったのだが、ミニコミの原稿の他にも、その男性が主催するイベントの手伝いをしたり、参加したりして、一時期は上手くいっているようにも見えていた。その男性は、男性運動の世界では結構名前が知れていて、経験や知識もあるし、話術や文章力も達者だ。その男性の訴えることには、それなりに深いところがあったし、説得力もあった。

しかし、その男性との関係はしだいに弱っていき、憎しみの残るような別れとなってしまった。

(1) 女の下ネタ

おそらく、その導火線となったのは、2年前の新年会の時のことだったと思う。その男性の手料理を僕も含めて5人(男3人・女2人)でつつきながら会食したのだが、その席で女性の一人が露骨な下ネタを始めたのだった。下ネタが大嫌いな僕は、隣の席から何度も彼女に「やめてくれ」という態度を示したのだが、彼女は僕の気持ちなどおかまいなしにHな話を続けていく。僕が怒ると、その男性は「そんなふうに言うな! 私は下ネタが好きなんだから」と僕のほうを制して、彼女の下ネタを煽るのだった。

それだけだったら、まだ許せる。ところが、その後ブログで、その時の僕のことをネタにして、「女性が下ネタをするのは品がないと思っていらっしゃるのでしょうか」と書かれた時は、さすがに怒って、「僕は女の下ネタが嫌いだななんて言っていないですよ。男でも下ネタなんてする人は嫌いですから」と激しく抗議のメールを出した。その男性は、僕が「男が下ネタするのは許されるけど、女は許されない」という古いジェンダー規範に囚われているから、彼女の下ネタに怒ったのだ、一方で自分は女の下ネタに付き合うことができる進んだ男だと思い込んでいるのだ。その男性は、10年以上も付き合いながら、結局、僕のことを何も理解してはいなかったのだった。

2. 男・おごる人 女・食べる人???

その男性が行う講座でも、これは変?と思う出来事はたびたびあった。

とりわけ隔世の思いを抱いたのは、「男がおごる」という議論になった時だ。その時は女性と付き合うときは男がおごらなくてはならないんだという囚われをもっている若い男性がゲストで現れて、それをテーマに話が進んだのだが、「一体、いつの時代の話なの???'と首をかしげたくなるような話が飛び出してくる。「僕は、彼女はいないけど、女友達はいて、先日鎌倉で彼女に会った時、何から何まで彼女におごってもらいましたよ。彼女のほうが収入多いですから」と僕が訴えても、「それは一部の話だよ」と真剣に取り合ってはもらえない……。

「俺は異常な世界を生きているのかなあー。俺の周りだったら、男がおごるのが当たり前

なんて言うような女、一人もいないけど…。」

3. 男たちよ、女に白旗をあげよ!?

また当時、僕はその男性がやっている団体のHPに僕のブログをリンクしていた。当然、そこに入入りしている人たちが主たる読者だった。

僕は当時ジェンダーの悩みをあれこれ綴っていて、若い頃、女性からトラウマを負われ、女性と上手く付き合えないなど、女性に対するルサンチマンも綴ることがあった。するとその団体に関わっている男性から、こういうコメントが入った。「(女に)負けたくないだけなんちゃうのー。負けてもええんちゃうのー」。

この人は僕と同年なのだが、昔は妻君にDVしていて、当初は、夫のDVに耐えていた妻君が、フェミニスト・カウンセラーのカウンセリングを受けて、「あなたが悪いわけじゃないんだ。暴力をふるう夫のほうが悪いんだ」と諭されてから、所謂「逆転現象」がおきて、一時期は大変だったらしい。最初は自分がいらないから殴られるのだと思って、自分を責めていた妻君が、逆DVを始めたのである。で、結局、壮絶な葛藤の末、無事DVから抜け出し、妻君との間もどうにか修復できたとのことだった。

明らかにこの人は、自分自身を僕に投影してしまっていた。最初は亭主関白男だったのが、夫婦関係が壊れて、妻に暴力をふるい、激しいリベンジをされて、結局、妻に白旗をあげたことで、どうにか丸く収まったという経験をしているから、僕にも女に完全降伏す

れば上手くいくんだと進言しているのだ。

「俺は、シングルなんだよ。女性に DV もしていない。むしろ女性から傷つけられた男なんだ。あなたとは問題の次元も違う。だから、あなたと俺を重ね合わせるのではなくて、あなたの妻君と俺とを重ねあわせて考えてくれ」とコメントを返したはずだけど、あの人が僕の言わんとすることをわかってくれたかなあー。おそらくわかっていないだろうなあー。

4．女の罪は男のせい！？

さらに同じくこの団体に関わっていた女性から、次のようなコメントが来た。「女性を憎む男性たちのブログやサイトを見ていると、『女を下位のものと見做しているから、女性を許せないんだ』と感じる時があるんですが……。」という内容のものだった。「僕は子供の頃から、女の子にいじめられるような弱虫で、女性を下位の者に見做したことなんてありません。」とコメントを返した。しかし、彼女は、「でも……。」と、またしつこく突っ込みを入れてきた。

どうやらこの女性は、僕の気持ちを察するのではなく、僕のブログのなかに自分の読み取りたいことを読みこもうとしていた。おそらく、「女は男に何も悪いことはしていない、男の意識の問題なのだ」と僕に言わせかけたのだろう。女性から被害を受けたと感じるのは男性優位な意識を男が持っているからで、だから、そういう意識をもつ男が悪いのであって、女は悪くないのだと思いたいのだ。

5．二次被害

うーん、これでは議論が進まない。

僕は普段大学で教えているが、今の若い子は、性の問題に関してはきわめて敏感で、ちょっとしたことであっても、過剰な反応を示す子はいる。男子大学生も、下ネタをする時はある程度は場所と相手をわきまなくてはという意識はもっている。「だって、先生、今は男同士で話をしていて、たまたま近くで女の子が聞いていただけても、彼女がセクハラだと感じてしまったら、セクハラになっちゃうんですよ」と言われたのが 10 年くらい前だった。

もちろん、下ネタが好きな人同士が集まって、下ネタをするのは勝手だが、新年会の席で、隣に下ネタ嫌いの人が座っているのに、その人のことはおかまいなしにそういう話をし続けるなんて、環境型のセクハラである。またそれを煽った男性も、セクハラ教唆の罪にとわれるはずだ。

男がおごるという問題は、男のほうが入収入が多いのが当たり前の時代だったらわからない。しかし、今はこの下流社会。男のほう給料が高いとは限らない。女性のほうも、そのことはわかっているだろう。それに合意のうえで付き合っておいて、お金をとることを強制してしまったら、売春と一緒に。そう思われるのは嫌なんじゃないの？ フェミニストのなかには、「男が女を養ったり、守ったりするのは女性差別だから、しないほうがいいのよ」と言う人だっているぜ！？

僕が女性と付き合えないのは、女性になめられるタイプだからだ。僕は相手に合わせ過ぎる性分なので、付き合うのがしんどいのである。女だって、男に合わせてばかりでは身

がもたない。だからこそフェミニズムが起きたはずなわけで、男に女に対して白旗をあげさせようと先導するのは変だ。それでは男性解放ではなく、女尊男卑なのである。

世の中はまだまだ男性優位主義だというけど、現実はそのような単純なものじゃない。すべての男が社会的・経済的・肉体的・精神的・頭脳的に女性よりも勝っているとは限らない。じゃあ、女性たちに訊くけど、もし男にセクハラされたとして、その男がものすごく貧乏で、家族からも愛してもらえず、学歴もなく、ぶ男で、何の取り柄もない、かわいそうな男だったとしたら、女性は、その男のことを許せるわけ？ 多少の情状酌量はしてくれるかもしれないけど、セクハラしたこと自体は反省して欲しいと思うはず。それと同じで、万が一、僕が男尊女卑的な男で、女性を下位の者とする意識をもっていたとしても、僕が女性に傷つけられたことは事実なわけで、女性にも反省すべき部分があることも事実なのである。社会の外枠を牛耳ってきたのは男であるにしても、女性だってその枠の中で、男に影響を与えたり、色々な選択したりしてきているはずだ。だから、半分は女性の責任なのだという責任感をもってもらわなくては困るんだよなあー。

こんなわけで、せっかく男性運動に関わったのに、僕はイライラのし通しだった。河島英伍の歌に「時代遅れの男になりたい」という歌があるが、僕が男性運動で知り合った人たちは本当に時代遅れな男たちであり、そして、時代遅れな男しか知らない女性たちである。時代遅れな男を基準にして考えてしまう人ばかりだから、僕みたいに時代の先端に行く男(?)は、二次被害にあってしまう。女

性からトラウマを負わされた上に、女性から傷つけられた経験をどれだけ訴えたところで、「それは一部のことだ」「あなたが男尊女卑の意識を持っているからだ」「その原因をつくったのは男社会だ」と跳ね返してこられたのでは、議論は振り出しに戻ってしまう。僕は自分の感情を否定されて、さらにトラウマを深めることになる。

実は、僕は12年前にもまったく同じ理由で、他の男性解放運動家の男性ともめていて、もう二度と同じ失敗は繰り返すまいと思っていたのに、性懲りもなく同じ確執を繰り返してしまった。そういうアホな俺にも問題はあるけど、日本の男性解放の人って、なぜ、こんな(僕目から見れば)時代遅れな人ばかりなのか。僕はとても付き合っていられない。癒しを求めて運動に協力したのに、逆に傷つけられるというのでは何のメリットもないのである。

この頃は、N先生と親しくしているが、N先生は、僕がもめた二人の男性のこともよくご存じで、冗談半分で「第三の男にしないで」と言われている(笑)。二度あることは三度ある? いや、三度目の正直を信じたい。N先生こそ、僕とともに歩むことができる男性であると信じたいところなのだ。N先生は、僕が訴えんとすることも十分にわかっていると思う。「これまでは、おじさん型男性運動だ」とはN先生自身もおっしゃることなのである。

簡単に言ってしまうと、今までの男性学・男性運動は、マッチョな男の人を脱マッチョさせる運動であり、僕みたいにマッチョでない男の人に手を差し伸べる運動ではない。もちろん、脱マッチョ運動も大いに結構だけど、「その理論を俺みたいなマッチョでない男に

あてはめないでくれー」と僕はずっと不満を募らせていて、それが鬱積して爆発してしまったのである。

2 『僕達急行 A列車で行こう』(2012)

『僕達急行 A列車で行こう』は、『家族ゲーム』(1983)や『それから』(1986)など、様々な傑作を生み出してきた森田芳光監督の遺作だ。森田監督は、まだ61歳の若さで亡くなったわけだが、この映画を見るとおいしい人を亡くしたと思わずにはいられない。『僕達急行』は、文句なく、僕にとって今年のベストワン映画だし、僕が時代遅れだと感じる人たちに、是非、見て欲しい。主演は松山ケンイチと瑛太。現代の日本映画を代表する若手男優2人だが、何よりも2人の友情が微笑ましくて、これからの男はこれだよね!と思わず、膝を打ってしまったのだ。

(1) 限りなくゲイに近い友情

僕は、この映画、まったくの予備知識なしで見たのだが、最初はゲイの話なのかと思った。冒頭、列車のなかの風景がスケッチされる。松山ケンイチは一緒にのっている女の子を怒らせている。一方、瑛太は外国人2人と何やら話をしている。同じ列車に居合わせた2人は初対面なのだが、この2人がニコッと微笑み合うショットの後、映画のタイトルが出るのである。松山がほほ笑み、瑛太がそれに応える。2人とも品が良くて草食系。なんとなくボーイズ・ラブを彷彿とさせる開幕である。

しかし、話が進んでいくとそうではないことがわかる。2人とも大の鉄道ファンで、鉄道が2人を結びつける共通項となるのだ。男同士が共通のもので結ばれて、友情をはぐくん

でいく。そういう話はいくらでもある。しかし、この映画で面白いのは、圭(松山)と健太(瑛太)の友情の描き方だ。

ゆで卵と焼鳥

まず、2人が食事をしながら話す場面。ゆで卵の殻をむいているアップが真上から撮られる。そして画面は横側から、健太の部屋で、小さな食卓に向かい合って座って、卵と焼鳥を食べている2人をとらえる。なぜ、卵と焼鳥なのか。森田監督らしい、わけのわからない、すっとぼけた面白さである。しかし、深読みして解釈すれば、卵と鳥は親子どんぶりの関係だ。これは、この2人が親密であることを示唆する指標となる。

いちごミルク

またちょうど映画のなかほど、博多に左遷された圭の部屋に健太が遊びに来るのだが、「何か飲む?」という圭に、健太は「いちごミルク。練乳をたっぷりかけてシェイクして」と答える。圭がキッチンに行こうとすると、「うそうそ、お茶でいいよ」と健太。しかし、「傷ついた心に優しいよ」と圭は、本当にいちごミルクをもってくるのである。ここでまた小さな卓上テーブルで向かい合って、2人の会話が始まるのだが、「お見合い断られて、落ち込んだよ。いい人だったんだけどね」と健太。「女子の気持ちは女子にしかわからない。わからないことはストレスになるから考えないのが一番だよ」となだめる圭。ここで健太は、圭が出してくれたミルクを飲み干す。

今でも男2人でパフェを食べたりするのは恥ずかしいという人がいる。僕はこれがよくわからない。男でも甘党の人はいるし、僕もパフェは大好きだ。しかし、男が食べる場合は、女性同伴、あるいは少なくとも男一人で

ないと変に見られるのだそうだ。男 2 人だったら、居酒屋か焼き肉か、そういう男っぽいところでないとあかんと思っている人はまだまだ多くて、男性差別である。甘いものには恋愛の匂いがするからだろう。しかし、圭と健太をつなぐものはいちごミルク。2 人はゲイではないのだが、こう考えてくるときわめてゲイ的な友情であることがわかるだろう。

パステル色の服

服装にしてもそうだ。圭はパステル・ブルーの服で登場する。一方の健太はパステル・ピンク。パステルカラーとは中間色であり、柔らかさを示す。深読みすれば性的にも中性であること、両性具有的であることを意味する。さらにブルーは男子の色、ピンクは女子の色だ。トイレなどは、男子用が青、女子用が赤で表示される。青と赤を薄めれば、パステル・ブルーとピンクになるわけで、そう考えれば、圭が同性愛の男役であり、健太が女役であると解釈することもできなくない。

しかし、圭も健太もフェミニン系で、どちらも男っぽい男ではない。2 人の関係には男同士の関係にありがちな攻撃性が欠けているし、両者とも受容的で、女に負けたくないとか男のほうが上位でなくてはならないという気負いはまったく感じられない。2 人はいちごミルクの仲。男同士の友情は、スポーツとか戦争とか、戦いにカムフラージュして描くケースが多いのだが、この映画は、それとは、まったく対照的な男同士の関係をさりげなく、なにげなく描いてみせる。

同じポーズ。

2 人は、福岡を旅する途中で、同じく鉄道ファンの筑後雅也(ピエール瀧)と出会う。「あなたたちいつもこうやって旅しとっと。うら

やましいねー」と筑後に言われて、2 人は同じポーズで頭をかく。この一瞬のさりげない味わいも微笑ましい。反射的に同じポーズをするということは、女性同士ではよくあることで、お互いがシンクロしていることを示唆するものだ。異性愛でいえば、ペアルックを着ているのと一緒にいる。すなわち、2 人は女性同士、もしくは恋人同士のような男同士の関係を結んでいるのだが、そのことをまったく意識している様子がない。こういう男同士の関係は、筑後が言うようにまったくもって「うらやましい」ものなのである。

優しい男

健太が列車にのって帰る場面。ホームにいるケンイチに何度も笑顔で手を振るところも挿入される。笑顔は、感情の表出であり、相手を包み込む優しさである。30 年前に流行った中島みゆきの「誘惑」という歌があって、♪ 優しさそうな表情は女たちの流行、崩れそうな強がりや男たちの流行 ♪ と歌っていくのだが、今となっては、優しいのは男・強がるのは女だ。

(2) 草食系男の恋愛

健太のお見合いの場面。見合いの相手あやめ(松平千里)は、健太の父・哲夫(笹野高史)や彼女の母・ふらの(伊東ゆかり)も同席している見合いの席で、いきなり「私、キャバレーにつとめていたんです」と語り始める。「関心ですねー」とすっかり固くなっている瑛太は答える。「過去は問わないよな。私も息子もキャバレー好きです」と哲夫。「いや、僕は……」と健太。どうやら健太は、キャバレーのような女遊びをする場所は苦手らしい。

あゆみと健太のデートの場面でも、あくま

でも積極的なのはあゆみであり、「あゆみさんは恋愛に積極的なんですか？」とおずおずと尋ねるのは健太のほうだ。「これと思った人にはね。うふふ」とあゆみ。その後、健太はまんざら彼女のことが嫌いではないのだが、あやめのほうは「インパクトがないから」と健太との付き合いを断り、一度は寄りを戻そうとするかにもみえるのだが、やはり彼女のほうから分かれるということになる。

一方、福岡に転勤した圭は、福岡の同僚から、「中津の別嬪さんには気を付けなよ」と言われて、「趣味は列車にのって音楽を聴くことです。誤解されないように最初に言うておきます」と答える。またその後、クラブに誘われる場面でも、「僕はそういうところ行ったことないんで」と後ずさりする。

圭も、健太同様に、女性に対しては奥手であり、キャバレーやクラブのような女遊びをしたりする場所には馴染めないし、行く気にはなれない。そんなところに行く暇があるんだったら、鉄道のことを考えていたほうが楽しい。そういう男性なのである。

圭がつきあっているあずさ（貫地谷しおり）は、あゆみ同様に、恋愛に対して積極的な女性で、デートでも、「私のこと好き？ 好きでしょ」と迫ってくるし、「大丈夫よ。自分の分は自分で払うから。私、おごられるの嫌いな」と男におごらせることを拒否する現代的な女性だ。「私のこと好きならキスして」と迫るあずさに圭が応えて、一瞬ロマンティックなムードが高まる場面もあるが、ここで列車の音が聞こえてきて、思わず、圭は唇を離してしまい、あずさを怒らせてしまう。

2人の別れの場面では、「私と結婚する気ある？」と問うあずさに、「好きだけど、結婚今

はしたくない」と答える圭に、「私は今、したいのよ。旦那さんと色々なところを旅したいの。誰もいないところでの中途半端なキス。私、忘れないわ。」と言いだし、結婚することになった外国人の男を圭に紹介する。

男のほうが優柔不断。女のほうは、さばさばしていて、人生に対して意欲的、自分に対して不要と考えた男を未練たらしく追うことはなく、きっぱりと決断を下し、そして、相手も傷つけずにカラッと離れていくのだ。

（３）趣味がプライオリティ。

結局、圭も健太も、女性よりも鉄道のほうに夢中だ。女性だけでなく、仕事よりも鉄道である。

2人が偶然知り合った筑後は、クラブでの再会で、圭の取引先の社長であることがわかり、圭と筑後は仕事のことやクラブの女性たちのことはそっちのけで、鉄道談義に熱中する。圭の会社の接待役・天城（西岡徳馬）は、「どうやら2人はできとりますな。鉄道の話で結びついていて。あの2人は2人きりになれます。そのほうが取引は上手くいくでしょう」と社長（松坂慶子）に耳打ちすることになる。圭、健太、筑後、男たちのプライオリティは趣味なのである。

終盤、あずさに振られた圭に健太がよりそう。「僕達もてないのかなあー僕も見合い断わられたし」と健太。「関係ないよ。僕らしかわからない世界があるさ」と圭。「そうだなあ」と健太。ここで筑後が話に割り込んでくる。「そうなんだよ。僕も仲間に入れてくれんね。あんたたちがうらやましかよ。社長になると友達がなくなるもんね」

筑後のこの台詞には社長という地位よりも、

共通の趣味をもつ友達がいる人生のほうがずっといいという想いがこめられている。

映画のファイナルは、列車にのって、一緒に駅弁を食べ、ビールを飲む仲むつまじい圭と健太のツーショットと鉄道が走っていく場面がモンタージュされる。

「休みとってどこかに行こうか」と圭。「お互い、カップル同士だったりして」と健太。「それはないよ。でも、そのほうがいい、そのほうがいい？」とふざけて、健太の顔に自分の顔を近づける圭。2人は身体の関係はないのだけでも、男同士のカップルでもいいか、それが一番楽しいんだったら……とこの結末は訴えているように思える。

2人は女性がいなくても、仕事が上手いかなくても、鉄道と友情がある限り、十分、幸せそうに見えるのである。

3．新しい男たちの時代。

この映画の優れたところは、ジェンダーとセクシュアリティをちゃかしているところだ。社長を松坂慶子が存在感たっぷりに好演していて、女性がトップの会社なのだが、そのことを映画はことさらに強調してはいない。当たり前のことのように女が社長を務め、当たり前のことのように主役の男二人が同性愛的な/女性的な友情を紡いでいく。

それが、きわめてナチュラルに描かれ、新しい性の時代の幕開けを感じるのだ。しいてジェンダーを感じるのは、鉄道が2人の共通の興味であること。列車は旅のシンボル。旅するのは男なのである。これがもっと女性的な趣味だったら、さらに面白いことになっていたところだが、東映のようなメジャーな会

社で製作された映画にそこまで期待するのは酷だろう。かつてはやくざ映画というイメージだった東映が、ここまでジェンダーフリーな内容のものを世間に発表したことを高く評価したいと思う。

もう時代はここまで来ているのだ。これからは新しい男性の時代。とはいっても、まだまだおじさんたちは、30年前の中島みゆきの歌の世界を生きている。俺は、長年、男性学・男性運動をがんばってきたつもりなんだけど、まだ男性運動の内部の人からも認めてもらえない。いや、内部の人だからこそ、新しい男が見えなくなってしまうているのかなあー。本当に俺はつらいよ。あー、男は痛い！です。



1. 俺は、京都人！？

1月の終わり、僕はある50代の女性と、お互いに行きつけの自然食系レストランで会食をした。この時、彼女と僕が食べたのは京都風の白みそ雑煮だった。この店はアットホームなお店で家庭の味。ここに集う人は、大概は顔見知りで、家庭的な味が欲しいからやってくるのだと思う。値段も手ごろだし、自然食だから健康にもいい。もちろん、味も美味しい。

この日、雑煮を食べたのには理由があった。今年の正月、母から電話があった。「あんた、50歳近くにもなって、正月からコンビニグルメなんて物悲しいわよ。こっちに帰ってくれば、雑煮ぐらいは食べさせてあげたのに…。」母は僕の理解者だ。母と暮らす弟も理解してくれている。僕は、母と弟には誰よりも感謝しているけれど、少年時代のトラウマが大きくて、できる限り、故郷には帰りたくない。たまたま故郷の熊本で悲しい少年時代を送ったからと言って、熊本全体に偏見をもつ僕は、合理的に考えれば確かに間違っている。さらに僕は、熊本でひどい目にあったことで、九州全体に偏見をもち、引いては地方全体にも偏見をもっている。でも、わかって欲しい。

「偏見」を生きる便（よすが）にするしかない人だって、世の中には存在するのだ。

僕が大学入学で京都に出てから、京都での生活にこだわり続け、よい仕事のチャンスがあっても、地方には行こうとしなかったのは、「地方よりも都会のほうがいいんだ」という根強い偏見のせいだった。もちろん、関西も東京から考えれば地方だ。僕は、元々は東京指向で、受験勉強をしていた時も東京しか考

えていなかった。しかし、不登校で、受験勉強の期間も少なく、大学を慎重に選ぶゆとりもないまま大学を受験するはめになった僕は、博多の西南学院大学を第一志望にして大学進学を考えることになった。九州そのものは嫌いだけど、博多は都会だからまだ許せる。僕はそう考えていた。そして、西南の法学部と文学部を受験することに決めたのが、僕の数奇な運命の始まりである。その時たまたま、法学部の入試の後、1日置いて文学部の入試だった。「この間の一日で、どこか受験できる大学はないものか、一日遊ぶのはもったいない……。」そう思っていたら、その日がたまたま京都の立命館大学の地方試験の日だった。

不登校で高校に行かなかった僕は、修学旅行で京都に来た経験もなく、立命館という大学についても何も知らなかった。しかし、とりあえず、受験しよう。両方受かっても、西南のほうに行くつもりでいた。結果、無事にすべて受かった。しかし、想定していなかった問題が合格発表の日に立ちはだかった。西南の方は地元の新聞にも合格者の名前が掲載されていたのだが、西南の合格者はほとんど9割以上、九州の高校の出身者だ。当たり前と言えば当たり前。本州から九州の大学に来る人なんてそうそういるもんじゃない。中学時代に一緒だった男の子の名前もあった。ということは、僕の不登校の過去も、いじめられっ子時代も知っている人がいるということ。また僕の名前の後ろには高校名ではなく（大検）と書かれている。おそらく、すぐに僕は偏見の的になるだろう。僕はその点がどうにも心配で、立命館の方に入学することを決めてしまった。

今でも、「なぜ、俺は京都にいるんだ??？」

と不思議に感じることがある。物心つく頃から東京の大学しか考えてなくて、それが博多で妥協することにして、さらに運命の悪戯で京都へ来るなんて……。学風は立命館よりも西南の方が僕と合っていたことは、京都に来てすぐにわかった。あの当時の立命館は、人氣が落ちた時期で、「クライ」「ダサイ」「アカ」「イモ」「ぶ男・ブス」だとか言われていて、入学してから後悔することが度々だった。また卒業間際になって、ゼミの先生からアカハラまがいのことまで言われ、憎しみの残るような卒業の仕方になってしまった。

それでも僕は、30年間に渡って、京都に自分の居場所を懸命に求め続けようとした。しかし、現実は厳しい。僕はいまだに京都が自分の居場所だという実感が持てない。そのことを話すと、「東京はしばらく住んでいれば東京人として認めてもらえるけど、京都は、『先の戦争は応仁の乱』だからね」としばしば言われる（笑）。僕が、京都の女性と結婚でもして子供でもできていたら、あるいは、京都の大学の専任教員になれていたなら、僕の京都アイデンティティは確固としたものになっていたのかもしれない。しかし、それはかなわなかった。僕は、少年の頃のトラウマが大き過ぎて、女性と付き合うことにも、京都の大学に専任職を見つけることにも、積極的になることはできなかったのだった。結婚したり、大きな組織の一員となる自信がなかったのだ。50歳近くになって、トラウマはだいぶ回復はしてきたけども、もう今となっては、結婚も専任も遅いだろう。せつない話。

しかし、京都風お雑煮を食べたことで、一段、ささやかだけど、京都の生活の土台ができたような気がした。母から「雑煮も食べな

い正月なんて」と言われたと話したところ、この店のオーナーの女性から「雑煮くらい、言ってくれば、私が作ってあげるわよ」と言われ、俺ひとりのためにつくってもらうのは気の毒だから、もう一人常連客の女性を誘った。ちなみに店のオーナーの女性は東北出身。一緒に雑煮を食べた女性は、九州の出身である。他の常連客のお客さんたちも、生粋の京都人と言う人は少ない。皆、流れ流れて、このレストランで集うようになったのである。

『キルトに綴る愛』(1995)というアメリカ映画に、「若い人は完璧を求める。でも、若くない私たちは、つぎはぎのなかに美しさを見出すものなのよ」という台詞があって、僕はこの台詞が忘れられない。そう、キルトといえば、布のつぎはぎ。つぎはぎのほうが味わい深いという言い方はできるのだ。つぎはぎの人生を生きてきた、若くはない人たちが、一つの店にたむろするなんて、素敵な風景だ。これこそ、京都らしいと言えるかもしれないのである。京都は文化の町、応仁の乱からの京都人にはなれなくても、京都のアウトサイダーとして生きていく手はある。この日は、オーナーの女性の紹介で、近くのパン屋さんに言って酵母パンも買った。ここも美味しいこだわりのお店。「こだわり」は人間を苦しめるけど、同時に成熟させる。「俺が京都にこだわって生きてきたことも、決して無価値なことじゃないんだ。」そう、思った。

思えば、京都の白みそ雑煮を食べたのは生れて初めてだった。30年間、京都での居場所を見つけようと頑張って、やっと口にしたい一杯の雑煮。ここまでのどり着いた自分を誉めてあげよう。「俺には、京都の雑煮を食べる価値がある！！！」と。

2. 俺はゲイ！？

一緒に雑煮を食べた女性は、フェミニストではないのだが、ジェンダーやセクシュアリティのこともよくご存じだ。

「僕は、変なセクシュアリティなんです」と僕は彼女に打ち明けた。

「セクシュアリティは、人それぞれなんだから、変も何もあったものじゃないわよ」と彼女。

「僕は、男の人とゲイ関係になったことはないのだけど、男同士の関係はすごく好きです。子供の頃、友達がいなかったから、今になって、『スタンド・バイ・ミー』みたいな友情に憧れるんです。女性に欲望がないわけじゃないけど、女性と付き合うとなるとカッコつけなきゃいけないから面倒くさいんですよね」と僕。

「カッコなんてつけなきゃいいのよ」と彼女。

「でも、僕は若い頃、女性から『気持ち悪い』と言われ続けて、だから女性が怖いという気持ちは抜けないんです。女性への偏見と言われるかもしれないけど、僕は男の子から『気持ち悪い』なんて言われたことはないし、僕のことを気持ち悪いと感じるのは、女性独特の生理なんだと思うんです」と僕は訴えた。

「若い女の子は、『可愛い』と『気持ち悪い』くらいしかボキャブラリーがないのよ。確かに、私の頃も、女子に『気持ち悪い』と言われていた男の子はいて、そういうタイプの男子って、女の子とばかり遊んでいたり、他の男の子のなかに入れなくて、浮いているようなタイプだったわねー」と彼女は回想してく

れた。

「僕は、まさしく、そういうタイプだったんです。女子の方は深い意味はないにしても、『気持ち悪い』なんて言われるのは、男の自尊心を深く傷つけるんですよ……。僕が女性と付き合うのが怖いのは、女性から心ない言葉を言われた時に、少年時代のトラウマがフラッシュバックしてくるのが怖いんです。僕は強い女も怖いし、弱い女も怖い。強い女に傷つけられるのも怖いけど、弱い女に涙顔ですがって来られるのも怖いんですよ」と僕は話した。「男同士の方が楽だし、男の人の方が僕は好きです。これって、ゲイなんじゃないか。。。」

『メゾン・ド・ヒミコ』(犬童一心監督・2005)は、自分自身もゲイで、ゲイ男性ばかりの老人ホームで仕事をしている男をオダギリ・ジョーが演じて話題になった。オダギリ・ジョーはゲイに見えるだろうか。ゲイと言えば、普通、映画などでは、おねえ系に描かれるか、あるいは筋肉系に描かれるかのケースが多いが、オダギリはどっちにも属していない。繊細で、芸術的才能がありそうなところはゲイ的と言えるかもしれないが、しかし、とりたててストレートの男性と違った雰囲気があるわけではない。したがって、普通のところで普通に働いていても、違和感はない男に見える。しかし、彼はメゾン・ド・ヒミコという老人ホームで、老人ゲイの世話をしながら生きている。「俺はずっと独りだったからさー。卑弥呼と会うまで」とオダギリがつぶやく場面がでてくる。ここにそこはかとなないゲイの悲しみが感じ取れる。

僕は、オダギリと自分を重ね合わせた。僕は不登校で、高校にどうしても行かれず、通

信制の高校に通いつつ、大検の準備をした。通信制の高校は、当時、おじさんやお婆さんばかり。普通の男の子が、クラブやスポーツや受験勉強や遊びに明け暮れている頃、僕はおじさんやお婆さんと勉強することしかなかったのだ。言いようもない孤独。まだ不登校や引きこもりという言葉もなく、誰も理解してはくれない。しかし、通信制の高校だけは行かなくては……わらをもすがるような思いだった。あの時、誰か自分を救ってくれる男性に会っていたら、おそらく、僕はその人に一生の恩義を感じただろう。

オダギリ自身が述懐しているように、岸本春彦(オダギリ)は「老け専」の男ではない。映画は、かつてはゲイバーを経営していた卑弥呼(田中泯)の娘の吉田沙織(柴咲コウ)が、死ぬ間際にいる父のところにやってくる場所から始まるのだが、岸本は、沙織の上司である細川(西島秀俊)に性的にはそそられている。岸本と細川の最初の会話の場面。「てっきり吉田の彼氏だと思っていました。吉田にしてはいい男つかまえているなあ」と細川が言う。「僕、女に興味ないんですよ」と岸本は答える。今度は、岸本が細川に「細川さんは、男から迫られたりしたことあるんじゃないですか?」と問いかけ、「学生の時にアメフト部のやつにいきなり羽交い絞めにされそうになったことはありましたね。」と細川が答える。異性愛と同性愛が交錯する世界が垣間見える。細川からすれば、岸本ほどのイケ面だったら女にもてるだろうと考え、岸本の方も、細川ほどのイケ面だったら男に襲われることもあるだろうと考える。同性愛者は同性愛の目線から考え、異性愛者は異性愛の目線で考える。思えば、異性愛・同性愛と分け

てしまうから関係が上手くいかなくなる。たまたま好きになった相手が、同性だったり、異性だったりするというふうに変えてしまった方が万事上手くいくように思えるのだけでも、今の社会では、同性愛は徐々に認められるようになったものの、性的指向はどちらか片方であるという考えは根強いように見える。もっと柔軟に両方を行き来することはできないのだろうか。

不登校だって、俺たちの頃はよほど変わったやつだと見られていた。しかし、今は不登校のやつはいくらでもいるし、いじめや体罰が横行する学校なんて、やめることも一つの選択だと考える子も増えているだろう。俺が不登校だった頃、俺を白眼視した熊本の連中。俺は今でも許せない。時代が流れ、不登校が異常とは見なされなくなった今、彼らは俺に対して「すまない」と思ってくれているだろうか。

3. 俺は、ナリワイ！？

「僕は社会的地位があって、奥さんと子供がいる人が羨ましいなあと思いますよ。だって、そういう人は丸ごと存在を受け入れてもらえるんだもの」と僕は彼女に話した。

「あなただって、受け入れてもらえているでしょう。非常勤の仕事はちゃんとあるわけだし、友達も多いし……。あなた自身が勝手に、『社会的地位や妻子のいる男のほうが幸せだ』という昔の価値観にとらわれているだけなのよ」と彼女。

「数年前に仕事をご一緒した女性がいたんです。で、理想の男性は？という話になって、彼女は、『仕事ができる人』と答えたんです。

僕は一瞬、『結婚しても、私に仕事をつづけさせてくれる人』という意味で言っているのかと思ったんだけど、そうではなくて、『仕事の能力のある男性』という意味で言っていたんです。彼女は僕と同年代で、独身なんだけど、ずっとキャリアを積んできた人だから、彼女が家族を養うくらいの経済力だってあるはずなんです。なのに、やはり男にはそういうものを求めるわけでしょう？ 彼女に、『僕は大きな組織でやっていく自信がないから、非常勤で頑張っていきます』とメールでしたら、『国友さん、充実した仕事のためには、安定した基盤があったほうがいいですよ』と返事してこられたんですよね。なんとなく、傷つきました」と僕。

「それは彼女もあなたと同年代だから、そういう価値観を刷り込まれてしまっているのよ。安定した地位があって、妻子のいる人が必ずしも幸せとは限らないことはわかっているでしょう。隣の芝生は緑なだけよ。」と彼女。

そうなのだ。俺たちはもうアラフィー（50前後）だ。俺たちの世代の価値観はもう古い。それを自戒しなくてはならない。

最近になって、「ナリワイ」という言葉が、僕の周りの若い人の間では流行っている。伊藤洋志さんが『ナリワイをつくる：人生を盗まれない働き方』（東京書籍・2012）という本を書いて、これが話題になっている。伊藤さんは、非バトルタイプの生き方と言うことで、自分のしたいことをやって、それでお金を稼いで、お裾分けのネットワークを紡いで、自力で生きていくことを「ナリワイ」と定義して、提唱している。僕の行きつけのカフェのお兄さんも、伊藤さんの説に賛同していて、カフェをしながら、マッサージをしたり、空

手を教えたり、そういう生き方をしていきたいと話していた。昔だったら、こういうフリーター的な生き方はなんとなくネガティブなイメージがあったのだけど、今となってはポジティブである。「今さら、終身雇用で愛社精神という時代じゃないですから」とそのお兄さんも語っていた。

俺だって、大学の非常勤講師の他に翻訳やテープ起稿のバイト、本の執筆などもしたことがあるので、「ナリワイ」という言い方はできる。そう考えれば、俺は時代の先端に行く生き方を選択してきたナリワイ男ということになる。そうそう自分を悲観することもないのかもしれない。

4. 俺は、ブロマンス！？

僕の交友関係は、女性もいるが、親密なのはほとんど男だ。そのなかには 30 代、40 代の独身男性も多くて、ひょっとするとゲイなのかなあと思う人もいる。でも、どっちでもいいのだ。そもそも、彼らと会っても、映画や趣味、仕事や社会、食べた料理やパソコン、旅や生き方の話ばかりで、女性の話にはならないし、性的な話にもならない。僕の知らないところで、女性と派手につきあっていたりするのかもしれないけど、そんなのは僕にはどうでもいい。彼らがゲイであろうが、女好きの精力絶倫男であろうが、僕と心のキャッチボールができるのならば、友人だからである。

この頃、便利な言葉ができて、男同士の恋愛の**ホモソーシャル**を**ブロマンス**(bromance)というのだそう。ブラザー(brother)とロマンス(romance)をくっつけ

た言葉だが、そういえばこれに近い男友達は僕には何人かいる。

前にも書いたボディ・メンテナンスの男性は、時々、僕の部屋でマッサージをしてくれるが、マッサージの場合だと女性はもちろんのこと、この頃は、男性でも変なところを触るとセクハラと言われる可能性があるので、それなりに気を使うらしい。

この人はオイルマッサージが好きなのだそう。時々、僕にはクリームをオイル代わりにしてマッサージしてくれる。当然、僕は上半身裸の状態、彼がクリームを塗ってくれるのだが、時々、かなりきわどいラインをマッサージすることもある。例えば胸をマッサージする時もあるし、僕は股関節が固いので股間を強い力で押される時もある。傍から見たら、ホモ行為をしているようにも見えるかもしれない。

「こんなことをするのは国友さんだけです。セクハラだと言われたら、悪い評判がたちますからね」と彼は言う。「ということは、俺が一番、友達だからだね」と言う。と、「そうですよ」と彼。彼の言葉は真実だと思う。よっぽど心を許し会った中でなかったら、2人きりで、こんなマッサージはできない。この人だったら、セクハラの言いがかりはつけないという信頼がない限りは触れないだろう。こういう時に「俺って、ホント幸せだ」と思う。この人は、俺のことを友達だと思ってくれているんだなあと思うからだ。

岸本は、沙織の父親の男の愛人である。母を苦しめた父の愛した男である彼に、最初は不信感をもつ沙織だけれど、2人の間には次第に友情が芽生えて入って、岸本が沙織に思わずキスをする場面がでてくる。彼のなかで異

性愛が芽生えたのだろうか。その後、天井を黙って見つめている彼の表情からも、彼がまんざら女性が嫌いではないことが示唆されるのである。キスされた方の彼女は、他のゲイのおじいさんに、「女性としたことありますか？」と思わず尋ねてしまう。同性愛の男が女を好きになるのかという疑問がわいてきたのだろう。

この後、彼女をベッドに誘う岸本。2人はベッドに腰掛ける。彼女の肩を抱こうとする岸本。彼女の顔を自分の方に向けてキスをする岸本。2人のキスシーン。彼女のエプロンをほどいていく岸本。もう一度、2人のキスシーン。彼女をベッドへ優しく押し倒していく岸本。キスをしながら、彼女の胸のボタンをはずしていく岸本。彼女の胸に手を入れていく岸本。彼女が靴を脱ぐショット。ロマンチックでセクシャルなムードがどんどん高まっていき、いよいよ岸本が同性愛から異性愛に転換するのかなと思わせる。しかし、もう一步のところまで「触りたいところ、ないんですよ？」と彼女。場面は海へとスイッチされる。結局、岸本は彼女と一線をこえないままなのである。

この場面は何を意味するのか？ 日本のゲイ研究の第一人者である伏見憲明は、彼自身ゲイだが、名著『プライベート・ゲイ・ライフ』のなかで、彼自身の女性体験を語っていて、女性とのセックスの際、女性の身体に欲情していたわけではなく、自分の男の部分に欲情していたんだと語っている。すなわち、「女性とセックスをしている自分の男性性」への欲情である。しかし、これはゲイに限った事じゃない。ゲイのほうがナルシズムは強いのだろうとは思われるが、異性愛の男性で

あっても、女性とセックスする場合に、自分の男の部分に欲情している部分があることは否めない事実だと思われる。

この後、映画の終盤、今度は細川と沙織のベッドシーンが描かれる。細川はストレートの男性なので、彼女の身体を必死に求めようとはするが、ここで描かれるのはもっぱら沙織のふてくされたような不満げな顔。細川の顔は映されず、「声を上げろよ」と沙織に命令する声だけが印象に残る。2人は性交まで行くのだが、その後、「わたしが泣いているのは、あなたが思っている理由ではありません」とふてくされる沙織の顔がアップでとられ、その背後のほうに上半身裸の細川がぼんやり見える。すなわち、細川は女性とのセックスで、自分が満足すれば相手の気持ちなどはどうでもいいというタイプの男であり、肯定的にはとらえられていないのだ。先の岸本とのラブシーンは、性交にはいたらないにしても、繊細な優しさが漂っていた。これと対比されるのである。

この映画で細川と岸本を演じる西島とオダギリは、2人とも女性にもてるタイプのイケ面だが、あくまでも、この映画ではゲイである岸本の方に軍配が上がる描き方となっている。彼の方が女性に対して優しく、沙織も彼に抱かれている時のほうがはるかに幸せそうに見えるのである。

卑弥呼の死後、荷物をまとめて去っていく沙織に、「細川さんからセックスのことを聞かされた。ちょっとうらやましかったよ。お前がじゃなくて、細川さんが」という岸本の台詞で、オダギリは彼女とセックスすることができたのではないかということが仄めかされる。伏見によれば、ゲイの人もほとんどは結婚す

るのだそうで、隠れゲイはたくさんいるわけだし、ゲイだから女性とセックスができないわけではない。しかし、この時点で、まだ岸本は自分の殻（こだわり？）をやぶることに躊躇があるのだ。「もう一生、会わないだろうなあ」と岸本はいい、沙織はバスで去っていくのだが、彼女が再び戻ってくるところで、映画はエンドとなる。

再び戻ってきた沙織に、岸本は「チューしていい？」と微笑み、「ダメ」と答える彼女だが、内心はダメだとは思っていない。果たして、この2人はこの後、どうなっていくのか。それは映画では描かれていないが、仮に岸本がゲイのままであるにせよ、女性に目覚めるにせよ、あるいは彼女とセックスをしようがしまいが、そのことは、おそらく問題とはならないに違いない。

5. 規範を欲望するということ

死の床にある卑弥呼を見ながら、「欲望が欲しいんだ。なんでもいいんだよ。強烈なのが欲しいんだ。愛や欲望なんてどうでもいいけど、でも、それが欲しいんだ」と涙を浮かべながら語る岸本の台詞には、熱いものがこみあげてくる。確かに、愛なんてどうでもいい。欲望なんてどうでもいい。そんなものなくたって、人間は生きていける。なのに、社会は、俺たちが愛や欲望にプライオリティをおくように仕向けようとする。しかも、異性愛でなきゃだめだ、一流企業でなきゃだめだ、持家でなきゃだめだ……と社会がつくりだした規範にそった愛や欲望を強要しようとする。しかし、その規範は絶対的に永遠に続いていくものではない。30年前には白眼視されていた

不登校が、今となっては珍しいものではなくなったように、一流企業に勤めることが、だんだんと若者への魅力を喪失してきているように、規範はどんどん変わっていき、社会の強要する規範を欲望していても、気がついた時には、その規範は時代遅れなのだ。

そのことがわかっていながら僕は、『社会的なポジションをもち、奥さんと子供がいる』という規範を体現している男性たちを、どこかで羨んでいる。欲望のコードは生れた時から、知らない間に、僕のパソコンにインストールされている強力なスパイウェアのようなものだ。それをアンインストールするのは、難しい作業なのである。

彼女とは2時間くらい話しただろうか。彼女と話しながら、俺は、ナリワイだし、ブロマンスをたっぷり楽しんでいるし、よくいえば時代の先端を行っている。決して不幸な男じゃない。京都にもこういう居場所ができ始めたのだし……と思った。しかし、俺は、「社会的なポジションをもち、奥さんと子供のいる」男性たちを、批判したりはしたくない。むしろ生き方は違っても、仲間になりたいと思う。人間は皆、孤独だ。だからこそ、俺だって京都に居場所を求めた。孤独を紛らわすためには、どこかに居場所が必要となってくる。規範を欲望し、規範に同一化することは、自分を受け入れてもらえるための手段であり、ある意味での居場所づくりである。孤独な人間たちの悲しい作業なのである。だから、僕は、誰も責めたくない。人間は誰だって孤独。孤独を共有すれば、人間は皆ブロマンスである。

最後に僕は、昨年の対人援助学会の大会で受けた質問を彼女に話した。僕は個人研究発

表で、女性から受けたトラウマを語り、被害男性の存在を訴えた。すると、若い男性から、「そういう男性をカウンセリングの場に引っ張ってくるにはどうしたらいいんでしょうか」という質問が来た。彼は、男性相談の窓口を紹介する仕事をしていたことがあるらしいのだが、奥さんに心ならずも暴力をふるってしまう男性だとか、加害者的な男性からの相談はあるけど、被害者的な男性の相談はないらしいのだ……。

「まだまだ男の人は、被害者になるのは抵抗があるからでしょう。国友さんみたいに自分のことをぺらぺら喋れる男はまだ少ないのよ。あなたは幸せだと思うわよ」と彼女は言ってくれた。

そうか！ 俺は、考え方を変えれば幸せなのかもしれない。

「規範を求め過ぎる人は、首つり自殺よ（笑）」と彼女は言った。

でもなあ。でも、やはり俺は寂しいから、規範が欲しいと思うこともあるんだよなあ。そうすれば、少しは孤独が紛れるかもしれないって……。これって、やはり無いものねだりなんだろうけど……。

考えてみれば、孤独って、女よりも男に似合う言葉ですよ。まだまだ、男であることは「痛い！」です。



1. まだらマッチョ

大学の2年の時のことだ。僕は英会話教室に通っていた。ある夏の日、授業の中休みに、女性の先生（当時30歳くらい）から、突然、こう言われた。

「あなた、背中に毛が生えているわね。私、初めて見たわ。日本の男性としては珍しいわね（笑）」

他の生徒たちもいる前での発言である。夏になって、それまでよりも薄着になったので、シャツの隙間から僕の背中の毛が見えたのだろう。それを面白がったのコメントなのだ。

確かに、この女の先生は「毛深いのが悪い」とは言っていない。女子に毛深いと言っては失礼だけど、男子だからちょっとくらい弄ってもいいかと思って言ったことなのだろう。しかし僕は、「この先生は授業中に、俺の体毛なんかを観察していたのか」という気持ちになって極めて不愉快だった。女子が男の先生から「いいお尻しているねー」と言われて、不愉快になるのと同じことだ。

今、考えれば、明らかにセクハラである。僕も教壇に立っている身で、僕は面白い系の先生なので、学生の前で冗談はしょっちゅう言っているが、しかし、男女を問わず、容貌のことだけは、冗談であっても、口にしないと決めている。容貌のことは、最も相手を傷つける部分で、こっちは誉めたつもりであっても、相手は傷ついていたりするからである。

毛深いということは、子供の頃からの僕の悩みの一つだった。中学くらいから少し胸毛が生え始めて、それがどうにも気になって、薬局に脱色剤や脱毛剤を買いに行ったことも

ある。もちろん、薬局のおじさんには「お姉さんから頼まれたんだ」と嘘をついた。

試してみたのだが、あまり効果はなかった。脱色剤だと毛の色が薄くなるだけなので、毛そのものがなくなるわけではない。また脱毛剤は、あまりにも綺麗に毛がなくなってしまうため、逆に不自然な印象を与える。剃刀で剃ると、ますます毛が太くなる。また脱毛剤にしろ、剃刀にしろ、すぐに新しい毛が生えてくるのである。

その後、脱毛テープや脱毛ジェリーみたいなものが市販されるようになって、これだと根元から毛を抜くせいか、ある程度は毛のない状態が長続きする。しかし、抜く時の痛さは大変なもので、肌が赤くなって因幡の白ウサギのような状態となる。そのことは、『ハート・オブ・ウーマン』（2000）や『40歳の童貞男』（2005）などハリウッド映画でも描かれている。映画で描かれるところを見ると、脱毛を試したことがある男は、僕以外にもたくさんいるということなのだろうけど、やはり男の脱毛はコメディになっちゃうねー。それほど真面目な問題としては描いてもらえない。

しかし、笑ごとにはされては困る。日本は毛深い男は嫌いだという女が多いからだ。欧米に比べると、毛深い男性は少ないから、見慣れていないというのが最大の原因なのだろう。もっとも、「毛深いのが気持ち悪い」なんていうのは、高校生くらいの女の子で、大人の女性には、好きになった男が毛深ければ、毛深い男が好きになる。事実、毛深いことが原因で女性と上手くいかなかったという話は聞いたこともない。だから気にすることはないだろう。しかし……。

男性はむしろ、毛深いのが羨ましいという

人もいる。人間はない物ねだりで、毛の薄い男性からすれば、胸毛は男っぽくてかっこいい。長嶋だって、加山雄三だって。それと僕の知り合いの細マッチョの若い男性によると、「毛深いのは男性ホルモンが多いということで、筋肉もつきやすいということなんですよ」とのこと。これは事実なのだろう。僕は胸や脚が毛深いので、胸囲は普通の男性よりも大きいし、マッサージの人から「いい脚ですねー」と言われる。一方で腕にはなぜか、筋肉がつかなくて、血管も細いので注射がしづらい。僕は、腕は毛深くない。

僕は全身が毛深いわけではなく、部分的に毛深いのだ。背中毛にしても、背中全面に毛が生えているわけではない。背中の上の方に鰓のように生えているだけのことで、下の方は生えていない。確か坂本竜馬がこういう生え方だったはず。

僕はあごひげが濃いので、若い頃、将来絶対に禿げると思っていた。あごひげが濃いということは顔の男性ホルモンが多いということなのだから、当然、禿げる可能性も高いと聞いたことがあったからだ。しかし、50近くになった今でも、禿げる気配はまったくない。美容院の美容師さんからも、「国友さんは絶対に禿げないタイプですよ」というお墨付きをいただいている。長年、美容師をやっていると、禿げるタイプの人と禿げない人の区別はつくのだそうである。

僕の男性ホルモンはまだらなのである。ホルモンの多いところとそうでないところが分かれているわけだから。そういえば、前に親しくしている男性から、「国友さんって、所々マッチョですよ」と言われたことがあった。僕は性格も、マッチョなところとマッチョで

ないところがあるらしい。

そう思ってしまえば、自分が好きになる。俺は、所々マッチョ……これは理想的なんじゃないか（笑）。マッチョな男とフェミニンな男の両方の善いところをもっていると解釈することも可能だ。そう、『風と共に去りぬ』のレット・バトラー（マッチョ）とアシュレー（フェミ男）の両方の側面を俺はもっているんだ一、とポジティブに考えようじゃないか。所々マッチョ、まだらにマッチョ、僕は「まだらマッチョ」と自分を命名したいと思う。

2. 久しぶりの脱毛

体毛については、20 過ぎるくらいからだんだんと気にならなくなった。21 の頃からプールに通い始めて、今でも通っている。もうかれこれ 30 年近いプール歴で、自分の裸をさらすことには普通の男性よりもはるかに慣れてしまっている。プールに行くと、毛深い男性も意外に多いし、女性たちの方もそのことを気持ち悪がっているというふうではない。若い女性の「気持ち悪い」は間投詞みたいなもので、それほど深い意味はないのかもしれないのだ。

そんなわけで、まったく毛深いことを気にしないで長い間、生きていた。ところが先日、僕のところにマッサージの友人が来た時のことだ。ムダ毛の話になった。彼は毛深いわけではないのだが、マッサージを自分の脚で試してみるのに、すね毛が邪魔になって、剃ってしまったというのである。「一回、胸毛とか、全部剃ったらどうですか」と彼から言われた。「でも、俺はプールに行っているからね。いきなり胸毛がなくなったりしたら、変に思う

人もいるだろうし（笑）」「意外にそんなの皆、覚えていないですよ」というやりとりとなった。僕は、この夏、彼と海に行く予定なので、ヘラクレスの彼と並んで海水パンツ姿になっても、見劣りしないような身体になるため、シェイプアップをしようと思っている。毛がない方が、筋肉は見えるし、写真で撮っておけば、身体の変化もわかりやすいだろう。やってみようか。

それでネットで探してみたら、この頃は男性用の除毛クリームもたくさん出ていて、意外に安い。この頃は、三浦和義や木村拓也が男のエステのコマーシャルをしたりもしているので、男が脱毛したりすることも、昔ほど奇異なことではないのだろう。50 近くになって、今さら男のエステもないか、いや、50 近くになったからこそ、エステでもして、自分を綺麗に保つ努力をしなきゃいけないのかもしれないのだ。

数日後、ふたたび、マッサージの友人が家にやってきた。「買ったんだよ」とクリームを彼に見せた。「さっそくやってみましょうよ」と彼も乗り気。僕の胸からお腹にかけての毛深いところにたっぷりとクリームをスプレーし、5 分から 10 分時間をおく。その後、ティッシュで拭きとるというやり方だ。ものの見事に僕の毛はなくなった（笑）。

その 2 日後、久しぶりにプールに行った。しばらく怪我で休んでいたの、2 カ月ぶりくらいで顔見知りのおじさんにも会った。「怪我しちゃって、大変だったんですよ」と話しながら、僕は半分身体を傾けて、胸が見えないように神経質になっていた。おそらく、俺の胸なんて覚えていないだろうけど、やはり、なんとなく気になった。「あの人、脱毛したん

じゃない」と噂したりするのは、一般には女性たちだし、男の人だったら、気づきもしなかったりするのだけでも。

そんなわけで、せっかく久々のプールだったのに、胸が気になって、のびのびとリラックスすることができなかった。実は、これを機に、定期的に脱毛して、毛のない状態を保った状態でプール通いしようかと思っていたのだが、そこまでするのはしんどい。後は生えるに任せて、海水浴とか写真を撮る時だけ、脱毛すればいいかと思った。

3. 格闘家になった！？

脱毛した後、何枚か上半身裸の写真を撮った。俳優さんやモデルさんとはわけが違うので、あまりカッコ良くない。50のおじさんだから仕方がないかと、とった数枚の写真を見ながら思ったのだが、1枚だけマッチョポーズで撮った写真がすごくよくとれていて、撮ってくれたマッサージの友人からも、「格闘家みたいでいいですねー。僕のメールにも送ってくださいよ」と言われた。

今は便利なものができたもので、写真も添付すればすぐに彼のスマートフォンに送れる。さっそく送った。「他のお客さんに見せていいよ」と言った。しかしメールを送りながら、変な心配がわいてきた。間違っ、女性の友達に添付したりしてしまったらという不安だ。いや、男の友達であっても、裸の写真なんかを間違っ、送りつけたりしたら、変な気持ちになるだろう。メールは送りやすいし、間違っ、送ってしまうケースが時々あるので、気が小さくて心配性の僕は、起きてもない状況を想定して心配をしてしまうのだ。

僕は、知らない女性に裸の写真を見られても抵抗ない。プールで会っている女性は普段が知らない人なので、いくら裸を見られても平気だ。しかし、普段仕事などで一緒の女性に見られるのはなあー。恥ずかしいというのもあるけど、「裸の写真を見せられた。セクハラだ」と言いがかりをつける女がいるんじゃないかなあーなんて、あらぬ心配をしてしまう。ジェンダーにとらわれるとこうなっちゃうんだねー。

4. 黒子をとりたい！

ムダ毛のほかに、僕がもう一つ気になっているのは、顔の黒子だ。僕の顔には顎と口元に二カ所、米粒大の黒子がある。何度かとうとうと考えた。何よりも困るのは、僕はひげが濃いので、剃刀を当てる時に、下手に黒子に当たると血が止まらなくなることである。黒子は血の塊なので、バンドエイドをしても長い時間とまらなかつたりする場合もある。

それにやはり顔のイメージを少し変えてみたいという気持ちもあった。黒子は皮膚科の病院でもとってくれると聞いていたし、黒子くらいだったら、整形のうちには入らないかと思っていたのだ。整形したと思われるのは、なんとなく抵抗があった。「あの人、芸能人でもないのに、男のくせに整形なんてして」と陰口言われそうで怖かったのだ。黒子くらいはプチ整形と言ってしまえば、すむだろう。この頃は、男の子でも歯を矯正している子はいし、それと同じと考えてしまえばいい。しかし、千昌夫は黒子を取った途端に借金まみれになったと聞いたしなあ。顔のイメージが変わるのも怖いし……とあれこれ悩んで、

結局、とらずじまいだった。

3年ほど前、僕が通っていた鍼灸の先生が、「お灸でも黒子はとれるからやってみますか」と言ってくれたことがある。これは絶好のチャンスかもしれない。俺はこの先生を信頼しているし、お灸だったら東洋医学だから、整形に比べればまだ抵抗はなかった。

しかし、その後、先生から、「申し訳ないんだけど、国友さんの黒子だのとった後、クレーターみたいになってしまう可能性があるんです。だからとらないほうがいいかと思って」と言われた。それでこの計画も没になった。

なんかかんかで、僕の顔には黒子がこびりついたままだ。この先とる日が来るのだろうか。これから不幸な出来事が相次いで、「運勢が悪くなったなあ」と感じた時は、黒子をとろうと思っている。黒子のせいで運が悪くなるという可能性もあるからだ（笑）。

5. ジェンダーは難しい。

とりとめもなく、品のない話を書いてしまった（笑）。でも、僕がここまで書いてきたことを読んで、読者の方はどう感じられるだろうか？

男性問題として考えるならば、僕は、まだ除毛したり、黒子をとったりすることに躊躇を感じている。おそらく女性だったら男ほどには躊躇を感じない。これはひとつの男性に対する抑圧だ。男は、顔とか容貌を気にするべきではないという価値観を僕は刷り込まれているのだ。しかし、この問題は、徐々に解決してきているようにも思える。おそらく、今の若い男の子は除毛や黒子除去くらいは、それほど偏見はもっていない。格闘家のよう

な僕の上半身裸の写真を細マッチョのお兄さんに見せたのだが、「夏に向けて、いい感じになったじゃないですか」と僕が除毛したことも、何とも思っていない様子で、笑顔で答えてくれた。おそらく、僕の価値観の方が古いのだ。

その一方で、元々無精者の僕は、綺麗な男が規範になってしまうのも、それはそれでしんどい。男は女性に比べると、ある程度、汚い格好をしたり、お行儀の悪いことをしたり、部屋を散らかしたりということも許される。これは男の特権である。この特権は手放したくないけど、ジェンダーセンサティブ男の僕は特権を行使することにも躊躇してしまう。

ジェンダーに鈍感な人。あるいは、ジェンダー規範と自分の性格や性癖がほぼ一致している人は幸せだ。完全一致とまでは行かなくても、社会が普通と見做してくれる程度に一致している人は、生きていきやすいだろう。しかし、僕は大きく規範に外れた男であるがゆえにジェンダーに批判的になり、女性化するのも抵抗があるけど、男の特権を行使するのも躊躇する。両方に引き裂かれながら日々を生きているのだ。

今から10年ほど前、ある60代の男性のカウンセリングを受けた。その人は、元々はエリートサラリーマンだったのが、うつ病になって、年をとってからカウンセリングの勉強を始めたという人だった。「ジェンダーにセンサティブになってしまったってことは、大変な苦勞でいらしたと思う」と言ってくれた。その人はお母さんが病弱だったため、「病気」に対して過度にセンサティブになってしまって苦勞したことがあったらしいのだけど、ジェンダーのほうの問題が大きいのだ。ジェン

ダーは生活の細部にまで入り込んでしまっていて、いったん囚われると生活全体が不愉快になる。また鈍感な人はまったく理解できないため、誰からも理解してもらえないという状況になってしまうのである。

6. 『電車男』

『電車男』（村上正典監督・2005）は、たわいのない映画なので、罪はない。暇つぶしに見る分には悪くないだろう。オタクの男の子の話なのだが、オタクの生態を描くのではなく、彼が女性と付き合うまでが話の中心となっているのだが、結局、このラブストーリーが実は彼の幻想のなかの物語だったという落ちがついて終わる。すなわち、オタクの男の子って、こんな幻想をしているものなんだという話なのである。

これを男性学的に分析してみよう。

①女を救う

主人公（山田孝之）は、22歳で、年齢と彼女いない歴が一緒という人物だが、電車の中で男に絡まれている女性（中谷美紀）を救ったことがきっかけで、生まれて初めて女性と付き合うことができるようになる。彼女はお金持ちのお嬢さんで、聖女のように優しい女性なのである。

悪漢に絡まれた男を救うことで女にもてる男になるなんて、本当に古臭い男性観で、あきれてしまう。これはコメディだからまだ許せるが、真面目に描いていたら、こんな不愉快な話はまずないだろう。男だって、絡まれたら怖い。自分の彼女や妻や母親や娘であっても、体をはって守る男なんて、今時ダサい。

まして、この映画、電車のなかでの見知らぬ女性という設定である。他にも多くの乗客が乗っているし、見知らぬ女性を守るために一人だけ立ち向かう男なんて、古めかしいヒーロー願望である。

しかし、そう思うのは、俺がジェンダーに反発する男だからで、現実にはこういう幻想を抱いている若い男は未だにいるのだろうか。

②深窓の令嬢におごる。

彼が救ったことがきっかけで、親しくなる女性は、昔風の言い方で言えば深窓の佳人である。何一つ苦労せず、桁違いの金持ちに育てられたお嬢さん。したがって、お金はたくさんもっている。しかし、彼は、彼女とのデートでどうしてもおごりたいという願望をもっている???

これはどういうことなのか。相手のほうがはるかに金持ちなんだし、彼女のほうも割り勘にしようと言っている。なのに彼は「男がおごらなくては!」というプレッシャーを感じているのだ。

これまた俺に言わせれば、おかしいヒーロー願望である。僕だったら、男女を問わず、自分よりもお金持ちだということが明らかなら、躊躇なくおごってもらうが、自分よりも貧乏だということが分かっている人におごってもらっても嬉しくない。親しさの度合いにもよるが、無理されると、むしろ負担になる。

もう15年近く前になるのだが、ある男性が軽食をおごってくれた。僕より年上の人だし、収入も僕に比べれば多い。ただ大して親しいわけではないので、おごられて恐縮してしまった。優しい人だから奢ってくれたんだと僕

は解釈して、好意的にとらえていたのだが、そのことを他の人に話すと、「あの人は、男はおごんなきゃという意識をもっているんですよ」とのこと。なるほどねー。男って、そんなふうを考えるの？ 俺は潮流とは外れた男なのか？？？ と一瞬、目が点になった。

しかし、この映画を見ていると、そういう男は今でもいるんだろうなあー。

③もてない男のサイト

この映画ではもてない男のサイトが出てくる。主人公のオタク青年は、ネットで見知らぬ友達と付き合うしか、人付き合いもないのだ。

で、この部分は、それなりに面白い。他のオタク友達が彼の彼女作りを応援するのだが、こういう話を打ち明けられるグループは、男にとって心強い。今ほどのネット時代になる以前・15年ほど前に、もてない男同士で場を共有して語りあうグループは、東京のほうにいくつか存在していた。所謂、男性運動だったわけだが、今はそういうグループも消滅してしまったようだ。しかし、サイトに場を変えて、こういう語らいが行われているのだとしたら、好ましい側面もあるだろう。とはいっても、現実にはこの映画のように微笑ましくはいかず、ブログ上で喧嘩になって、あわやブログ炎上というところが頭に浮かぶのだけでも。

しかし、男が「俺はもてないんだ」と自信を持ってカムアウトするようになったことは、男性学的に見て、価値ある進歩である。

④小ざれいにしてデート。

彼女とのデートすることになった主人公は、

まず身だしなみをととのえ、おしゅれをする。昔は、むさい男でも許されていたが、今では女性と会うのに、小ざれいにするのはエチケットである。男のエステもだんだんと一般化していくのだろう。

2人のデートの場面では、彼が彼女の前で泣いたりする場面も出てくる。男が好きな女の前で泣けるようになったことも、男性学的に見れば好ましい。男性が心のバランスを崩しやすいのは、「男の子だから、泣いちゃダメでしょ。愚痴っちゃダメでしょ。」というプレッシャーが大きく原因していることは、もう耳が腐るほどに言われていることなのだが、一考に男らしさから抜けられない男は、まだまだ存在するのである。

こう考えてくれば、もてない男のサイト、男のエステ、泣くことを恥じない男……と男性学的に見て、進歩と言えるような事柄が描かれている映画に思えるのだが……。重大な×印がいくつかある。

×1) 山田孝之

まず主人公を演じるのが山田孝之である。いかにも髪型や服装をオタクっぽくして登場する彼だが、元々が女性受けするイケ面である。これをイケ面でない俳優さんにやらせていたら、もっとリアルな話になっていたかもしれない。しかし、山田孝之が演じているから、これは最初からお遊び。女性とデートする時に見る、ラブ・コメディなのである。

オタクというとイケ面でないイメージをもっている人が多いだろうから、そんなことはないんだということを世間に訴えてくれる面ではいいのかもしれないが、これはオタクを知るための映画ではなく、山田孝之君のイケ

面ぶりを「可愛い、可愛い」と思いながら、見る映画だ。泣くことも、イケ面だからこそ許されるのだ。

× 2) 恋愛至上主義

主人公が、「男が女におごる、男が女を救う」という古い価値観に囚われているということも男性学的に見れば問題だが、それよりも大きな問題点は、オタクの男が女性と結ばれることで、幸せになるという筋立てである。すなわち、恋愛至上主義の映画なのである。

この部分を突き崩さなくては、真の男性解放にはつながないと僕は考える。

『結婚できない男』という阿部寛主演のドラマがあった。主人公は独身で三高なのだが、結婚すると、妻と子供と住宅ローンの三大負債を負わされると考えていて、普段付き合っている特定の彼女もいないという設定になっている。彼は自分流の生活スタイルにこだわっているので、女性がいると自分のこだわりを壊されると考えているのだ。阿部寛ほどのイケ面だから、彼女ができないわけではない、自分からつくらないのである。これこそが俺が描いて欲しかった男性像！ 思わず、ほくそ笑んでしまった。

とはいうものの、俺はこのドラマの DVD を途中までしか見ていない。おそらく、女嫌いの彼が、心を変えて、女性と結ばれて、ハッピーエンドになるのではないかなあと思ったので、怖くて先を見ることができないのである（笑）。

前にある女性から、「ソクラテスの悪妻という言葉もあるし、悪い女とでも結婚すれば成長もあるわよ。」と言われたことがあるのだが、本当にそうなの？ もちろん、結婚したい人

はすればいいんだけど、結婚も恋愛もしない男だっていたっていい……そういう世の中になってくれないかなあー（笑）。

女性にとらわれずに生きるにはゲイしかないのか！？・・・あー、男は痛いです。



1. 裸教育

連載も今回で 8 回目だ。このあたりで、そろそろ、これまで書いてきたことを振り返らなくてはならないと思っている。

この連載を読んできて、「男の裸」の話が多いことに気付いた人は多いと思う。これは何よりも、僕が中学 3 年生の秋から半年間、一貫して、男子全員上半身裸で体育の授業を受けさせられたせいである。最初の連載にも書いたと思うが、この時の体育教師は大学を出た後、5 年ほど浪人し、やっと採用試験に受かって僕の学校にやってきた教師で、当時まだ 20 代だった。僕が中 2 の時にやってきたのだが、上半身裸を強要するようになったのは、中 3 の秋。本当は 1 年目から、裸教育をしたかったのだろうが、さすがに 1 年目から極端なことをするのは気が引ける。それが 2 年目になってある程度自信をつけて、それでこういう男根的な教育に出たのだと思う。

僕がこの教師から受けたトラウマを、どうにか母に打ち明けたのは、大学を卒業する間際のことだった。高校に入ってからすぐに不登校になり、その後、少しずつ母に、それまでのトラウマを打ち明けてはいたものの、この核心の部分だけは、どうしても話せなかった。もちろん、僕が不登校になったのには、様々な理由が絡み合っていて、この問題だけで不登校になったわけではない。僕は小学校の高学年の頃から男であることに理不尽さを感じ始め、中学に入ってから学校になじめず、日を追うごとに少しずつ学校嫌いが深まっていた。1 年生の頃から、先生たちからは誤解され、理不尽に怒鳴りつけられ、女の子たちの

執拗ないやがらせの日々が続いていたのだ。裸教育が始まる以前から、僕の心は弱り切っていた。その弱っていた僕の心を完全に壊したのは、この裸教育だった。母は、この教師が男子全員に上半身裸を強いていたことは知っていたのだが、女性だから、男が裸を強要されることの屈辱にはピンと来ていない部分があった。また僕がこの教師から受けた暴言や恥辱の数々は具体的には知らなかった。忌むべき体験を僕が語った時、「ごめんなさいね。それも知らずに、『学校に行きなさい』とうるさく言って」と母は涙ぐんだ。「あの人は見るからにそういう人だったからね」と母はもの思いに浸ったような顔で述懐したものだ。母は、この教師を学校の集まりなどで、数回しか見たことがないはずなのだが、その母の目にも、この教師は、一目瞭然、威圧的で権威主義的な人物に見えていたのである。

岡崎勝さんの本に『体育教師をブッとばせ！』（風媒社、1986）という本がある。一般に体育教師は体罰など、生徒の自尊心を傷つけることにかけてはプロフェッショナルなので、このタイトルをみただけで買いたくなる人も多いに違いないが、僕にトラウマを負わせたこの教師は、悪評高い体育教師のなかでも、とりわけ極端なタイプだった。一步間違えれば、生徒を自殺に追い込むようなことであっても、この人だったらしていただろう。今年も体罰で自殺する子が出て、体育教師の体罰がその原因であると騒がれたが、僕はあのニュースを聞いた時に、自殺した子よりもむしろ教師のほうに同情してしまった。なぜなら、僕を自殺の寸前まで追い詰め、僕を不登校に追いやったこの体育教師は、その後解雇になることもなく、最終的には校長におさ

まったと聞いているからである。僕があの時、自殺していたら、この教師もマスコミにたたかれて懲戒免職に追いやられていただろうか。いや、僕の経験は30年以上も前のことだから、僕が命をたっていたにしても、「それくらいのことで死ぬなんて、弱い子だ」と、僕のほうが情けない目で見られていただけだったろう。まだ不登校や引きこもりという言葉もなかった頃、今みたいにモンスターペアレントの時代でもなく、むしろ、先生が絶対の時代だったのである。

僕はあの頃、自分が同一性障害（当時はそういう言葉はなかったけれど）と思って悩んでいた。他の男の子たちは、皆、先生に素直に従い、冬の厳寒のなかで裸になって、走り回っていた。最初は抵抗があったやつもいたはずだ。しかし、いったんそれを受け入れてしまうと、それが普通の状態になってしまうのである。とはいうものの、冬のマラソンの時に、学校のグラウンドではなく外を走ることになった時ばかりは、他の男子たちも動揺していた。さすがに「恥ずかしいよー」とぼやいていた子もいた。「まさか外を裸じゃないだろう」と言っていて、この日だけはシャツを用意していた子もいたが、一方で、「あの先生のことだから、外であっても裸で走らされる」と見越して、体育の授業を休むことに決めたやつもいた。

僕はというと、必死の思いで、「風邪をひいているんです。だからシャツをつけさせてください」とこの教師に懇願した。この教師は、「こんな薄い半袖シャツを着て、風邪ひいているもあるものかねー（爆）」と僕を他の生徒たちの前で嘲笑した。あの時のこの教師の顔は、いじめっ子のガキ大将そのものであり、

教師なんて言うものではなかった。女性が男性に凌辱されるというのはこういう気分なのだろう。しかし、この時ばかりは、この教師も僕の必死の抵抗に応えるしかなかった。これ以上僕を追い詰めたら、親が出てきて、他の先生に訴えに行かれるかもしれない、という一抹の危惧が浮かんだのだろう。この教師は自分のしていることが行き過ぎだということがわかっていながら、自分の欲望をどうしても抑えられなくて、男子全員を裸にしていたのである。マッちょ大好きで独善的、自分を大きく見せたい、相手を小さくみせたい。無茶なしごきを生徒たちに強要し、生徒たちがそれに服従してくれることにサディスティックな快感を得るタイプの人だった。

結局、他の男子たちは真冬の雪が降ってもおかしくない日に、短パン一枚で学校の外を走らされることになった。今思い出しても恥ずかしい、痛々しい男子中学生たちの裸身だった。幸い、人通りは少なかったが、通りがかりのおばさんたちがあきれて見ていた。あの時のことを思い出すと、「男って、なんて悲しいものなんだろう」と今でも思うのだ。明らかにこの教師のしていたことは、教育という名の支配であり、鍛錬のためと言い訳してはいたけれど、実際には自分の支配欲を満たしたいだけのエゴイズムだった。そのことに反発を感じていた子は、僕以外にもいたはずなのだが、従わなかったら、男の落ちこぼれと見なされる。男は、「お前は男ではない」と言われるのが一番怖い。だから他の連中が裸を見せることに耐えているのに、自分ひとりが耐えることができないとなると「男」から転落してしまう。そして、いったん転落した男は、もう敗北者として生きるしかなくなっ

てしまう。事実、このことで心のバランスを崩し、不登校になってしまった僕は、男の落ちこぼれの烙印を押され、白眼視される日々が続いた。そして、僕は 50 近くになった今も、PTSD に苦しみ続けいているのだ。

僕は小学校の高学年の時点で、男であることに拒否反応を示し始めていた。スポーツがまったくできなかったため、体育の授業ができずに毎日が憂鬱だった。野球やサッカーなど男の子らしい遊びがしたくてもできず、女の子からも馬鹿にされ続けた。男性度という点からすれば、他の男の子たちに勝てるわけがない、ビリでしかないということは自覚していた。自分がビリにしかねれないとわかっている分野に一生懸命になることはできず、その分、芸術や芸能をこよなく愛した。おかげで、感受性は人一倍磨かれて、体育はビリだったけど、音楽や作文はトップだった。しかし、感受性なんて、男が男の世界を生きていくうえで、何の役に立つのだろうか。

結局、「男らしさ」とは、家畜と同然の扱いを受けても、歯を食いしばって克己しようとし、虚勢をはることなのではないか。男は女よりも「強い」わけではない、女よりも「強がる」のだ。そのことに価値を見いだせるやつはいいが、僕は虚勢をはるなんて愚行だと子供の頃から思っていたのだった。

2. 男の羞恥心

男には肌をさらすことの羞恥心はないのか。そのことを僕はずっと考えてきた。僕自身は裸になるのがどうしても抵抗があったわけだが、他の男子たちには、抵抗はなかったのだろうか。裸になることが嫌で、不登校になっ

てしまった僕は、男ではないのではないのか。その思いに悩まされた。

おそらく、世間の人は、男は女よりも本質的に裸になることの羞恥心がないのだと思い込んでいる。でも、これは違っている。アメリカで文化人類学の授業を受講した時だ。原住民族の女性のなかには、乳房を出して生活している女性もいるが、彼女たちは元々そういう文化に生まれ育っているので、そのことに抵抗を感じないということを女の先生から教わった。一方、男性でもヴィクトリア朝の時代などは肌を見せることを極端に嫌がったという話も聞いたことがある。裸になることの羞恥心は、文化が規定していることであって、性差のせいではないのだ。

事実、僕の知る限り、大抵の男は上半身裸になることに羞恥心がある。プールや海は、それが規範だから仕方がないと割り切るしかない。最近は男の人でも全身を覆うような競泳用水着が出ているが、あれをつけている人は、ごく少数派なので、裸になることの恥ずかしさよりも、マイノリティの居心地の悪さのほうが上回ってしまう。ちなみに最近の高校では、女子学生にスカートとズボンの制服のどちらかを選択する権利を与えているところもあるとのことだが、ズボンの制服を選ぶ女子は、学年に1人くらいだと聞いている。実際にはズボンのほうが好きな子もいるはずなのだが、皆と違うことをするのは勇気のいることなのだ。

大抵の男は、「男だから、仕方がない」と割り切って、男の規範に合わせている。しかし、あの当時の僕は「仕方がない」と割り切ることができなかった。あの頃の僕は男っぽいことをすることに激しい嫌悪感を抱いていた。

しかし、この教師にそれを訴えても、この教師が理解してくれるわけがない、他の教師だって理解できないだろう、仮に理解してもらえたにしても、他の子が皆裸なのに一人だけシャツを着用というのでは、それもまた立場がなくなる。僕はどんどん袋小路に追い込まれていった。

僕は男じゃないのかもしれない。僕は「運動神経ゼロ」で、「女の腐ったようなやつ」で、「オカマ」と言われて育った。男でない男が男として世の中を生きていくことに希望などもてるわけがなかった。世の中は男社会だ。男の規範に合わない男は、不良品であり、男からも女からもさげすまれる。将来に希望がもてない。俺は、どうしたらいいのか。僕はどんどん、心のバランスを崩していった。それまでも学校が楽しかったわけじゃない。大して勉強もしていたわけじゃない。クラブ活動もしていなかった。早くに学校を終えて家に帰りたい。毎日、その一心で生きていた。

そこにこの裸教育が始まった。僕の心は福島のような状況になってしまった。それまでも地震の兆しはあったのに、ほっておいたがために、取り返しのつかない惨事が起きた。僕は自殺か精神病院かというところまで、追い込まれていったのだった。

あの時、死んだ方がよかったのかもしれない。精神病院に入っておいたほうがよかったのかもしれない。僕はどうかそうはならなかったが、僕がトラウマ・サバイバーと言えるのだろうか。僕は50近くになって、仕事は非常勤のまま、パートナーも子供ももてなかった。普通の男が、普通のこととして通過していくことを僕は何一つしていないのだ。僕は未だに「男」に同一化していない。そして、

そのことに僕は今でも大きな劣等感を抱いている。非常勤であることや、シングルであることに誇りをもって生きている人もいるが、僕の場合は、積極的にそういう生き方を選んだのではなく、そうするしかないという消極的選択だったからである。

3. ドジ？ マッチョ？ ホモ？

僕が、中学の裸教育の問題を、昨年の援助学会で語った時のことだ。会場にいる何人かの女性がクスッと笑っていたのを覚えている。確かに男が裸になることが恥ずかしいとかいっているのを聞くと笑いたくなる。そういう反応しかできなくなる。「性の境界は女の側から超えやすく、男の側から超えづらい」というのは依然として真理だ。しかし、笑ごとにされたのでは困るのである。

肌をさらすという問題は、同一性障害で悩んだ人の本を読むと必ず出てくる。同時に、男性差別を訴えるブログやサイトでも必ず出てくる。重大な男性問題である。同一性障害の問題と男性問題は地続きであり、女性の身体に変えたいとまで思う人とマッチョに完全に同一化してしまう人の間にはグラデーションがあって、同一性障害とまではいかない男性でも、他の男性との同一化に悩んだ男性はいるはずなのである。

もちろん、世の中には裸になることが好きな男もいる。あれは自分の男らしさを見せびらかしたいというナルシズムである。「男だから裸を見られても平気だよ」という強がりでもあるのだ。裸になることはマッチョの証だ。しかし、僕はマッチョじゃなかった。おそらくクラスの誰よりもマッチョじゃなかった。

自分と不似合いなことをやらされるのは恥ずかしかった。

じゃあ、マッチョになれない男はどうしたらいいのか。男性ジェンダーの問題を扱った古典的な本である『ピーターパン・シンドローム』（祥伝社、1984）のなかで、ドジかマッチョかホモが男の子のシナリオだとダン・カイルーは訴えている。マッチョになれない男に残された選択肢は、ドジかホモ。ドジを選んだ場合は、「俺はどうせ、男らしくない男だよ」と自分で自分を笑うことができなくてはならない。すなわち、開き直って三枚目役を演じることだ。しかし、三枚目になるのも僕には理不尽だった。なぜ、マッチョじゃないから、笑われ役にならなくてはならないのだろうか。

僕はホモを選んだ。とはいっても、あの当時、僕が恋していた男性は、生身の男性ではなく、おおかた映画に出てくる男性スターだった。自分もあんなふうになれたらいいなあと思うような男性だった。当時の僕にとって、現実の男性は魅力的ではなかった。したがって、同一化したいと思わなかった。

僕が現実の男性に恋をして、同一化したいという欲望を抱き始めたのは、18歳の時、予備校の時だったとは、以前、この連載にも書いた。しかし、僕は不登校という大きな十字架を背負っていた。高校に行かずに大学に行く子なんて、マイノリティのなかのマイノリティ。僕がどれだけ同一化を求めても、経歴が他の男子とかけ離れているため同一化できないのである。予備校時代、大学時代の僕は、言ってみれば「みにくいあひるの子」。一人だけ違っているがゆえに、誰も同一化してくれる男子がいなくて、つらい毎日が続いた。大

学院に入ると男性の数が周りから少なくなるため、同一化したいと思う男性自体がいなくなる。同一化したいという欲望はいつまでも昇華できないまま、僕は 30 を過ぎた。

そして 37 歳の時に、やっと親密な男友達が一人でき、40 を過ぎてからは、次々に男友達は増えて行った。不登校のトラウマも、さすがに遠い昔のことになってしまったし、高校に行かない人も少しずつ増えて行き、以前ほどマイノリティではなくなった。僕の不登校体験もカムアウトしやすくなった。

とはいうものの、もう遅い。僕は普通の男性たちが、思春期の頃に通過する問題を、50 までも持ち越してしまったのである。そして、普通の男性たちはその苦しみを理解してくれない。少年期に男性ジェンダーを受け入れ、他の男と同一化し、男のアイデンティティを築いてしまった男性は、もうその時の思いなんて思いだすこともない。忘れてしまっている。前に男女共同参画センターで、男性相談のカウンセリングを受けた時、「僕だって、男のアイデンティティなんて考えたことがないですからね」と理解に苦しむような顔で、男性カウンセラーから言われた。ジェンダーのカウンセリングをしている男性だってわからないのに、普通の男性がわかってくれるだろうか……。

僕だって、裸教育がなかったら、あるいは運動神経がよかったら、どうにか不登校にならなかったら、少しでも感受性が鈍かったら、もし同一化できるいい友人に恵まれていたら、どうにか思春期のジェンダー危機を生き延びて、男のアイデンティティを築けていたかもしれない。僕は、とにかく悪い条件が重なり過ぎたのである。

4. なぜ、裸が問題なのか？

同一性障害の人の本を読んでいると、大抵は、水着のときの違和感で悩んだと語っている。他にも様々な悩みはあったはずなのだが、その部分が突出しているように思える。それは、何故なのか？

水着は、最も男子と女子の差異が強調される部分だからである。水着は男はパンツだけなのに、女はワンピースである。男のほうが 3～4 分の一くらい隠す面積が狭い。これは逆説的なことでもある。普段の生活の中では、女性のほうが肌の露出度ははるかに大きくて、水着も同然のかっこうをして仕事に行く女性はいるのに、だけどプールだけは、男のほうが狭くなる。男のほうが、普段の格好と水着になった時のギャップがはるかに大きいのだ。

水着は別にして考えた場合でも、男女の肌の露出に対する意識は非対称だ。女性の場合は、もし人前で胸を出したりしたら、猥褻行為と摘発される。ところが男子の場合は、公の場で上半身裸になることを、教育の場である学校が奨励するのである。体育祭の騎馬戦や組体操などを男子全員上半身裸でやらせる学校は今でも存在していると聞いている。

なんとなく変だと思いながら、僕はこの問題を考えてきた。しかし、裸になるのが嫌で不登校にまでなった自分が情けなくて、大学の 3 回生の頃からプールに通い始めた。最初は YMCA のフリースイミング。ある程度、自信がついてからは、由緒ある京都踏水会の成人コースでたっぷり何キロも泳いでいた。毎日のように女性も含めた他の人の前で、裸身を披露していたのだ。今は毎日ではないが、

近くのスポーツクラブのプールに通っている。したがって、普通の男の人よりもはるかに人前で裸になった回数は多いので、裸を見られることにはすっかり慣れてしまった。しかし、今でも違和感が残っている。男の性的な部分はペニスだけではないはず。大体、裸になった時に他人の目の位置にくるのは胸なわけで、そう考えれば、男でも胸を隠すのが道理のような気もするのである。

でも、やはり、俺は考え過ぎなのだろう。普通の人には違和感があっても、それが男の規範なのであれば、受け入れてしまう。羞恥心よりも、同一化の欲望のほうが上回っているのだ。しかし、僕は、男の子に同一化することにどうしても反発があった。どうしても嫌だったことを、教師から無理矢理強要されたことが、心が壊れる原因となってしまったのである。

ジェンダーの催しなどで、話を聞くと、思春期の頃、どうしてもジェンダーに違和感があったと語る人は女性のほうに多い。ある知り合いの女性は、「私は中学の時に、皆で一緒にトイレに行ったりだとか、女の子がよくするパターンのことはどうしても抵抗があって、できませんでしたね」と語っていたし、また別の女性は、「私は中学の頃、一人称がなかったの。自分が女だっていうことに反発していたから『私』とはいいたくなかったし、だけど、『俺』とか『僕』っていうわけにもいかなかったし……」。

男性でも、小谷野敦や伏見憲明のように、すでにジェンダーやセクシュアリティの世界では有名になっている人たちは、著書のなかで、ジェンダーに対する違和感を吐露している。しかし、一般の男性で、こういう問題を

カムアウトする人は、女性に比べて極めて少ない。やはり、男のほうが自分の性にこだわっている。実際には同性愛や同一性障害に陥るのは、女性よりも男性のほうがはるかに多いので、男性のほうがジェンダーへの違和感は強いのではないかと思うのだが、男は女のように正直になることができないのである。繰り返すが、男は、「お前は男ではない」と言われるのが一番、怖いのである。

5. 疑似ゲイな生活

僕は今でも同一化できる男性を探し続けている。そして、ある面、親密さを分かち合うことのできる男性は、たくさん見つかった。そして不安になると彼らに会ってもらう。

今年の2月入院した時、初めて全身麻酔の手術だったため、不安だった。僕は前の日、何人もの人にメールして、その不安をぼやいた。返事をくれた人が何人もいた。すべて男である。

この原稿を書いている今日は、実は、30代の男友達と須磨に行く予定だった。海水浴だ。しかし、残念ながら雨でつぶれてしまった。でも彼は僕の部屋にやってきて、「残念ですよ。今日のためにタンクトップ買っておいなんですよ。俺とお揃いですよ」とグレイの薄いタンクトップをプレゼントしてくれた。彼のは黒だ。彼と僕は、ペアルックを着るくらい仲良しなのだ。

また、これも雨でも降ればつぶれるだろうが、20代の男友達と川遊びに行こうかという計画をしている。彼からは、「僕のバイクの後ろでいいですか」と言われた。「いや、それはまずいよ。俺は頭が大きいからヘルメットが

入らないし(笑)、電車で行こうよ」と答えた。しかし、彼が、僕を自分のバイクの後ろに乗せてくれてもかまわないと思ってくれていることがわかって、嬉しかった。細マッチョのイケメンである。

明日は、10年来の友人と大阪のスパワールドに行く。彼と会う時は必ずスパワールドだ。スパワールドは、温泉、プール、レストラン、マッサージなどたっぷり4時間は2人で遊べて、話ができるので、2人のデートスポットみたいになっている。

夏休みは、東京に遊びに行く予定だが、ここではかつて京都にいらした鍼灸の先生とかつて京大生だった友人と会うことになっている。2人とも僕よりはるかに年下だけど、鍼灸の先生は安らぎを、後者の友人は刺激を与えてくれる。

僕の生活は疑似ゲイである。これだけ僕が男とばかり付き合うのは、同一化を求めている旅なのである。『妖怪人間ベム』の「早く人間になりたい」という台詞は有名だが、僕の場合は、「早く男になりたい」のである。僕は50近くになって、まだ「男」がつかめないのだ。

6. 男はみんな男が好きだ。

男をつかむためには、ホモエロティックな男同士の絆が必要だ。

『狂った果実』(1956)は、石原慎太郎の原作で、石原裕次郎の出世作だが、この映画を見ると、これがあのホモ嫌いで有名な慎太郎の原作かと思う。避暑地で若い男たちが遊びまわる話だが、男同士の裸の戯れが満載である。今の基準で考えれば間違いなくゲイ映画と見られるだろう。

『火まつり』(1986)は、中上健次の原作で、主演の北大路欣也が数々の主演男優賞を受賞したが、和歌山の山奥を舞台に男っぽい山の男たちの裸をたっぷり見せる、神話的なドラマを描いている。北大路欣也の美しい身体があつてこそ成功した映画で、「男がうずうずする」という台詞が今でも印象に残っている。これも今の基準では同性愛である。

『MISHIMA』(1985)は、三島由紀夫の伝記映画で、ハリウッドの監督により製作・監督されて、日本では三島の家族の反対でお蔵入りとなった幻の映画だが、僕は見る機会があった。緒方拳が三島に扮しており、彼が雪のなかを他の男たちと上半身裸で走る場面が出てきて、僕の中学の時のことを思い出した。三島に同性愛傾向があつたことは、自明のことである。

そして、『棒たおし』(2003)は、ほとんど話題にもならなかった小品だが、城戸賞受賞の脚本を映画化したもので、男子高校生たちが、上半身裸で棒倒しをする場面がクライマックスとなっている。この映画は、太宰治の『走れメロス』の少年版であり、少年同士の友情と男に同一化したいという心理が微笑ましく描かれていて、誰も見ていないような映画なのに、僕は思わず論文の材料にしてしまった。(関心のある人は、國友万裕「メイル・ボディ」という論文を探して欲しい。この論文で、僕は、この『棒たおし』と『ウォーター・ボーイズ』を重ね合わせて、男の裸の問題を論じている。関心のある人はそちらを読んでもらうということで、今回は紙数がついてきたので、映画の分析は割愛したいと思う。)

ちなみに『棒たおし』は、ほとんど誰も知

らない映画だが、ゲイサイトに大きく紹介されていた。体育祭の棒たおしを男子全員裸でやらせるのは、男根の力を見せつけたい演出だが、それはゲイとオーバーラップする。男らしさの絶対条件は「異性愛」であるはずなのだが、男らしさを追求することは、皮肉なことに同性愛につながるのだ。

男って、結局、本質的に皆同性愛なのである。それは、男はつらいから、痛いから、男同士で傷をなめ合わなかったら、やっていけないからだと僕は解釈している。僕も、男の友人たちと男同士の語らいをする時、男に生まれてよかったと思う。男は痛い、つらい、損だと思いながら、こいつらと同じ男でよかったと思う。とはいっても、彼らと僕は身体の関係はない。でも、精神的には十分同性愛なのだ。「俺たち、精神的には同性愛だよ」と僕が言うと、ある友人は「いや友情ですよ。でも、男の友情は、女性との恋愛よりも重いんです（笑）」と答えてくれた。

これから僕が男のアイデンティティをつかめる日がくるのだろうか。でも、男のアイデンティティって何なの？ おそらく、普通の男たちは、思春期の時点でいつの間にか自分が男だと思い込み、そのことについて深く考えずに男をまっとうするのだと思う。しかし、思春期に、「僕は男ではないのではないか」というジェンダー・パニックにぶつかった僕は、50 近くになって、自分が男だという確信がもてないのである。

誰か僕を男にしてください！！



1. 善意の暴力

今、思い出しても、怖い経験がある。あれは不登校になって、1 カ月くらいの頃だったと思う。

あの頃のぼくは、毎日、一日を乗り越えるのがやっとの生活をしていた。学校にはどうしても行かれない。無理に行った日も、いたたまれなくて、鞆も自転車も学校に残したまま、休み時間に学校から逃げてしまった。ぼくが数日だけ通った高校は、田舎のほうにあって、近くには公衆電話もない。川べりの道をてくてく歩いた。1 時間近くも歩いて、やっと公衆電話が見つかって、母に電話。「今、学校を抜け出してきた。先生に何も言わずに来たから、学校に電話しといて……」。母のつらい顔が目につかんだ。

当時の担任の先生には感謝している。30 代後半くらいの男性で、理解してくれる人だった。苦手な体育の授業には出なくていいと言われた。カウンセラーの先生にもわざわざ会いに行ってくれた。飾り気はないけど、優しさをもった人だった。奥さんに早くに死なれて、男手一つで息子を育てていた。自分のことを、「僕は」とか「私は」ではなくて、「俺は」というところも好きだった。しかし、この先生でも、不登校のことは何もわからない。まだ不登校という言葉もない時代。精神科に行っても話にはならない。カウンセラーは公立の児童相談所だけ。他県まで、母と一緒に出向いたこともあったが、そこでも何の糸口も見出せないのである。

あの当時のぼくは、学校に行っても、女子から悪口を言われているのではないかという

妄想が広がって行って、座っていることすらできないような心理状態に陥っていた。でも、学校は行かなきゃいけない。日本は学歴社会。高校も出ていなかったら、一生惨めな思いをすることになる。当時は、大検なんていう制度があることすら知る人は少なかった。「明日、何か奇跡でも起きてくれて、心が変わっていたら」。藁をもすがる思いで、生きていた。しかし、ぼくの心はもはや完全に壊れてしまっていた。すぐに治るような病ではなかったのだった。

15歳の子が、平日の昼間に町を歩いていると補導される。近所の人からは白眼視される。外にも出ることができない。そんなある日のことだった。家の部屋に閉じこもっていると、「学校の人が来ているよ」と母の声。外を見ると、ぼくのクラスメートたちが、ぼくをどうにか学校に来させてあげようと、大挙して訪れたのだった。男子は、わずか2人。女子はクラス全員だった。もちろん、彼女たちに悪気はない。ぼくは高校には3日くらいしか行っていないので、ぼくのことなんて彼女たちはほとんど覚えていないはずだ。まだぼくのことを好きだとか嫌いだとか言える段階ではない。

おそらく、これは、野球部のマネージャーをやっていた女の子の提案だったのだろう。3日しか高校に行っていないぼくにも、彼女の印象は残っていた。『キューポラのある街』の吉永小百合のようなタイプの子で、前向きで、健気な優等生。おそらく彼女が、「皆で行ってあげましょうよ」と提案して、こういうことになったのだろう。

女たちの群れ！ 怖い！！ ぼくは、裏口から外に出ると走りに走った。本屋さんのお

ばちゃんにかくまってもらおうか。でも、あのおばちゃんでも、学校に行かれない気持ちは理解してくれないだろう。ぼくはタクシーを拾った。「おばあちゃんのところに行こう」。ぼくは小銭ももっていなかったのだが、おばあちゃんは家にいるだろうから、おばあちゃんに払ってもらえばいい。そう思った。30分くらい、おばあちゃんの家まで、タクシーに乗った。幸い、タクシーの運転手さんは親切な人で、ぼくがお金をおばあちゃんにもらいに行くのを待っていてくれた。

あの時のことを思い出すと、今でも心臓の鼓動が聞こえてくる。あの怖さをわかってくれる人はいるだろうか。女子たちが集団となって押し寄せる。おそらく男子たちは、他人事はどうでもいい。ぼくのことを知っているわけでもないし、学校に来ようが来なかろうが、どうでもいい。だから野球部の彼女が誘っても、のっかる子は2人しかいなかったのだろう。しかし、女子は、リーダー格の子が、「行ってあげましょうよ」と言いだすと、全員がそれに同調してしまうのだ。

もちろん、この時の彼女たちは善意。しかし、これは善意の暴力なのである。そして、善意がひっくり返って悪意になった時、具体的には、誰か1人の女子がぼくのことを「気持ち悪い」と言い始めた時、恐ろしい集団の悪意が始まっていくのである。

2. 女性の暴力性

ぼくは今だったら、間違いなく発達障害・自閉症スペクトラムと診断されるタイプの子だった。中学くらいからその傾向が顕著になり、クラスのなかで浮いていて、他の男の子

たちに同一化できなかった。ぼくは中1の頃から、クラス的女子から気持ち悪いと陰口を言われ続けていた。中2になって、組み替えがあって、クラスのメンバーが代わっても、また新たな女子グループから気持ち悪いと言われ始めた。

ぼくは中学の2年生の秋に、クラス委員をやらされた。もちろん、友達もなく引きこもり、言葉も発することができないような子だったぼくに、クラス委員が向いているわけがない。当時のクラス的女子たちの集団の悪意による投票だった。気持ち悪いぼくをクラス委員にして、皆でからかって面白がるという作戦を彼女たちはたてたのだ。

この当時の担任の先生は、学年主任のベテランの男の先生。ぼくが選ばれたのは、彼女たちの嫌がらせのせいであることは、この先生にもわかっていた。先生はもう一度、選挙をやり直すことを生徒たちに強いた。しかし、彼女たちは言うことを聞かない。この先生は、決してなめられるタイプの先生ではなく、体罰を必要悪だと思っている先生だったので、時として男子には顔に手形の跡が残るくらいのビンタを5発くらいくらわせることだってあった。しかし、女子だとそれができない。彼女たちも女だから大して怒られないということはわかっている。また、「私たちは、國友君がクラス委員にふさわしいと思っているから選んだのに、先生は、ふさわしくないと思っていちゃるのですか」と、しらばっくられて、先生をやりこめることもできるとわかっている。そのことまで見抜いた上での悪質ないじめである。

女性の集団心理は、時としてすさまじいものとなっていく。昔から、魔女狩りなど、女

性が魔性の存在とみなされるのはそのせいなのだろう。時として、女性は男が制御できないような暴力性を発揮するのである。

3. 女の魔性

「時々、理屈とはあわないようなことで、怒ってしまうことがあります。それは私も女の問題として感じることもあるんです」。以前、関わっていたグループで、ある女性が自ら述懐していた。おそらく女性たちは、魔性に襲われて、時として理不尽なことをしてしまう。大人になった女性ならば、しばらくたった後、そういう自分に気づいて、恥じってしまうのだと思う。

あれは大学2年生の冬休みだった。ぼくはある人にノートを貸してもらうために学校のキャンパスにいた。すると、1年生の頃、ゼミでぼくと同じグループだった女の子が、ぼくの姿を見つけて話しかけてきた。

「授業ないのに、学校来てんの？」

ぼくの顔色を窺うような、話しかけ方だった。彼女らしくもない。大学の1年の秋、ゼミの発表の打ち合わせの時間に、教室に行った時のことだ。ぼくの発表グループは、女子は彼女ひとりで、男子がぼくをいれて3人だった。待ちあわせの教室に来ていたのは、彼女とぼくのみで、他の男子2人はさぼっていた。2人で話し合いをしなくてはならないのだが、彼女のほうは、何故か怒ったような様子で、ぼくとともに向かい合おうともしない。結局、話し合いはできないままになってしまった。どうやら、彼女の友達の一人がぼくの悪口を言いだしたみたいで、それが彼女に伝染したようだった。ぼくはそれまでも

何度も同じような経験をしているので、大学生になっても女は相変わらずだと思ったものだ。(やはり、女は怖い！)

しかし、それからしばらくたって振り返ってみて、彼女はおそらく自分の方が悪かったと気づいたのだろう。今にして思えば、あの時、ぼくは、彼女を無視して、意地悪してやったほうがよかったのかもしれないと思う。彼女が謝りでもしない限りは、口をきいてあげないと毅然とはねのけたほうがよかったのかもしれない。彼女がしたことを考えれば、それくらいのリベンジは許されるはずだ。しかし、あの当時のぼくは自尊感情が極限まで落ちていて、当然の自己主張をすることもできなくなっていた。

「友達にノートを借りに来ているんだ」とぼくは答えた。

4. あえて女性を批判する理由

この原稿がアップされる頃には、対人援助学会の全国大会は終わっているはずだ。今回は、「傷ついた男性性からの回復」その②と題して、主として女性ぎらいを語ることになる。こんなことをして、女性の参加者に嫌われるだけのことなのかもしれない。しかし、ぼくは、一度は話さなくてはならないと思っていた。

誰が何と言おうと、ぼくには女性を批判する権利がある。少年の頃の1年は、大人になってからの5年に相当すると言われている。ぼくは少年の頃、ずっと引きこもっていたので、普通の人よりも軽く20年以上は遅れている。実際、ぼくが女性から傷つけられた体験を、こうやって語れるようになったのは、4

0代の半ばになってからなのである。

若い頃は、むしろ、少年時代の忌わしい経験は消してしまおうと思って生きていた。ないものとしてしまおうと。しかし、それはできないことがわかった。無理に女性と付き合いおうとしたこともあったが、若い頃のぼくはまだ自我がない子供のような状態だったため、むしろ女性への恐怖を深めてしまうことになった。自分の過去を消化し、自我を確立しなければ、女性とは付き合えないのだ。

思えば、ぼくの人生は孤独だった。女性どころか、男友達もいない青春時代だった。そんなぼくが徐々に男友達とスタンド・バイ・ミー的な関係を紡げるようになったのは、40くらいになってからである。本当に遅い。しかし、それも仕方がなかったのだ。ぼくは決して努力しなかったわけではない。むしろ、普通の人がしなくていい苦労を山のようにしてきたという自負がある。そもそも、発達障害に生まれたのはぼくのせいじゃない。だけど、ぼくは心ない女子たちや教師たちから、理不尽に傷つけられてきた。いったん、心が壊れてしまうと、それを治すのには膨大な時間がかかる。トラウマを治すためのマニュアルも存在していない。ぼくは試行錯誤を繰り返しながら、どうにか心の置き場を見つけ、一進一退にしか回復しない心と30年以上も闘ってきたのだった。

気がついてみたら、もう来年の2月で50歳になる。幸い、男友達はたくさんできた。闘いも最終段階まで来ているのだろう。しかし、女性への不信感はまだ消えていない。そして、このことを訴えても、大抵の人はわかってくれない。

「それは一部の女性のしたことですよ」

「そんなことばかり思い出していたら、憎しみが余計に大きくなって行っちゃいますよ」

「あなたが女に負けたくないという意識をもっているからじゃないの。男性優位主義思考を治せば、いいんじゃないの」

「男の人は見えない権力を握っているんですよ」

援助をしている人たちがこんなことを言うのである（怒）！！！！ こんなことを言われても、ぼくのトラウマが治るわけがない。むしろ感情を否定され、余計にぼくは傷つくことになる。

それは一部の女性のしたこと？ それを言うのだったら、セクハラだって、DVだって、一部の男のしたことに過ぎないのでは？ だけどフェミニストは、あたかも全ての男性のしたことであるかのように男を批判してきたのでは？ 痴漢だって一部の男がしているに過ぎないのを、男は全部、女性専用車両には乗せてもらえないのだ。ぼくを傷つけたのが1人や2人の女性だったら、一部の女性の問題と言われても仕方がない。しかし、ぼくは複数の女性集団からそういう目に合わされている。したがって、女性への恐怖というよりも、女性性への恐怖がぼくのなかには根付いているのだ。

そんなことを思い出していたら憎しみが大きくなる？？ ぼくだって、憎しみを消そうと懸命に努力してきた。しかし、憎しみから目をそむけても憎しみは消えない。そうであるのならば、徹底して憎しみと向かい合うしかない。ぼくにとっては、いたし方のない選択だったのだ。

男性優位主義？？？ ぼくが、男性優位主

義と思っているの！？ もし仮にぼくが男性優位主義の価値観をもっていたとしても、女は何をしても許されるということにはならないのでは？ ぼくが女の子からいじめられていた頃、早くに親に相談していたら、不登校までにはならなかったはず。ぼくが言えなかったのは、男性優位主義ではなく、男性差別のせい。男は女よりも強くなくてはという価値観があるから、「男のくせに女にいじめられる奴があるか！」と言われることは目に見えている。余計に自尊心を傷つけられることはわかっているから、ぼくは誰にも言えなかったのだ。

男の人は権力を握っている？？？？ ぼくはこれまで結婚もしていないし、仕事もずっと非常勤を貫いてきた。これからもおそらくそうなるだろう。女性に権力をふるったりできるような立場についたことは一度もない。いつだって女性に気を遣って、小さくなって生きてきたぼくが、ただ生物学的に男だという理由で、権力者扱いされるのは筋違いである。

ぼくは辛酸をなめるような経験をした。女性によって心を壊された。それを女性にぶつけることで、ぼくは彼女たちに気づいて欲しいと思っている。15年ほど前にあるフェミニストから、「男の人は何気ない気持ちでしていることであっても、女にはセクハラと感じられることがあるのよ。」と言われたことがある。それを言うのならば、逆もまた真なり。女の人は何気ない気持ちでしていることが、男を深く傷つけることだって、絶対にあるはずなのだ。今回の発表は、女性に喧嘩を売るためではない。あくまでも女性に理解してもらうため、そして、もうぼくみたいな不幸な男を

生み出さないための女性批判である。

上手く行けばいいけどなあー。今、ぼくは不安1割に期待1割、そして、誰もわかってくれないのではないかというあきらめ8割の混じり合った気持ちの中にいる。おそらく誰もわかってくれないというのがぼくの偽らざる予想なのだ。ジェンダーの問題なんて言うのは一端囚われてしまった時点で負けだ。ジェンダーは理不尽な部分がたくさんあるにも関わらず、普通の人はそこまで深く考えずに生きているため、理解してもらうのがきわめて難しい。

ただ、大勢の人にぼくの傷つき体験を語ることで、少しでもぼくの心の中に新たな一筋の気づきが生まれてくれることを祈るのみだ。そして、女性へのわだかまりが多少でも消えてくれればと祈っている。そのかすかな光のような願いのために、ぼくはあえて発表するのだ。

5. 時には、何も考えずに『HK／変態仮面』

結局、ぼくはジェンダーに囚われ過ぎている。でも、それは仕方がなかった。

ぼくは子供の頃、スポーツや喧嘩ができず、女の子からも馬鹿にされるタイプの子だったので、ジェンダーに反発していた。時を同じくして、マスコミからはウーマンリブという言葉が盛んに流れて行き、男女平等だ、フェミニズムだと言われ始めた。ジェンダーに反発していたぼくは、当然のここのようにフェミニズムにとびついた。フェミニズムを勉強することで、ぼくのコンプレックスをどうにかしようと思った。

先日、ぼくのところにやってくるマッサー

ジの男性から、「國友さん、小説書いたらどうです。ぼくとの関係でもかまわないし、ぼくたちのやりとりだけでも、結構面白い話になりそうじゃないですか」と言われた。

ぼくの男友達のなかで、今一番頼りになるのは彼だ。何かあった時はすぐにかけてくれる。他にも親しい友達はいるが、皆、遠方に住んでいるので、すぐというわけにはいかない。彼は、スポーツクラブのインストラクターもしていたことがあって、身体はヘラクレスだが、性格的には優しいタイプだ。権力には関心がないと言っていた。ただ、身体を動かすのが好きだし、人の身体にマッサージしたり、トレーニングしたりする仕事は好きだと話していた。

この頃、マッチョという言葉は、身体に特化するものになってきた感がある。マチズモとは男らしさの誇示のことであり、必ずしも身体のことではなく、性格的マッチョ、社会的マッチョ、経済的マッチョ、性的マッチョの意味もあると思うのだが、この頃はもっぱら身体のことを意味することと思っている男性が多いみたいだ。

これは逆に言えば、身体的以外のマッチョが必ずしも肯定的ではなくなっているせいだろう。性格的に男らしい男といっても、今の若者にはピンとこない。ぼくが『マッチョになりたい！？ 世紀末ハリウッド映画の男性イメージ』を出した後、「これから身体をトレーニングしてマッチョになろうと思っています」と、出版の際にお世話になった女性にメールした。すると、彼女からは「性格までマッチョにはならないでくださいね」という返事が来た。

今となっては性格的なマッチョなんて、ネ

ガティブな意味でしかない。前にぼくの友人が、「マッチョとは、他人の都合よりも自分の都合を優先させる人のことだ」と定義していた。要するに、マッチョは自己中で他人の気持ちを考えないだけのことだ。

社会的・経済的マッチョにしても同じこと。昔みたいに終身雇用と年功序列、家族的な義理人情に支えられた社会だったら、そういう性格の人も頼りになる親分として受け入れられていたのだろう。しかし、今みたいに合理化で、人を物みたいにドライに切り捨てるのが当たり前の世の中になってくると、こんな男は困るのである。マッチョな人が権力を握ると、自分の都合で物事をすべて進めてしまい、権力のない人はドライに切り捨ててしまう。不況で失業者が増えて、理不尽な仕事でのプレッシャーや過労から自殺や精神病院に追い込まれる人が後を絶たない時代だ。一部のマッチョが世の中を牛耳っているから、下流の人たちが苦しまなくてはならないのだと考える人が増えているように思う。社会的マッチョは賞賛的ではなく悪者である。

また性的マッチョも、この頃は必ずしも歓迎されない。セクハラは基本的に女性の主観を基準にしているのも、好色過ぎる男は、摘発されることになる。

むしろ、ジムやプールに通って、身体をマッチョにすることをエンjoyしているくらいの男の方が、罪がない。他人に危害を与えないからである。この頃、細マッチョという言葉が定着してきたが、これは男が女の好みを取りこんでいることを示している。一般に筋肉質の身体に憧れるのは女性よりも男性で、女性はむしろ、男の汗や臭いを感じさせない小ざれいなボディを好む。男性的過ぎる身体

は、女性に恐怖心を与えるのである。マッチョな身体になりたい男と男性的過ぎるのは嫌いだと思う女、両者の妥協点が細マッチョなのだ。ほどほどにマッチョということか。

あー、いけねえー。俺は、こんなふうで、ジェンダーの問題と言うとあれこれ理論づけて考えてしまうので、逆に身動きができなくなってしまっている。ぼくは賃借対照表のように男と女を並べて、男にとって損得ゼロの男女関係にしてみたいという衝動をもっている。しかし、損得で考えてしまうといつまでもぼくの苛立ちはおさまらない。今でも日本の学校では武道の授業は男子のみ、マラソンの距離は男子の方が長い、というところが多いみたいだ。韓国などでは、男のみが強制的に徴兵される。男性は女性よりも生活能力が低いと見做されるため、女性の方に非がある場合でも、離婚したら子供は女のものだ。あー、イライラ。

普通の男はそこまで考えていない。どっちみち社会は不公平なもの。男同士の間でも格差はあるのだから、男女格差くらいは仕方がない。それを訴えても社会は、すぐには変わらない。そうであるのなら、考えないのが一番だ。どうにもならないことは何も考えずに、楽しいことを考えた方がいい。だけど、ぼくは運悪く考える悪循環に陥ってしまい、なかなかそこから抜け出すことができないのだ。

ある日、マッサージの彼がお面をかぶって、ぼくの部屋にやってきた。もちろん、ぼくたちは男の友情で結ばれているから、スタン・バイ・ミーのおふざけである。「あ、変態仮面だね」とぼくが言うと、「スパイダーマンですよ(笑)」と彼。そうか、変態仮面なんて

マイナーだから、お面なんかは売っていないよなあ。「こういう楽しいことを考えるのがいいんですよ」と彼。

その彼がぼくに推薦してくれた映画が『HK/変態仮面』（福田雄一監督・2013）という映画だった。

少年ジャンプに掲載されていたマンガの映画化なのだそうです、彼に面白いと言われて借りてみた。確かに面白いのだが、とにかくこの連載で、詳細に分析するのがお恥ずかしいくらいのお下劣コメディ。これだけ男の裸がたくさん出てきて、股間やお尻や乳首を強調するような描き方をしたら、R指定になっても不思議ではないのだが、マンガチックだし、男の裸だからいいかと一般映画になったのだろう。これも差別だなあ。男の身体だって、性的なものなのに……あ、また俺の悪い癖がはじまった（笑）。前回に続いて、今回も紙数がついてきたので、映画の分析については割愛することにする。（そのうち、『テルマエロマエ』や『あしたのジョー』などと比べて、詳しく分析したいとは思っているが。）

その代わり、失敗談を披露したい。この映画をDVDで見た後、ぼくは彼に『変態仮面』見たよ。面白かったよ」とメールした。いや、メールしたつもりだった。ところが、間違っ、仕事関連のMLに送っていたことがわかった（汗、汗、汗。。。）。このMLには女性もたくさん登録しているので、皆にそれが流れてしまう。。。。。。どうしよう一、どうしよう一、とあたふた思っていたら、どうやら、返信したメールアドレスが、そのMLに登録していたアドレスとは違っていらしく、流れていないということがわかった（爆）。

とはいっても、一瞬、顔は真っ青、心臓

が凍りつくような思いだった。そもそも、『変態仮面』なんて、ほとんどの人は知らないだろうけど、タイトルがタイトルなので、いかがわしいものと思うだろう。女性からセクハラと摘発されるかなあ（男は、損！）。いや、男だから、そういうDVDを観るのは仕方がないかと思ってくれるかなあ（こういう面では、男は、得！）。こう考えると、またまた男は得なのか、損なのか、わからなくなる（笑）。

ただ、この『HK/変態仮面』、卑猥系コメディ映画だけど、小栗旬が脚本に絡んでいる。そのことを説明すれば、女性の偏見も解けるだろうなあと思って、心を休めた。やはり、得なのは、イケメン男（笑）。ぼくはイケメンではないので、男は痛い！

でも、男も女も、たまにはこういうものを見て、ガス抜きするのはいい。真面目な理屈ばかり考えていたのでは、心は壊れてしまう。何も考えない時間をもつこと。それがぼくのこれからの課題だ。でも、達成するのには時間がかかりそう（笑）。



1. 学校に問題がない！？

『アフタースクール』(2008)という映画がある。『運命じゃない人』(2005)『鍵泥棒のメソッド』(2012)で、すっかり人気監督のひとりとなった内田けんじ監督の映画で、作品の評価は高く、あれこれ受賞もしている。主演は大泉洋、佐々木蔵之介、堺雅人。

ぼくは元々映画に関してはメジャー好みで、大きな賞をとったりした映画は素直に感動する。それなのに、この映画だけは、どうしてもいただけないという後味が残って、この映画が誉められるなんて、困ったものだなあと、思ってしまったものだった。

この映画で有名なのはラストの大泉洋の台詞だ。彼は自分の母校で教えている中学の先生という設定になっているのだが、彼が、警察につかまって、連行されていく佐々木蔵之介に向かって、「あのな、お前みたいな生徒、クラスにひとりくらいいるんだよ。全てわかったような顔をして、学校がつまんないだの、何だのって。学校なんてどうでもいいんだよ。お前がつまんないのは、お前のせいだ」と偉そうに言う。ネットのレビューを見ていたら、「こういう台詞に女はしびれてしまうのよ」と書いていた、女性のユーザーがいた。

だけど、ぼくはこの台詞があるゆえにこの映画が大嫌いな映画となった。だって、俺は、大泉のいう「クラスにひとりくらいいる、学校がつまんないだのなんだの言っている」少年だったからだ。こんな台詞を出されたのでは、俺自身が否定される。でも、いや、おそらく俺の見方が間違っているのだろう。大体、この映画は教育問題を訴える映画ではない。

トリックの面白さを堪能させるミステリーだ。したがって、この台詞も、教育云々を議論するために発せられるものではないのだ。

そのことがわかっているけど、俺は、こういう台詞には激しい反応を示さずにはいられない。学校に問題がないなんて、絶対に嘘なのだもの。

2. ボール投げのトラウマ

16 歳になろうとしていた頃だ。高校に行かなくなって 1 年が過ぎ、さすがに 2 年も休学するわけにもいかない。通信制の高校に鞍替えすることになった。思えば、不登校になっての最初の 1 年間は、血の涙、嵐のような日々だった。両親も相当苦しんだ。でも、もう他に選択肢がない。藁をもすがる思いで、通信制の高校に入学することを決めた。その手続きのために、母が中学に電話した時のことだ。ぼくの中学 3 年の時の担任の女の先生が出られて、こうおっしゃったのだそうだ。

「國友君が学校に来なくなったっていう話。実は数ヶ月前に聞きました。同じ高校に入った S 君と N 君が学校に遊びに来て、『先生、國友君、来なくなったんだよ。来るように言ってください』と言っていました。」

S 君も N 君も優しい、いいやつだった。しかし、人気者で、スポーツもできて、いじめられっ子でもない彼らには、ぼくが何故、学校に来なくなったのか。その理由が想像すらつかないのだ。「もっと早くに相談しておけば、よかったですね」と電話口で先生はおっしゃったのだそうだ。

この連載にこれまで何度か書いてきたとおり、ぼくは小学校の高学年からジェンダーに

対する抵抗を示すようになっていた。中学 3 年の時に、例の体育教師による裸教育がはじまり、ぼくの心はいっきに崩れていった。成績が一気に落ちたので、この担任の先生は、当時、「I 先生に相談して見られますか。いい先生だし、きっと親身になってくれると思うから」とおっしゃったのだそうだ。この I 先生も体育の先生なのだが、ぼくらに裸教育を強いた T 先生は 2 年生からぼくらの体育の授業の担当で、I 先生は 1 年の時のみだった。

今でも溜飲があがってくる思い出がある。1 年生になってまもなく、運動能力測定がおこなわれた。ぼくは小学校の時から、これが一番憂鬱だった。ボールをどこまで投げられるかを測定する種目があって、ぼくは子供の頃からキャッチボールの経験すらなかったため、まともに投げる投げ方がわからず、10 メートルのラインまですらとばすことができないのだ。女の子だって、10 メートルくらいはやすやすととばせる。だけど俺にはそれができない。でも、仕方がない。一瞬だけ恥をかけばいい。そう考えるしかなかった。皆、やすやすと 18 メートル、20 メートル、あるいはそれ以上にとばしていった。ぼくのひとつ前の K 君は 10 メートルぎりぎりのライン。さて、俺の番だ。案の定、ボールはとばなかった。「あれ、國友君、身体のわりにとばせないんだね」と脇で見学している A 君が悪気もなく言っているのが聞こえた。俺の方は、自分が情けなくて、泣きたい気持ちだったが、仕方がない。これで一番、苦手なことは終わった。ホッと一息だ。

そう思っていると、「國友君、I 先生が呼んでいるよ」という他の男子の声。いやな予感がした。先生は少し離れたところから記録を

つけていたのだが、ぼくがあまりにもとばせないで、怪訝に思ったらしい。

「どうかしたんか？」

「いや、ちょっとさっきの持久走で疲れていたんで……」

「こういうボール投げみたいなのは、疲れているとかとは関係ないんだよ。そこまでしか投げられないなんて！　しっかりしろよ！！」と予想していたとおりの、ぼくの自尊心を粉々に傷つける雷が落ちた。

K 君はぼくとそれほど変わらないのだけど、彼は身体が小さいから、投げられなくても、不思議には思わなかったのだろう。しかし、ぼくは身体がでかい。ふざけている。真剣にやっていない。先生はそう思ったらしい。「好きでできないわけじゃないよ。できない子ができるようにするのが教師の役目なんじゃないかよ」とぼくは心のなかでつぶやき、悔しさを押し殺した。ぼくのスポーツコンプレックスはますます根を張って行って、ぼくは体育の授業をさぼり始めた。

I 先生は、風紀係の先生で、全校集会などのたびにあれこれ風紀のことで説教する先生だった。根は悪い人じゃないことはわかっていた。善良で単純な人だ。裸教育を強いた B 先生のような極端な暴君ではなかった。ただ感情リテラシーに欠けている人だった。相手を厳しく威圧すれば、それでその子が矯正されると思っているのだ。今では、肉体的な暴力だけではなく、相手を威圧したり、叱責したりしても、場合によっては DV と見做される。この先生が俺に言ったことは、明らかに DV だった。しかし、当時は、誰もそのことに気づいていなかった。ぼくが T 先生の裸教育に耐えられず、心のバランスを崩していた頃、

この I 先生に相談していたとしても、I 先生がぼくのことをわかってくれただろうか。くれるわけがなかった。「男なんだから、裸になるくらいいいじゃないか。そんなことを恥ずかしがるな！ 他のやつは、皆たえているのに。男だろ！ しっかりしろ！！」と雷を落とされるに決まっていた。ぼくは余計に傷つくことになるだろう。

しかし、担任の女の先生はそのことがわかっていないのだった。

人はそれぞれ、センサーやレセプターが違っているんだよ。同じ出来事を、全ての子が同じように感じ、同じように受容することができるのであれば、教育は簡単だけど、どうしても受容できない子は当然のことながら出てくる。前にある本で読んだけど、どうしても受け入れられないことを強いられたとき、「トラウマ」が生まれるのだ。

3. ウィルスのようなじめ

この女の先生が一生懸命だったことは、十分わかっていた。母も、「あの先生のことは悪く言っちゃダメよ」と言っていた。彼女はちょうど母と同じくらいの年代。まだ中高生の子供を 2 人も抱えていて、夫も教師だと言っていた。ぼくが 2 年の頃までは副担任だったのだが、2 年の時の担任だった F 先生が全体の主任になって、担任をおりざるを得なくなり、それで、その先生の言葉添えもあって、この先生が抜擢された。この先生としては、担任はしたくなかったらしい。家庭持ちの女性の先生だから、受験を控えた 3 年生の担任を引き受けるのは重荷だったらしいのだ。

ぼくは中 1、中 2、中 3 と年を追うごとに、

学校に行くことがきわめて苦痛になっていった。周りの男の子たちに同化できず、しかも、女の子たちの執拗な嫌がらせが続いていたのだ。ぼくのクラスの女子で、とりわけぼくを嫌っていたのは、クラスで最も優等生的な、クラスのお姉さんのような存在の女の子だった。彼女はぼくの身体が彼女の机に接触すると、その度ごとに、そこをティッシュや雑巾で拭いたりしていた。しかも、わざとぼくが気づくような形の見えよがし(?)の嫌がらせである。ぼくは「気持ち悪い」存在なので、汚いから拭いているのよという態度を示して、ぼくをチクリチクリと傷つけようとしていた。

しかし、彼女は表向きは優等生。この女の先生は、ぼくが誰かにいじめられているのではないかと心配はしてくれていたのだが、まさか彼女の仕業だとは思わない。この女の先生だけではない。母だって、気づいていなかった。

先日、ある先生に聞いたのだが、今でも、いじめられる子は男の子に多く、いじめるのも男の子、被害も加害も男子なのだそう。しかし、これをいうとフェミニストからは怒られるだろうが、ぼくは女の子のいじめ加害も相当数あるのではないかと予想している。ただ、女の子の加害は表に出づらい。肉体的な暴力でもない。威圧でもない。ただ、「私はあなたを嫌いなよ」という態度を持続的にとり続けることで、相手の心に侵入し、相手の心の細胞を破壊していくウィルスのようないじめだ。それに男子は女子よりも強くないとはならないと教育される。「男のくせに、女にいじめられるやつがあるか!」と言われる可能性もあるから、女子からひどいことをさ

れても多くの男子はそれを誰かに言うことはできないのである。仮に言ったとしても、男が女に迫害されるケースは、女が男に迫害される場合に比べると深刻には受け止めてはもらえない。男は強い、女は弱いんだから、女に迫害される男のほうが情けないんだという社会通念はまだまだ根強い。

まして、ぼくの体験は 35 年も前のことだ。ぼくは彼女の態度に深く傷ついていたが、それを訴えたからと言って、担任の女の先生は、理解してくれただろうか。この女の先生は、一生懸命だったけれど、女性だから女子の方に甘かった。というか、男の苦しみと女の加害性に気づいていなかったのだ。

4. 体育教師の弱い者いじめ

当時のぼくは、なんかかんかで体育の授業をさぼっていた。I 先生にしても T 先生にしても、生徒の自尊心を傷つける、怒り方をすることを何とも思っていなかった。丁寧に教えてくれた上で、怖いのであればまだ許せるが、往々にして体育の先生たちは、ただ号令をかけているだけのことで、手とり足とりなんてことはいっさいしようとしなない。これを言うと、「体育だけじゃなくて、他の科目だって、苦手な子にはつらいじゃないの?」と言われそうだが、他の数学や国語、英語や社会や理科は、できない子はただ座って、先生の話聞いているふりをしていればいい。しかし、体育の場合は、皆の前で恥をかかされる。かけっこなどの個人競技では惨めな思いを味わうし、サッカーやバレーのような球技では、できない子はチームの足を引っ張るから、いたたまれない気持ちになる。

しかも、なぜか、体育だけ、女子にハンデがつく。数学は男のほうができる人が多いと言われるが、ハンデはつかない。国語や音楽は、女子のほうができる子が多いと思うのだけど、男にハンデはつけてくれない。すなわち、他の科目は、男の方ができようが、女の方ができようが、それは個人差の問題。しかし、体育だけは、男の方ができて当たり前とされるのである。女子よりも体育ができなかったぼくは、体育ができないということの屈辱と男として欠陥品であるということの屈辱、二重の屈辱を負わされることになるのだ。そして、そういう二重苦の子をさらに追いつめる、心ない体育教師たち。こんな教師たちに反抗して、体育の授業をさぼることが、そんな悪いことなの！？ あんたたちの方が、ずっと非人間的じゃないか。そう、俺は思っていたのだ。

幸い、体育教師は細かいことには鈍感な人が多い。俺がさぼっていても、気にも留めていない様子ではなかったのだ。俺はずっとさぼっていた。ところが、この女の先生は、そのことに気づいてしまい、裸教育のT先生にぼくが体育の授業に出ようとしないということを話してしまった。公立の高校受験になると、体育や実技科目の成績もかかわってくる。それで、「どうにか先生からも真面目に出るように言ってあげてください」と言ったみたいだった。

そこから、T先生のぼくに対する執拗ないじめが始まった。それは、この原稿に書くのも忌々しいくらいの恐ろしいばかりのいじめだった。この先生は、弱い者いじめが大好き。担任の女の先生も愚痴っているのだから、それを口実にして、ぼくをいじめてもかまわな

いと思ったみたいだった。

体育の先生というのはある種独特の人種だ。当時、ぼくの中学で、一番生徒に馬鹿にされていたのは、国語の男の先生だった。この先生は今の言い方で言えば、天然みたいなのところがあって、点数は間違うし、教え方は下手だし、授業中におならをしたりすることもあった。普段は温和なのだが、突然、切れると、生徒に何発もビンタを食らわせたりするので、生徒の陰口の的だった。音楽の男の先生も嫌われていたが、この人は嫌味だけど、殴ったりはしないからまあいいかと評価されていた。ぼくに言わせれば、国語の先生よりも、音楽の先生よりも、この体育の先生のほうが、はるかに残忍で冷酷な人だったと思うのだが、生徒たちは不思議と彼の悪口は言わなかった。

アメリカの作家・フィッツジェラルドの『夜はやさし』という小説に、トミー・バルバンというマッショな男が出てくる。周りの男性は、彼が頭の悪い男だということを知りながら、なんとなく、彼をばかにすることができないのだというくだりがある。このくだりを読んだとき、まさしく体育の先生はトミーだと思ったものだ。頭の悪い男であるにもかかわらず、体育の先生を生徒がばかにすることができないのは、体育の先生は、男性度という点では誰よりも勝っているからである。男性的な威圧力をもち、自分の優位性を盲信している男は、非人間的なことをしても、許されてしまうのだ。しかし、この先生がぼくにしたことは明らかに弱い者いじめだった。これは、先生が一番してはいけないことなんじゃないの？ でも、先生には「いじめ」を「教育」という言葉で置き換える特権があるのだ。

思えば、ぼくが中学時代に男の子からいじ

められていたら、状況は変わっていたようにも思う。肉食系の男の子が弱い男の子をいじめることはよくあることだ。周りにも相談しやすかったろうし、何らかのかたちで、相手の男の子の方が罰せられていただろう。

しかし、ぼくをいじめたのは女の子と教師。女の子が男の子をいじめるはずがない。教師が生徒をいじめるはずがない。ぼくの受け取り方に問題があるのだという結論をつけられることは目に見えていた。そうになるとぼくは余計に自尊心を傷つけられることになるだろう。それがわかっているから、ぼくは誰にも相談できず、一人で苦しみ続けて、自分の心を崩して行ったのだった。

こんなぼくにでも、大泉洋さんは「学校なんてどうでもいいんだよ。つまらないのはお前のせいだ」と言うのだろうか。そして、その台詞を聞いた女性は、「大泉さん、カッコいい！」とエールを送るのだろうか。

まだ不登校という言葉もない時代。そういえば、あの当時はまだ不登校はなかったが、家出少年少女というのが結構いた。テレビでも時々、家出した子を探す番組が行われたりもしていた。なかに、体育系の高校に通う女の子が、その厳しい上下関係にどうしても耐えられず、家出したというニュースがあって、ぼくは痛く共感したものだ。

彼女の場合は家出、ぼくの場合は不登校。そこまで子供を追いつめるまで、先生たちは気がつかない。深刻に考えてはくれない。周りが問題なのかもしれないということを……。

そういう時代だったのだ。

5. ビンタの興奮

先に名前をあげた S 君と N 君は確かにいいやつだった。ぼくみたいないじめられっ子にも偏見の目をもっていなかった。ぼくが高校に行かれなくなったとき、何度か 2 人で、ぼくの家まで来てくれた。しかし、ぼくは彼らに面会することができるような状況ではなかった。

ぼくは、心のなかでは S 君や N 君のような男子になりたいという願望はあったと思う。いつだって、明るくて、先生にもなついていくタイプ。先生から見ても、こういう子はかわいいはずだ。時にはやんちゃもするけど、不良というのではなくて、かわいい男の子だった。

今でも覚えているのは、中学 2 年生の時だ。

F 先生が担任の頃だった。ある朝、先生が朝、教室にやってくる頃、S 君や N 君も含めた男子数人が、黒板のところでふざけていた。教室に入ってきた F 先生は、このとき、2 人も含めて、その時、ふざけていた男子全員に 5 発ずつビンタをくらわした。

F 先生は学年主任の先生。古いタイプの男の人ではあったのだけど、人間味があって、中学になって会った先生のなかでは、この先生が一番好きだった。しかし、この先生は体罰を必要悪と考えていて、しかも、「殴るときには本気で殴らない」と思っているようなところがあった。この時のビンタも強烈なビンタで、最初に殴られたのは S 君だったが、彼の頬は一発ビンタが張られた時点で真っ赤になった。一発で終わるかと思っていたら、さらに 4 発続いた。左の頬にのみ 5 発だ。彼の左頬は真っ赤になった。F 先生は、「5 発ずつだ。席に着け」と S 君を解放すると、N 君も含めた他の男の子たちにもたっぷり 5 発ビ

ンタを浴びせた。

あの時、ぼくは変な性的興奮を感じたのを覚えている。ぼくは F 先生が好きだったし、S 君も好きだった。自分の好きな男の子が、自分の好きな男の先生からビンタをくらわされる。殴るという行為は、性交に似ている。軍隊など男ばかりの同性愛的な組織で、ビンタがしばしば行われるのは、一種の性交なのである。ぼくは、あの時、S 君や N 君と並んで、一緒に F 先生からビンタされたかったんだと思う。嫌いな先生から殴られるのは嫌だが、F 先生は好きだったし、好きな S 君や N 君と一緒に殴られるとなれば、ひとつの青春時代の思い出になっていたのかも知れない。

しかし、あの頃のぼくは、すでにジェンダーに囚われてしまっていて、男になることに拒絶反応を示し始めていた。女の子だったら、5 発もビンタを食らわせるなんてことは絶対にできない。男だからこそ、強いられることだ。何度か書いた裸教育に関しても、女の子が裸にさせられるなんてことは絶対にない。男だからこそ、強いられることだ。

なぜ、男だから……？ おそらくぼくが何よりも嫌悪していたことは、体罰でもなく、上半身裸になることでもなく、スポーツ教育でもなく、強制的に男にさせようとする権力だったのである。

そして、ぼくのジェンダーに対する反発は、学校が植え付けたものであることは間違いなかった。ここで語ったエピソードは、ぼくの体験のほんの氷山の一角だ。「男のくせに」「男だから」「男は我慢」「男の子は頑張らなきゃ」……こういう台詞をぼくは毎日のように聞かされていたのだ。ぼくを不登校まで追いつめた主犯は学校だったと確信を持って言えるの

である。

6. 中学生の魂、百まで。

その後、S 君と N 君は、地元の大学を出て、今でも地元にいると聞いている。2 人とも家業を継いでいるらしい。『アフタースクール』の大泉洋扮する先生も、母校の先生となったという設定になっている。しかも人のよい教師という設定になっていて、S 君や N 君に似ているとも言える。『アフタースクール』というタイトルは、放課後という意味もあるだろう。大人になった男 3 人のドラマなので、3 人の大人の男が 3 人の男子中学生のメタファーということなのだろう。その一方で、学校を終えた後、すなわち、3 人の男の子が大人になった後という意味もこめられているように思う。

ぼくは 19 歳の時に京都の大学に入って、その後は、絶対に故郷には帰らないと生きてきた。過去を封印してしまうために。やはり、俺には S 君や N 君のような人生を歩むことはできなかったのだ。「中学生の魂、百まで」だなあ。

あー、また同じことを書いているなあ(笑)。

もう連載も 10 回目となって、少しは進歩しなくてはならないと思っている。なのに、ぼくはまだ過去のトラウマの周りをぐるぐる回っている。ぼくの愚痴を聞いてくれる年下の友達からも言われる。「國友さんの話って、いつだって、中学の時のことばかりですよね(笑)」と。「それくらい俺にとっては大きなトラウマだったんだよ。俺にとっての広島・長崎なんだから(笑)」とぼくは答える。

実は今、『アフタースクール』の DVD を借りている。嫌いな映画だけど、もう一度見て

みようかと思っている。おそらく内田監督が訴えたいことは、「先生には問題がない、生徒本人の責任だ」というような、30年以上前の古い教育観ではないはずだ。全体の文脈をはっきりと把握すれば、違ったドラマとして受け入れられるだろう。映画はすべてをまんべんなく描くことはできない。『アフタースクール』はあくまで善良な教師を主人公にしているけれど、『告白』(2010)や『悪の教典』(2012)のように、先生を不気味に描く映画もたくさん存在するのだ。

S 君や N 君の目から見た学校と、俺の目から見た学校は、まったくの別物だった。それだけのことに過ぎない。S 君や N 君のように一生、故郷から離れずに生きる人がいてもいい。でも、俺みたいに故郷に背を向けて、他の町で一生を終える人もいていいよね。

この原稿がアップされている頃には、ぼくはもう 50 歳だ。50 にもなると自分が生まれてきた宿命がわかってくる。もう俺は一生、京都で暮らすだろうなあ。中学の時のトラウマは一生、消えないだろうなあ。ジェンダーへのこだわりもなくなることはないだろうなあ。でも、そういう自分でいいんだと思わなくてはいらない。

人間はひとつの人生しか生きられないもの。自分に与えられた運命が宿命だったんだと悟ること。それがぼくの人生目標だ。

男は痛い！という気持ちも一生、変わらないと思う。だけど、ぼくは不思議なことに女に生まれ変わりたいとは思わない。次に生まれてくるとしてもやはり男に生れたいなあー。結局、ぼくは痛いのはつらいと思いながらも、痛いのが好きなのだ（笑）。



1. ぼくを支えてくれたもの

① 水泳

丸太町のところに、京都踏水会という老舗の水泳教室がある。ぼくは、この水泳教室には10年ほど前まで通っていた。20代の後半から30代の前半にかけては、ここに通うサイクルに合わせて、生活をしているようなものだった。

踏水会の存在を知ったのは、京都に出てきて間もない頃。当時、河原町に大きな本屋があって、そこに踏水会のリーフレットがおかれていた。スポーツが全然できなかったぼくは、スポーツ・コンプレックスを解消するために行ってみたいなあーという気持ちは抱いたけど、実際に通うようになるまでにはハードルがいくつもあった。

まず、大学生にもなったような人が、プールなんかに通うのかという思い。今はスポーツクラブがいたるところにあるが、あの当時は今ほど多くはなかった。それにプールなんて、幼稚園や小学生の子が通うところというイメージもあった。リーフレットを見ると成人コースもあるみたいだが、運動神経が誰よりも鈍いぼくが他の人についていかれるだろうか。それにお稽古ごとんかに通うのは、ほとんど女性であり、男は少ないだろうという思い込みもあった。あれこれ考えると、やはり行くことはできない。

そんなぼくが一大決心をして水泳を始めたのは、大学の3年生の時だった。最初は踏水会ではない。三条のところにあるYMCAのプールである。ここは自由遊泳のみだったので、自分のペースで泳いでいい。料金も安い。当

時は指導はついていなかったが、特別上手くなろうとも思っていなかったし、それでいいかと通い始めた。

最初は 25 メートル、クロールで泳ぐのがやっとだった。平泳ぎはどう身体を動かしているのかがわからないので、適当に身体を動かして、疑似平泳ぎでどうにか 25 メートル行けるようになった。それから徐々に距離を伸ばしていき、50 メートル、100 メートル、200 メートルと行けるようになった。嬉しかった。俺だって、練習すればできないわけじゃないんだ。

思えば、混乱と葛藤の大学時代。大学ではつらいことばかりだったのだが、つらい時、寂しい時、惨めな時にぼくを慰めてくれていたのがプールだった。これくらい泳げるのは普通の人だったら当たり前なのだろうけど、当たり前のことがずっとできずに苦しんでいたぼくは、多少、泳げるようになっただけでも、大きな喜びだった。

YMCA のプールには 1 年半通った。その後、少し自信をつけて、踏水会のプールへとのりだした。踏水会は指導つきである。成人コースで、まずは初級から、先生が丁寧に教えてくれる。それまで YMCA でだいぶ距離は泳げるようになっていたものの、形は自己流に過ぎなかったのだが、踏水会では形をただしてもらえる。先生たちは親切だ。もっと早くに踏水会に通っていればよかった。大学卒業間際になって、自分の居場所が見つかるなんて……。俺は、気がつくのがいつだって遅い。だから人なみになれないのだ。

その後、大学卒業間際で、どうにか大学院への進学が決まった。あの当時までは、まだ学者になる気はなかったし、とりあえず、モ

ラトリアムの期間を先延ばしにするための進学だったのだが、これで京都に留まれる、踏水会を続けることができると安堵したものだ。

大学の頃のぼくは、高校に行けなかったことの大きな引け目を背負っていて、だから普通の人の数倍も頑張ろうと日々もがいていた、しかし、どうしても突破口は見いだせない。ぼくは少年時代に失くしたものが大き過ぎたのだ。あれだけ、苦しんだのに、神様は心の居場所すら与えてくれなかった。あの当時、偶然読んだ小説が田村泰次郎の『肉体の門』だった。娼婦たちを描く話だが、彼女たちがすべてを憎むことで自分の境遇を受け入れているという行に、ぼくは痛く共感したものだ。すべてを憎む。あの当時のぼくには、それしかなかった。あの頃のぼくは、娼婦だったのだろうか。自我をなくして、彷徨っていた部分では、娼婦と通じる部分もあったのかもしれないのだ。そんなぼくが、わずかな時間だけでも、幸せに浸れるのがプールだった。

大学院の頃は、週に 3 回はプールに通っていた。5 回くらい行くこともあった。徐々にぼくの泳ぎの技術は上達していった。バタフライまでできるようになった。博士課程に進んでもからも、引きこもりの状態が続いた。その時も支えになってくれたのは踏水会のプールだった。踏水会は、日本泳法の試験があって、それも受けるようになって、指導科 2 級まではどうにか受かった。とりわけ楽しかったのは、夏の朝、子供たちとエンドレスプールで泳いだ日のことだ。これは、試験の項目の一つで、3 時間、一度も足を地面につけずに、平泳ぎで泳いでいくのだ。受験生は子供が多いのだが、あの時の水しぶき、朝の太陽、子供たちの瑞々しい熱気、先生たちの笑顔、今思

い出しても、ぼくの人生の最高の瞬間のひとつである。

あの当時、日曜日の朝の成人コースのプールも好きだった。ぼくが 30 代前半の頃。40 代のおじさんが多かった。皆、いいお父さんで、プールサイドで、ちょっとだけ世間話をするのが、ひとときの男同士の触れ合いで、何とも言えなかった。とりわけ、立命館の出身で、宇治から娘を連れてやってきているおじさんは、朴訥とした人で好きだったのだが、ぼくがちょうど 34 歳になる頃、小学校 6 年生の娘を中学から立命館に入りたいから、日曜は塾の送り迎えがあるからとやめていった。寂しかった。もう、あれから 16 年。あのおじさん今頃何をしているだろうか。俺より 10 歳年上だったから、もう 60 だろうなあ。もう会うこともないだろう。

その後、ぼくは、男性運動を始めるようになり、あれこれ忙しくなったせいもあって、徐々に踏水会に行く頻度は減っていった。8 年前に近所にスポーツクラブができ、こちらに鞍替えすることになった。ここにもプールはあるし、何よりも、ぼくの住んでいるところから 5 分くらいなので行きやすい。

しかし、今でも踏水会の人たちには感謝している。おそらく古顔の人は、ぼくのことを覚えてくれているはずだ。

2. ぼくを支えてくれたもの

②図書館

大学院で引きこもっていた頃、ぼくの支えになっていたもう一つのスポットは中央図書館だった。当時のぼくは、日本育英会（日本学生支援機構）の奨学金をもらって、細々と

生活していた。お金がないので、本を買うことはそうそうできない。中央図書館に置かれている本を 1 冊ずつ読んだ。大学院生であるにも関わらず、一般教養がなかったぼくは、研究書は読まずに一般書ばかり読んでいた。

中央図書館の近くには、二条公園があって、本を借りた後、この公園で読書したものだ。ここには当時ホームレスのおじさんが住んでいた。なぜか、ネクタイをしているホームレスのおじさんで、「ライターもっていませんか」と話しかけられたことがあった。普段、大きな声で独り言をいったりなさっているのだが、物腰はいたって紳士的だった。どういう素姓の人だったのかはわからない。相当長くホームレスをなさっていた記憶があるし、あの界限ではちょっとした有名人だった。しかし、いつのまにかいなくなられた。

いまは何処で何をなさっているのか。あの頃、40 代くらいだったから、もう 70 くらいになっていらっしゃるかもしれない。なくなったのかなあー。いや、お元気そうだったし、まだ生きてはいらっしゃるだろう。

3. ぼくを支えてくれたもの

③レンタルビデオ

20 代の後半の頃は、中央図書館で本を借りた後、近くのホビーズというレンタルビデオ店で、ビデオを借りていた。あの頃は、まだ 1 週間レンタルができなくて、毎日通って、片っ端から見たものだった。この店にある在庫でめばしいものは見つekしてしまい、いくつものレンタルビデオ店の会員になって、掘り出し物のビデオを探すのが楽しみだった。10 軒くらい会員になっていたと思う。

なかでも、重宝だったのは、京大前のステーションというお店で、ここはマニアックなビデオが勢揃いだった。ここにしょっちゅう通っていたのは30の頃。どうにか大学の非常勤の仕事ができるようになって、レンタルビデオも、1週間レンタルができるようになった頃だった。20代の頃まではアメリカ映画ばかり見ていたのだが、ここに通うようになってからは、日本映画やヨーロッパ映画の名作もくまなく見た。

かなり遅い深夜までやっていて、夜中に自転車を走らせたりもしたものだ。ちなみにこのお店はその後なくなったが、今でも、このお店の在庫をレンタルしているところが、麩屋町にある。ぼくも8年くらい前までは行っていたが、さすがにVHSよりもDVDの時代になってきたため、しばらく行っていない。でも、まだやっていると聞いている。あのお兄さん、お元気だろうか。

4. ぼくを支えてくれたもの ④カウンセリング

カウンセリングにぼくが通い始めたのは、30の夏の頃のことで、今から20年くらい前。ちょうどその頃からカウンセリングや心療内科が日の目を見るようになり始めたのだ。思えば、もっと早くにカウンセラーについて聞いたほうがよかったのかもしれない。しかし、それまでは、カウンセリングというと敷居が高かった。また不登校の時に逆戻りするようで、怖かった。それに当時まではカウンセリングというと高額だった。この頃から、良心的な料金でカウンセリングをしてくれる心療内科や、無料でやってくれる公立のカウンセ

リングなどが増えてきたのだった。

ぼくが30過ぎて最初についたカウンセラーは、25歳の男性。ぼくよりも5歳も若いが、いかにも頭のよさそうな人ではあった。ぼくとの相性も悪くはなかった。しかし、彼はアルコール中毒で、1年ほどでカウンセリングをおりることになった。それで助っ人として同じ心療内科でぼくより1歳年上の女性のカウンセラーにつくのだが、この人とは相性が悪い。ぼくのほうからカウンセリングをおりた。

もうカウンセリングなんてやめようと思い、寝つきが悪いので軽い睡眠薬だけもらおうと他の心療内科に行ってみると、運命的な出会いがあった。ここで働いているカウンセラーの人に見覚えがある。そうだ！ アメリカに留学していた頃に同じ大学に留学していた大学院生の人だ！！ 年はぼくよりも8つ上で、当時40くらいだった。この人のカウンセリングだったら受けてみたい。そう思って、再びカウンセリングを受け始めたのだが、アメリカじこみの衝撃のカウンセリングだった。ドンと核心に迫っていき、徹底的なセルフサポートの手法で、ぼくの心を立て直していく力技的療法だった。性格的な相性もよかった。ぼくとは顔見知りだったこともあって、私とかぼくではなく、「俺は」と話してくれて、兄貴みたいだった。普段は大学の先生で、心療内科にはバイトで来られていて、今でもいらっしやるはずだ。

この先生のカウンセリングでだいぶ回復したぼくは、その後、しばらくはカウンセラーのお世話にはならなかった。ところが、その3年後、男性運動に関わるようになり、そこで、フェミニスト・カウンセリングの世界では有名な女性がいると聞きつけて、コンタクトを

とってみた。ジェンダーの角度からのカウンセリングだったら新たなことが見えてくるだろうと思った。男女共同参画センターのカウンセリングで料金も無料だった。後で聞いた話だが、当時は原則女性しか受け入れていなかったのが、ぼくが男性運動に関わっているからという理由で引き受けてくれたみたいだった。彼女もよく勉強している人で、ぼくのほうもフェミニストのカウンセリングを受けることで、フェミニズムの勉強にもなった。

それから30代の終わりの頃、ぼくは大阪の関西カウンセリングセンターに通った。自分自身もカウンセリングの勉強をしようと思ったからだ。クライアント体験ということで、受講生は、研修生のカウンセリングを無料で受けることができるのだが、ここでまたもうひとつの出会いがあった。当時、60代の男性で、元々はエリートサラリーマンだったのがうつ病になって、カウンセリングの勉強を始めたという人だった。普通は研修生だから、もっと拙いはずなのだが、ぼくはあたった人がラッキーだった。プロ以上の力量と知識をもっていた。何よりも大きかったのは、ぼくはこの人には、例の裸教育のことと、女性から受けたトラウマをたっぷり話せたことだった。それまでのカウンセラーにはその部分だけはつらくて話せなかった。しかし、いよいよ機が熟してきて、もっともつらかった経験を吐露できたのだった。

この先生は、「ジェンダーに囚われたというのでは、大変なご苦勞でしたよね」とぼくの苦しみを受け止めてくれ、「女同士集まって、誰かの悪口をいったり、誰かを理由もなく毛嫌いしたりという、女性独特の部分に傷つかれたんですね。男性だったら、自分の利害関

係のない人は気にしないですからね」と、多くの女性恐怖も理解してくれた。これは、それまで誰もいってくれなかった台詞だった。

さらに、3年前、ある認知療法のグループで公開カウンセリングをすることになって、知り合いの女性からクライアント役を頼まれて、カウンセリング無料で、交通費までもらって、この先生のカウンセリングを受けにいった。この先生もいい先生だった。落ち込んでいる時に電話すると、電話でも対応してくれた。

他にも何人かの先生についている。もちろん、なかには合わない先生もいたし、ちょっとしか関わらなかった先生もいる。しかし、これくらいカウンセリングを受ける機会に恵まれる人って、そうそういるものじゃない。ぼくは、クライアントのプロになる運命に生れついたのだろう。実は、この後、精神分析を受けることになっている。知人の先生が紹介してくださった先生で、ゴールデンウィークが明けたら、連絡してくれと言われている。この原稿がアップされる頃には、お会いしているはずである。

5. ぼくを苦しめるもの

① 男を悪者にする男性運動

今年の2月で、ついに50歳になった。ちょうど50歳の誕生日の頃、梅田を歩いていると、かつて同じ男性グループでおつきあいしていた男性とバッタリ会った。その人は、ぼくと同い年で、独身。子供の頃からスポーツができなかったともおっしゃっていたし、大人しいタイプの人で、グループで出会った人のなかでは、一番、ぼくに近い人ではあった。

ぼくは3年ほど前にグループの中心の人と

もめてやめてしまったのだが、その人は今でも、時々、出入りしていて、ぼくは時折、その人にメールして、愚痴をきいたりしてもらっていた。温厚で誠実な人なので、優しい返事をくれるのだが、もうぼくの愚痴にはうんざりしているだろうなあと思って、今年の正月にメールしたのを最後に、しばらくメールしていなかった。梅田の雑踏の中でしばらく立ち話をした。ぼくは、まだ3年前のトラウマが抜けていないので、またあれこれその人にグループの悪口をもらした。

「まだ気になりますか？」と、その人からは言われた。その人は、ぼくがいつまでも引きずっていることが、理解できないみたいだった。今となっては、ぼくがもめた人よりも、ぼくのほうが人間関係にも仕事にも恵まれている。それなのに、ぼくがいつまでもそんな小さなグループのことにこだわっていることがわからないみたいだった。

なぜ、ぼくが引きずるのか。そこには様々な理由があるのだが、何よりも、ぼくが言わんとすることを、そのグループの人たちが理解してくれなかったということ。それが何よりも、ぼくのトラウマだった。いや、理解してくれないのはかまわない。しかし、理解していないのに、理解していると思いこまれるのは困る。二次被害を生んでしまうからだ。

あの人たちは、ぼくが古い男女観にしばられている、男は女よりも上位でなきゃいけない、女が下ネタしちゃいけない、男は負けちゃいけない、そういう考えから逃れられないから、女性から些細なことをされたことを大きくとらえてしまう、そう思っていた。自分たちが、かつてそうだったから、ぼくもそうだと決めつけてかかっているのである。

そうじゃないんだ。あなたたちと俺とは、考え方が違うんだ、生きてきた人生が違うんだといくら訴えたところで、わかってくれない。どう言葉を重ねてもわかってくれない。なぜ、これくらいのことかわからないのかとぼくはイライラさせられる。男性運動に関わり始めた頃から、このイライラは続いていて、思えば、もう15年である。

あの男性グループは、主としてDVの加害男性の支援をしている団体だった。そこに入りしている男性たちは、パートナーにDVしていた人が多いのだが、あの人たちを見ると、この人たちは男を加害者にしたいのかと思う時がたびたびだった。「男・加害者女・被害者」という先入観で男女を見ているという点において、フェミニスト、それも初期のフェミニストに似ている。何故なのか？あの人たちは女性にDVしてしまっている。DVなんて一部の男のすることだということになってしまったら、あの人たちはマイノリティ。悪い男というラベルを貼られてしまう。フェミニスト（正確に言えば、勉強不足なフェミニスト）は、全ての男が悪いような言い方をしてくれる。DVなんて絶対にしないような男であっても、男は男であるだけで加害者なのだという言い方をしてくれる。そうになると、あの人たちにとっては、都合がいい。罪の意識が軽減される。すべての男は悪者なのだから、DVをしてしまった俺だけが悪いわけじゃない。それに俺たちは、その贖罪のワークをしている。古い男性ジェンダーから抜け出そうと努力している。俺たちは普通の男よりも偉いんだ、進んでいるんだと、男性運動をしていることを理由に自分をヒーロー化しようとしている。そう感じるのが、しばし

ば、あった。

確かに、DV 加害の男性のことを悪人と決めつけるのは間違っている。人間だったら、心ならずも、他人を傷つけてしまうことはある。彼らが DV にいたる背景には、様々な経緯があったのだろうし、彼らは、自分の加害行為を認め、反省もしているわけだし……。しかし、ぼくのように女性から加害行為を受けた男性までを加害者にしてしまうのはいただけない。それでは男性差別である。男性被害を認めていないからである。ただでさえ、男性被害は取り合ってもらえない。男性は被害者になれない。その状況を悪化させる運動を彼らはしているのである。

ジェンダーの問題に目覚めた時期の違いが、あの人たちとぼくとの隔絶の原因であることは間違いなかった。前にある先生と話した時に、ぼくはそのことを訴えた。「ぼくは 15 で心が壊れたんです。だから自分が男だという確信ももてない。女性に権力を行使したりなんかはしていない。だけど、あの人たちは、30、40 になってからこの問題に目覚めているんだもの。ぼくとは目覚めた時期が違うんですよ」と。その先生は、「早い方がいいと思うけどなあ」と言ってくれた。ぼくは目覚める時期が早かったから、中年になって目覚める人よりも、よかったのかもしれないとおっしゃるのだ。

しかし、ぼくの若い時代は、水泳、図書館、レンタルビデオ……一人遊びばかりだった。そして話し相手はカウンセラー。一人遊びもそれなりに楽しかったけど、思えば孤独な人生だった。ぼくはまだ少年時代を取り戻していない。心の空洞は埋まっていないのだ。

ぼくは人格形成が終わっていない年齢で、

大きな挫折をしている。したがって、根源的な部分に傷がついてしまっているのである。

6. ぼくを苦しめるもの

② 女性を許せない心

神山征二郎監督の『白い手』(1990) という映画があった。これは椎名誠の自伝的小説の映画化であり、それなりに作品の評価は高くキネマ旬報のベストテンにもランクされている。ぼくは、キネマ旬報のベストテンに入選したやつは全部見たいと思うのだけど、この映画は敬遠してみなかった。未だに見ていない。この映画だけはなあー。これから観たいと思う日が来るのだろうか。今のところ、まだ見る気にはならない。

この映画、椎名誠の自伝的小説をベースに、彼の少年時代を描いた映画だが、当時アイドルだった南野陽子が小学校の先生役で出ていて、この映画の予告編では、南野が小学生の男の子たちを廊下に立たせて、ビンタを食らせていく場面がでてくる。椎名誠は確かインタビューで、小学校の頃、若い女の先生から殴られて、興奮したみたいのことを語っている。そういう奴もいるんだろうなあー。しかし、ぼくはこの場面があることがわかっているがゆえに、この映画だけは見ることができない。まだ未だに。

前にも書いたと思うが、ぼくの小学校の時の女の先生は、男子生徒にのみ厳しい体罰を与える先生だった。ぼくのジェンダーへの囚われの原因をつくったのがこの先生であることに疑いの余地はない。中学の時の裸教育の体育教師、不登校の頃のカウンセラー、他にもたくさん不幸な出会いはあった。しかし、

ぼくの人生の最大の不幸な出会い、それはこの先生との出会いだった。この先生と出会ったことで、ぼくの人生は大きく潮流から外れていったのだった。

確か、神谷美恵子さんがおっしゃっていたと思うが、人間はまず自分の性（男に生れたこと・女に生れたこと）を受け入れなければ幸せにはなれない。そして、ぼくが男に生れたことを受け入れられず、結果的に不登校にまでなっていく原因をつくってしまったのは、この先生なのである。そして、悩んでいたぼくを心なく傷つけた数々の女性たちが、ぼくの女性への偏見に油を注ぎ、結果的に、ぼくは、ぼくに対して好意的な女性に対しても偏見をもつようになってしまった。女性全般を憎むようになってしまったのだった。

こんなぼくを理解してくれる人は少ない。女が男にトラウマを負わされて、男性全般に偏見を抱くのは同情してもらえる。前に女性専用車両の話になった時、ある女性が、「痴漢をする男性は一部だろうから、女性専用車両は男性差別だけでも、痴漢の被害にあった女性のなかには怖くて乗れなくなってしまう人もいるから」と同情的な解釈を示されていた。それを言うんだったら、男だって、一部の女性からトラウマを負わされれば、女性全般が怖くなっていくことだってあるはずなのに……だけど、それは、その男性本人のとらえ方の問題と軽く一蹴されてしまう。同情してくれる人なんて、ほとんどいないのだ。

ぼくは15で心が壊れ、大検を受けてどうにか大学に入り、それからプールに通い、カウンセリングを受け、様々な映画や本に触れて、少しずつ壊れた心を立て直してきた。今では人間関係も充実している。しかし、女性を許

すことだけは未だにできないのである。

DV被害者のあさみなさんの『いつか愛せる』はとてもいい本だけでも、ぼくが、女性を「いつか許せる日」がくることを祈るのみだ。思えば、もう50代。もう許さなきゃいけない年なんだけど、まだ許せてはいない。許せないままに、ぼくの一生は終わっていくのだろうか。今度、精神分析を受けようと思っているのは、許せる日が来るかどうか、確かめたいからである。

7. 憎しみ返し……な～んてね。

中島哲也監督、松たか子主演の『告白』（2010）は、作品の評価はきわめて高く、この年のキネマ旬報のベストテンの2位である。

原作はベストセラー作家の湊かなえだが、彼女の作品は映画やドラマにもしばしばなっていて、小泉今日子主演のドラマ『贖罪』も面白かったし、今年になってから封切られた中村義洋監督の映画『白ゆき姫殺人事件』も楽しかった。小説のほうはまだ読んでいないのだけど、読んでみたいと思っている。

湊かなえ原作の映画の特徴は、女性のいやな面を存分に描いているところだ。ぼくみたいに女性から傷つけられた男は、カタルシスを感じる。しかし、男性運動家の人たちは映画も小説もあまり読んでいないのだろうか。女性の怖さは、湊かなえと限らず、小説や映画では昔からたくさん描かれてきているのだけど、あの人たちはあくまでも女性を可哀そうな被害者にしてしまおうとする。

『告白』の松たか子扮する中学教師は、娘を殺されたという部分では被害者だが、感女の行動は鬼気迫っていて同情の余地もない。

映画は、彼女が生徒の前で、「私の娘が殺されました。警察は事故死だと言っていますが、このクラスの子が殺したのです」と語る告白から始まっていき、「あなたの更生はこれから始まるの」と恐ろしい表情で生徒の髪をわしづかみにする彼女のアップで終わっていく。しかし、この台詞の後に、一呼吸おいて、「な～んてね」という言葉が続いて、そこにエンドタイトルが流れていく。憎しみ返しのドラマである。

映画のなかで、「憎しみを憎しみで返すこと」は間違っているという台詞が出てくるが、憎しみを背負って、復讐の鬼と化した主人公は時として、とても魅力的に見える。それは彼らが純粋であるがゆえに、社会や人間の不合理さに傷つき、その憎しみも大きくなるという解釈が可能だからである。

「な～んてね」という落ちをつけることによって、この映画は全体をちゃかしている。人を批判する時は、ユーモアが大事。この落ちがあることで、この復讐劇のトーンが変わるのである。

ぼくも、これから「女性加害・男性被害」をさらに訴えていくつもりではいるが、最後には、「な～んてね」と落ちをつけて、女性から嫌われないようにやっていかななくてはならない。

男は痛々しいんだから、女の人たちも更生してね、な～んてね（笑）。



1. マン・デート

一日だけお父さんになった日

8月の初め、大学の授業の採点がすべて終わった。4月から7月までの4ヶ月間、殺人的な忙しさで、自転車操業状態だった。やっと、これからしばらくはのんびりできる。何か楽しいことが起きればいいけどなあー。暑い夏の昼下がり、そう思いながら、ぼくは最寄りの駅から歩いて帰宅しようとしていた。

すると自転車に乗った若い男性と目が合った。「あ！」ぼくが専門学校で教えていた頃に、教えていた男の子だった。彼は、専門学校から大学へと編入し、卒業して、今は中学で先生をしているということは知っていた。

彼がぼくのことを好きだということは、他の女の学生に聞いて知っていた。先生という立場上、彼らが学生の間はFACEBOOKの友達にはならない、とぼくは教え子たちの友達リクエストを断ってきたのだが、彼は卒業した直後に、ぼくのところにリクエストを送ってきた。早速送ってくれるなんて、やはり俺のことが好きだったんだなあー、と嬉しかったものだ。とはいっても、もう会うことはないと思っていた。友達承認はしたのだが、就職すると忙しくなるし、忙しさに紛れて、昔のことは忘れていくだろう。FACEBOOKも、この頃はだんだんと廃れていて、LINEにとって代われようとしている。人は、ぼくの人生にやってきては去っていく。人生なんてそんなもんだ。もう会うこともないかと思っていた矢先だった。

しばらく立ち話をした。そして、一緒に飯と風呂に行こうかという話になった。善は急

げで、さっそく、その夜、桂の仁左衛門風呂に行き、しゃぶしゃぶを食べ、締めにラーメンを食べて別れた。息子と二人で語り合ったような気分だった。彼も大人になったなあ。俺は年をとった。感慨無量だった。一日だけ父親の気分を味あわせてくれた彼に感謝した。

2. マン・デート 海パンおじさんになった日

思えば、去年の夏も楽しかった。

去年は、普段、身体のマインテナンスをしてもらっている男性と兵庫の須磨海岸に行った。若者の海だと聞いていたのだが、朝行ったせいか、意外に人は少なかった。たっぷり、ふたりで海岸を歩き、海に入ってプロレスごっこをした。楽しいなあ。俺はずっと、こういう男同士の関係に憧れていたんだよなあ。

人前で裸になることの羞恥心は、その時のモード次第だ。温泉で裸になるのは一番当たり前のことで、温泉の場合は女性の目がないこともあって、それほど気にならない。海やプールの場合は、女性から見られる場合がある。男だから恥ずかしくないかという決してそんなことはなくて、意外にいやだと思っている人は多いはずだ。

一昨年も、当時親しかった飲み屋の仲間たちと宮津の海に行った。海に入るだけではなく、天の橋立を見て、温泉に入って、美味しいものをたっぷり食べて、花火を見て、目いっぱい安い宿屋に泊る、若い時代に戻った気分が夏休みを謳歌しようという目的だった。男6人くらいで、女性が4人くらいだった。女性たちのほうは、温泉は入るけれど、海には最初から入るつもりはないと水着ももって

いっていなかった。女性だから日焼けが困るというものもあるのだろう。男たちのほうは、一応、海に入ると言っていた。「男子だから、見られて困るところなんてないも〜ん」と小学校くらいの男の子のまねをして、ふざけていた人もいた。ところが、いざ、海水浴に行こうかという段になると、実際に海水パンツになって海に入ったのは、ぼくが親しくしている男性とぼくの2人だけということになった。ほかの男性たちは、また後で合流しようと、何か他の観光を楽しむために車でどこかに行ってしまった。

結局、みんな恥ずかしかったのかもしれない。海水パンツ姿になることが。これは男でも正常な反応なのだ。学校とかでは仕方がないから皆脱ぐだけのことで、上半身裸になることが恥ずかしくないという男性は、強がっているだけのことである。何年か前にレスリングをやっている男性が、「レスリングって、あんな格好をさせられるから、それが恥ずかしいんですよ」としきりに言っていた。そして、写真を見せてくれた。「あれ、昔はもっと恥ずかしい格好だったんじゃないの？」とぼくが言うと、「えー、昔は乳首見えてましたもんね」と彼。今のレスリング着も、身体に貼りついたようなものではあるけども、乳首は見えないようなふうになっているのだということとその時初めて知った。そういえば、ボクシングも、プロは上半身裸だけど、アマチュアはランニング着用になっている。昔に比べれば、男性の性的羞恥心は認められるようになっているのかもしれない。

須磨海岸では、写真もたっぷり撮った。この年になって、あれだけ海水パンツ姿の写真を撮るとは思いもしなかったが、あれこれポ

ーズをつくりながら、何枚も写真をとった。結構よく撮れている。「海パンおじさん」というゆるキャラで売り出そうか、と冗談で話した。可愛い雰囲気に撮れているのだ。

他の海水浴客の人に頼んで、彼と並んで写真も撮ってもらった。彼は、まだ30代だし、スポーツマンなので、見事な筋肉質の身体なのだが、その彼と並んでも、別に俺は遜色はないなあとか思ったものだ。もちろん、筋肉では彼に劣っているけれど、俺は身体の横幅が大きいので、それなりに裸がさまになっていた。宮津に行った頃は、もっと太っていたので、その時海パン姿で撮った写真を今見ると恥ずかしくなる。よくこんなお腹が出ていて、それを写真に撮ったものだと思ったりもする。でもあの頃は、あれが普通の状態だったので、気にならなかったのだった。40代の後半にもなれば、見苦しい身体の人の方が多いんだから、これくらいいいかと思っていたのだった。しかし、いったんダイエットに成功して痩せてみると、昔の身体が無様に見えて、せめてもっとカッコいい海パンパンツにしときゃよかったとか思ったものだった。

須磨海岸ではビーチボールを買って、海で遊んだりもした。男二人の裸の戯れをたつぷりと堪能させてくれた、彼に感謝したいと思う。

3. マン・デート もろゲイ！？になった日

去年の夏は、ほかの男性と川遊びにも行った。

その時も、男2人で、海パン一枚になって

遊んだのだが、その時撮った写真をN先生に見せた。

「もろゲイじゃないの」とN先生。

2人で並んだ写真を撮ってくれそうな人が周囲にいなかったのも、2人で身体を寄せて、自分たちで自分たちの写真を撮ったのだが、彼とぼくの裸体がぴったりくっついてアップで写っているため、ゲイにも見えてくるのだ。

「いや、20くらい年が違っているし、親子みたいな雰囲気ですよ」とぼくは話した。

あの時は、2人で川の流れを見ながら、小さなバーベキューをした。彼もととてもいいやつで、親子ほどに年が違っている人とも、なんのこだわりもなく、つきあえる人だった。この時もたつぷり男同士の裸の付き合いを堪能した。

彼は、今年の2月のぼくの誕生日にはケーキを焼いてくれた。いまは料理好きの男性は着々と増えていて、ぼくの知り合いの女性なんかは、「私は結婚する前は料理していたんだけど、結婚してからがしなくなっちゃったのよ。彼が料理するの好きだから」と話していた。彼が焼いてくれたケーキはプロテイン・ケーキ。ぼくはマッチョになりたいと常日頃言っていたので、細マッチョの彼は、そのことも考えて、プロテイン入りのケーキを創作してくれたのだ。美味しかった。彼にも感謝だ。

4. マン・デート わだかまりを打ち明けた日

8月の上旬、用事があって東京に行った。

せっかくだから、東京の友達にも会ってこうと、まず以前、京都で暮らしていて、今

は東京にいる30代の友人と会った。彼は博識で、頭が切れる。いつだって、思わぬ刺激をあたえてくれる。

読書家で、精神分析の本もたくさん読んでいたので、実は、今年の5月、思わぬ経験することになったのだと彼に話した。ぼくの知り合いの先生経由で、ある九州出身の女性カウンセラーと会うことになった。この連載にも書いてきたとおり、ぼくは九州に偏見をもっているし、女性恐怖症だ。これまでカウンセラーには何人もついているけれど、まだその部分は解決できていない。それで九州の女性から自分を理解してもらえれば、偏見も解けるのではないかと考えていた。しかし、逆に偏見を強める結果になってしまった。

ぼくが彼女に話したのは、男性差別の問題。具体的には、学校時代の体罰、半裸の強制、スポーツ問題である。これらは基本的な男性問題で、この援助マガジンでも何度も書いているし、援助学会の大会でも話したことがある。男性差別のブログやサイトなどでも必ずとりあげられる問題である。ぼくは、援助学会の発表のときは、まずN先生に内容をチェックしてもらっているし、よほど一般の人に伝わらないような問題は、N先生がカットしてくれる。決して特殊な問題ではないはずなのだ。

ところがこの女性カウンセラーは、ぼくの話に戦々恐々とした様子だった。「先ほども男の人が来られていたのだけど、その人の話はすごくよくわかるんです。でも、あなたのはわからない」彼女は、本当に困り果てたような顔でそういうのだ。

ぼくは、彼女にまず体罰のことを訴えた。小学校の時、3年間担任だった女の先生が男

子にのみ厳しい体罰を与えていたということ。すると彼女は、「でも、あなたが殴られたわけじゃないんでしょ？」と返してくる。「でも、ぼくはいつ殴られるかと思って、いつだっておびえていました」とぼくは訴えたのだが、それでも彼女はキョトンとした顔だった。次にぼくは、中学の時、番長のような体育教師から真冬に上半身裸で体育の授業をやらされていたことを訴えた。すると彼女は、「上半身裸になるのが好きな男の子もいるじゃないですか」と返してきた。さらにぼくはスポーツができなかったことも訴えた。「ぼくはのび太みたいな男の子だったんです」と。すると彼女は、「のび太くんも、静ちゃんと結婚できたじゃないですか」と笑顔で返してきた。

彼女は、おそらく男性差別の問題を考えたこともなかったのだろうし、ぼくのようなことを訴える男に出会ったこともなかったのだろう。したがって、男性ジェンダーの問題で悩むことがピンとこないのである。さらに、ぼくは、「ぼくは、自分と同じ経験を共有できる男性がいないことがつらいんです」と訴えた。すると「上半身、脱がされたことがですか？　でも、その時一緒に脱がされていた男の子たちがいるじゃないですか」と返された。俺は、そういう意味で言っているんじゃない。俺は、そのことで悩んで不登校にまでなってしまったんだ。しかし、他の男の子たちはジェンダーを受け入れているから、そのことで俺ほどには傷つかず、普通に人生を歩んでいたんだ、だから俺と同じように男性ジェンダーをどうしても受け入れられなくて悩んだ仲間がいないことがつらいと言っているんだ、しかし、彼女にはまるでそれが伝わっていない。

「好きで男っぽいことをするのと、先生に強制されるのでは別なんですよ。女の人だって、好きな男の人とセックスをするのと嫌いな男から無理矢理レイプされるのでは違うわけでしょう？」「じゃあ、逆の場合だったらということを考えてみてください。例えば、女子ばかりが殴られて、男は絶対に殴られないという状況が3年も続いたとして、あなたは何も感じないんですか」とぼくは熱く彼女に問いかけた。しかし、彼女は、困惑しきった表情で、ぼくを理解しようと一生懸命考えてはいたのだけでも、どうにも理解できない様子だった。

やはり、俺は変な男なのだろうか。

彼からは、「まあ、國友さんみたいなことを訴える男の人って、俺の周りでも他にいないですからね」と言われた。そう、彼女のほうは悪気はなかったのだろう。カウンセラーだって全能じゃない。ぼくは15年前にあるフェミニストカウンセラー（ジェンダーカウンセラー）についたことがある。ジェンダー意識のないカウンセラーだと、「男は男らしく、女は女らしく」というメッセージを送って来る。だけど、ジェンダーで苦しんでいる人だとそういうメッセージは逆効果。だからこそ、ジェンダーの視点からのカウンセリングが生まれたのだとおっしゃっていた。

おそらく普通の男性たちも、先生から殴られたり、強制的に半裸にさせられたりしたら、傷つく男のほうが多いはずである。これは確信をもって言える。しかし、ぼくみたいな極端な男根主義教育を受けた人はマイノリティだろうし、多少、ジェンダーを理不尽に感じることはあっても、仕方がないと男性ジェンダーを受け入れている。他のやつもしている

んだから仕方がないと受け入れて、どうにか思春期の多感な時期を乗り越え、大人になっていく。そして、大人になると少年の時のことなどは、粗方忘れてしまうのだ。

ぼくは男として挫折する時期が早すぎたのだろう。10代の頃の1年間は大人になってからの5年間に相当するという話を聞いたことがある。思春期の時期に心が壊れた僕は、大きなハンデを背負い、50になった今でもトラウマに苦しみ続けている。

ぼくがジェンダーを受け入れられなかったのは、生来、スポーツが極端にできなくて、発達障害で、男の規範に合わせようにも合わせられない規格外の男子だったからである。ぼくが曲がりなりにも他の男の子集団に1歩遅れてでもついていけるような資質をもって生れていたら、俺だってジェンダーを受け入れていただろう。しかし、1歩どころか、1千歩も1万歩も他の男子たちと違っていたぼくは、どうしてもジェンダーについていけない。だからジェンダーを憎むことになってしまったのだった。

彼女とのカウンセリングはすぐに打ち止めとなった。やはり、ぼくは九州とは相容れない何かをもっていたのだと思った。俺は九州とは縁がないんだ。そう思うしかない。

九州はぼくにとってトラウマの地。からゆきさんとして売られていった老女（田中絹代）が、彼女を取材しに来たライター（栗原小巻）に自分の若い頃を語っていく、『サンダカン八番娼館 望郷』（熊井啓監督・1974）という有名な映画がある。この映画のラストで栗原小巻さんが、「おさきさん、みな、日本に背を向けて眠っとんなはっと」という台詞は有名である。現地に行った彼女は、日本からからゆ

きさんとして売られた女性の墓が日本とは逆のほうを向いて立っていることを発見するのだ。もちろん、この台詞は彼女たちが日本に背を向けていることを批判してはいない。それくらい彼女たちは悲しい思いをしたのだということ。そして、自分を売った日本を憎むことでしか自分を支えられなかったのだということを示唆しているのである。

そうだ、俺も九州に背を向けて、生きていくしかない。俺は十分、九州で悲しい思いをしたのだから、背を向ける権利くらいあるはずだ。世間の人は、男が半裸を強制されたり、殴られたりするくらいのことが、からゆきさんに匹敵するほどのトラウマなのかと思うかもしれないが、俺にとってはそれに匹敵するトラウマだったのだ。

「俺はこの頃 N 先生と親しいけど、N 先生はある程度はわかってくれるんだよ。結局、俺は誰か理解して欲しいんだよね」とぼくは彼に言った。

「じゃあ、いいじゃないですか。女のカウンセラーにわかってもらえなくても、N 先生にわかってもらえば……。まあ、國友さんが悩まなくなったら、本を書くネタもなくなるから、それでいいじゃないですか」と彼は力強く言ってくれた。

そうだ。全ての人に理解してもらおうと思うから、余計に俺のイライラは募る。女性のカウンセラーが男の痛みなんかわかるわけがないのだ。男に生理痛や陣痛がわからないのと一緒だ。

彼は公明正大で豪放磊落である。変にぼくに同調するわけでもなく、反論するわけでもなく、ぼくのことを受け止めてくれる。彼と話すといつだって、新たな発見があるのだ。

彼にも感謝である。

5. マン・デート 男の握手をした日

東京への小旅行の最後、かつて京都にいらした鍼灸の先生の治療を受けに行った。一年に一度、この先生の治療を受けるのが年中行事になってきた。京都で治療を受けていた時がとてもよかったので、東京に移られても、この先生との関係は断ちたくなかった。

そうそう、鍼灸の時の治療着もこの頃は羞恥心を傷付けないような配慮がされている。鍼灸は身体に鍼をさすわけだから、当然、上半身は裸になるのだが、この頃は胸と背中の方が開けられる治療着が用意されていて、完全に脱がなくても治療ができるようになっている。

今回もたっぷりやってもらった。治療が終わった後、すぐに東京駅から京都に帰るので、先生はわざわざバス停までついてきてくれた。

東京での息抜きが終わって、これからまた京都での生活が始まる。俺には京都があるんだし、俺の遠い先祖は滋賀だと聞いている。滋賀は京都の文化圏だ。先祖が、九州から京都に子孫を呼び戻すために、俺を九州嫌いにしたのかもしれないのだ。そう思えばいい。

鍼灸の先生とは、男同士の固い握手を交わして別れた。この先生の握手はすごく好きだ。力強くて、男の握手っていう感じがするからである。この先生の友情にもすごく感謝している。

6. プロロマンス

かつての教え子、海水浴にいった友人、川遊びに行った友人、東京の力強い友人、鍼灸の先生。ぼくは、それぞれにぼくの二冊目の単著『BL 時代の男子学 21 世紀のハリウッド映画に見るブロマンス』（SCREEN 新書）という本を贈呈した。

ブロマンスを、ラブロマンスの誤植だと思った人もいるみたいなのだが、ブロマンスとは最近できた言葉で、ブラザー（兄弟）とロマンスの合成語。すなわち、男同士の兄弟のような友情をさす言葉である。ブロマンスな関係の男たちは、ゲイではないけども、マン・デート（男同士のデート）をするのだが、マン・デートとは、仕事やスポーツではなく、お互いにテーブルをはさんで話したりするような親密な男同士の付き合いをさしている。

ぼくにはマン・デートできる男性は、ここで書いた人のほかにもたくさんいる。なんと俺は幸せなんだろうと思う。カウンセラーが理解してくれなくても、彼らは少なくともぼくのことを受け入れてくれる。

ぼくは家族がいないので、誰の居場所にもなったことがない。また九州を憎んでいるため、帰る故郷もない。だけど、こうやって、つきあってくれる男たちがいる。子供の頃友達がいなかったぼくは、今になって遅れてきたブロマンスを謳歌できるのだ。

俺の人生はこれでいいんだと思わなきゃいけない。九州での忌わしい少年時代。映画だけが唯一の救いだった。それがあったことで、今や映画の本が出せる身になった。これで 2 冊目だ。俺の人生はこれでいいんだと思わなきゃいけない。誰も、京都から俺を追い出さずやっはいないだろう。もう 30 年以上も暮らしている。京都のほうが長いのだ。

7. お風呂でブロマンス

さて、アメリカではブロマンス映画が量産されている。それはぼくの本のなかで書いているので参照して欲しい。

今回、この原稿を書くにあたって、日本のブロマンス映画は？と考えてみた。日本だって、男の友情の話はたくさんある。しかし、厳密にブロマンスの定義にはまる映画があるだろうか。詳しくは、[hardtoexplain](#) というサイトを参照して欲しいのだが、アメリカのブロマンス映画とは、かつての西部劇やギャングものとは一線を画す、「マッチョなストイシズム」のない映画と定義されている。しかも、スポーツや仕事などのホモソーシャルな世界とは別の、男同士の親密さを描いた映画である。したがって、日本の任侠ものや時代劇や刑事ものは、男同士の話ではあっても、男のストイシズムがあるので、ブロマンスとは言えない。『ウォーター・ボーイズ』（矢口史靖監督・2001）や『おっぱいバレー』（羽住英一郎監督・2009）などは微笑ましい若い男の子たちの物語だが、スポーツを介しているところが、ブロマンスの定義とは外れる。

『おこげ』（中島丈博監督・1992）『渚のシンドバッド』（橋口亮輔監督・1995）『ハッシュ！』（橋口亮輔監督・2001）『メゾン・ド・ヒミコ』（犬童一心監督・2005）などは、ゲイの話であり、ブロマンスはセックスがからまないで、これまたブロマンスの定義からは厳密にははずれるということになる。

さあ、何があるだろうと考えているうちに、今回も忙しくて、ネタになる映画を探している暇がない（笑）。この頃、この連載、たるん

できている。最初の頃は、映画の分析を張りきってやっていたのだが、忙しさに追われて、いつの間にか、映画はつけ足しにしてぼくの随想を綴っていくようなふうになってきて、そろそろリニューアルしなくてはと考えている最中なのだ。

これまで連載を続けてきて、日本映画を繰り返し見ながらわかってきたことは、やはり日本はアメリカに比べればマッチョではないということ。したがって、男性論の本を書くのもアメリカとは違った角度から書かなくては合わなくなってしまう。元々ぼくはアメリカが専門で、日本文化の専門家ではないので、このところたるんできたのは、大目に見て欲しい。

とりあえず、今回は大ヒットとなった風呂映画『テルマエ・ロマエ』(武内英樹監督・2012)がぼくは大好きだというところで締めたいと思う。ちなみに今回ぼくがブロマン스의仲にいる友達のことを何人も書いたが、いずれもぼくと風呂などに入った経験のある人たちなので、お互いの裸を知っている。しかし、ぼくたちはゲイ関係ではない。

前に外国人留学生のクラスをもったときに、よく日本人はあれだけ他人と風呂に入るものだと言われたことを覚えている。国にもよるのだろうが、国によっては、人前で肌をさらすことを極端に嫌う人もいるのである。ちょっとこじつけだけど、日本人は風呂でお互いに裸の付き合いをすることで、ブロマン스의欲望を昇華しているのかもしれない。「だいこんの花」という有名なテレビドラマがあるが、このドラマで、森繁久弥と竹脇無我がお風呂で語り合う場面は有名である。ぼくも大好きな場面だ。

『テルマエ・ロマエ』くらい、楽しく男の裸をとった映画というのはそうそうあるものじゃない。アメリカで、男が裸になるときは、もっとマッチョなシチュエーションであり、戦いなどがからんでいるのだが、日本人は微笑ましいシチュエーションで、男同士裸になるようだ。このことに関しては、これからもっと考察を深めたいと思う。

一緒にお風呂に入れば、心も身体も癒える。男の痛みも男同士で分かち合えるということか。男は痛い！ でも男同士でお風呂に入れば痛みは流れる。日本のブロマンスは風呂にあり。強引な落ちだね(笑)。



男は 痛い !

國友万裕

第13回

大阪ハムレット

1. クラスに一人いた男の子を忘れないで

ぼくは、その女性カウンセラーにかなり厳しいことを言ってしまった。おそらく彼女の方は今でもトラウマかもしれない。彼女の方は、聞いたこともないような話を突然聞かされて、どう反応していいかわからなくて、困惑していたに過ぎなかった。もし、ぼくが何度か男性学のレクチャーをすれば、彼女だって理解できたに違いない。しかし、クライアントがカウンセラーに、お金を払ってレクチャーをするというもおかしな話だ。

結局、ぼくはジェンダーにとらわれ過ぎてしまっている。彼女はおそらく、ジェンダーの問題について深く考えたこともない人だ。フェミニスト的な女性ではないのである。しかし、その彼女であっても、女性差別や女性被害はある程度はピンと来るのではないか。彼女は、大学で教えた経験も豊富な人だし、この頃は、セクハラ対策委員会はこの大学でもある。先生たちもセクハラの疑いをかけられたのでは困るから、そういう部分には神経質になっている。この頃は男子に対するセクハラも認められるようにはなっているはずなのだが、やはり、初歩的なことしか普通の人は理解していないのだろう。

彼女とのカウンセリングの1回目のとき、ぼくは子供の頃からジェンダーに囚われていて、ほとんど女性とつきあったこともなく、ゲイになるわけでもなく、男か女かわからないような状態でこの年まで生きてきた、いまでも女性恐怖だということは話した。最初の前置きのつもりだった。

そして2回目のカウンセリング。そのとき

の会話は以下のようなものだった。

「ぼくの小学校の高学年の頃の女の先生は、男子にのみ体罰を与える人だったんです。それがぼくのジェンダーへの囚われの原因なんです」

「でも、あなたが殴られたわけじゃないんですでしょ？」

「ぼくが殴られたわけじゃないけど、いつ殴られるかと思って、いつだって恐怖におびえていました」

彼女はまるで理解できない困惑の表情だった。

「先ほども男のかたが来られていたんですけど、その人の話はよくわかるんです。でも、あなたのはわからない」

なぜ、わからないのか？ ぼくには、わからない彼女がわからなかった。彼女は体罰容認派なのだろうか。体罰には目撃体罰という言葉もあるし、自分が殴られたわけではなくても、誰かが殴られているところを目撃するだけでも、子供の心を傷つけるということはどうの昔から言われていることだ。彼女はまだ30代のはず。この世代で体罰肯定派ということはないだろうに。

おそらく、彼女はなぜ、子供の頃に体罰を目撃したくらいなのに、50までも続くようなトラウマになるのかがわからないのだろう。彼女は、考え込みながら、「男の人が奥さんを殴るってこともあるから」と自問していた。「だから、男が奥さんを殴るのも問題でしょう。あなたは、DV容認派なのですか？」今考えれば、そう問いかければよかったと思っている。おそらく、彼女は男性問題だけではなく、DVの被害女性のことも大して知らないのだろう。DVの被害を受けた女性のなかには、

男全体に敵意をもっている人だって大勢いる。しかし、DVに対する意識は女性によって大きく異なっていて、DVを目撃すらしたことのない女性は、DVなんて一部の極悪な男のすることだと思っている人もいるし、まるで人ごとのようにしか思っていない人もいる。自分が殴られたわけじゃない、他の女が殴られるのは、他人事なのだ。

ぼくは彼女にもっと丁寧に教えるべきだったのだろう。先生が何もわからない子供に手取り足取り教えるような気持ちで……。ぼくは生まれつきスポーツやけんかができず、男として3流という意識をもっていたということ。その女の先生は、「男の子は一家の大黒柱にならなきゃいけないのよ」が口癖で、男性ジェンダーを男子に強要することを何とも思っていなくて、何かにつけて男の方に厳しかったということ、そのことにぼくは深く傷つき、男性差別という意識を早くももち始めていたということ。

おそらく、女性たちは、スポーツやけんかできないことが男にとっては重大な問題であることに気づいていない。もちろん、何事であっても苦手なのはつらいだろうということはわかっているだろうが、スポーツ問題は男性に特有の問題である。女がスポーツが苦手なのと男がスポーツが苦手なのは重みが違ってくる。スポーツができるということは、男らしさの条件だけれど、女らしさの条件ではない。またスポーツのできない男子は、男性的な活動をすることができない。当然のことながら、友達をつくるのにも難儀する。しかし、女はそこまで考えていないのだ。女の子でも、スポーツができない子はつらい面もあるが、男ほどではないはずなのである。

僕らの若い頃、河合奈保子がアイドルだった。彼女は、子供の頃からスポーツがからっきしできなかったことを、明星などのアイドル雑誌で常に語っていた。しかし、彼女は当時、男の子に大人気のアイドルだったのである。一方で女の子に人気のアイドル、例えばジャニーズ系の男性アイドルなどは、バク転ができることを披露したり、スター水泳大会で活躍したり、スポーツ好きであることを常にアピールしていた。スポーツのできない男性スターがアイドルになるなんてことは、ぼくの知る限りないのだ。

誰しも小学校や中学校の頃を振り返ってみれば、虐められっ子で、女の子たちからもバカにされるような男の子がクラスに一人くらいはいたはずだ。ぼくはまさしく、そういうタイプだったのだが、大人になると、みんな、そういう男子がいたことを忘れてしまうのである。

忘れないで。そういう男子は、おじさんになってからも、心にトラウマを抱えているということ。

2. 殴られておけば……。

ぼくが不登校になった原因は、これまでこの連載にも書いてきた。一番の不幸な出会いは、やはり小学校のときの女の先生である。この先生との出会いがなければ、ぼくは人生の迷路に入ることはなかっただろう。

この先生の担任は3年間。この3年間で、ぼくをのぞく男子は一人残らずこの先生からビンタをもらった。女子はひとりももらわなかった。「ぼく、ビンタされる人、私、ビンタされない人」という状態だった。

男の子の方が悪いことをしていたかというと必ずしもそうとは言えない。むしろぼくのクラスは男子はおとなしい子が多く、女子の方が先生への反抗は激しかった。とりわけ、5年生くらいから態度が豹変した女の子がいた。彼女はおそらく反抗期が始まるのが普通よりも早かったのだろう。非行に走るわけではないが、とにかく感情的に先生に反抗し、先生を敵意むき出しに睨みつけることもあった。それでも、先生は彼女を殴ろうとしなかった。男子だったら、口答えしただけでも殴るくせに。

先生と生徒の性が逆だったら考えがたい自体である。男の先生が女の子の顔を殴ったりしたら、男子を殴る場合よりも大きな問題になる。中学の2年のときだったと思う。皆からバカにされていた国語の先生に、授業中、女の子の一人が口答えした。気の強いタイプの子だったので、強い口調になっていた。その時、先生は彼女を前に出すと、頬をピシヤリと叩いた。彼女は授業が終わると、机にうつ伏し泣き出した。彼女の仲間の女の子が先生に近づいて行って、「なんで、こんなことをするんですか」と先生の手を引っ掴み、あわや校内暴力にもなりそうな状況となった。女の子たちは皆、殴られた彼女をかばって、国語の先生に敵対した。女子たちの反撃は、まだそれだけでは終わらない。先生の手をひつつかんだ女子は学年主任の先生に、その件を告げ口に言った。

国語の先生が処分されることはなかったのだが、男子だったら考えられないことだった。男子が先生にビンタされたくらいのことで、先生の手をつかんで暴れたりしたら、それこそ停学ものである。あるいはコテンコテンに

殴り返されていただろう。しかし、女子の場合は、停学どころか、彼女たちの方が他の先生にその先生へのクレームをつけるということまでが許されてしまう。

小学校の時の女の先生は、男子は殴っているんだと考えていた。女性は、男は傷つかないと思っているのだろうか？ 女の方が傷つきやすいと思っているのだろうか？ だったら、なぜ、男の方が自殺が多いの？ ノイローゼが多いの？ 過労死が多いの？ 男は傷ついていないわけじゃない。男は傷ついていてもそれを訴えることができないのだ。

いつしか、ぼくは女性全体を色眼鏡で見るようにもなった。女性は、彼女自身は気づいていなくても、どこかで男を差別している。もちろん、男も無意識に女性を差別しているのだけれど、女性差別は問題になる。しかし、男性差別は問題にはならないし、摘発することもできないのだ。

ぼくは、小学校の頃、ビンタされるのが怖くて、相当気を張りつめていた。ちょっとでも隙を見せると殴られる。常にいい子を演じていなくてはならない。苦しかった。自由が欲しかった。その先生の支配から逃れたかった。女の子がうらやましかった。それがぼくのジェンダーへの囚われの導火線であり、不登校への導火線であり、強迫症への導火線でもある。

その女の先生に悪意はなかったにしても、その先生の行為は性差別であり、セクハラである。ビンタには性的な興奮がある。女の先生が男の子の顔を殴るなんて、暴力であるのと同時に性的虐待なのである。

その話を母にしたときだ。「いっそ、一回、殴られておけばよかったのよ」と言われたも

のだ。一回免疫ができてしまうと開き直ってくる。最初は、こんなのは絶対に嫌だと拒否していても、いったん免疫ができれば、平気になっていたのかもしれないのだ。しかし、それはその女の先生の考えを受け入れるということ、男性差別を受け入れることを意味していた。それは、ぼくにはできないことだったのである。

3. ぼくの人生の十字架

ある日、親しい仲間たちと歓談している最中だった。ある男性から、「國友さん、出身高校どこの？」と訊かれた。その男性は、九州の出身の人なので、熊本の高校のこともある程度はご存知である。とりわけ熊本の場合は、高校の学閥があったりするので、ちょっと興味をもたれたのだろう。ぼくは、とっさに、「高校の頃は熊本にいなかったんです」と嘘をついてしまった。

この男性に限らず、九州出身の人からは時々、高校のことを尋ねられる。そのたびにぼくは、適当に話をそらしたり、曖昧に返事をしたりで、応えることができない。そして、この時は咄嗟に嘘をついてしまった。

その後、しばらく、ぼくは嘘をついた自分に恥じてしまい、行きつけの自然食レストランで、店の女性たちにそのことを話した。「そんなのは嘘とは言わないのよ。便宜上言っただけのことなわけだから」と彼女たちは言ってくれた。そのレストランは、社会運動系のレストランで、社会的マイノリティや性的マイノリティの人も出入りしている。彼女たちは、マイノリティの人をたくさん見ているので、不登校で高校に行けず、大検で大学に行

った人は他にも知っている。したがって、多くの少年時代に偏見はもっていない。

もっとも、その時、ぼくに出身高校を尋ねた男性も、ぼくが不登校だったことがわかって、そのことに偏見を持つような人じゃない。人間味のあるいい人だし、人間なんて絵に描いたようなものじゃない、人それぞれ事情があるんだということは十分わかってくれる人だ。そのことがわかっていても、他の人たちが交えた軽い会話で、「実は俺、不登校だったんです。だから高校にまともに行ってないんです」とは言えない。せっかくの楽しい会話が他の方向に流れてしまう。嘘をつくしかない。履歴書に嘘を書いたわけじゃないから詐称にはならないし、これくらいの嘘は誰だってついている。

しかし、できる限り、嘘をつきたくないと思って生きているぼくは、こういう時に、つくづく自分の運命を悲しく思ってしまう。なぜ、俺は高校に行けなかったのか。高校に行かなかったことは、俺の人生の十字架なのだ。

あの先生との出会いがなかったら、こんなことには……。

4. 終わらないトラウマ

ぼくはずっと自分のことを同性愛者だと思っていた。今でもぼくは女性というよりも男性という方が楽しいし、男性の方を信頼してしまう。若い頃は、そのことで悩んだものだ。あの当時はまだ同性愛者に対する偏見は根強かったし、結婚して、子供をつくらなければ、男として一人前とは見なしてもらえないというイメージがあった。

今となっては、生涯独身率があがっている

し、同性愛に対する偏見も減ってきた。したがって、ゲイの世界に入ってもいいのだけど、ぼくはそこまでしたいとは思っていない。ぼくは様々なカウンセリングを受けて、自分がなぜ、男性の方が好きなのか、女性とつきあえないのかということを知っている。そして、男性と性的関係をもつということまではしようと思わないということも自覚している。これはゲイと思われたくないから言っているのではなく、実際そうなのだ。

ぼくが男性に同性愛的感情を抱くのは、少年の頃に他の男の子たちと十分に遊んでいないからである。ぼくは50歳になって、いまだに女性に恋する前の小学生の心理にとどまっている。もっとも、一般に男は、大人になっても、男の友情が好きだ。女性は恋愛映画や恋愛小説を好むが、男性は友情のドラマの方を好む。野球やサッカーを観戦するのが好きな男性が多いのも、男同士の友情を見るのが楽しいからである。

しかし、ぼくは女性への警戒心が抜けないがために、欲望が完全に男性との友情のほうに向いていて、女性との恋愛には向かわないのである。普段、親しく話をする女性がたくさんいるが、それはぼくのことを男として見ていない女性たちである。ぼくを男として見て、接近してくる女性とは、ぼくはつきあえない。

これは異常な心理なのだろうか。そんなことはないだろう。女は魔性の存在。古くから男が女を憎しんできたことは、かのボーヴォワールも『第二の性』のなかで語っていることだ。それに昔の人は、親が決めた相手と結婚したりしていたわけで、そうそう恋愛もしていなかっただろう。ところが、自由恋愛の

時代になってからは、恋愛至上主義的な考えが膨れ上がってしまったため、女に関心をもたない男性は異常視されるのである。しかし、恋愛は女の世界。女にある程度は身を委ねるという気持ちにならなければ、恋愛はできない。だけど、ぼくは、女性から受けたトラウマの PTSD がぬけないがために、女性に対してバリアをはってしまっている。

おそらく、ハリウッドのロマンティックコメディを見まくって、アダルトビデオを見まくって、強引に女性と恋愛するんだ！と自分にプレッシャーをかければ、ぼくだって女性とつきあえるのかもしれない。しかし、ぼくはそれをするに躊躇してしまっている。それをしてしまったら、ぼくはぼくを苦しめたジェンダーを許すことになる。俺はジェンダーを許したくない。許してしまうと今までの俺の人生が何のための人生だったのかわからなくなる。俺はもの心つく頃から、ジェンダーに苦しんできた。ジェンダーと戦ってきた。その自分に折り合いをつけることのできない俺は、女性とは軽い関係しか築けないのである。

あの先生に出会わなきゃこんなことには…。

5. かけ違えたボタン

ワイシャツのボタンの第一ボタンをかけ違えると、その後のボタンもかけ違えてしまう。ぼくの人生はまさしくそういう人生だった。ぼくが挫折したのは少年時代だが、少年の頃にボタンをかけ違えているため、いつまでたってもぼくはワイシャツをちゃんと着ることができないのだ。男という名のワイシャツを。

こんなぼくを理解してくれる人は少ない。「ジェンダーって、わからない人は全然わからないのよねー」と、レストランの女性は言ってくれた。ジェンダーくらい、人によって意識が違っているカテゴリーはないのだ。最初から理解してもらえる人なんていないんだと割り切っていくていくしかない。とりあえず、ジェンダーの話はあまり大っぴらにはしないほうがいい、とんちんかんな答えを返してこられるか、意見が対立するかが関の山なのである。

戦死、過労死、自殺、すべて男性がマジョリティーなわけで、男性差別の結果なのだけど、とりあえず、日本は兵役（これは究極の男性差別）もない、ぼくは過労死になるほど働いてもいない、自殺する気もない。比較的平穏に生きているので、他の男の人たちのことを考えて、胸を痛ませることもないかもしれないのだ。

とりあえず、ジェンダーについて考える時間と考えない時間を分けたいと考えている。それが、ぼくが自分を治癒する第一歩である。

スティーブン・キング原作の『黙秘』（ティラー・ハックフォード監督・1995）という映画がある。この映画で、ジェニファー・ジェイソン・リーが演じる女性は、子供の頃に性的虐待を受けて、それが原因で男とはゆきずりの関係しかもてないという設定になっていた。この映画と限らず、女性が男性から受けた虐待がきっかけで、男と関係を持てなくなる話はしばしば耳にする。しかし、逆の場合は、まだ認知されていない。俺は40年も苦しんだのに、誰にも認知してもらえないなんて、悲しい話だ。

誰か俺をわかってくれ！！！！というか

すかな願いをこめて、これからもこの連載だけは続けて行こうと思う。

ボタンをかけ違えたままの古いワイシャツは、脱ぎ捨てて、早くに新たなワイシャツに着替えたい。着替えるのが難儀なんだけど、いつか新しいシャツに着替えられる日が来ることを信じて、日々を生きて行くしか、俺にはないのだ。

6. 『大阪ハムレット』

前号にも書いたとおり、この連載、この頃たるんできているので、今号からリニューアルを考えたのだが、あいにく忙しくて、今号もいつもと似たり寄ったりの内容になってしまった。申し訳ない限りである。

最後に映画の紹介をしておきたい。『大阪ハムレット』（光石富士朗監督・2009）である。この映画では3人兄弟がそれぞれ兄弟とは思えないほどに性格が違っていて、三男が女の子みたいな男の子という設定である。忙しくて、今回はDVDを見直すゆとりもなかったのだが、とにかく男の子は多様だということを知ってもらうにはいい映画だったと記憶している。松坂慶子が母親役を好演している。これを見て、痛々しい男の子たちを思い出してください。

次号は正月明けになるので、リニューアルを目指します！！





男は 痛い !

國友万裕

第14回

あぜ道のダンディ

1. ぼっち君だった俺に。

2月で51歳になった。思えば、大学で非常勤として教え始めて22年が過ぎたのだ。月日のたつものの早さにうたた感慨だ。

俺の人生は、30歳で大きな転機を迎えた。俺が大学の非常勤として仕事をし始めたのは29歳の時だった。大学院の博士課程を満期退学した春からである。ちなみにN先生は、29歳ですでにR大学に専任が決まっている。俺の周りは、そこまで順調に行く人はいなかったが、それでも、当時は英語の人だと大学院に在学中から、大学に非常勤に行っている人が大半で、俺は普通の人よりも出遅れた。

これには理由がある。俺は開き直って、大学院生活を送っていた。当時の常識では、20代の後半にもなれば、親に頼らずにバイトと奨学金だけでどうにかまかなう生活を送るべきだったのだろう。しかし、俺は、大学院に入った時点で、そのことをあきらめた。

俺の大学生活は、心が揺れに揺れ、半狂乱のような状況の4年間だった。俺の大学生活に対する期待は大きかった。しかし、考えが甘かったのだ。まだ不登校という言葉もない頃、学校に行けなくなり、3年も引きこもっていた俺が、大学に入ったからすぐに他の人に追いつけるわけがない。やることなすこと裏目に出る四年間だった。

「N先生は、法学部だったわけでしょ。でも、俺は英文科だったんですよ。だから女の子が7割以上だった。まだ女性とつきあうような状態じゃなかったのに、女の子ばかりのなかに投げ込まれて、男は10人くらいだっ

たし、もっと多かったら、一人ぐらい気の合う相棒が見付かっていたのかも知れないんだけど……あまりいい思い出ないんですよね」
と俺はN先生に話した。

何よりもつらかったのは、昼食時だった。お昼時になると、学食はごった返す。近くの喫茶店も満杯になる。あの頃は今に比べるとコンビニも少なく、学生たちが皆で集う学食や食堂で、一人で昼飯を食べるのは惨めだった。時間をずらして、空いている時間に一人で食べたりもしたものだ。

「ぼっち君、だったんだね」とN先生は言ってくれた。

授業も徒労だった。あの頃、出席の代返や代筆は当たり前のことのように行われていた。だけど、俺は代返してくれる人もいない。出席するしかない。大講義は、1回も出席せずにテストの時になって、初めて先生の顔を見るというやつもざらだった。他の連中は、友人関係がしっかりしていたので、友達から情報やノートをかき集めて、要領よく単位をとっていた。俺は授業に出てはいたものの、嵐のような心を抱えて、授業に集中する事はできなかったし、情報がはいらないので、成績も大してよくはなかった。今となっては何の意味もなさない出席だったのである。

あの当時の俺は、藁をもすがる気持ちで授業にだけは出ていた。何でもいい。糸口が見付かることを期待して……。どこにも行くところのなかった俺は、ひたすらキャンパスのなかを徘徊していた。俺としては、心を鎮めるため、そして誰かに声をかけて欲しくてしていたこと。せつかく入った大学だったから、大学の隅々まで知りたい。どこかに自分の居場所をつくりたい、その一心でもあったのだ。

しかし、自分の居場所は見つからない。むしろ、用もないのにウロウロ徘徊している人というレッテルを貼られ、白眼視される毎日が続いた。あげくに卒業間際になってトラウマ的な事件が起き、俺は憎しみの残るような気持ちで大学を去る事になった。大学院は他の大学に進んだ。その大学では上手くいったのだが、当時、そこは修士課程しかなかった。博士課程はまた新たな別の大学に行くことになった。言ってみれば、渡り鳥だ。

博士課程は兵庫県の大学だった。入学してしばらくたったら神戸に引っ越そうと思っていた。しかし、京都からでも通えることがわかった。それに博士課程は週に1日だけ出席すれば済む。定期券も学生用の定期は安い。俺は京都から通うと割り切った。俺は京都にこもり、できる限り人付き合いをせず、細々と切り詰めた生活をした。

俺は大学時代に親の金を使い過ぎた。あの頃の俺は金を使うくらいしか、心を沈める手段がなく、幸い、あの当時は親にお金のゆとりがあったため、どうにかお金に頼って乗り越えたのだ。相当な額の食費も使っていた。あの当時、わら天神のところにジョイみのきちというレストランがあった。俺はあそこの常連客だった。「学生が食べるところじゃないよね」とN先生。でも、仕方がなかったのだ。学校の近くの安い食堂だと学生のグループばかりだから、ぼっち君の俺はいたたまれなくなる。自炊しようにも料理どころじゃなかった。部屋は無残に散らかり放題。あの当時の散らかりようは、今思えば我ながら想像を絶するもので、あの当時の俺の心のメタファーである。

親には、経済的負担だけではなく、相当な

心配をかけた。もうあれだけの親不孝をすることはできない。母は俺のことを理解してくれていたので、多少の仕送りだったらくれるだろう。狂気になるくらいだったら、割り切って、生きたほうがいい。無理して他の同年代の連中に追いつこうとすると、また狂乱の世界へと逆戻りになる。

大学時代の俺は、必死になって人間関係を築こうとして、しかし、築けなくて、苛立っていたのだ。大学院に入って、俺は、居直って、ぼっち君でいようと思った。人付き合いは極力避け、非常勤の仕事を探す努力もしなかった。ただひたすら今を生きた。あの頃、心は安定していた。人間は、一人の方が心は安定するのだ。他からの雑音が入ってこないからである。

しかし、心の安定の代償として、仕事は出遅れた。もうすぐ大学院も終わりなのに非常勤の声すらかけてもらえない俺は、修士課程時代の先生に年賀状を出し、その時に一筆そのことを書いた。その先生は神様のように優しい先生だった。その大学で2月に急にやめる先生が出て、その先生の口添えもあって、どうにか満期退学の寸前に非常勤の口が見つかり、首の皮がつながったのだった。今思えば、その先生に感謝せずにはいられない。もう10年以上も前になくなったけれど、天国で安らかに過ごしたろうか。

そして、29歳からの1年間で、俺の人生はやっと少し自立への道へと動き始める。非常勤の仕事は思っていたよりも楽しかった。これからもっと増やそうと他の大学にも頼んで、仕事は30歳から増えることになった。収入が増えるので少しだけ高い下宿に移った。好調だった。ところが、ちょうど30の誕生

日の頃、大学の春休みの頃に、また大きなトラウマ的な出来事が起きた。今思えば、俺に社会性がなかったがゆえに起きたこと。別に不運なことというのでもない。しかし、そのことで俺の心は再びコントロールをなくして、俺は1週間ほど、心が嵐のような状況になり、また再び自分を見失うことになる。

俺は意を決して、近くの心療内科へ行った。俺の30代は精神病院から始まったのだった。精神科が、心療内科と呼ばれるようになり、敷居が低くなったのは、ちょうどその頃からである。

2. 女性恐怖症は治らない。

あれから、21年かあー。確かにあの当時に比べれば俺は成長しただろう。仕事にはすっかり慣れたし、この21年の間にはカウンセリングもたくさんうけ、社会活動にも参加し、世の中のこともたくさん勉強した。大学だけではなく、翻訳の仕事もしたし、専門学校でも非常勤をしたことで、すっかり人間関係にはたくましくなった。今となっては、友達がたくさんだ。しかし、結婚したり、パートナーをもったりすることはできない。

「誰かとおつきあいでしたら」

行きつけのレストランの女性から言われた。俺は、悶々として暮らしている。自分の生活に不満があるわけではないが、何かが欠けている。そう思う毎日だ。彼女は、そういう俺に美味しい料理をつくってくれて、家族の気分を味合わせてくれる人である。

「いや、ぼくは女性恐怖症なんですよ」と、俺は笑って応えた。俺が、自分が女性恐怖症だと言うことをカムアウトしたのは、もう5、

6年前の事だ。それから楽になった。俺が女性にトラウマを負わされる過去をもち、女性と前向きな付き合いができないのは事実であり、それを隠して生きて行くのはしんどかった。女性恐怖をカムアウトしたことで、俺の長年の肩の荷はおりた。しかし、カムアウトしても、女性恐怖症は治るわけではない。おそらく、少年期に女性からトラウマを負われ、年相応に女性とつきあっていないことが、この歳になって、女性と積極的に付き合いえないという後遺症の原因になってしまっている。

中学くらいから引きこもって行き、高校に行けず、学歴マイノリティになってしまった俺は、マイノリティであることの重荷に折り合いをつけることに氣を取られるなかで、女性恐怖が固着してしまっていたのだ。

伊藤公雄さんが『男らしさのゆくえ』のなかで、男らしさを過度に追求したり、あるいはそこから撤退したりすると対幻想の入る隙間がなくなり、女性は観念化された存在でしかなくなると述べている。難しいのだが、おそらく、例えば戦争のような、過度の男性ジェンダーの世界だと当然男の世界となって女性が入る隙間がなくなり、逆に完全に男性ジェンダー・男らしさを拒否してしまうと、女性とつきあえなくなるということなのだろう。俺は後者のタイプだ。

男らしさから撤退した俺は、もう女性はいらなくなってしまっているのである。俺のことを男とっていない女性とは普通につきあえる。しかし、俺を恋愛対象としてみる女性とは怖くてつきあえない。俺は、女性から男らしさを求められると過度に反発してしまう。こんな男が女と上手くいくわけがないのだ。男に男らしさを少しも求めないで、恋愛する

女が果たして世の中にいるだろうか。

岸田秀さんの『性的唯言論序説』という本を読んでいる。もう15年以上前に書かれた本だが、この本の一節に、売春婦になる女性のなかには子供の頃に性的虐待を受け、それと同じことを強迫的に反復することによって、自分のトラウマを治そうとする神経症的状況に陥っている女性がいるのだと書かれていた。

同じく岸田さんの『ものぐさ精神分析』のなかにも、男運が悪いと言われる女性はいるけど、例えば、DVの被害者になるような女性は、子供の頃にDV家庭に育って、その時のトラウマを癒したいから、無意識にそういう男を選択してしまうのだとも書かれている。

とても深い説である。

他にもこれと同様の説をいろいろな人が言っているのだが、岸田さんの説明が一番わかりやすく、俺は目から鱗が落ちたような気持ちだった。

性的虐待やDVに深く傷ついた女性が、なぜ、過去と同じ状況に自らを追いやっていくのか??? きわめて逆説的だ。しかし、人間は考えてみれば、そうなのだ。俺は、まさしくこの強迫的反復症に陥っていて、そこから抜け出せなくて、苦勞しているのである。

俺は毎日のように自分を傷つけた人のことを思い出す。小学校の高学年の頃の女性教師、中学の時の体育教師、不登校の時のカウンセラー、大学の頃、俺を口説こうとしていた女の子、嫌な奴を思い出すことによって、俺は心のどこかで、それを克服したいと思っているのである。

トラウマを忘れることはそう簡単じゃない。忘れられないのならば、向かい合うしかない。俺はずっとそう思ってきた。そして、反芻し

たことで成長した面もある。しかし、その一方で、あの時、言えばよかったことが浮かんできて、つらくなるのだ。もうあいつらと会うすべもない。あいつらは俺のことを思い出もしないだろうし、まして、俺をここまで長く苦しめたことを考えたこともないだろう。かくいう俺だって、誰かを知らぬ間に傷つけてきているはずだ。人間って悲しいなあ。痛恨の思いを抱えたまま、人は一生を終えるのだろうか。

「そんな！？ 女性でなくて構わないじゃないの。男の人だっていいわけだし」とレストランの女性は、「あなた遅れているのねー」と言わんばかりの言い方で言ってくれた。

「まあ男の人とはつきあっていますよ。ただゲイ関係ではないし、とても仲のいい友達というところなんです。」

俺は女性とつきあうよりも、気の合う男性とじっくり友情を温めている方が好きだ。実際、俺と一緒に食事をし、風呂で裸のつきあいをしてくれる男性は何人かいる。ゲイ関係ではないが、男の友達であっても、好みというのはあって、好きな男性でなかったら一緒に風呂に入りたいとは思わない。一緒に風呂に入って楽しいかどうか、俺の友情の基準と言っていいかも知れない。

正月も、仲良しの友達と船岡温泉に行き、それからラーメンを食べた。ラーメンは太るから普段は控えているのだが、正月だから特別に二人でカウンターに並んで、熱い汁をすすったものだ。

3. 失われた少年時代を求めて。

正月と一緒に風呂に行ったのは、身体のメ

インテナンスをしてくれているマッサージの友人である。彼は定期的に俺のところに来てくれているので、会う機会は多いし、もう俺の事を何もかもわかっている。

「この間、仕事で一緒のフランス語の先生と怪我の話になった時に、『前に部活で突き指した時に……』とふと漏らされて、俺、その一言で悲しくなっちゃったんだよね。何故だかわかる？」

「その先生が部活でバレーかなんかやっていたことが、羨ましいんでしょ（笑）？ もう俺は國友さんのことは全てわかっていますよ」

彼と親密になってから、かれこれ2年半が過ぎようとしている。その間、治療を受けながら、俺は彼にすべてを話してきたのだ。俺は、中学の頃から完全にクラスで浮いていて、高校にはまともに行けず、当然、クラブ活動の経験なんてない。京都は修学旅行生が多いが、俺は、グループで、バスに乗っている、修学旅行生を見ただけで、悲しい気持ちがわいてきて、いたたまれなくなる。あの頃の俺は、グループ活動が一番嫌いだった。グループ作りとかが行われると、俺はいつだってグループに入れなくて、仕方が無いからどこかに押し込んでもらおうという状況だった。惨めだった。俺はいつだってグループの女の子たちからバカにされながら、小さくなってグループに入れてもらうしかなかった。しかし、ジェンダーの活動で知り合ったやつらは、こんな俺にさえ、「女を下位のものと見なしている男性優位主義者」のレッテルを貼ってしまう。男は一枚岩じゃないんだよ！ お前ら何にもわかっていない（怒）……。さまざまな思いが、修学旅行生の微笑ましい光景から俺

の心の中に膨らんで行く。切ないなあー。

「でも、そうやって人生の悲しみを味わっている時に國友さんは、人生を感じるんじゃないんですか？」とマッサージの彼は言ってくれた。

確かにそうだ。ポジティブな俺なんて想像できない。俺はネガティブなのが俺らしいのである。

マッサージの彼には、本当に若い頃をしたかった事をたくさん味合わせてもらった。鴨川の川縁を上半身裸で散歩、須磨海岸で海水浴、スポッチャでローラースケート、キャッチボール、卓球、ボーリング、それに温泉も何回もいったなあー。彼は見事なヘラクレスなので、彼と風呂に入るのは誇らしかった。周りの人たちが彼の見事な身体に見とれていたりするからである。「俺は、この人の友達なんだぜ！」と鼻を高くしながらも、同時に友達の一人もいなかった少年時代がわき上がってきて、悲しくなるのである。

俺は青春時代に失うものが大き過ぎたのだった。

4. いつか普通になれる

今、『6才のボクが大人になるまで。』という映画が話題になっている。アカデミー賞では作品賞は逃したものの、大量にノミネートされ、お母さん役のパトリシア・アークエットが助演女優賞を獲得した。

アメリカ映画だが、6才の男の子が大人になるまでのドラマを12年間かけて撮っていて、しかもドキュメンタリーではなく、ドラマ映画なので、俳優さんたちがそのまま老けていく。実験的なつくりの映画である。3時

間ほどの長尺で、地味な話なのだが、絶賛の嵐だ。俺の友人の男性も、「アメリカの男の子って、こうやって大人になっていくんだなあと思って、そこが面白かった」と言っていた。なるほど、そう言われてみれば、そうだ。お母さんも、お父さんも存在感があるし、特別ドラマチックなことが起きるわけではないのだが、エピソードにリアリティーがあって、アメリカの普通の家庭の男の子の成長プロセスの物語という印象になるのである。アメリカは多様な国だから、何をもって普通と言っているのかは難しいのだが、いかにも一般の人がイメージしそうなアメリカ人の風景がこの映画には溢れている。

日本で、こういう映画を作ったとしたら、どうなるだろうかとふと思った。おそらく、小学校ではゲームに夢中になり、中学から野球やサッカーを始め、家族向けのマンションで暮らし、お父さんは多少気が弱いけど真面目に仕事をしていて、お母さんはパートをしながら家事をしている。高校くらいから女友達ができ始めて、高卒後は都会に出て下宿、バイトしながら大学に通い、お酒やタバコやセックスを覚えて大人になっていく。そういうストーリーとなりそうな気がする。

俺は、そういうストーリーにならなかった。15で心が壊れ、高校に行かれなかった俺は、普通からは大きく外れたストーリーを歩むことになったのだ。普通でないことというのはつらいこと。男性ジェンダーの問題がなかなか広がらないのは、人間は普通でいたいという気持ちが強いからだだろう。多少、ジェンダーに理不尽さを感じても、男という枠のなかで折り合いをつけて生きていた方が楽だ。そ

のほうが普通だし、普通でいることが楽なのである。しかし、俺は、少年時代に様々な問題が噴出し、普通でいようにもいれない、不可抗力的に普通のレールからそれることになってしまったのだった。

しかし、俺の心が壊れてから36年が過ぎ、その間には社会も変わった。何よりも普通という概念が以前に比べればゆるくなった。まったく普通の平凡な人生を歩む人なんて、今時滅多にいない。そして、年を重ねるごとに、運命の過酷さを知る人の数は多くなる。俺の人生は、15で大きなドラマが起きたが、中年になって、大きな運命に巻き込まれる人も出てくるのである。

もう考えることはやめよう。今は、1日1日を大事に生きるのみだ。そのうち何か新しい展開があることを信じて。いつか女性恐怖も治るだろう。すべてがおさまるところにおさまるだろう。おそらく、まだ俺の人生は、30年は確実にある。俺の家は長生きの血筋だから、80くらいまでは元気でいれるはずだ。昔は人生50年だったはず。そう考えれば、俺はまだ21歳なのだ。

5.『あぜ道のダンディ』(石井裕也監督・2011)

『あぜ道のダンディ』は、小さな映画だが、男ってというのは少年の時に思い描いた理想の男性像を中年になっても捨てられないんだなあということを思わせてくれる。この主人公は本当にいじらしくて、エールを送ってしまいたくなる。どんだけ、しんどくても、誰も認めてくれなくても、ダンディでいようとするのだから。男性ジェンダーに依存して、あぜ道を歩いていくことをよすがにしている男。

男って、悲しいけど、愛おしいと思わせてくれる映画だ。おそらく、日本の普通(?)の男たちは、これに近い生き方をしているのだろう。

この映画は男を考えるために、いい映画だ。ただ、すべての男がこうだとは思わないで。俺は、ダンディになりたくてもなれない資質で生まれ、その結果、少年の頃に心が壊れ、そこから少しずつ自分を構築していく人生だったのだ。。。そして、いつか構築できる日を願いながら、今でも日々を生きている。『男へと向かう道を歩む男になれない男』のような人生なのである。

さて、話は変わるが、ここ数号、この連載をリニューアルしたいんだと自分で言ってきた。しかし、どうリニューアルしていいのか。今だに糸口が見付からない状態である。

当初はこの連載を最近の日本映画を使って、男性問題を語るという目的でスタートさせたのだが、いかんせん、忙しい。映画のテキスト分析は結構時間がかかって、忙しい最中にやっていくのは困難であるということがわかってきた。また、俺はそもそもアメリカ映画が専門なので、日本映画の専門家ではない。したがって、専門外の事をあれこれ語っていくのは、僭越という気持ちがでてきた。

それに、この連載は自分史を語るエッセイなので、どこまで書いていいのかが心配になる。ぼやかして書いているつもりだが、登場してくる人が特定されてしまった場合に、問題になるのではないかという不安も出てきたのである。

まず何よりも、これは自分自身を援助するために始めた連載だったのだけど、果たして、

連載を始めて3年もたって、俺は変わったの
だろうかという不安がある。この3年の間に、
仕事や人間関係で新たな展開はたくさんあっ
て、しかも、よい方向への転換だったと思
う。しかし、肝心の俺の心は、どうなのだろ
うか。徐々に治癒はしているが、トラウマは
消えてはいないのである。

また読者の人たちが、この原稿を読んで果
たして何を感じているのかもわからない。最
初の時は、ツイッターで「面白い」という評
価が来たのだが、その後は何も来ない……と
思っていたら、読者の人からのファンメール
が転送されてきた。ということは、この連載
を楽しんでいるという人も一握りはいるとい
うことなのだろう。「じゃあ、とりあえず、変
えることもないか。いい案が浮かぶまでは…
…」と強引に自らを納得させ、今回もいつも
と似たり寄ったりの内容でお許してください
(笑)。

ご意見のある人は、ぜひ、メールを！！
とりあえず、今回のオススメ映画は『あぜ道
のダンディ』です。



1. ゲイって、何???

本を出してから、俺のことを最初からゲイだと思って、近づいてくる人がでてきた。俺は「ゲイだ」とカムアウトした覚えはないし、俺の単著2冊もゲイに特化した映画の本ではないのだけど、ゲイを匂わせる画像や言葉が表紙についているから、自動的にゲイだと思ってしまう人もいるだろう。

先日、ある若い男性からゲイであることをカムアウトされた。彼は俺の本も図書館でじっくり読んでくれていて、一緒に食事をする事になったので、俺の著書2冊プレゼントしようかと思ったのだが、親にはまだカムアウトしていないから、家に置いておくのはまずいと言われてしまった。ストレートの人だったら、むしろ気にせず、もらってくれるだろうが、ゲイの人だと、そのことを意識しているため、ゲイの臭のするものは、遠ざけておかないと周りに気づかれるという心配があるみたいだ。

しかし、俺はゲイなのだろうか？ 俺は否定も肯定もできない。彼から、「パートナーはいるんですか」と訊かれ、「いや、俺は、ゲイというよりも女性恐怖なんだよ」と答えた。

この連載で繰り返し、書いてきた通り、俺は大きなトラウマを複数の女性たちに負わされているため、どうしても女性を許すことができない。ただの友達としてつきあうのはOKだし、むしろ、周りの女性たちは、俺を普通の男よりも話ししやすいとは思ってくれている。先日、「あの人、男か女かわからないし、気持ち悪い」と俺のことを評している女性がいて、憤慨して、訴えてやろうかと思ったが、俺が、しばしば、男のことをわか

っていない女性たちからそういうことを言われるのは、男の割には表出的だからである。普通の男は顔に感情を出さないし、愚痴だつてこぼさない。だけど、俺はありのままの自分を晒すことに躊躇しなくなっている。

しかし、そのことが女性的だと感じるのは、女性の思い違いである。2年前に入院した時のことだ。翌日に全身麻酔の手術をするので、俺は怖くて、色々な友達にメールして、愚痴をこぼした。すると、一人の友達から、「怖い時に怖いと言える國友さんは男らしいですよ」という返事が来た。普通の男たちは、怖くても怖くないふりをする。そして、それは決して男らしさではなく、虚勢なのである。男は、虚勢をはるやつなんて男らしくないことは、皆わかっている。しかし、女は男の身になって考えないから、そのことに気づいていないのだ。虚勢をはる男は強いんじゃない！ 悲しいんだよ！！ わかってくれ、女性たち！！

さて、ゲイって何なのだろう？ 俺は、前にある学会の他の会員の人たちにゲイの定義の部分で理解してもらえなかったことがある。他の人たちは、どうやらストレートとゲイとは違った世界とされていて、俺の説は、両者を混同していると感じているみたいなのである。しかし、それはちょっと違うのでは？ ストレートとゲイは違った世界では決していない。

この本で何度も書いたが、俺を不登校へと追い込んだ一人は、中学3年の時の暴君のような体育教師である。この先生は、男子生徒全員に、上半身裸で体育の授業を受けることを強いた。真冬の厳寒の時期にである。他の男子たちは素直に従っていた。しかし、俺は

どうしても従うことに抵抗があったので、自分はオカマなのだと思っていた。あの頃はゲイという言い方は定着していなかったし、オカマの人というと女性的な人というイメージだった。俺は裸身を強制されることに抵抗があった。男らしいことをするのに抵抗を感じるのは、俺は男じゃないからで、だから俺はオカマなのだと思っていた。

今思い返せば、他の男子たちも抵抗があったやつは多かったはずだ。しかし、番長のような、体育系の男の先生から威圧されれば、それに従うしかない。男は自分が男ではないと思われるのが一番怖いのである。

また、この教師のしていることは、今となつて考えれば、ゲイである。鍛錬の名の下に、男子全員を裸にしようとする。それは男子への陵辱である。この男性教師は性格的にもドマッコである。自分の欲望のために、他の連中を威圧し、支配し、屈辱を与え、トラウマを負わせることをなんとも思わない。しかし、彼のしていることは、きわめてゲイ的なのである。今となつては、裸を誇示する男性は、ゲイのステレオタイプだ。

3年ほど前に、ある男の人に話したことがある。「自分が男だということを疑ったことないですか」と。すると、その男性は、「男に恋したことがあったとしたら、疑っていただろうね」と答えた。男って、なぜ、こういう勘違いをするのだろうか？？？ この考えは明らかに間違いだ。ジェンダー（男らしさ・女らしさ）とセクシュアリティ（異性愛・同性愛・両性愛）は別物である。性格的に男らしい人が、異性愛とは限らないし、むしろ、男らしさを追い求める人は、女よりも男の方が魅力的だと思っているわけで、むしろ、男らしい

人＝ゲイ的と考えた方があたっているのだけど、多くの男たちは、男らしい人＝異性愛というとんでもない間違いをおかしてしまっているため、異性愛者であることを誇示しようとするのである。

2. 肉体関係をもつまではゲイ

しかし、この状況は徐々に変わっていくだろう。このところ、ハリウッドの男優たちも自分がゲイだということをカムアウトし始めた。『ホワイトカラー』というテレビ映画の主演で有名なマット・ボマーは、文句ないイケメンだけど、堂々とゲイであることを公言している。彼は、今年のゴールデン・グローブ賞で助演男優賞を獲得し、波に乗っている。今年のアカデミー賞の司会者ニール・パトリック・ハリスも、ゲイであることをカムアウトしている。

最近では、映画『ミルク』『127時間』などで人気絶頂のジェイムズ・フランコが、ゲイの噂に対して、面白いコメントを発表して、これは俺の考え方と似ているなあといっぺんにフランコのファンになった。海外ドラマナビ

<http://dramanavi.net/news/2015/03/post-3533.php>というサイトから、引用したいと思う。

米同性愛誌「FourTwoNine」3月号で表紙を飾ったジェームズが、ゲイのジェームズによるストレートのジェームズへのインタビューという形で取材に応じた。ストレートのジェームズがゲイのジェームズに向けて、“お前はゲイなのか？”と直球質問を投げかけると、「芸術におい

てはゲイだけど、普通の生活ではストレートだって思いたいね。普段の生活でも肉体関係を持つまではゲイだけど、まあストレートだと思ってくれたらいい。ゲイをどう定義するかによるね」と、かなり複雑な答えが返ってきた。

さらに、「誰とセックスするかって話になると、僕はストレートだ。1920年代や30年代には、ホモセクシャルはセックスの相手ではなく、どう振舞うかで定義されていた。水兵は男とやってたけど、男らしく振舞っていたからゲイだとは思われていなかったからね」と、ジェームズ独自のゲイ理論を展開。彼は同性愛を匂わすことで、人々が“ジェームズ”という人間を簡単に特定できない今の立場が気に入っているとも付け加えている。役者という様々な役柄を演じる仕事をしているだけに、ジェームズは自分の存在を明確に定義づけしたくないのかもしれない。

まさしく同感である。俺も、フランコと同じで、「肉体関係をもつまではゲイ」である。俺は、今まで一度も男の人と肉体関係をもったことはないし、今でもアナルセックスやフェラチオなどをしたとは思わない。しかし、精神的にはゲイだと思う。女というよりも男という方が楽しいし、男の人と風呂やプールで裸の付き合いをするのはすごく好きだ。

N先生とも昨年の秋、初めて一緒にお風呂に行った。教え子の男の子とも、彼の卒業を祝して一緒に船岡温泉に行った。ベストフレンドとは、もう14年のつきあいだが、彼とは互いに風呂好きということもあって、数え切れないくらいの回数風呂にいつている。その

ほか、親しい男性とは大概是風呂に入っていて、お互いに裸になると、友達になった気持ちになる。もちろん、男にもよる。嫌いな男の人と、風呂に入ったり食事したりしても楽しくはないが、仲のいい人だとたまたま楽しく。これはストレートの人が女性を相手にする場合でもそうだろう。一般に男はセックスの対象の射程範囲が、女性よりも広いことは確かだろうが、それでも、男にも好みというのはあって、どうしても嫌いな女性はいるのである。

俺は、男性の裸を見る時、大概是胸板を見ている。俺は裸の上半身には憧れる。しかし、一方で、ペニスはほとんど見ていないし、見たいとも思わない。俺はあくまでも、男として男と付き合うのが好きなのだ。友情の延長が好きなのだ。男同士の友情の映画は、男同士で上半身裸になる場面が必ずと言っていいほどあるが、俺はそれが好きなのである。ゲイのカップルのなかには、片方が男役、もう一方が女役というカップルもいて、女役の方が女装したりするケースもあるが、俺はあくまでも男同士で付き合いたい。

女性と付き合うよりも、男同士の方が気楽である。女性とつきあうと、男は責任をとらなくてはならないという気持ちになってくるし、子供なんかができたらなおさらである。しかも、女性は一般に、一人の男性と対になろうとするので、恋人ができてしまうと、ほかの女性との付き合いは制限しなくてはなくなる。しかし、男同士だったら、何人と付き合っても、そのことでとがめられることはない。子供が生まれる心配もない。経済的保証もしてあげなくていい。男と女がトラブルと、女に非がある場合でも、男の方が

悪いような目で見られる。男は被害者にはなれないのだ。あれこれ考えると、男同士の方がはるかにメリットは大きい。デメリットは、子供ができないだけのことだ。

女性の方が悩みを聞いてくれる、周りの世話をしてくれると思っている人もいるみたいだが、俺が親しくしている男たちはきちっと悩みを聞いてくれる男性たちである。俺は、30年以上も一人暮らししているから、周りの世話なんてして欲しいとは思わない。それに、一般的に言って女性は余計なことを話し過ぎるし、人の悪口を言い過ぎる。この人は好きだ、あの人は嫌いだ、あの人はカワイイ、この人はキモい、とあれやこれや感情レベルで男を物色する。女同士でやってくれるのであればかまわないが、そういう話を聞かされると、俺はその女性が嫌いになってしまう。俺は、女性から、散々、「キモい、嫌いだ」と言われ続けた男なので、いやな思い出が蘇ってくるのだ。悪いことをしているわけでもないのにキモいと言われるのは、男にとっては大変な屈辱である。好きや嫌いに理屈はない。彼女たちがキモいと感じるのは、俺の問題ではない、彼女たちの感じ方の問題なのである。

3. セックスだけがゲイじゃない！

この頃、ネットなどを見ていると、ストレートなのだけど、女性とセックスはしたくないという男性の悩みが語られていたりする。それに理解を示す女性も多いようだ。女だって、したくない人はいるから、そういう人を探せばいいじゃないのと。

ゲイを語る上での一つの問題は、セックスと同性愛を混同しているということなのでは

ないか。これは、そもそも、男性の同性愛を同性愛の基準としてとらえているがゆえに起きることでもある。例えば、昨年、『アデル、ブルーは熱い色』というレズビアン映画が話題になった。作品の評価も高く、何よりも画期的だったのは、女性同士のベッドシーンをたっぷりリアルに見せているところだった。男の同性愛の映画の場合は、必ず、セックスシーンや裸の場面が出てくる。しかし、女性同士のものはアカデミー賞にノミネートされた『キッズ・オールライト』にしても、必ずしもそういう描き方にはならない。男性はセックスがプライオリティだが、女性はコミュニケーション重視であることはまだまだ事実なのだろう。

現実レベルで考えても、レズの女性の場合は、自分の同性愛性に気づいていない女性が多いと聞いている。男は身体が先に反応するから、自分が同性愛だということにすぐに気づくが、女性は肉欲は後からついてくるので、精神的に満たされるのならば、身体の関係はなくてもかまわないというレズビアンは多いとのことである。したがって、女性の基準にしたがって同性愛を定義するのであれば、セックスのない男同士のつながりも、精神的につながっていれば、同性愛ということになる。先にあげた通り、この頃は異性愛でもセックスしたくない男性が増えているのだから、セックスするかしないかを基準にして、同性愛を考えるのはもう古いのである。

4. ゲイになるのも悪くないか

俺も、この際だから、完全にゲイになってしまおうかと思うこともある。

この頃、ゲイになってしまったほうが、むしろ特典も多いのではないかと思うのである。まず、「なぜ、結婚しないの」と聞かれなくなる。俺の場合は、女性恐怖症だからなのだが、女性恐怖というのは理解してもらえない。女の人でも、少女時代に男に陵辱されて、男全体に偏見を持っている女性は大勢いる。そういう女性に対しては、世間は同情的だ。しかし、逆の場合は同情してもらえない。おそらく、世間の人たちは、女性が男性にトラウマを負わされるのは深刻なことだけど、逆は大して深刻な問題ではないと思ってしまっている。

俺は、自分のトラウマをわかって欲しくて、男性運動にまで参加してきたのだが、フェミニストはあれだけ怒って、男を糾弾するのに、男性運動の場合は、フェミニストから反発されることを恐れて、なかなか女性を批判することができない。俺は、別にフェミニズム反対ではないし、男が悪くないとは言っていない。ただ、女も悪いところはある、男を傷つける場合はあるのだと言っているだけのことなのに、ちょっとでも女性を批判すると、フェミニストたちは激しく反発する。男の人は見えない権力を握っている、男社会ですよ、というのが彼女（彼の場合もある）たちのエクスキューズだ。現実には、権力握れる男なんて一握り、下層の男はたくさんいる。そのことは子供にでもわかりそうなものなのに、彼女たちは、「女に責任はない理論」をふりかざそうとする。被害者の権力を乱用しようとするのである。一昨年の援助学会の大会で、ある若い男性から、「女性を糾弾するにはどうしたらいいのですか？」と質問された。やはり、女性を批判したいけど批判できないもど

かしさを感じている男性は、今はたくさんいるのだと痛感したのだった。

いっそのこと、ゲイになってしまえば、女性に抗議しやすい。ゲイは女性よりも差別されているし、偏見の目で見られる。政治家や管理職でゲイとカムアウトしている人は、女性の政治家や管理職よりも少ないだろう。ゲイだったら、「俺たちは被害者だ、俺たちに責任はない理論」を女性に行使することができるはずなのである。

5. ゲイが社会を変える。

去年、カウンセリングを受けてあやうくその女性カウンセラーと喧嘩になりかかったことは、この連載にも何度か書いた。彼女との面談を思い出すと、今でも溜飲があがってくる。

例の裸を強制された経験を話した時に、彼女は、「上半身裸になるのが好きな男もいるじゃないですか」と返してきたわけだが、なぜ、カウンセラーが、こんな安直な返し方をするのだろうか。不登校の子に、「学校に行くのが好きな子もいるじゃないですか」と返せば、不登校の子は余計に傷つくだろう。それくらいのがなぜ、わからないのか。彼女は、男を相対的に考えたことがないのだろうか。若い女性のなかには、冬場にミニスカートや胸のあいたような格好をして闊歩している女性はたくさんいる。ほとんど水着同然である。彼女たちが好きで、ああいう格好をするのは彼女たちの自由であるが、もし、強制的にすべての女にそういう格好をしろと先生が命じたりしたら、それは大問題なのだ。しかし、男の場合は、それが問題とはされない。あな

た、男には性的羞恥心がないと思っているの？ 身体にコンプレックスをもっている男だっていっぱいいるし、女性の前で男が裸になるのが恥ずかしいと思うのは当然のことなのだ。

もちろん、男には裸になるのが楽しい時もあるが、それはモード次第である。大学の頃だ。自宅生の友人から、「下宿のやつはいいなあー。上半身裸で寝ることだってできるしなあ。自宅だと、自分の部屋であっても、母親や妹に入ってこられる可能性があるからなあー」と言われたことがある。彼は体育会系なので、見事ないい身体だ。その彼であってもそういうのだ。まして、女の腐ったと言われるようなタイプの男子が、脱ぐのが平気だと思っているのだろうか。

女性差別や女性批判にはフェミニストがついているが、男性にはオンブズマンがついていないため、男であるがゆえに不当な扱いを受けても、誰も理解してもらえない。

あの女性カウンセラー、今頃、どうしているだろうか。俺のことをいやなクライアントだったと思っているだろう。彼女は、30代半ばだ。この世代になってくるとフェミニズムのことも大して知らない。だから、女性が「もの」みたいに扱われていた時代のことも知らないため、ジェンダーを受け入れることが、ある種の人々にとっては、きわめて困難であることに気がついていない。

これから社会を変えていくのはゲイだ。幸い、同性カップルが日本でも認められ始めた。これからはゲイの人を支援していけば、ゲイではない男の人にとっても生きやすい社会へと変わっていくようにも思える。そう考えるのは、楽天的すぎるかなあー。

6.『ハッシュ！』

(橋口亮輔監督・2002)

そんなわけで、今回は必見の日本映画ということで、『ハッシュ！』を紹介しておきたいと思う。この年のキネマ旬報の第2位であり、日本でゲイを描いた映画のなかで、間違いなくもっとも評価された作品である。田辺誠一と高橋和也がゲイのカップルを演じていて、これはどちらかといえば、爽やか系ゲイの話である。

もっと濃厚なのが好きな人は、『おこげ』(中島丈博監督・1992)をどうぞ。インテリのマニアの人だったら、『薔薇の葬列』(松本俊夫監督・1969)が絶対的なオススメ。逆エディプスである。



1. 死

ラグビーの上田昭夫さんが死んだ。62 歳だったとのことで、まだまだ若い死だった。俺はこの人が好きだった。ラグビーだけど、甘いマスクで、ソフトな物腰で、俺が一番憧れるタイプだ。俺の理想は、ソフト・マッショなのだ。

今年は1つ違いの従兄がなくなり、母の従姉も80 過ぎでなくなった。俺が不登校だった時代に大げんかした神経科の先生もついに亡くなったとのことだった。おそらく80 代前半だろう。先日、ある機会に、大学院時代に同期だった人で、名古屋の大学に就職した女性が、もうとっくにこの世の人ではなくなっていることも知った。名古屋に移って、3 年後くらい後に病気で亡くなったのだそうだ。まだ30 代だったはずだ。

50 代となって、着々と死が身近になってくるのを感じる。母からは、がん保険にはいつおきなさいとうるさく言われているところだ。俺の年で保険に入るとなれば、相当高額のはずだが、「いまは、がんは誰でもなるし、治る病気になっているから」と母は言っている。

人間だったら、一度は必ず死ななきゃいけない。俺の人生にはいつそれがやってくるのか。どこで、どういう形で、俺はこの世と別れを告げるのだろうか。俺は、若い頃は長生きしたいと思っていた。平均寿命より早く死ぬ人は、不幸な人だと思っていた。しかし、今は人生長さだけじゃないことはわかっている。俺のおばあちゃんは90 くらいまで行きたが、15 年くらい狭い病院に入院して、死んで

いった。つらかったろうなあ。俺は何才まで生きるのか？ 妻子がいらないから、晩年は孤独だろうなあ。死の瞬間にどういう気持ちが出るのだろうか。

2. 時は流れて

2週間に一度、俺は烏丸の心療内科に通っている。その日、先生は、俺のほうにパソコンを向けた。「ほら、『全般性不安障害』と入力しようとしたら、『全般政府案障害』と出るんだよ。ちゃんと心療内科のソフトを入れているのに」と先生は笑っておっしゃった。

この先生のところに通い始めて、もう20年が経とうとしている。ここ以外はどこにも行かなかったわけではない。他の心療内科にも通った時期はあった。30代の頃までは、まだ心は嵐だったので、ありとあらゆるところに通った。40過ぎて、だいぶ精神状態が安定してきたからは、もっぱらこの先生のところばかりになった。

初めてお会いした頃40代くらいだったこの先生は、もう70近くになっているはずだが、今でも、おしゃれで、センスのいい先生だ。初対面の時は、鋭くて怖い人かと思った。その後も、あまり親密に患者と話をする先生ではなかった。心療内科だとある程度は距離をおいて患者と接しておかないと、相手のペースに巻き込まれたら、大変なことになる。そのことを計算してのことなのだろう。その先生が、俺に対して、自分のパソコンを向けるなんて、一歩親密さを許してくれたと思ったものだった。20年も通ってくれている患者だから、心を許しても大丈夫と思ってくれているのだろう。嬉しかった。

烏丸には、京都シネマという映画館がある。この映画館の壁にはホワイトボードがあって、そこにプレミアム会員の名前が列記されている。俺の名前ものせられている。俺は、この映画館の前身の朝日シネマだった頃からこの映画館の常連で、最初からの会員であるため、常時900円で映画を見ることができる。

思えば、河原町にはめっきり行かなくなった。俺が京都に出てきた頃は、京都のスポットといえば河原町しかなかった。しかし、今となっては、当時の映画館はすべて撤退し、梶井基次郎の『檸檬』に出てくる本屋さん丸善もなくなり、新京極のシネコンMOVIX京都でたまに映画を見る以外には河原町界限に行くことはほとんどなくなった。

昔は大宮にもいくつか映画館があったが、それもなくなり、今は映画を見るときは、圧倒的に二条のシネコンである。ちなみに俺はこの近所に住んでいる。ミニシアター系のものは京都シネマ、マニャック系は九条のみなみ会館、たまにMOVIX京都や八条口のTジョイ京都にでかける。京都は街が狭いので、いずれも自転車でいける。きわめて便利だ。

15年くらい前までは、大阪の映画館にも足繁く通っていた。あの当時は、東大阪の大学で教えていたせいで、梅田に行くことが多かった。仕事帰りだけでなく、土日に大阪の映画館まで出るのも苦にならなかった。あの当時は天満の男性グループに出入りしていたので、大阪の男女共同参画センターであるドーンセンターにもよく行ったものだった。あそこの図書館はジェンダー関連の本がたっぷりで、一時期は貪るように借りて読んでいた。しかし、男性グループとのトラブルが起きてから、天満はトラウマの地となり、その当時、

あれこれ考えることあって、東大阪の大学の仕事もやめてしまった。収入は月に10万円くらい減った。つらかった。

しかし、藁をもつかむ思いで、関西カウンセリングセンターに通い、そこで出会った男のカウンセラーの先生に、俺はついに例の上半身裸にさせられたトラウマを語った。家族以外の人にそのことを語ったのは、あの時が初めてだった。事件が起きて、15年近くも経過していた。あの先生とはもう12年以上会っていない。当時、60代後半くらいだったから、もうなくなっているかもしれない。あの時、仕事が暇でなかったら、あの先生との出会いもなかった。今思い返せば、何一つ無駄はなかったのだ。

考えてみると、俺は梅田には相当の回数来ている。30代前半の頃は大阪での仕事がメインだったし、俺は大学院の博士課程は西宮だ。梅田を経由して通っていた。当時は恐れ多くてほとんど話もできなかった指導教授の先生とは、3年前に出版社の人の好意で再会した。20年の月日を経て初めて対等に先生と話ができた。握手も交わした。当時は何のために西宮の大学の大学院なんかに通っているのかと、悶々としていたが、これも無駄じゃなかったのだと思った。

今は、京都での仕事がメインになり、大阪には週に1コマ寝屋川の大学に行くだけのことだ。寝屋川は、大阪とは言っても東大阪のような大阪カルチャーではないので、ほとんど京都と気分は変わらない。仕事以外の行動範囲は烏丸から大宮、西院、そして二条界限がメインである。京都の人はわかるだろうが、阪急沿線なのだ。3年前まではずっと阪急電車がメインの交通手段だった。

ところが3年前にほんの数軒先のマンションに引っ越した。すると阪急の駅よりもJRのほうが微妙に近くなり、阪急に乗る機会はめっきり減ってしまったのだった。俺は今の通りにもう26年も住んでいる。最初のマンションは4年半。ワンルームの学生マンションだった。次はその数軒南の2Kのマンション。ここでは18年ほども過ごした。そしてそこから最初のワンルームを通り越して、数軒北の新しいマンションへと移った。思えば、俺は同じ風景を四半世紀以上も見続けているのだ。

全然違ったところに引っ越そうかと思ったこともあった。6年ほど前になるだろうか。家賃の安い山科に移ろうかと思った。当時、俺は山科の自助グループにかかわっていた。しかし、移らなくて幸いだった。その山科のグループのおじさんとも大げんかとなり、山科は天満に続くトラウマの地となった。しかし、このことがきっかけで、N先生とは親しくなり、対人援助学会にも入れてもらった。これも無駄ではなかったのだろう。立命館とも復縁である。大学時代、陰口をいわれまくった俺にとっては、立命館もトラウマの地なので、もう復縁はないかと思っていたのだが、これが実れば立命館での4年間にも新たな意味づけができるかもしれないのだ。

「この頃、少し人生上向きになってきたんだから、長生きしなきゃ」と電話の向こう側から母の声。母は、俺にとっての最大のトラウマの地である九州にいる。母は帰って来いとは言わない。俺も帰るつもりはない。しかし、死んだら、故郷の墓に入るしかないという心配がよぎる。新たに墓を買うようなお金はない。それに、親や兄弟には感謝しているので、一緒に墓に入らないのは、家族不幸だ。だけ

ど、九州で眠るのは……。若い頃は、墓のことなんて考えなかった。姑と一緒に墓は嫌だと言っている人たちの気がしれなかった。しかし、50になると、墓のことも真剣に考えるようになっていくのだった。

俺は大学で非常勤講師を始めて、23年目である。最初の頃から控室で顔を見ていた先生たちも、少しずつ定年でやめていく。知り合った当初は40代だった先生たちが、もう60代後半なのだ。学生たちと話をして、もうご両親が俺よりも若い。考えてみると、俺が大学で教え始めた頃、彼らはまだ生まれていなかったのだった。時の流れ、切ないなあ。

俺の人生は、どこで終わりを告げるのか。これまでのトラウマの地とすべて和解して、わだかまりなく死んでいくのが理想なのだろう。しかし、痛恨の思いを抱えたまま死んでいくのも、それはそれで人生。神様に任せるしかないのだ。

俺は、様々なトラウマの地を経由しながら、今住んでいる界隈にだけは長年根強く踏みとどまっている。俺は長く嘔み続けて、味のなくなったチューインガムのように、毎日、同じ風景を眺め、同じことに囚われてきている。この囚われが、俺の人生の宿命なのだ。

3. 男性性の目覚め

この頃、スポーツクラブで、マッスル系のスタジオプログラムに入っている。バーベルや重りを用いて、音楽に合わせてながら、筋肉を動かしていくトレーニングだ。おかげで、一時期に比べるとムキムキになった。肩の筋肉が盛り上がってきて、腹筋も硬くなってきた。

プログラムに参加する人は、男女半々である。女性の方がやや多いかもしれない。俺はこのプログラムを受けながら、もし男ばかりだったらということを考える。例えば、高校や大学の体育系のクラブに入っていたら、男ばかりで筋トレということになっていただろう。普通の男子たちは、それをする中で男のアイデンティティを築いていくのだ。しかし、俺にはそれができなかった。運動神経が鈍いからということが大きな理由だが、男性ジェンダーへの反発も大きな理由だった。

先に挙げたカウンセラーの先生は、俺がすべてを語った時、「ジェンダーに囚われたとなったら、大変な苦勞でしたね」と言ってくれた。子供の頃から女の腐ったような子と言われ続けた俺は、自分が男だということに自信がなかった、男っぽいことをするのがことごとく恥ずかしかった。他の男の子たちに同一化できなかった。その俺が、冬場に上半身裸にさせられる。それも毎回体育の授業ごとになのだから、悪夢だった。この先生の教育は、どう考えても行き過ぎであった。

俺は、裸を強制されたことで、心が壊れた。俺は、自分は男ではないのではないかと思っていたので、大人になってからも、男になることに抵抗があって、自分の奥底から湧き上がってくる、自然な欲求を常に抑圧して生きてきたように思う。先生から、「男か女かわからなくなったのは、いつ頃からですか」と訊かれ、「小学校の高学年くらいです」と答えた。「だったら、大丈夫でしょう」と先生は言ってくれた。臨界期を超えた年だからということなのだろう。いつかは男としての意識を取り戻せるだろうという意味でおっしゃったことのようにだった。

俺は、少年時代に過酷な男性ジェンダーを強いられた。この点では俺は明らかに不運だった。俺は様々な男の人の話を聞いてきたが、俺くらいひどいジェンダーを強いられた経験のある人はそうはいない。俺の知り合いのある先生は、俺より5才年下で、山梨出身だが、「男は男らしくとは言われなかった」とおっしゃっていた。3年ほど前に教え子の男の子が、たまたま九州の出身で、俺と同じ小学校だとわかった時、「俺は、九州は嫌いなんだ。男は男らしくと言われるからね」と話した。すると、「あー、それはありますよね」と彼はうなずいてくれた。彼は、俺と同じ小学校を出た後、中学は俺と違ったところに通っている。「先生の通っていた中学は、柄が悪いから」と彼。確かに、例の裸教育を強いた教師は、俺の中学だからこそ、あそこまでの男根教育にでることができたのである。勉強はできないけれど、肉食系の荒っぽいタイプの子が多かったので、裸を強いたりするのはしやすかったのだろう。適度のジェンダーだったら、俺だって受け入れられた。しかし、あの先生のジェンダー教育は極端だった。しかも、周りに同一化できる男子がいない。恥ずかしさを共有したいと思う連中がいない。どうしても受け入れられないことを無理矢理に受け入れさせられた時、トラウマは生まれる。俺はあの時、心が破壊されたのである。

もう35年くらい前だが、五木寛之原作の『四季・奈津子』（東陽一監督・1980年）という映画があった。この映画のヒロインは、自分を変えるために、ヌードを撮ろうとする。烏丸せつ子と阿木耀子のヌードが話題になった。女性がメインの映画だが、原作も監督も男だから、どうも女性には反発が残ったらし

い。ある女性が、「この映画が描いているのは嘘の女だ。女は裸になることなんてたいしたことだとは思っていない。男が思っているだけ」と映画雑誌に書いていたことを覚えている。これは俺の知り合いの映画の仕事をしている女性もしばしばおっしゃることだ。男にとっては70年代になって、女のヌードの時代になったことは画期的だったのだろうけど、「女は、人生を変えるほど特別なこととは思っていない」と彼女は言う。確かに彼女たちの言うことはあたっていて、その後になってくると、宮沢りえのヌード写真集など、自分を表現するために主体的にヌードになる人は増えていって、今では海外旅行でヌードツアーなどもあると聞いている。俺の知り合いの女性も、「若い時に撮っておけばよかったわ」ともらしていた。

ところが、男の場合だと、これとは逆の状況が起きる。男には羞恥心がないと思われているため、いやでも裸を強制される。俺は裸を強制されたことで、人生が大きく変わったわけだが、そのことを理解してくれる人がいるだろうか。この連載に何度も書いてきたとおり、男に羞恥心がないと思うのは間違いである。ある時、スポーツクラブであるおじさんからこう言われたことがある。「ムキムキになって、一度タンクトップを着てみたいんですよ」と俺がいうと、「タンクトップだと乳が透けてみえるじゃないの。恥ずかしいよ」とおじさん。男の人でこういう人は多いのである。アメリカでも、シャツレスフォヴィア（上半身裸になることの恐怖症）という人は一部に存在するようだ。男の人の場合、プールや海の場合は、裸になるのが規範だから仕方がないという思いがある。「しかし、他の場所で

裸になるのは、いくらなんでも恥ずかしい」というのが本音のはず。男の本質と男らしさは別物。好きで裸になると強制されるのでは別物なのである。マッチョな人でも恥ずかしいと思うことを無理やり強制されて、心を壊された俺は、自分の男の部分を拒否するようになっていった。俺にとっては、プールで海水パンツになって泳ぐくらいが、女性と違ったことをする部分だった。だから、俺は自分が男なのか女なのかもわからなかった。

ジェンダーを受け入れられなかった俺は、確かに不幸だった。上田昭夫さんのような体育系の男の人が、爽やかで、好ましく感じられるのは、なぜ、だろうか。おそらく、体育系の男性たちはジェンダーを受け入れている。しかも、上田さんなんかだと、品の良さ、ソフトさや優しさも備えている。その上、男たちと一団になってプレーしているため、同性愛的欲望も消化している。そのことで、男性ホルモンがうまく具合にコントロールされて、好感につながっていくのだ。自分が男だということを受け入れている男は、女も受け入れることができる。女性に対しても、ある程度はわがまを言うけれど、女性のわがまも許す度量も備えている。一方で、俺は、人生の早い時期にジェンダーに囚われているため、男同士で楽しくやれない、男のエゴを女性に押し付けることもしない代わりに、女性のわがまも許せない。そういう男になってしまったのだった。

その俺がcaろうじて、男としての意識を取り戻したのは、専門学校で教えていた頃だ。40代の頃は9年間、専門学校でも教えた。専門学校は、大学とは勝手が違っていて、手を焼くことも多かったが、俺を男にしてくれた

のは、専門学校の男子たちだった。前にも書いたが、俺は男の子たちから身体を触られて、そのことで自分の忘れていた男の部分が目覚めたのだ。本当に思わぬきっかけで、些細なことで、男としての意識が生まれるんだなあと思ったものだった。結局、俺が必要としていたものは、同性愛にも似た、男同士のスキンシップだったのだ。他の男性とふざけて、じゃれあうことで、俺の男としての意識は目覚めたのだった。普通の人なら、10代の頃に通り過ぎるプロセスを、早い時期にジェンダーで躰いた俺は、経験することもなく40を過ぎていたのである。

男としての意識を取り戻した俺は、その後、次々といろいろな男の人と親しくなっていっていった。俺くらい一緒に風呂にいつてくれたり、愚痴を聞いてくれたりする男性がたくさんいる男は珍しいのではないかな。普通の男は、そこまで親密にはなれないという人が多いのである。

今年の春、かつての教え子で、スポーツクラブでお世話になっていた学生が、卒業だということで、一緒に先斗町でお寿司を食べ、それから、船岡温泉に行った。息子と風呂に入った気分で楽しかった。二人で並んで、鏡に身体を映して、「やっぱり俺の方が見劣りするなあ」というと、「そりゃ、先生はお父さんくらいの年なんだから、仕方がないですよ。ぼくの人生はスポーツの人生なんだから」と言ってくれた。また、今年の誕生日は、ある同僚の男の先生が企画してくれて、かつての教え子の男の子3人と一緒にサプライズパーティをしてくれた。

楽しい男同士の交流は続く。若い頃から男同士で風呂に入ったり、男同士の付き合いみ

たいなものに焦がれていた。しかし、学歴マイノリティで人付き合いもできなかった俺は、もがいても友達とはできなかった。しかし、40になって、もう友達をつくるのは無理だと諦めかけていた頃に、俺の人生は変わっていった。本当に人生は数奇だなあ。俺の女性恐怖症も治る日はくるのだろうか。それは、神様におまかせである。

4. 『ペコロスの母に会いに行く』(森崎東監督・2013)

そんなわけで、今では自分の性自認ははっきりしている。俺は男だ。しかし、それが目覚めたのは、40過ぎてからだ。あまりにも遅い。母は、「あなたは遅咲きだったんだから、普通の人よりも、20年くらい長く生きなきゃ」といつてくれる。しかし、俺が長く生きたら、悲惨だろうなあ。女性恐怖症で、女と暮らせない俺だから、きっと孤独死だろうなあ。それとも新たな展開が俺の人生に待っているのだろうか。すべて、神様におかませするしかない。一日一生。日々に感謝して、あとは運命に任せようと思う。

この原稿を書いている最中にかつての専門学校の子から、Facebookの友達リクエストが届いた。シンクロである。俺は今、いい人間関係に恵まれている。俺って、結構、幸せなのかも。

というわけで、今回のオススメ映画は、『ペコロスの母に会いに行く』である。この年のキネマ旬報の日本映画1位である。ちなみに外国映画の1位は『愛アムール』で、どちらも老人問題を描いた映画が1位になるとは、今の時代を反映している。今年のアカデミー

賞主演女優賞も『アリスのままで』のジュリアン・ムーアが若年性アルツハイマーの大学教授役で受賞。この頃はこういうテーマのものが多いい。こういう映画は見ていてつらくなることもあるのだが、『ペコロス』は微笑ましく赤木春恵扮するお母さんが描かれていて、彼女の苦労だらけの若き日々を原田貴和子が好演。女の一生ものとして見て感動的である。

男は痛い！　されど、女は強し！です。



男は 痛い !

國友万裕

第17回

龍三と七人の
子分たち

1. ラーメンをもらった！

1ヶ月ほど前、仕事で一緒にいる女の先生から彼女の故郷のラーメンをいただいた。3人前のやつを二箱である。とても嬉しく、感謝したのだが、さて、どうしよう???

今のマンションに移ってから、3年半が過ぎようとしているが、キッチンを使ったのは一度だけ。2年ほど前に母が遊びに来て、手料理を作ってくれた時だけだ。その時も大変だった。俺の部屋には炊飯器がない、電子レンジがない、フライパンもない、急須もない、あるのは電気ポットと、前にこの部屋に住んでいた人が残していった小さな鍋だけなのである。仕方がないから、近所のスーパーで、ご飯を買い、誰が使っていたのかわからない、その小さな鍋で、母がちょっとしたものをつくってくれた。

俺は大学で教えているので、テキストを採用すると時々出版社からお礼に食べ物が送られてくる。毎年うどんを送ってくれる出版社があるのだが、毎年他の先生にあげている。お茶をくれる出版社もあるが、これも他の先生にあげている。俺は絶対に自分では料理はしない、お茶もたてないと決めている。

もともと俺は器用に頭を切り替えられない性格である。学生の頃は想像を絶するほど部屋を汚くしていた。あの頃の俺の心はまさに嵐だったので、俺の部屋は俺の心のメタファーだった。20代の後半の頃、少しましになって、男も料理ぐらいはできなくてはと思って、毎日料理をしていたが、そのおかげでキッチンが汚くなって、出るときには敷金を返してもらえどころか10万円くらい余計にとら

れた。今だったら考えられない話だが、あの頃は住居者の方に修復義務があったのだ。しかも、自炊していた頃は、栄養が偏るので、無残なくらいに太ってもいた。

そのあと、30を過ぎてからは仕事が忙しくなり、無理に料理する必要もないのだから、特別な時以外は料理はしないと割り切った。しかし、今回のラーメンはどうしても食べたかった。せっかくだからいただいたのに他の人にあげるなんて、失礼だ。また地方のラーメンはそれぞれ味わいがあるので、どういう味がするののかも知りたかった。

誰かのところに持って行って食べよう！まず、日頃お世話になっている、男の先生に頼んでみた。彼は俺と違って生活能力がある。安くしてうまいものをつくるのは得意だ。すると彼の方はあまり気が進まないようだった。「カニとかよっぽどつくるのが大変なものなら、話は別だけど、ラーメンなんて、自分でつくりゃいいじゃないですか」と言われてしまった。「でも、普段火を使っていないと、火を使うのも怖いんだよね。火が出たらと思うちゃうから」と俺。「でも、國友さんのところって、電気コンロでしょ？ 余計に心配ないじゃないですか？」

確かに彼の言う通りだ。ラーメンも作ろうとしない俺の方が悪い。そう思って、自分でつくるしかないかと観念していたとき、行きつけのレストランの女性にそのことをふと話したら、「それだったら私が作ってあげるわよ」と引き受けてくれた。

彼女は前に、京都風の雑煮も特別に作ってくれたことがあった。彼女のレストランは小さな、家庭的なレストランなので、そういう脱線も許されるのだ。そういうわけで、近々、

彼女のところでラーメンをつくってもらって、食べる予定である。

思えば、彼女のレストランに通い始めて、もう3年が過ぎている。彼女のところに最初に行った時のことはもう覚えてもいない。学会で知り合った先生が、この女性の義弟にあたる。それで「行ってあげてください」とチラシを渡されて、それからだ。ところが行ってみると、彼女は、俺の行きつけの近所のカフェの人とも知り合いであることがわかり、対人援助学会のメンバーの人や映画祭のメンバーの人、大学の非常勤講師仲間だった人とも親しいことがわかっていった。「京都は狭いのよ。だからすぐに知り合いになるのよね」と彼女。

そんなわけで、俺はすっかり彼女の店の常連で、本当に美味しい料理を毎週ごちそうになっている。自然食系の家庭料理である。

2. そうじしなくては！

俺は部屋のそうじもほとんどしない。洗濯は毎日しているが、アイロンかけはしない。そういえば、アイロンはもっているけど一回も使ったことはない。この頃はノーアイロンのワイシャツがでているので、ハンガーにかけておけば、それほど問題はない。

1週間に1回、マッサージの人に部屋まで来てもらって、体のメンテナンスをやっているのだが、彼は綺麗好きで、こっちが頼まなくても、さっさと部屋のそうじをしてくれる。ちなみに今俺のところにある掃除機は彼のお古なのである。

「國友さん、もうおっさんなんだから、掃除機くらいはかけないと寿命が縮みますよ」

と彼からは言われる。彼は普段が綺麗に生活しているからなのだろうが、敏感である。彼は、俺の部屋にくると必ず、最初に窓をあけて、空気を入れ替える。俺は窓を開けることすら面倒臭くて、そうそうしょっちゅうはあけていないのだ。

彼は、去年までは、もっとたくさん部屋の掃除をしてくれていた。しかし、この頃、彼の仕事が忙しくなってきたので、そうそう彼に甘えるわけにもいかない。自分でするしかないのだが、なかなか進まない。俺の部屋がゴミっぽくなるのは、仕事柄紙が多いからだ。昔の答案とかを溜め込んでいて、どこから捨てていいのかわからなくなってしまっている。この頃は個人情報にうるさい時代なので、名前などが入っている書類は捨てるのに苦労する。自分宛にきた郵便でも、露骨に捨てるのはまずいかと思って、なかなか捨てられないため、部屋が紙だらけになっていくのである。「そこまで考えなくても、そのまま捨てても誰も見ないんだから」という人も多いのだが、強迫的な性格の俺にはそれができないのだ。とりあえず、シュレッダーを買った。小さなシュレッダーなのでテストの答案まで処理するのは無理だが、自分に来た郵便くらいは、これで処理できるだろう。

ちなみに俺のマンションは、掃除会社が毎日ゴミをとりに行くので、ゴミの分別はしなくていいことになっている。しかし、それでも俺は心配になる。俺はやはり強迫症だ。普通のところだったら、燃えないもの・燃えるものと分別して、決まった日に捨てるのに、何もかも一緒に捨てるということに罪悪感を抱いて、それができないのだ。せめて、カンとペットボトルだけは、一般ゴミとはわけて

おこうと分別して捨てる。しかし、ペットボトルはラベルなどをすべてはいで捨てなければ気が済まない。他の人たちはそこまでしていない。そこまでしようとするから疲れるのだけど、俺はいったん決めたルールが破れないのだ。ルールを破ってしまうと絶望的なことが起きるという強迫観念にとらわれている。俺の生活にはルールがあり過ぎて、それが俺の行動を鈍らせている。独り身で自由のはずなのに、心は強迫症に縛られているので、自由を感じる間がないのである。

一週間に一度、マッサージの彼がきてくれるのは、俺にとっては心のやすらぎの時間だ。彼と俺は、一緒に飯や風呂、海水浴やスポッチャも行った仲だから気心が知れている。体をマッサージしてもらいながら、心もほぐれていく。彼は元々俺の通っているスポーツクラブで働いていた人で、8年くらい前から知っている。親密になってからはもう4年近くになろうとしている。もはや、家族のようなものだ。

3. 愚痴を聞いてくれる友人

俺は強迫症で心配性だ。当然、誰かに愚痴をこぼしたくなる。グチグチ言うだけで、俺の心は少しマシになるのだけど、愚痴を聞かされる周りの人は、当然のことながら、面倒臭がる。しかし、一人だけ、嫌がりもせず、愚痴を毎日聞いてくれる人がいる。6歳年下の男性だ。彼と知り合ったのは、14年ほど前、俺が37歳の時のことだった。

なんども書いてきたとおり、俺はずっと若い頃から男の友達の一人もいなくて孤独だった。他の男子と同化できないことで不登校に

なり、学歴マイノリティになったことで、さらに友達はつくれなくなり、30 になって、カウンセラーにそのことを相談しても、解決策は見つからない。ある女性カウンセラーからは、「そんなみんな親友なんているのかしら？みな、その場その場でつきあっているんですよ」と言われた。

もう友達をつくることなんか諦めていた頃に、神様がくれた友達。それが彼だった。俺の唯一の LINE 友達でもある。彼と俺は、まさに赤い糸で結ばれた友達だった。彼は実家は関西だが、普段関西で暮らしているわけでもないのに、知り合った当初からメールのやりとりで、徐々に友情を育んでいった。俺は、それまで友達もいなかった身なので、友情に多くを期待することはしないでおうと思っていた。心からの友達なんてそうそうできるものではないし、人は皆、やってきては去っていく。さよならだけが人生なのだ。

しかし、彼とはそうはならなかった。この 14 年間、お互いに風呂好きで、美味しいもの好きなので、大阪のスパワールドで落ち合って、たっぷり風呂のなかで話をし、一緒に食事をする。酒を飲んだりはしない。むしろ、しゃれたレストランと甘いデザートだ。彼は俺の愚痴をたっぷり聞いてくれる。他にも映画の話、コンピューターの話、仕事の話など、とりとめもなく楽しい会話が続く。女性の話になることはない。俺と彼はゲイ関係ではないが、これだけしょっちゅう風呂にいて、一緒にスイーツを食べて、しかも、酒や女の話なしとなったら、端から見たらゲイだろう。しかし、本当にゲイ関係ではないのである。

彼とつきあっていると、同性同士の友情結

婚というのがあってもいいのかと思えてくる。この頃、男同士の結婚も認める国が増えてきて、日本も近いうちに認められるのではないかと思うのだが、別にセックスだけが結婚じゃない。むしろ、一旦結婚してしまうと性欲を感じなくなって、セックスレスになっていくカップルの方が多いとも言われる。中村うさぎのようにゲイの男と結婚している女性だっている。

彼と俺は、14 年も友情をつないできた。本当に赤い糸の関係だ。ゲイ関係ではなくても、生涯の伴侶とするにふさわしい相棒なのではないか。

4. 俺は足長おじさん

俺の従妹はシングルマザーである。男の子が一人いる。まだ幼児だった頃は本当にかわいくて、彼と一緒に遊ぶと心が癒されていたものだ。息子ができたみたいで嬉しかった。しかし、その彼も、早くも小学校の高学年となって、だいぶ大人びてきたせいで、この頃は恥ずかしがって、あまり相手になってくれなくなった。

しかし、たまには親父の気分を味合おうと去年の夏の彼の誕生日にはゲームソフトをいくつか買ってあげた。しかし、今年の夏は残念ながら会う機会がないので、彼が欲しがっているゲームの機械を Amazon で注文して、彼宛に贈った。2 万円くらいかかった。ちょっとした散財である。

でも、いいか。お父さんのいない子だし、たまには足長おじさんみたいな気分で、プレゼントを送るのも悪くない。父のない子と子のないおじさんとである。彼は俺のプレゼン

トに本当に喜んで、夢中でゲームばかりしていると電話で聞いた。あー、よかった。ゆくゆくは彼が京都に遊びにきてくれればいいけどなあと思っている。まだ小学生だから無理だろうけど、高校生くらいになれば可能かもしれない。夏休みに1週間くらいきてくれれば、京都案内もできるだろう。

実際に自分の子供をつくることは俺にはできない。俺は、少年時代に辛酸を舐めるような思いをしているので、自分の血を残したくない。あんな辛い思いをするのは俺一人で十分なのだ。

5. Facebook

先日、N先生と打ち合わせのために温泉に行った時のことだ。ある若い男性が、立って俺の方を見ている。4年ほど前に専門学校で教えていた子だった。「あー、元気だった？」とまず男同士の固い握手。「だいぶ、ムキムキになってきただろう？ スポーツクラブで筋トレしているんだよ」と俺が自分の体を誇示すると、彼は俺の腹や胸や腕をさわりながら、「まだまだですよ（笑）」。彼はスポーツマンなので、なかなか手厳しい。「また今度、飯でも行こうよ」「ええ、ぜひ」「後で、Facebookにリクエスト送るから。先日、Aさんから友達リクエストがきて、それがきっかけで、Sくんには久々にあったんだ」と会話した。

その後、風呂から上がって早速リクエストを送るとすぐに承認が来た。「機会があれば、また一緒に風呂に行こうね」とメッセージでやりとりした。

専門学校で教えていた頃は、つらいことも多かった。専門学校は大学と違って、学生の

注文が多いので、クレームが来て凹むことも度々だった。その一方で、専門学校の子は卒業した後も、俺と交流しようとしてくれる。大学の教え子でも数人、Facebookで繋がっている子はいるが、専門学校の方がはるかに割合が高いのである。

これだけ何人もいると、時々、遊んでもらうことがある。かつての教え子に遊んでもらう先生なんて、なんとなく情けない気もするが、しかし、若い頃友人のいなかった俺にはそれが楽しくてたまらないのだ。

6. しかし、女性恐怖は治らない

俺の生活は優しさに満ちている。独身生活になんの不自由もしていない。

繕い物があるときはクリーニング屋さんに頼めばやってくれる。留守中に荷物が届く場合は、近くのコンビニで受け取れる。コンビニには毎日なんども行っているの、すっかりお得意さんで、俺には笑顔で接してくれる。行きつけのレストランはたくさんあって、俺が、漬物嫌いで、スイーツが好きだということは、もう周知のこととなった。

強迫症も耐えられないほどではない。人間は自分の生活と付き合うしかない。50代にもなれば付き合い方もわかってくる。

少しずつ、自分の場はできてきたように思うのだが、女性と恋愛関係になることだけはできない。友人ならOKだが、深い付き合いはしたくない。俺のジェンダーの病は、本当に深刻なものだ。しかし、それもだいぶ割り切れるようになってきた。結婚しても、恋愛しても不幸な人は大勢いる。俺のように女性と付き合うことがなくても、他のやさしさに

包まれているやつのほうがはるかに自由で幸せだ。

俺は対人援助学会で、少年の頃に異性から凌辱されると、それが一生消えないトラウマになり得ること、そして、女の子が男に凌辱されるのは重大な問題としてケアして貰えるけれど、逆の場合は、軽いことのように片付けられてしまうのだということ、それを訴えたかった。

俺は、男性ジェンダーを女性に要求してこれられることに激しい反発を感じる性格になってしまったため、もはや女性とは軽い関係しか結べなくなってしまったのだ。男性ジェンダーを求めずに男と付き合う女なんて、世の中に存在するのだろうか。フェミニストであっても、男に守ってもらいたい願望を持っている人のほうが多いのではないか。

俺は女性の前だと男になれない。自分のことを「俺」とは言えない。男っぽいことができない。男の子の前で男っぽいことをするのは平気になってきたが、女性だと様々なトラウマが一気に想起されて、それがブレーキになってしまう。

俺は女に男という目で見られるのが嫌なのだ。それは、俺が少年の頃に、男であるがゆえに様々なつらいことを強制され、さらに、その強制してきた相手が女性であるケースが多かったこと、そして、男が男のジェンダーを強制されて苦しんでいるのを、まだまだ気づかずに、女性のほうが一方的にジェンダーで苦しんでいると思い込んでいる人が多いことが原因である。

女性に凌辱されたトラウマを引きずっている男なんて、マイノリティなのだろう。毎年発表し続けたおかげで、対人援助学会で徐々

に賛同してくれる人はでてきた。しかし、まだまだ分からない人の方が多い現実を目の当たりにすると、自分の孤独を思い知ることがたびたびである。

理解してもらえないままに、俺はもうすぐ52歳。人生の秋になってしまった。女性から受けた凌辱をどう消化するのか。これは俺の人生の一生の宿題な

のだろう。1日1日、自分の宿題と闘いながらも、楽しい感動を沢山積み重ねて、これからの人生を送ることができたらと思う。

6.『龍三と七人の子分たち』（北野武監督・2015）

今回のオススメ映画はこれである。何よりも藤竜也の主演というのが嬉しい。藤竜也は若い頃は見事なマッちょで、日本の役者のなかでも、その体躯のよさはナンバーワンだった。しかし、その彼も74歳となって、この映画でも少しだけ裸の場面があるのだが、さすがにもう昔ほどのムキムキではない。だんだんと枯れてきている。

俺も、50代になって、少しずつ枯れていなくてはいらない。そんなことを考えさせてくれた。近藤正臣など、元マッちょのおじいちゃん俳優大挙出演の映画である。

マッちょの老後?????（笑）。この年になって、マッちょだと痛々しいけど、それも男のこだわりで素敵だと俺は思っている。俺も、できる限りマッちょボディを保って、70になっても、若い男の子と海水浴に行ける男でいたい、男でイタイ、男で痛い！



1. 前例のない人生

俺が登校拒否になったばかりの頃だ。母と一緒に市民講座に行った。心の問題についての小さな講座だった。その時の講師だった先生は、30 くらいの男性だった。京都から来ているとのことだった。おそらく、あの当時、あの年齢だったということは、学生運動がたけなわだった時期に大学生生活を送ったのだろう。髪はやや長めで、細身の人だった。

その時の講座の内容は、「心を変えることで、思わぬ力がわくのだ」というような内容だったと思う。メンタルパワーである。自分で自分の心に暗示をかけて、俺はパワーがあるんだと思こませるという話。今で言えば、ポジティブ・シンキングということだろうか。当時は、悩んでいても、まだ神経科の敷居は高かった。カウンセリングもほとんどなかった。藁をも掴む思いだった俺と母は、講座が終わった後、その先生に個人的なカウンセリングをしてもらえないかと頼んだ。そして、その翌日、その先生と3人で面談することになった。

当時、俺が学校に行けなかった、直接的な困難の一つは、スポーツが人並みはずれてできないことだった。

「身体が大きいので、体力があるんだと思われて、なぜ、これくらいのことができないのか」と怒られるんです。

「身体が大きい・小さいなんて、運動神経と関係ないよ。私もスポーツはできなかった。でも、私は逃げなかったよ。恥ずかしい思いをしたけど、がんばった」

その先生は繊細で、優しい人だったのだが、

ここがこの先生の限界だった。「私も頑張ったんだから、君も頑張んなきゃ」こういう返し方をしたら、子供は余計に追い詰められることになる。今の社会の価値観で考えるならば、威圧的な暴言で、できない子の自尊心を傷つける先生に問題がある。暴力的なパワーハラスメントである。ところが、当時はまだ不登校という言葉もなく、子供の人権という言葉もなく、議論が煮詰まっていなかったため、先生のいうことには絶対我慢して従わなくてはならないという社会通念のほうに重みがあり、傷付いた子供の目から教育を見ようとする視点がなかったのだった。

それから2年後、俺は大検を目指して勉強していた。母は宗教に頼るようになり、当時、母が熱心に通っていた宗教団体に話を聞いてもらいに行ったことがある。その時、母の通っていた教区が一番上の女性が、こういった。「もう一度、高校を受験して、高校に行かれることをお勧めします。ちゃんとプロセスを踏んでいかないとうまくいきません」

そのおばさんは、その時俺と初対面。俺がどういう性格なのかもわからない、どういう経緯で学校に行かれなくなったのかもわからない、俺の心理状態もわからない、ただ、当時は大検なんて全然知られていなくて、高校は行くのが当たり前という考えがあったため、高校はいくべきものと決めつけてかかっていた。その当時、俺は17歳。それから高校を受けなおしたとしたら、18で高校一年生ということになる。確かに大人になれば、3年くらいの年の差があっても対等につきあえる。しかし、高校生くらいの子にとって、3年というのは大きなギャップである。学校で浮いた存在になることは目に見えている。彼女は、そう

いう事情も推し量ろうともせず、ただ社会の大勢に合うか合わないかのみで、良し悪しを判断しているのである。

俺は先駆的な不登校だった。先駆者というのはつらい。前例がないことは大それたことと人は思うのだ。世の中変わっていくのだ。歴史に残る偉大な人たちは、いつだって、世間の常識にはないことを成し遂げたからこそ、偉大とみなされるのに、なぜ、前例のないことを人は偏見の目で見るとだろうか？？？？

俺は、今でも履歴書を書くのがつらい。俺はサンプル通りの履歴を歩んでいない。俺は規格外なのだ。俺の人生は孤独な人生だった。痛恨の思いを抱えたまま俺は、いつしか50代になった。

2. 自己肯定感の欠如

今から、もう15年ほど前のことだ。37歳の頃、俺は、公立の心の健康増進センターで、法律相談を受けたことがある。俺はその当時、激しい強迫症に悩んでいた。すでに心療内科にも何軒も通い、カウンセラーにも何人もついていたが、不安症は治らず、万一、心配が現実になったとしたら、どれくらいのことだったら法律的に許されるのかを知りたかった。藁をもつかむような思いだった。おそらく、俺のような理由で相談に来る人はいないのだろう。男の弁護士さんが相談に乗ってくれたのだが、「漠然とした問題ですねー」と言われた。

「ちょっとしたミスでクビになるんじゃないかという心配があるんです。どれくらいのミスだったら、法律的に許されるんでしょう

か」

「人間ですからね。例えば答案を一枚なくしたとか、それくらいのことは大丈夫だと思いますよ。学生を殴ったりでもしない限りは、大丈夫だと思うんですが……」

「出席簿が盗まれるんじゃないかと思って、机の鍵のしまる引き出しにしまっているんです。それでも心配なんです」

「出席簿なんて、普通は盗まれないものなんですよ。」

確かにそうだろう。学生の答案やら、出席簿は個人情報なので、俺はどうしても管理に神経質になる。とはいっても、普通の人にはそんなものなんの価値もない。盗まれるのは金目のものなのである。

「まあ、そういう不安症があることを専任の先生に話しておくことですね。」

「でも、そんな不安、わかってくれるでしょうか？」

「大学の先生なんかだったら、わかってくれますよ」

その弁護士さんは大らかで、楽天的な人みたいだった。

あれから 15 年が過ぎた。その間に、強迫症はだいぶマシにはなった。しかし、まだ完治してはいない。俺たちみたいな非常勤講師は、いくつかの大学で仕事をもらって生活をしていく。こういう生活を始めて、もう 23 年が過ぎた。非常勤であることに不満はない。非常勤でいいんだと割り切って生活してきた。専任に比べて収入が少ないのは仕方がない。しかし、何よりも怖いのは、非常勤は一年契約の更新なので、常にきちっと仕事をしなくてはならない。ミスやトラブルが起こすわけにいかない。その心配と闘いながら、俺は 20

年以上もの月日を生きてきたため、俺は常に絶望的な状況を想定し、予防線に予防線を張って仕事をする習慣がついてしまっているのだ。

俺はよくいえば、真面目だ。しかし、真面目すぎて、自分を追い詰めてしまう。これはネットで調べたところ、自己肯定感の欠如のせいだと書かれていた。確かにそうだ。俺には自己肯定感がない。全然、自分に自信が持てない。だから、常に人の顔色を伺い、些細なことでも怒られるのではないかとおどおどしながら生活している。それは俺が少年の頃に大きく人生に躓き、誰からも理解してもらえない日々が長かったせいだ。

小学校の高学年からジェンダーの問題に囚われ始めた俺は、その後急下降の人生を歩むことになる。俺の人生を折れ線グラフに例えれば V 字型である。そして、左よりも右のほうが長い変形 V 字型だ。V の尖った部分、すなわち俺の人生のどん底は 15 歳の時にくる。この時、俺は心が壊れたのだった。それから少しずつ這い上がってはきたのだけれど、その上がるスピードは遅すぎて、ほとんど平に近い斜めの上昇カーブにすぎないのである。だから俺は、普通の人が普通にしていって、年相応のことをまったくできずに生きてきた。そのことが俺の自尊感情の低さにつながっている。

38 歳の頃だ。ある不登校の NPO に少しだけ参加した。すると、そこの女性からは、「國友さんの表情を見て思うことは、だいぶ立ち直ってはいらっしゃるけど、まだ完全には吹っ切れてはいないというところでいらっしゃるのではないかしら」と言われた。その通りだった。38 になっても、俺の人生はまだ不登

校が重く影を落としていたのである。これだけ長く苦しんできた俺は、様々な葛藤を抱えながら、苦しみ抜いて生きていた。

しかし、普通の人はそれをわかってくれない。俺は天涯孤独なのだ。

3. 異性はわかってくれない。

孤独であることはおおっぴらに言わないように気をつけている。俺が孤独だということをもらすと、人によっては、俺が結婚していないからだ、女性がいらないからだという解釈をしてしまう。カップル幻想、結婚はすべきものという幻想に依存している人はまだまだ多い。

そうじゃないのだ。俺が結婚しない、女性とつきあわないのは、どっちみち理解してくれないことがわかっているからである。

*Not Gay*という電子本を読んだ。アメリカのレズビアン女性の学者が書いた本なのだが、彼女は元々がレズだったわけではなく、若い頃は男性とたくさん付き合っていたのが、どうしても男性に違和感を抱く部分があって、ある時、ふとしたきっかけで、女性と関係をもったところ、その関係がとてもよかった。それがレズに転向するきっかけだったというのだ。男は無意識に女性を差別するようなことを言っている。女性の感情に鈍感なことをしている。ジェンダー・センサティブでない女性だったらそれくらいのことは気にしないのだが、ジェンダーに囚われている女性は、些細なことに激しく反応し、男との関係が結ばなくなってしまう。

俺はこのくだりに共感した。俺は彼女の男バージョンである。俺は、この連載に書いて

きたとおり、男の人とゲイ関係になったことはないが、男同士の友達の方が心地いい。女性は無意識に男を差別することを言っている。男の感情に鈍感なことをしている。もちろん、男性でもジェンダーに鈍感な人はいるのだが、同性の場合は、自分と同じ宿命を背負ったもの同士だからまだ許せる。しかし、女性から言われると、「女のあなたに、なぜ、男の苦しみがわかるんだ！」と俺は激しく反発してしまうのである。

4. 『さよなら溪谷』

『さよなら溪谷』(大森立嗣監督・2013)は、やや、観念的な話であることは否めない。真木よう子が出色の演技で、この年の主演女優賞をいくつも受賞したが、複雑な設定の映画である。彼女が演じるヒロインは、高校生の時に野球部の連中に集団レイプを受け、そのトラウマで、男との関係が上手くいかず、自殺未遂や失踪を繰り返し、今は、自分をレイプした男の一人である尾崎(大西信満)と暮らしているという設定である。ストーリーは、尾崎が殺人の容疑をかけられ、尾崎に関心をもった記者(大森南朋)が解き明かしていく、ちょっとしたミステリー仕立てとなっている。

この映画で、記者の部下の女性(小林杏)は、「自分をレイプした相手と一緒に暮らすって私にはわかりません。でも、その場合だとバレる心配がないんですよね。いつもオドオドする必要もないし……」と述懐する。なるほど、レイプされた過去を十分知っている相手だから、隠し事をしなくてすむから楽な面もあるのだ。

確かに、そうだ。俺の人生に重ね合わせる

と、俺はずっと自分が不登校だという過去に触れられるのを恐れて生きてきた。俺が博多の大学にも受かっていながら、京都の大学に来てしまったのは、一つには過去を消したいという思いがあったからだ。しかし、その一方で、博多の大学だったら、俺がいじめられっ子で不登校になったことを知っているやつも何人もいたから、バレることを恐れてオドオドすることはなかったのかもしれない。俺は、過去のことは全て九州の風土のせいにし、京都での新生活をスタートさせようとしたのだが、俺の大学生活は偽りのアイデンティティの上に築かれたものだったため、うまくは行かなかった。俺の人生の最大の事件（トラウマ）イコール俺のアイデンティティであり、それを隠蔽した形で生きることは、つねに何かが胸につかえているという状況だった。こういう状態で、楽しい人間関係が築けるわけはなかったのだ。

『さよなら溪谷』のヒロインは、尾崎と暮らしながらも、時として彼のことを激しく責める。「私たちは幸せになるための結婚ではないのだ」という台詞も出てくる。尾崎は罪を悔改めようとしているが、むしろ、彼女はそれを断固として認めない。「あなたを私以上に不幸にしたい」というのも彼女の本音であり、彼女は彼を苦しめたいのである。彼女が彼と暮らすのは、彼に罪を忘れさせないための復讐である。彼女は常に彼といることで、「あなたは加害者なんだ」というメッセージを、彼に突きつけ続ける。

この気持ちも俺にはよくわかる。俺は今でも、自分を苦しめたやつを許していない。許してしまったら、俺のこれまでの人生はなんだったのか、トラウマに苦しみ続けた人生は

何だったのか、その意味がわからなくなってしまふからである。俺は過去に囚われているので、「いつまでも過去のことを反芻していたら、憎しみが大きくなっていくわよ」と言われることがあるのだが、反芻とは牛など動物たちが消化吸収するためにすることであることを思い出して欲しい。トラウマを背負う人々が、トラウマが大きくなるとわかっていながらも、反芻をやめられないのは、過去を消化吸収できないからなのである。その体験が忌まわしいものであるほど、反芻は延々と続いていく。トラウマの厄介さはそこにある。

こう考えてくると、『さよなら溪谷』のトラウマの描き方は極めて秀逸である。

と思いつつも、男の俺は、俺のほうももっと不幸だと言いたくなる。この映画のヒロインと俺が違っているのは、俺のトラウマはまだ認知されていないということである。女性がレイプされるということは、最大級の女性差別であり、トラウマとして認知され、加害者は、殺人と同等の重い罪に処される可能性もある。しかし、男性ジェンダーで苦しみ、女性に凌辱され、男としてのプライドをずたずたに傷つけられた俺の苦しみは、まだ社会が認知しない。去年だったかネットに、30年ほど前の少女時代に性的虐待を受け、その後、精神障害者となった女性の訴えが認められ、魂の殺人として、相手の男に多額の慰謝料を払う判決がだされたという記事が出たことを記憶している。俺は、40年前に自分の魂を殺された身だが、俺が訴えても、慰謝料請求は認めてはもらえないだろう。

これを言うと、「男性被害が認められないのは、男性の被害者は女性に比べると少ないから仕方がない」と反論されるだろうが、少な

いからこそ、当事者のトラウマは余計に重くなる。同情してくれる人、理解してくれる人がそれだけ少なくなるからである。そして、男の被害が日の目を見ないのは、「男は被害者になるべきではない」という抑圧がまだまだ強いからなのである。その抑圧がなくなれば、被害をカムアウトする男性はたくさん出てくることは間違いないのだ。

5. スポーツマンとナード

まだまだ男性被害を正面から見据えた映画が出るのは先のことになるだろうが、『さよなら溪谷』がいいのは、男を完全な悪者には描いていないところである。

記者の男と部下の女性との間で次のようなやりとりが出てくる。「被害・加害という単純なもんじゃないんだ」という男、「加害者に共感していませんか」という女。

この記者の男は、元々はラグビー部でならした男である。しかし、今となっては、妻とも上手くいかず、身体もすっかりたるんでしまっている。映画の序盤で、妻と喧嘩をした後の彼が、服を脱いで、自分の裸を鏡に写してみる場面は、一つの象徴的な場面だ。

彼は、かつては野球部だった尾崎に「スポーツしかやってこなかった人間は、やめると何もなくなっちゃいますよね」と語りかける。どこかしら、彼に引かれ、共感するものを感じているのである。また別の場面で、部下の女が、「でもなんでなんでしょうかねー。運動部ネタって、さわやかネタか、集団レイプ事件、その中間がないっていう」と語る場面があるが、これは男にはピンとくる。

スポーツができなかった俺は、体育系の男

が羨ましい。彼らは爽やかだし、目標がはっきりしているし、他の男たちと熱いホモソーシャルな絆で結ばれているので、なんとも男性的な魅力がある。

しかし、こういう男ばかりが集まると、男性性が高まって、男集団のモビングが起きる。集団レイプ事件が起きるのはそのせいである。男からしてみれば、男が女とやりたいと思うのは当たり前のこと。集団になると気が大きくなるし、その時の勢いでやったこと。女性を凌辱しているとまでは思っていない。しかし、女にとっては、それが深刻なトラウマとなり、そのせいで、その後の男性関係まで、うまくいかなくなっていくのである。

俺はこの逆バージョンの男だ。この連載で何度も書いた通り、俺は女の子たちからモビングを受けた。おそらく、俺にモビングをして、俺の魂を殺した彼女たちは、俺のことなど覚えてもいない。その時の感情にまかせてしたことで、それほど深い思いはないのだ。しかし、俺は、そのことに深く傷つき、その後の女性関係が上手くいかなくなってしまう。おまけに俺は男だから、誰も同情も理解もしてくれない。

また、この映画では、かつてはスポーツをしてきた男のしょぼくれた姿が描かれる。その部分も注目に値するところだ。

これはアメリカ映画だが、『ナーズの復讐』（ジェフ・カニュー監督・1984）というコメディがある。ナード（nerd）とはガリ勉やオタクっぽい男性のことを指す。この映画は、大学を舞台に、大きなメガネをかけて、青白い、ナーズたちが、マッチョで体格のいい体育系の連中からいじめられ、それからコンピューターを使って復讐していくという物語で

ある。今の社会では、肉体的な力よりも知性が尊重されるため、むしろ、ナースのほうが社会的にはエリートになる可能性が高いのだが、男性的魅力という部分で体育系のほうが数等上であり、そのことがわかっている彼らはナードたちを馬鹿にするのだ。アメリカはとりわけマッチョの伝統が強いというせいもあるが、日本でも同様である。現に俺は、勉強はできないわけではなかったが、スポーツができなかったがゆえに馬鹿にされ続けたのだから。

今でも、覚えているのは、中学に入る時の従姉の何気ない言葉だった。「文化部に入りたい」と思っている俺に、彼女はいうのだ。「男だからねー。スポーツに入ったほうがいいわよ」若い女性たちは見た目の格好良さだけで男を見ている。昔から映画では、「女は娼婦男は軍人」と言われる。すなわち、女優は娼婦を演じた時が一番輝いて見え、男優は軍人役の時に最も魅力的に見える。娼婦と軍人というのは、究極のジェンダーであり、だからこそ性的魅力があるのだ。

『さよなら溪谷』では、レイプされる女が娼婦、運動部の連中が軍人を敷衍させた形である。レイプされる女も運動部の連中も究極のジェンダーの姿だからである。そういえば、ポルノやアダルトビデオでもレイプは頻繁に描かれる。レイプされる女は魅力的だから、レイプしてもいい、そういう考えが若い男の子たちの幼稚な脳裏にあったとしたら、それは大問題だが、その一方で、スポーツができる男のほうが魅力的・カッコいいと、ナードを馬鹿にする若い女性も問題なのである。

スポーツマンを否定しているのではない。しかし、それを間違った形で礼賛するのも問

題。過度の男性性は支配へとつながっていくからである。

この映画は、ヒロインが置き手紙を残して去った後、かつてのスポーツマン2人が、しょぼくれた様子で、よりそうところで終わっていく。俺のことを深く傷つけた中学時代の体育教師は、今、どこかで苦しんでくれているだろうか。俺の心を傷つけたことに気づいてくれているだろうか。そんなことを考えた。

加害者になるにせよ、被害者になるにせよ、どっちにしろ、男は痛し、です。



1. 男と見られたくない

2月□日

京都みなみ会館で、『マンガ肉とぼく』という映画を見た。杉野希妃さんの監督・主演で、彼女が特殊メイクで丸々と太った女子大生を演じている。撮影が行われたのは京都なので、あちこちに見慣れた風景がでてきて、それも俺にはとても楽しかったが、何よりも共感したのは、このヒロインだった。

彼女は太ろうと努力する。普通の若い女性だったら痩せようとする人が多いのに、一生懸命太ろうとする。痩せてしまうと女という目で男から見られるから、それが彼女には耐えられないのである。

「この気持ちわかるなあー」。俺は、彼女の男バージョンだ。俺は女性に男と見られるのがいやである。男と見られると反発する。俺のこれまでの人生で俺を口説いてきた女性たちは、何か勘違いしていた。

大学の頃、俺をしょっちゅう誘ってきた女の子は、いつだって、涙ぐんだような顔で俺に迫っていた。彼女は何か悩みを抱えていたことは確かだった。だから俺にすがろうとしていた。最初からすがる目的の恋愛である。しかし、普通の男はこんな口説き方でなびくのだろうか。女の涙は武器だ。哀れっぽい目で男に迫りすがるとは、ピストルや刀をもって脅迫するのと同じことなのに。脅迫するような女と男がつきあいたいと思っているのか。今思い出しても、恐怖の体験だった。

俺が30代の頃、他の男にセクハラされていると訴えてきた女の子がいた。彼女は俺に自分の悩みを分かち合ってもらおうと思っていた。俺と一緒に、「その男、ひどいやつだね」と共感してもらおうと思っていた。一

般に女性は、誰か共通の嫌いな人をつくることで団結しようとする。でも、俺は女のそういうところが嫌いだ。中村先生によるとこういうのはモビングというのだそうだ。一丸となって、誰かを嫌う。俺はこれまでその女性の習性の餌食にされてきた男だ。そんな俺に「モビングに加担して」と甘えることで口説けると思っているのか。セクハラなんかだったら、女性に相談すればよさそうなものだ。女の性の悩みを男に聞かせようとするなんて、男へのセクハラだと思う。実際、あの時、俺はセクハラされている気分だったのだ。

俺が40代の頃、ブログをやっていた時期があった。そこに見ず知らずの女性がファンになって、俺にコメントするようになった。彼女は京都在住。30代半ばで男に振られたばかり。俺の顔も知らんのに、ブログを読む限りでは優しいさだし、同じ京都だからつきあえんと思ったらしく、毎日のようにコメントを入れて、モーションをかけるようになった。「あの人、確実に國友さんに気があるわよ。30半ばの女は焦るのよ。これ以上年をとると子供が産めなくなるから」と知り合いの女性から言われた。ある時、彼女は、「私、高校の時に、リストカットをしたことがある」と秘密のメッセージまで送ってきた。カチン！と俺は切れた。リストカットをするような女を男が好きだと思っているわけ！？俺はそういう女とは怖くてつきあえない！

やはり、女性たちもジェンダーに染まっている。弱い女を演じれば、男はそこから救ってあげたいという気持ちになる、彼女たちはそう思っているに違いない。そういう男もたくさんいるんだろうなあ。だけど、俺はそんな男じゃない。そんなわけで、俺は女が怖い。

女に恋愛や性の対象として見られたくないのだ。女は怖い！ 怖い！！ 怖い！！！！

2. 息子と泳いだ日

3月□日

今年の春休み、久しぶりに専門学校で教えていた男の子と会った。彼とは Facebook でつながっていたのだった。

彼とは去年、一度は会って、ちょっとだけお茶を飲んだ。彼は専門学校から大学に編入し、今は営業の仕事をしているとのことだった。しかし、それきりで終わるだろうと俺は思っていた。ところがひょんなことから、また会うことになって、彼はスポーツマンで水泳もやっているの、ちょっとだけ泳いでから、メシでも行こうかということになった。

「先生、お腹出ていますよ（笑）」

「そりゃ、俺は52なんだから仕方ないよ」と話しながらプールの中を歩いた。

彼と俺はちょうど親子ぐらいの年の差だ。といっても、もう社会人になった息子と一緒にプールに入るお父さんはそうそういないだろう。俺は恵まれているなあー。二人で身体を動かし、あれこれ話をして、たらふく海鮮料理を食べて、立派な社会人になったもんだなあと思ったものだった。楽しいひと時だった。

こういうひと時を俺は小学校の頃から求めているのだろう。しかし、発達障害的で浮いた存在の子だった俺は、友達をつくろうにもつくれなかった。俺はいつだって3軍の男だったのだ。1軍の男は勉強ができてスポーツマン。あるいは、喧嘩の強いガキ大将。2軍の男は、それなりに1軍のやつと友達になれる連中。しかし、変わり者で気が小さくて、

運動神経ゼロだった俺は、3軍の男で、女の子からもバカにされるようなタイプの連中としか付き合えなかった。学校はつまらなかった。学校という階級社会の中で、常に3軍でいなきゃならないというのは、自尊心を傷つけられる辛い日々だった。

小学校の高学年からはジェンダーにとらわれ、男の子の仲間にいることに抵抗すら感じるようになっていった。男になってしまったら、損をする、殴られる、理不尽な役割を負わされる。そう思っていた俺は男同士のつきあいを拒否するようになっていった。そこから俺の人生は大きく潮流からそれ始めたのだった。

でも、今は自分の息子ほどの年齢の男性と一緒にプールに入れる。俺は彼と会う前、俺は良くて彼のほうが一緒にプールに入ったりするのはいやがるのではないかと思っていた。しかし、まったく違和感なく、話はそういう流れになり、その後、食事の席でも気詰まりなく語り合えた。至福の時間だった。

彼だけじゃない。2月にもう一人、かつての教え子の男の子と焼肉にいつている。去年の春休みもスポーツクラブのインストラクターをしていたかつての教え子と温泉と寿司に行った。彼らはかつての教え子であり、もはや俺と利害関係はないので、無理に付き合う必要はない。だけど、彼らは俺とつきあってくれる。楽しい時を分かち合ってくれる。俺はもっと自分に自信をもっていいのかもしれない。これだけ若い男性と仲良く話せる50代のおじさんはそうそういるものではないだろう。そして、彼らは決して3軍タイプの男じゃない。一軍の男なのである。

しかし、未だに俺は自分に自信がないのだ。

いつだって、自分はつきあってもらっている。そういう気分で俺は生きてきたのだった。

3. 男同士のパフェ

4月□□日

突然、メッセージがiPadに届いていた。もう4年ほど前の教え子からである。彼は体育会のキャプテンで、俺になついてくれていた。東京で就職したのだが、今日はたまたま大阪に仕事で来たから、昼間だけ時間があるから、「一緒に飯でも」という連絡だった。新学期が始まったばかりで、大学の授業が始まってなくて、まだその午後は時間があった。

高島屋の前で待ち合わせ、近くの寿司屋でたっぷり寿司を食べた。彼はすっかりビジネスマンになっていて、あれこれ仕事の話をしてくれた。今は超多忙だけど、しばらくは無理してでも頑張る気だいるみたいだった。やはり体育会あがりのやつは目上の人と付き合うのがうまいし、爽やかである。俺は体育系になれなかったから、余計にまぶしく感じる。そういえば、俺よりも一回り年上の男性は、スポーツ万能だったにもかかわらず、体育系の活動はいっさいしなかったと言っていた。「僕たちの頃は、スポーツなんかやっているやつは、頭が悪いというイメージがあったんだよ」とのこと。へー、そうなのか。あの頃は学生運動もあっただろうし、長髪世代だから、スポーツよりもフォークソングのような雰囲気だったのかもしれない。俺は生まれた時期が間違っていたのか。俺から見ると、やはりスポーツマンはステキだ。

たらふく寿司を食べたあと、もうしばらく時間があるので、デザートでも食べるかということになり、パフェが食べたいというので、

新京極の有名なパフェの店でいちごパフェを注文し、二人で向かい合って食べた。昔の男だったら、男二人でいちごパフェなんて、嫌だと思うやつが多かっただろう。しかし、今の若い男は平気だ。体育会の猛者であっても、さりげなく男同士でパフェが食べれる。やはり時代は変わるなあー

4. 焼肉、風呂、ラーメン

5月□□日

飛び石連休の途中の平日、かつての教え子とばったり会った。彼は学校の先生をしているのだが、運動部の顧問をしているせいか、日に焼けてますます精悍になっていた。彼も俺になついてくれていて、2年前にも偶然会ったときも、メシ、風呂、ラーメンと過ごした。

「あれから連絡がなかったし、Facebook も更新していないみたいだから、どっか他の街にでもいったのかと思っていたよ」

「いや、同じ学校で働いていますよ」

じゃあ、2年前と同じことをもう一度しようかということになり、次の週末に待ち合わせした。二人で焼肉に行った後、ラーメン、風呂、そしてかき氷で閉めた。若い男の子は、焼肉やラーメンが好きだ。風呂もつきあってくれる。彼は、好きな女の子がいるみたいで、もうそろそろ結婚することも考えているみたいだった。

彼と話していると結婚も悪くないなあと思えてくる。彼は俺のちょうど半分の年なのだが、もし20代の頃にこうやって一緒にメシや風呂につきあってくれる男の相棒がいたら、俺だって普通に結婚していたのかもしれないのだ。つくづく学校へ行かなかったブランク

は大きい。52歳になって、俺はやっと自分の息子ぐらいの子にたどり着いたのだった。

5. ホモマゾ

東京大学の先生で女装ですっかり有名になった安富歩さんが、「ホモマゾ」という言葉を使って男の世界を表現していた。まさにこの言葉は的を射ている。ホモマゾとは、ホモソーシャル+マゾヒズムである。

男たちはホモソーシャルな男の世界で、女にはないような苦しみはたくさんあるけど、でも俺たちは男なんだから皆で痛みを共有しようねというマゾ的な快感を支えに生きているのだ。

安富さんはそういう世界からはおりたいから女装になったのだろう。俺は逆だ。俺はそもそもホモマゾの世界に入ったことがない。だから、未だに男同士でプールに入ったりという小学生のような友情をたっぷり味わいたいという段階に留まっている。俺が一軍の男たちと親密なつきあいができるようになったのは40代になってからであり、それまではそういう男の关系到に憧れながらも、入れないがために、まるで同性愛のようにそういう关系到に焦がれていた。40過ぎて、人間关系到には恵まれるようになり、親密な友人关系到を結んでくれる男性はたくさんできた。しかし、俺はまだ女性とのつきあいには躊躇している。

俺は子供の頃から、男たちが、平気でジェンダーを受け入れてしまうことがわからなかった。せつかく一生懸命働いてお金を稼いでも、妻や子供に吸い取られる。離婚なんてことになったら、子供は女にとられる。結婚なんて、女の術中にはめられる行為である。

おそらく、大概の男たちはそこまで考えて

いない。最初から一軍の男で、ホモマゾに生きてきた男たちは、結婚し、妻子を養うのが一軍の男のイメージだから、他の男もしていることだから、つらくても頑張ろうとホモマゾの理論で生きている。だけど、俺はホモマゾ理論を受け入れることができなかったのである。

今は、男性とのつきあいという部分ではホモマゾが受け入れられるようになったが、女性とのつきあいの部分ではまだできていない。なぜなのだろう？

去年の対人援助学会で、女性から理解されたくないという話がでた。ある若い男性が、女性に自分のことを理解してもらうのはむしろ不愉快だというのだ。分かる気はする。普通の男性はそうなのだろう。普通の男は、相手が妻や娘であっても、ある程度の距離は置いて、自分のすべてを知ってもらおうとは思っていないように見える。

俺は逆だった。俺はフェミニズムを一生懸命勉強して、女性を理解しようと努めてきた。だから、女性にももっと男のことをわかってくれと思ってしまい、わかってくれない女性とはすぐに喧嘩してしまう。これが俺が女性とつきあえない大きな原因である。

『男性は火星から、女性は金星から』という有名な本がある。俺たち男は火星、女は金星。だから分かり合えなくて仕方がないんだと割り切らなくては男女の関係は上手くいかない。

女性にわかってもらおうとする俺が間違っているのだ。もっと冷めた目で異星人として女性を見ることができれば、俺の女性恐怖はマシになるのだろう。考えてみると俺は、日本人の女性よりも外人の女性のほうに好感を

もってしまう。外人の場合だと文化のギャップがあるから、最初から理解してもらえない部分があって当たり前という気持ちで接しているからだ。しかし、日本人の女性だと、「なぜ、これくらいのことかわからないんだ！！！」と俺は激昂してしまうのである。困ったものだ。

女性と喧嘩しないためには、俺はホモマゾにならなくてはならない。目一杯、他の男に同一化する。男たちと仲間意識を持つ。そして、女性は異星人だと思って、ある程度の距離を保つ。わかってもらえなくてもかまわないと割り切る。それが女性恐怖を防ぐ秘訣のようである。これからはそれを実践に移していかなくてはならない。

6.『起終点駅 ターミナル』(2015)

5月□□日

ホモマゾになりたいという思いもあって、シネコンで『64』の前編を見た。主演の佐藤浩市を筆頭に男性スターがたくさん登場する映画でまさしくホモマゾ。この映画のポスターを見ればわかるのだが、男たちは皆不機嫌そうな顔で写っている。不機嫌そうな顔をしながらも、これしか男の生きる道はない。煩わしい政治的な人間関係や家族とのしがらみに引き裂かれつつも、男という運命を生きている男たち。

俺は男の運命を受け入れることができなかった。そういえば、だいぶ前に中村先生から、「國友さんとつきあっているとすぐに傷つくから面白い」と言われたことがあった。俺は傷つきを表に出しすぎるのだ。普通の男は傷ついていても、それを表に出そうとしない。表に出さないのは問題だとこれまでの男性学

の人たちは訴えてきたが、俺みたいに表出的すぎてホモマゾに入れないのも問題なのだ。

『64』は、久々に充実した邦画の大作である。タイトルの64とは、わずか7日間で終わった昭和64年のことだ。この時、天皇崩御のニュースに紛れて、ほとんど報道されることもなかった女兒誘拐事件に今も捕らわれ続ける男たちを描いている。昭和に取り残された男たちには、昭和は今も終わっていない。

俺にとっても昭和は終わっていない。俺は昭和が終わる時アメリカに留学中だった。したがって、あの時、日本がどういう様子だったのか全然知らない。あの時、俺が日本にいなかったのは、俺の人生は平成に変わっても、昭和のトラウマを引きずり続けることを暗示していたのかもしれないのだ。

俺は1964年生まれ。64という数字も因縁めいている。この映画との出会いは俺にとっては運命だったのかもしれない。

佐藤浩市の初老ぶりにうたた感慨である。佐藤浩市は、『起終点駅 ターミナル』（篠原哲雄監督）でも同じような役で出ている。これも昭和から平成にまたがる話なのだが、昭和の終わり、女性が突然自分の前で死んだことのトラウマに引きずられ、25年間、一人で暮らしていた弁護士が、新たな若い女性との出会いと別れにより、長年会っていなかった息子とも和解し、新たな人生を踏み出す話である。

「25年間、俺は逃げ込んでいただけだ」というセリフが出てくる。男は一度トラウマを追うとなかなかそこから抜け出すのに時間がかかる。女性の方が潔い。この映画でも、「私何もいらなくなっちゃったんです」「うらやましいよ。男にもそれができたらなあ」という

やりとりがでてくる。確かにノスタルジーという言葉は女よりも男に似合う言葉である。過去が好きなのは女よりも男だ。

佐藤浩市は55歳。俺より3つ上だが、渋みがでていい役者となった。彼のような男でも、四半世紀を超える時間、過去を引きずっているのだから、俺が過去をひきずっているのも異常なことではないだろう。

ただ残念ながら、男になれないことがきっかけでトラウマを背負う男の話は今のところ見つからない。この映画のように女を死なせてしまったことが原因という話はしばしば見られるのだけど。やはり、世間は女にトラウマを負わされた男よりも、女にトラウマを負わせた（女を死に追いやった）男の方に同情的なのである。

男は加害者でなきゃいけないなんて、そんなの変！ やはり男は痛い！！です。



1. 専門学校のトラウマ

ある週末。突然 Facebook でつながっていたかつての教え子からメッセージが届いていた。「今、京都に来ているんです。よかったら食事でもいきませんか」というメールだった。俺が彼に教えていたのはある専門学校で非常勤講師をしていた頃だった。彼は専門学校から大学に編入し、卒業後は東京で仕事をしていた。大学時代は映画の自主制作もやっていて、俺は先生役で短編映画に出してもらったりもしたものだ。映画の撮影現場の雰囲気がわかって、いい経験だった。

三条で待ち合わせをし、カツの定食を食べながら話をした。彼は仕事をやめたとのことで、これから新たな道を模索中である。今は専門学校の頃一緒だった京都在住の子の家に泊まっていて、この後しばらくは親元に帰り、それから先のことを考えると言っていた。「また京都に戻ってきたいとは思っています」と話していた。こういうパターンの子はたくさんいる。今の子は昔に比べるとかわいそうだ。将来に希望が持てないし、おそらく職場でも安月給で割の合わない仕事をやらされてきたのだろう。仕事のことはあまり根掘り葉掘り訊かないようにしようと思った。仕事に満足していたらやめたりはしないだろう。やめるにはそれなりに他人には言いたくない理由があるはずなのだ。

「昨日、あの当時、専門学校で一緒だ

った連中と飲んだんです。先生、マッチョ君（仮名）とプール行ったんですってね」

どうやら、彼は前日同級生とあって、マッチョ君から俺の名前が出たから、突然誘おうという気持ちになったみたいだった。マッチョ君は、このところ何故か俺のことを慕ってくれていて、Facebook にもしょっちゅう「いいね！」を入れてくる。

「あの子はいい子になったよね」

「前からいい子ですよ」

「そういえば、マッチョ君と付き合い始めた時はお金がかかったんだよねー。海鮮料理食べまくったから笑」

今日の彼とは普通のかつ屋さんなので、一人 2000 円くらいで済んだ。彼らは社会人とは言っても、まだ給料安くて苦労しているだろう。せっかく会ってくれたんだからご馳走しなくてはならない。

「俺は専門学校は、あの後やめたからね。あそこは先生にとってはしんどい学校だよ。9 年も務めたけど。」

「へえ、そうなんですか」

専門学校出身の子たちは、俺が専門学校の苦労を話すとあまりピンとこないような顔をする。大概の子たちは専門学校の時の方が大学よりも楽しかったという思い出をもっている。

前に編入して大学生となったスリム君（仮名）とバスで一緒になった時のことだ。彼は大学生活がつまらないとぼやいていた。

「専門学校が結構楽しかったんで」

「そりゃ、専門学校の感覚でいたらうまくいかないよ。これで専門学校の先生たちのありがた味がわかったらう？」

「それはわかりましたけど、編入するまでは、大学のことなんてわからないじゃないですか」

専門学校は学生数が少なく、先生たちが一人一人の学生に目が届くように配慮されている。専門学校の子たちは、編入や就職、留学というプレッシャーが目の前にあるし、入れてもらったのではなく、入ってあげたのだという気持ちでいるから、文句は言い放題。専門学校は学生のわがままもすべて受け入れてくれる。その分、先生たちはしんどいだけでなく、学生の前ではあくまでも学生のご機嫌を損ねないように接してくれる。だから、彼らは先生たちの苦労に気づいていないのである。

専門学校で教えることは、大学よりも数倍難しい。大学の場合は、わかっている学生がいても、わかったものとして先へと進めていく。わからないところは学生が自分で調べるなり、友達に訊くなりするだろうという前提のもとに授業している。しかし、専門学校の場合は、学生がわかるまで教えなければ文句が来る。

また大学生の場合は、単位をもらえればそれでいいと割り切っている。したがって、パワハラ、セクハラ、アカハラ、極端に不本意な点数をつけるようなことでもしない限りは、学生から文句を言われることはない。文句を言ってもどうにもならないのだということは学生の

方もわかっている。どうしてもその先生が気に食わなければ、落として来年他の先生でとればいい、というのが大学生たちの考え方だと思う。それは俺たちの頃からそうだったし、今でも基本的には変わっていない。

ところが専門学校は勝手に違ってくる。大学生だったら基本的に放任していればそれですむが、専門学校生を放任したりすると大変なことになる。とりわけ、やんちゃな学生と真面目系の学生が一緒になると後者の学生たちが文句を言い始める。俺の目から見れば、やんちゃであっても根は悪い子じゃないし、やんちゃ系の子の方がなついてくれるから可愛い。しかし、やんちゃな子をほっておくと、真面目系の子達は先生が教師としての職務を果たしていないという悪意的な解釈をしてしまう。そして、それを教務や上司の先生にすぐに告げ口に行く。さらに専門学校は規模が小さいため、悪口が流れると学校全体に瞬く間に広がっていくのだ。

俺が遭遇した最大のトラブルは、学生からクレームが来て、途中でクラスを変えられたことだ。確かに、この時は俺が選んだテキストが難し過ぎた。俺としては1番上のクラスは毎年物足りない顔をするので、多少難しめのを選んだほうが頑張ってくれるかという思いがあった。しかし、それが裏目に出た。おとなしい子ばかりのクラスだったので、直接には文句を言わない。だから俺は彼らの不満に気づいていなかった。ところが、授業評価のアンケートの結果が悪く、

「わかりづらい、先生を変えてください」とひどく感情的な言い方で書かれたのだった。「うわあ、僕だったらそんなこと言われたら、落ち込んで鬱になっちゃうなあ」と同僚の先生から言われた。他の同僚の先生も、「どの先生だって教師生活の間には、一度や二度はそういうことがあるんだよ」と同情してくれた。学生の言っていることに筋は通っている。しかし、大学だったら、これくらいのことでクラスを変えるなんてことはしないだろう。おそらく学生たちは先生は傷つかないと思っている。先生は大人なのだから、自分たちみたいな若い子から文句言われたくらいのことで凹むような小さな器ではないと思っているのだろうけれど、俺たちだって人間なんだよ！！！！落ち込みに落ち込んだ俺は、この後知り合いのカウンセラーの先生に電話で話を聞いてもらった。「おそらく親分肌の子がいて、その子が他の子を巻き込んだのかもしれないね」とその先生からは言われた。そのとおりなのだろう。クラスを変えられてすぐに、先のクラスの男の子のひとりが「先生、缶コーヒーおごって」と職員室までやってきた。「あなたたち、俺のことが嫌だったわけだろう。よく、あんなことをしといて、おごってくれなんて言えるよね」と俺は彼に言った。彼は、「ぼくはそんなこと言っていないですよ。アンケートだって、そんな悪い点数はつけていない。ただ、あの人たちは……」。彼は俺のことを嫌っていないので、悪びれていなかった。おそらく文句を書いた学生も深い

意味はなくしたこと。若い子は残酷。しばしば自分のイライラを先生にぶつけてくる。先生に対するある種の甘えなのだろう。そのことがわかっていても、この事件は俺の心に深いトラウマを残すことになったのだった。

その1年半後、大学の非常勤の仕事が増えたため、ついに俺は専門学校とおさらばすることになった。時間的に行くゆとりがなくなったからなのだが、やはりクラスを変えられたショックが大きかったのである。

2. 専門学校の贈り物

今思い出すと専門学校時代は本当につらいことがたくさんだった。よく9年も勤めたものだ。乗り越えることができたのは、一方で「先生、先生」と慕ってくれる子がいたからだ。今でも俺に連絡をとってくるのは専門学校の子たちだ。とりわけマッちょ君は俺のことを好きでいてくれて、春にはプールに一緒に行き、この後、夏は琵琶湖に泳ぎに行こうかという話にもなっている。彼からしてみれば、親父みたいな感覚なのだろうか。彼も仕事のことで悩んでいるとラインで漏らしていて、俺に話を聞いて欲しいと思っているのかもしれない。俺としても、先生として、人生の先輩として、メンターになってあげたいところなのだが、世代の違っている俺にはどう相談にのっていいのかわからない。結局人生は自分に正直に生きるのが一番いいんだよ。自分をだましてしていると後で悔い

ることになる。誰がどう思おうと好きなように生きること、それが幸せなんだということしか俺には言ってあげられないのだ。

学生とつきあうのは楽しくて、俺は、大学での教え子も含めて、学生と一緒にいるときの写真を Facebook にアップしている。ある日、Facebook で繋がっている東京のある男の先生とメッセージでやりとりをしていたら、「國友さんは、学生さんに対する面倒見もいいし、いいですよー」と書かれた。「ぼくが面倒見ているんじゃないですよ。ぼくが学生たちに遊んでもらっているんですよ」とレスすると、「それが素晴らしいじゃないですか。若い人たちとそういう関係を構築できるところが素晴らしいですよ」と返事が来た。

確かに普通の大学の先生は元教え子とプールや風呂に入るなんてことはないだろう。しかし、俺は一緒に裸の付き合いをしてくれる元教え子が何人もいるのだ。俺がこうやって、元教え子や現教え子と仲良くやっていけるのは、専門学校で学んだことが大きかったからである。専門学校は学生と友達になれるような先生でなければやっていられない。俺は学生たちと生のふれあいを重ねる中で、若い子の心をつかむ方法も徐々に習得して行っただった。そのことが大学の教え子とつきあう際にもプラスとなっている。そう考えれば、理不尽なトラウマも、不可欠なものだったのかもしれない。ここに来て、また新たな Facebook の友達が増えて、沢山の子とこ

れから会って食事をする事になって
いる。このためにお金もためておいた。
今年の夏休みは旅行もしないつもりだ
から、その分学生との飲食代に使おうと
思ったのだった。

ただこの頃、仕事で東京に行った元教
え子からレスがこないのが気がかりだ。
Facebook のメッセージから何度も
メッセージして既読にはなっているん
だけど、ずっと返事はないままだ。彼は
去年の春卒業したのだが、彼は俺のベス
ト教え子だった。何よりも俺の行きつけ
のジムのインストラクターのバイトを
していたので、親しくなり、卒業の前に
一緒に先斗町の寿司屋と船岡温泉に行
った。あの時は楽しかった。彼は本当に
話すのがうまく、気のおけない話し方を
してくれる。

彼のような子が息子ならなあと思っ
た。湯船の中で話した時は本当に父と息
子みたいで嬉しかった。しかし、仕事を
始めてしまうと、彼には彼の新しい世界
が出来ていったのだろう。徐々に返事は
こなくなった。まあ仕方がないのかもし
れない。こんなものなのだろう。若い彼
らにとっては1年といえ、結構長い。
その間には様々な新しい出会いや経験
があっただろうし、もう大学時代に親し
かった人のことを考えることもなくな
っていくはずなのである。人間の人生な
んてそんなものだ。友達はやってきては
去っていく。

いつかまた懐かしい気持ちになって、
俺に連絡とってくれればいいなあ。
Facebook でつながっておけば、しばらく

たってからそういう日も来るだろう。わ
ずかな時間でも親父の気分を味わせて
くれた彼に感謝したいと思う。

3. 女性との関係を断捨離

俺がやりとりをしている（元・現）
教え子はほとんど全部男の子である。女
の子とはほとんど付き合っていない。と
いっても誤解しないでほしい。俺は決し
て、女性と友達になれない男ではない。
むしろ友達になるのは得意である。もう
10年くらい前のことだが、「先生は控え
室で一番女の先生と話しているものね
ーうらやましいなあ」とある年配の男の
先生から言われたことがあった。普通の
男の人は女性と話したいという欲求は
あっても、女性の会話のペースについて
いかれない。女性の場合はどうでもいい
ことをあれこれ話すから、それにどうい
う合の手をいれるのか、それがつかめ
ない男性は多いのだ。その点俺は女性と
渡り合えるだけの言語能力をもってい
る。女性の方も、普通の男の人だとなっ
つきにくい。だけど、俺は男か女かわか
らんような男だから気楽に話せる。そん
なわけで、女性と話すこと自体は俺は得
意だという自信がある。

しかし、俺は女性との深い付き合いは
避けてきた。かつては付き合う努力をし
なかったわけじゃないが、俺の女性恐怖
はカウンセリングを受けても治らなず、
もうとっくにあきらめてしまったのだ。
なぜ、俺は女性が恐怖なのか？

前に中島みゆきの歌でこういうフレ

ーズがあった。♪崩れそうな強がりとは、男たちの流行♪ そうなのだ。男は女の前だと強がろうとする。かっこつけようとする。虚勢を張ろうとする。

大学の頃だ。友人にガールフレンドができて、俺の下宿に連れてきたことがある。そのときの彼はいつもの彼とは違って、急に俺のことをバカにしたような態度をとったり、ワルっぽい態度をとったり、強がっていた。なぜ、こんなことをするのか、俺には理解できなかった。一旦強がったら、その後も強がり続けなくてはならなくなる。他の男をバカにしたようなことを言ったり、無理に強がったりするような男が女は好きなのだろうか。

それに俺はやはり女性を憎んでいる。理不尽な感情であるとはわかっていながら、憎しみは終わらない。女がいなかったら、俺は不登校にはならなかった。スポーツが下手なのを見られるのも、上半身裸を見られるのも、男の子だったらそれほど抵抗はない。しかし、女の子から見られるのは耐えられなかった。ローラ・マルヴィは視線の担い手は男だと主張する。確かに性的なポルノとして異性を見るのは男だろう。とは言っても、女も男を見ているのだ。むしろ、一般に女性には瑣末主義だから、細かいことは女性の方が見ているのではないか。女は異性を見てプライバシーを詮索する。女同士で男の悪口をいう。陰口をいう。噂話をする。

俺は女に心理的虐待をされながら、誰にも打ち明けられず、一人で抱え込んだ

結果、取り返しのつかないトラウマを背負うことになった。まだ不登校という言葉もない頃、不登校になり、3年も一人で過ごし、その後大学に入っても、3年のブランクは埋めることができなかった。俺が男の友達と普通に付き合えるようになったのは40くらいになってからで、まだ俺は女性と付き合う前の小学生の心理にとどまっている。そして、その長い苦しみの中で俺の女性恐怖は固着してしまい、もうおそらく一生女性と付き合うことはできないのである。

この頃「断捨離」という言葉が流行っているが、女性と深い関係になることの断捨離を世間は認めてくれるだろうか。女性が男を断捨離して生きるのはい訳が立つ。「私は仕事が面白いし、結婚したら、両立が難しくなるから」。しかし、男はゲイでもない限り、結婚を拒む理由がないと世間は思っている。

今の社会では女性被害は認知されているが、男性被害は認知されていないため、男は傷ついても訴えることができない。男性差別や男性被害は女性差別や女性被害に比べればマイノリティだと言われるかもしれない。しかし、マイノリティであればこそ、傷ついた当事者にとっては大きな問題となる。誰もわかってくれない、誰も同情してくれない、だから、誰にも打ち明けることすらできない。

でも、まあいいか。これも考えようである。女の教え子とは付き合わないほうが無難だ。大勢だったらいいが、一対一でつきあうのは変な誤解を招く。男の教え子だったら、仮に俺がゲイだったとし

でも、大きな問題になることは考え難い。むしろプライベートにつきあうのは男のほうがいいのだ。

4. 『ハッピーアワー』 (濱口竜介監督・2015)

今年の7月の芥川賞受賞作、村田沙耶香さんの『コンビニ人間』は傑作だった。新しい男女のジェンダーとセクシャリティを思わせるものだった。主役の女性は30代後半になって男性経験もなく、ずっとコンビニのバイトの経験しかないという設定。俺と似ている。俺も女性とほとんど深い関わりにならずに生きてきて、仕事も非常勤のままで、正社員になったことがない。

この彼女が男と同居することになるのだが、それがセックスのない、恋愛というのでもない、奇妙な同居生活。しかし、そこに不自然さはなく、むしろ人間的に感じられる。まさに新たな男女関係の創造であると俺は考えた。これは、いい！！！！ こういう考えが社会にもっと広がればいいなあー。人間は多様。恋愛しない人がいても、どういう男女関係があっても、他人を傷つければ、何の問題もないはずなのだ。

そのうち、この小説、映画になるだろう。この頃日本映画は原作もの以外はなかなか映画にしづらいという話を聞いている。そういえば、この頃、大きな劇場でかかる日本映画は漫画の映画化ばかりだ。でも逆にいえば、原作ものは確実に映像化される可能性が高いという

ことにもなる。

先日、久々にNetflixで故相米慎二監督の『お引越し』(1993)という映画を再見した。もう23年前の映画だ。京都を舞台に、両親の離婚で葛藤する少女の心理を描いている。当時、作品の評価は極めて高く、キネマ旬報のベストテン2位である。

最初に見たときはよくできてはいるけれど、俺にとっては大して関心の持てない話。それほど夢中になることもできなかった。それが、およそ四半世紀ぶりに見直して、面白さに浸った。人間関係の機微の描写が巧いということも思った。俺も年をとって、人間洞察力が増したのだろうか。

またそれにも増して、京都でロケが行われているので、風景のあちこちに親しみがあって、そこが何よりも楽しかった。最初に見たときはそうは思わなかったと記憶している。あの頃の俺はまだ引きこもり、京都でもう10年くらい暮らしていたとはいっても、京都のことは何も知らず、過ごしていたのだ。それが今となっては、すべての風景に既視感がある。俺は確実に京都という土地に根をはってきたのだという思いにさせられた。

この映画では、主人公が両親の離婚を乗り越えて、精神的なお引越しを果たす。でも、これは若いからこそできるんだよね。50代の俺が果たしてこれから変われるだろうか。でも、変われなくてもかまわないか。1日1日を懸命に生きよう。あとは神様にお任せである。

『お引越し』もオススメなのだが、こ

これは古い映画なので、今回の推薦映画としては『ハッピーアワー』をあげておこうと思う。これは神戸が舞台になっていて、『お引越し』同様に、関西の匂いが満喫できる。5時間にわたる長尺だが、これを俺は立誠シネマという京都の小学校を改造してできた映画館で見た。まさに京都を堪能しつつ、5時間たっぷり映画の世界に浸った。

神戸の4人の女性たちのドラマなのだが、印象に残っているのは、中学生の息子がガールフレンドを妊娠させてしまい、中絶のための費用と慰謝料をもって、少年の母親と祖母が相手の父親のところに頭を下げに行く。父親は終始偉そうにむっつり顔。少年の母と祖母はひたすら平謝り。帰り道に、祖母が言う。「二人で遊んだ結果、子供ができたのに、なぜ、私たちだけが謝らなきゃいけないのかしらねー」

これは我が意を得たりのセリフだった。昔から妊娠したりすると男のほうに責任をとられるけれど、なぜ、男が責任とらなきゃいけないの？ 二人でしたことなのに。こういう台詞が映画にで始めたことは一歩前進だ。昔は二人で遊んだ結果、妊娠して泣くのは女性だと言われていた。しかし、今は泣くのは男なのだ。

妊娠と限らない。教え子たちが苦勞している姿を見ると、どこがどう男のほうに特権なのか、あらためて問いかけたくなる。幸せなのは女、痛いのは男なのは！？

男は痛い！です。



1. ツギハギの人生

今、俺は部屋の明かりを消して、ベッドに横たわり、MacBook Airを開いて、この原稿を書こうとしている。しかし、なかなか話が浮かばない。浮かんでも、この話は公にするには差し障りがあるのではないかと、前にも書いたようなことだからと思って、途中でやめてしまう。

思えば、昔はもっと書けた。次々にネタは浮かんできた。しかし、ここにきて、浮かんだネタを文章化するのが辛くなってきている。それは一つには昔のトラウマ的なエピソードを文章にしようとするのとトラウマを再体験しなくてはならなくなる。俺は充分にトラウマの分析はしてきたので、もうこれ以上する必要もない。これ以上しても得るものはないだろう。生活のすべてのことにだいたい諦めも付いてきた。これは悪い意味ではなく、人生なるようにしかならない、ジタバタしても始まらないという開き直りが出てきて、それほど深く考えなくなった。自分の心の中にもやもやしているものがある頃は文章化することでそれを整理しようとしていたのだが、もう今となっては、整理すべき事柄もほとんどないのだ。

そうだ、そう考えれば、俺は幸せ者なのである。日本では、50代の男が、一番自殺率が高いし、幸福度が低いと聞いている。しかし、俺は自殺したいとは思っていないし、不幸だとも思わない。そういう境地までついに達してきたのである。美輪明宏さんが「負の先払い」という言葉を使われるけれど、俺は10代20代の頃に一生分の苦しみを経験し、負の先

払いを済ませてしまった。年齢を重ねるごとに幸福になってきている。

今でも断続的に怒りの感情が湧いてくることは事実だ。小学校の頃の男子にばかり体罰を与える女性教師、中学の頃の男子生徒を裸にする横暴な体育教師、不登校の時の保守的カウンセラー、大学の時の偽善的アカハラ指導教授、弱い女を武器に俺を口説こうとしていた女の子、支配的に俺に友情を求めてきたクラスメートの男子、男性運動で出会ったとんでもない学生運動おじさんたち、権威主義的な元大学教授のおばあさん、専門学校の生意気な女子学生、そして、2年前の何もわかってくれなかった女性カウンセラー。もう会うこともないような人たちなのだが、時々、彼らの顔が脳裏に浮かんできては俺を苦しめる。しかし、生活に支障が出るほどではない。嫌な奴との記憶とも付き合っていけばそれで済むのだ。

以前、『キルトに綴る愛』という映画があって、「若い人は完璧を求める。でも年取ったものはつぎはぎの中に美しさを見出すものなのよ」という台詞があった。すごくいい台詞だ。俺の人生も、つぎはぎだったけれど、そこに美しさが生まれ始めたのだろうか。いやな記憶は俺の人生のパッチワークなのである。

2. 徒然な日々

①大学どこなんですか？

11月の初め。「先生、大学どこなんですか？」と学生から聞かれた。学歴を知りたがる学生はしばしばいるのだが、その度に俺ははぐらかして、まともには答えない。「なんで、そんな質問するの？ 大学の名前を言うてしまう

と、そういう先入観で見られるだろう？ だから俺は言いたくないんだ」という具合にすり抜けるのだ。

本を出した時も、出版社から「経歴のところに学歴は載せないのですか？」という問い合わせが来た。その時も、「私はもう卒業してだいぶ経ちますので」と答えて、載せることを拒んだ。俺は3つも大学に入っている。学部、修士、博士と3つ違った大学に入っていて、そのことは大きなコンプレックスとして残っている。この頃は学歴ロンダリングと言って、不本意な大学を卒業した人が、大学院で希望のところに行って、最終学歴を塗り替えるというケースが増えている。しかし、俺の場合は、ロンダリングにはなっていない。仕方がないから大学を移ったというのが本当のところであり、本意な選択ではなかったからである。俺は今でも履歴書を書くのが嫌だ。めちゃくちゃな経歴。三つも大学に行った上に、高校が中退なわけだから、「わけあり」であることは一目でわかる。

対人援助学会は立命館の先生や学生が中心の学会である。そのマガジンで立命館を批判をするのは憚られるのだが、真実を書かなくては、この連載の意味はないので、ご了承願いたい。俺の立命に対するわだかまりはものすごかった。実は衣笠界限に行くのすら憂鬱だった。俺にとってはトラウマの地。最近になって、中村正さんがだいぶ友達になってくれたので、この大学関連者で親しい人がやっと一人できた。しかし、正さんは立命の生え抜きで教授や理事にまでなった人だ。俺は上手くいかなくて、そのあと、他の大学へと渡り鳥。同じ大学を出ているのにこの違い！ 人生は理不尽だなあ。

人はなぜ、他の人の学歴を知りたがるのか。それはその人のイメージの指標になるからである。しかし、俺は立命館というイメージに合わない学生だった。俺の世代で立命館の卒業の人は、「学費が安いからこの大学を選んだ」という人が結構多い。実際にはそうでなくても、そう言うておけば、他のところに落ちてきたといわずに済む。当時の立命館のセールスポイントは庶民派で学費が安い、奨学金が取りやすいということだった。

しかし、俺は何を隠そう元祖ワンルームマンションだった。当時の立命館というと4畳半にインスタントラーメンというイメージだったけど、俺はその当時からエアコンまでついた家賃が4万以上もするマンションで暮らしていたのだ。ちなみにあの頃は1万円から2万円くらいの共同炊事、共同便所で暮らす学生が多かった。従って、学費が払えない苦学生ということを自分が立命に行った理由にすることができないのだ。なぜ、お金がないんだったら、あんなところで暮らすんだ？と言われることになる。

じゃあ、他の大学に落ちて泣く泣く入ったのかという決してそういうわけでもない。受験の時は合格しないと思っていた。俺は英語の力だけはあったけど、国語と社会は良い時と悪い時で差があった。3年も学校に行かなかったというブランクは大き過ぎるくらいに大きかったのだった。

俺は受験の直前まで京都の大学なんて考えたこともなくて、東京の大学に行きたかった。しかし、ブランクは取り戻せない。でももう1年浪人はしたくない。仕方がないから日程と受験地の都合で、立命館を受験してしまったのだ。立命館は地方試験がある。俺は大学

に入るまで、立命館どころか、京都にすら来たことがなかったのである。何も知らず、下見もせずに大学に入った。今思えば、見合いもしたことのない相手と結婚したようなもの。でも入学を決めた時は、それはそれでいいんだと思ったものだった。入ったところで頑張れば、おのずと道は開けるのだと思っていた。

俺が高校も行かずに大学に行ったことを知っている人は、「高校も行かずに立命館に受かるなんて大変なものじゃないの」と言ってくれる。しかし、高校に入っていないことは、そうそうおおっぴらに話すことはできない。したがって、なぜ、あの大学に入ったのかと聞かれた時に、即座に答えられるちゃんとした理由がないのである。

立命館に愛校心を持っている人もたくさんいる。しかし、これは俺の偏見なのかもしれないが、そういう人は、大概、立命館のかっこ悪いところが好きだ、ダサい所が好きだという。スポーツで弱いチームを応援するのと同じ心理である。しかし、俺はダサいものに魅かれる人間ではない。洗練された、綺麗なものが好きだ。俺はハリウッドスターが三度の飯より好きな人間なのだ。

俺は大学の頃は前向きだった。ここに巣をつくろうと思っていたから、立命館を自分のアイデンティティにしようと思って、必死で頑張ったものだ。ところが、あの頃は全てが裏目に出た。

挙句に、卒業間際になって、指導教授からアカハラをされてしまった。憎しみの残るような形で俺は立命館を後にした。それから語学系の院の修士に入り、その大学の指導教授とは上手く行ったのだが、当時その大学には博士課程がなかったため、兵庫の大学の博

士に行った。移り過ぎなのがマイナスだとは色々な人から言われてきた。どこの学閥にも属していないので、就職が決まりづらいのである。俺は立命館を恨んだものだ。「あの大学に入っていなかったら」という気持ちを常に抱えて、40代までは生きていた。

しかし、もう52歳。さすがに大学に対する囚われは抜けてきた。この歳になって、非常勤歴も24年、著書も2冊出した、もう誰も俺の経歴に文句はつけない。前にある学生に「俺の経歴はつぎはぎなんだよ」と言ったところ、「つぎはぎの方がカッコいいじゃないですか」と言われたことがあった。そうなのだ。若い大学生でも、凸凹のないスムーズな道を歩んだところで、カッコいいとは思わないという子はいらぬのだ。今思えば、大学時代は、自分の膿を出す4年間だったのかもしれない。70歳くらいになったら老後の楽しみで、どこかの大学で博士号をとろうかなあと思っている。かすかな夢だ。夢は叶わなくてもいい。ただ叶うのならば叶えたい。そんな気持ちで今は生きている。

②専門学校の同窓会

10月の末。専門学校の教え子たちとの同窓会だった。参加者は10人くらい。先生は俺一人だった。

俺にはコンプレックスがたくさんある。まずは顔がでかいということだ。俺は今まで俺より顔がでかい人に会ったことがない。もう32年ほど前、シェールの主演で『マスク』と言う映画があった。実話に基づく話だが、シェールの息子がライオン病という顔がライオンのような奇病という設定になっていた。俺はまさにこのライオン病なのではないかと

思うくらい顔がでかくて、奇形に近いのである。中学の時の制帽も俺だけ60センチだった。バイクの時のヘルメットもXLだった。ほとんど特注のレベルである。そのことでからかわれた経験は数知れない。しかし、顔が大きいことが悪いことのように言われ始めたのは比較的最近のことで、タモリが言い出したことなのではないかと思う。昔は舞台演劇などでは顔がでかい役者の方が表情が客席から見えるので好ましいとされていたはず。ところが、テレビ時代になると顔が大きいのは不恰好と見做されるようになった。今はスマホ時代。写真を撮る頻度が著しく増えているので、俺みたいな顔のでかい人には困る。いつも目立たないようにちょっと他の人と間を置いたりしながら写真を撮っている。また連写してもらおう。連写すれば一枚くらいはましなのが取れるからだ。同窓会の写真はなかなか上手く撮れていて、Facebookにアップできた。

小さな小部屋であぐらをかいて、「専門学校の仕事は地獄だったよ」と教え子たちに話した。彼らはもう卒業して何年も経っているし、大人の年齢だから言ってもいいかと思ったのだ。「そうなんですか」と彼らはキョトンとした顔。大人になったとは言っても、まだ20代なかばの彼らには、先生の苦労がわからない。前号にも書いたが、あの頃のトラウマもまだ癒えてはいない。しかし、専門学校を辞めた後、良い仕事は続いてやって来た。専門学校は俺が成長するための通過点だったのだろう。ちなみに、この日は仕事で来ていなかったが、この時の同窓生と同期だった男子の一人とはラインまで教え合って、父と息子のような仲である。この冬はスキーに行こうかと話している。苦しかった9年間は無駄ではなかった

のだ。

③髪健康優良児

11月ある昼休み。大学の控え室で髪の話になった。俺は髪健康優良児である。ヘアサロンに行くと「毛の量が多いですね、絶対ハゲないタイプの髪ですよ」と言われる。「いいなあ」と他の先生たちから言われた。

メンズリブの男性たちもハゲかかっている人が多いので、羨ましいと思うのかなあ。そういえば、プロジェクトに関わっていた頃、他のメンバーの人たちが、やけにハゲ問題にこだわるなあと思ったものだった。俺はハゲの心配がないので、ハゲ問題なんて考えたこともなかった。人間は無い物ねだりで、自分が持っていないで他人が持っているものは価値あるものだと思うのに、自分が持っていて他人が持っていないものはたいしたものと思わないものらしい。

しかし、「俺は髪が多いんだ、ハゲている人、かわいそう」なんていう態度をとるような男には成りたくない。俺は自信がない男だと言われるが、自信家は嫌いだ。自慢話も嫌いだ。むしろ俺の美点は、人の良いところをみつけられるところ。俺は人を羨ましが性格なので、自分よりも他人の方が幸せに見える。だから、その人の幸せな部分を即座に探してあげることができる。そのことには自信を持っているのかもしれない。

④ラグーマンになりたい。

この頃、周りの人におおっぴらに話している。「俺は五郎丸が好きだし、ああいふ身体になることを目指しているんだ（笑）」と。これは冗談ではなく、ある程度本気だ。普段、俺

はラグーシャツで外出することがある。元々ガタイはでかいので、ラグーシャツは似合うと周りからも言われる。テニスは、ガタイのでかい人は少ないし、水泳も筋肉マンでは泳げない。野球もタンクトップが似合うような身体になってはならないらしい。やはり、俺の体つきに一番、似合っているのはラグビーだ。五郎丸を目指すのが一番いい。

俺の友達は何故かラグビー経験者が多くて、普段マッサージに来てくれる30代の男性、東京に行ってしまった鍼灸師の先生、卒業前に風呂に入りに行った教え子、専門学校時代の教え子など、ラグーマンだらけだ。スポーツクラブで、普段レッスンしてくれる若い男性は大学生なのだが、彼もラグビーの経験者のことである。この人は、俺が友達になりやすいタイプの人なので、スポーツクラブでもよく話をしている。ラグビー部にいるって、どういうものなのだろう。俺は水泳は長い間やっていたが、チームスポーツはついにできないまだ。

スポーツだけじゃない。俺は誰か気の合う友人と二人で、食事や温泉に行くのは好きだが、大勢で騒ぐのは好きじゃない。俺は変わり者なので、大勢だと浮いてしまう。目立ち過ぎて話の肴にされるか、隅っこに追いやられるかどっちかだ。あー、悲しい。大勢だとむしろ疎外感を抱く。一対一の付き合いの方が相手を独占できるから、俺には向いている。

しかし、男ばかり大勢の世界。男同士だから結びつける世界。そういう世界に一度入ってみたい。60になったら、おじいさんラグビーを始めようかなあーでも、仲間が見つかるだろうか。

⑤孤独に生きる

11月のある日。母と電話で話した。弟の婚活がうまくいっていない。「二人とも孤独に生きていくのかと思うと、私は心配だわ」と母は言う。母が元気なうちに弟が結婚できたらなあと思う。弟は結婚を望んでいるし、俺みたいに女性恐怖でもない。母も、弟の方が気がかりらしい。母は、俺は結婚することはないだろうと思っている。俺が女性から受けたトラウマのことは、母にはずっと話してきたから、俺が女性不信になるのも仕方がないと理解してくれている。それに俺は長いこと一人暮らしをしていて、今は友達も多いから、一人で生きていくことに慣れてしまっている。しかし、弟は大学時代をのぞいて、ずっと母と同居しているので、身の回りのことは母に頼ってきている。そんな弟が一人きりで大丈夫なのだろうかと考えているのだろう。

変な女と結婚したら余計に不幸になるから、一人でも構わないと俺は思うけど、やはり母は、パートナーがいた方が幸せだと思っているみたいだ。かくいう俺もいつまでも友人や教え子が遊んでもらえるかどうかはわからない。孤独でも生きていける心算はしておかなくてはならない。10年20年なんてすぐ過ぎる。老後はすぐにやってくるのだ。

⑥男性学の道は通し

10月末のある日。京都で男性学関連の催しが行われた。俺はこの会議の主催者の男性と6年ほど前に喧嘩して、この会議にも行っていない。この男性と最近男性学の本の翻訳を出された若い男性とのトークが行われたらしいのだが、どうやら異様な雰囲気だったみたいである。その若い男性自身が自分のサイトで

おおっぴらに主催者の男性に対する罵詈雑言を書いている。よほど気に入らないことが起きたのか。

主催者の人は男性加害者の支援をしてきた人だ。本人は加害だけではなく被害のことも理解しているのだと言っているが、実際には加害の人の状況しかわかっていない、これでは男性フェミニストだ、そもそもフェミニストで女性加害を問題にする人がいるのか、というようなことがサイトには書かれていた。この部分は確かに俺も共感する。

これまでの男性学の人たちは、男性を加害者と決めつけ、自分たちは男性性の問題から抜け出した進んだ男だという自負心を持っていたように思う。本人たちは否定しても、俺にはそう感じられるのだ。俺は最初から男性性なんて持っていない。女性性の男である。そこが違和感となって、俺はグループから離れたのだった。

⑦フレーミング

2年ほど前のある日。「あの人、男か女かわからないし、気持ち悪いわ、って、Oさんが言っていたわよ、ははは」と冗談めかして、ある女性が俺に言った。こういうのを「フレーミング」というのだろう。彼女は「ただの冗談」というフレームを装って、俺を傷つけることを言ったのだった。彼女はもうおばさんだし、俺と限らず、色々な人に言いたい放題いう人で、あれでよくトラブルが起きないものだとは思っていた。

それ以降、俺は彼女とほとんど口をきかなくなった。彼女が話しかけても必要最低限の返事しかしない。できる限り彼女の目を見ない。彼女はまずいことを言ってしまったと感

じ取っているはずだ。しかし、俺はわざと彼女には意地悪したいと思う。彼女はフェミニストたちとの交流もあるし、フェミニストがかった女性だ。そういう女性が、冗談であってもこういう台詞を口にするのは許されない。これを許していたら、ますます男性被害は続いていく。

この頃、彼女はもう俺に話しかけてくることはなくなってきた。俺の方も話すつもりはない。彼女がちゃんとした形で謝るまでは。

⑧女性被害者論

11月9日。ヒラリーが大統領選挙に敗れた。

俺もヒラリーを応援していた。俺はリベラルだから元々民主党支持だが、それ以上に彼女が勝てば、「女だから不利だった」という女性被害者論が言われなくなる。そのことを期待していたのだ。案の定、俺の周りの人たちは、女性だから差別したのだ、女を大統領にしたくないんだと彼女が女性であることを敗因にしている。あー、困った。もちろん、女性だから差別があったことは、敗因の一つだろうが、それを他の男女関係にまで広げられるのは困る。大統領の世界なんて、社会の頂上の世界。その下の世界では男だって差別されている。底辺にいる男性は大勢いるのに、そういう男性に対して、男性だから差別されているなんていう人がいるだろうか。

女だから差別された。男が大統領などトップの座に君臨し続ける限り、こういう決まり文句が言われ続けることになる。男は恵まれているやつでも、恵まれていなくても同じ土俵に立たなくてはならないのに。あー、男はやってられない。

3.『ビリギャル』(土井裕泰監督・2015)

今回はこの映画を推薦して、終わりたいと思う。えらい大ヒットになった映画である。興行的にヒットしただけでなく、ネットのユーザーレビューも高かった。しかし、俺の率直な感想は出来過ぎ。

実話に基づく話で、成績ビリから慶応に受かった女子を描いていくのだが、親も先生もいい人過ぎる一。それにビリギャルとは言っても、ヤンキーな高校のビリではなく、名門校のビリなわけだから、もともと勉強ができないわけではないしで、そこがちょっと引かかる。

でも暇つぶしにDVDで見るにはいい。気分のいい話だから、若い子はこういうのが好きなのだろう。俺だって、そうだったなあ。若い頃は希望がある。しかし、幾度かの挫折や絶望を経験しながら、人はどこかに流れ着くのだ。俺は52歳で、どうにか自分の人生に納得できるようになった。納得した後は、はて、どういう人生を歩んでいくべきなのか。とりあえず、一日一生。日々を乗り越えるという気持ちで生きるしかない。

男は痛い。でも痛い経験をたくさん積んでいくうちに痛みが快感になってきたのだろう。さあー、10年後の俺はどうなっているだろうか(笑)！？



1. 九州が怖い！

「たまには帰きなさい。1日帰るだけでいいんだから。私はもう来年で満80歳なのよ。いつまでも生きているわけじゃないんだから」電話口で母が言った。母には感謝している。弟にも感謝している。その感謝を伝えるために母の誕生日、弟の誕生日、法事の日などには必ず甘い物を送っている。電話も毎日かけている。しかし、母としては顔を見たいのだろう。

「80になったら、京都に来なよ。ちゃんと介護してあげるから」と俺は返事する。行きつけだった食堂の女性も秋田からお母さんを京都に呼ばれた。

「そう言ってくれるのは嬉しいけど、どうやって私が80になって、何も知らない町で暮らすのよ」と母。

「まだ強迫症が抜けないんだよ。家をあけると、その間に泥棒が入るんじゃないかとか思ってしまうんだ」

「でも、東京にはちょくちょく行くじゃないの」

「東京は仕事で行っているんだよ。仕方がないから」

俺は九州に帰るのが怖い。九州に連れ戻されるのが怖い。勿論誰もつれ戻す人なんていない。しかし、俺は何らかの運命のいたずらで、九州に戻る運命になるのをひたすら恐れているのだ。

俺の中の葛藤は今でも理不尽に俺の中を巡り巡っている。九州にいた頃は理不尽なことが次々に起きた。九州のせいじゃない。たまたま巡り合わせが悪かっただけのことだ。し

かし、俺は自分を許すことができない。なぜ、俺だけがあんな目に！ 俺は、この理不尽な思いを九州のせいになりたいのである。

3年ほど前についた30代の女性カウンセラーは言った。

「ジェンダーの人は社会のせいにしようとする。でも、精神分析は自分の問題として捉えるんです」

その考えはおかしい？ そういう返され方をするから俺は不登校になったのだ。例の裸授業が始まってから俺の心は雪崩のように崩れていったのだった。もし、あの時に授業中に裸にさせられることがどうしても抵抗があるんだと周りに話していたら、俺は不登校にはならなかったかもしれない。常識から考えても冬場に半裸で授業させるなんて、行き過ぎである。あそこまで極端な男根教育をする先生は滅多にいるものではないだろう。

「同じ気持ちを分かち合える人がいないんです」と俺が言うと、「その時一緒に脱がされた子がいるじゃないですか」と彼女は返してきた。

「脱がされる。。。この言葉に俺はキレた。女の子を脱がせたりしたら、それこそ大問題だ。セクハラ教師として訴えられ、懲戒免職だろう。女優さんが自分から「脱ぐ」ことはあっても、監督に無理矢理に「脱がされる」なんてことになったら大問題だ。女の子だから胸を見せるわけにはいかないと思うかもしれないけど、上半身裸と言ったら水着と一緒に。女の子をプールの時間でもないのに水着にしたら、これまた大問題。なぜ、この女はひたすらジェンダーを肯定しようとするのか、俺のトラウマを否定しようとするのか、そんなのが精神分析なわけ？ カウンセラーだったら

相手の気持ちを受容するのが役目なのでは？？？ 俺がカウンセリング講座に通っていた時、相手と話す時には、Yes, and（わかります。それで・・・）という調子で話さなくてはならないんだと教わったものだった。しかし、彼女は一貫して、No, but（でも、。。。。）だった。彼女は自分の常識で相手を見て、自分の理解できないことは大した悩みじゃないんだと思っている。人間って、一種類じゃない。人とは違う悩みであればあるほど、当事者は余計に苦しい。だからこそ、カウンセラーが必要になってくるのだ。

不登校の走りだった俺は辛酸を舐めるような体験をした。今だったら、不登校への理解も、学校や先生の問題も、子供の人権も社会的に認知されているが、あの頃は理解がなかったが故に、ただでさえズタズタに傷ついている俺の心はさらに破壊されていくことになったのだった。「あんたの言っていることは、不登校の子に向かって、『学校が好きな子もいるじゃないですか？』と言っているようなものなんだよ！ そんなこと言ったら不登校の子は余計に追い詰めるだろう！ あんたなんか京都でカウンセラーやっているとっているわけ！！ 九州に戻って、顔を洗って出直してこい！！！」と言いたいところだった。

俺たちが学生の頃に『ふぞろいの林檎たち』という山田太一原作のドラマがあって、このドラマでは時任三郎と手塚理美が恋人同士なのだが、時任は彼女に結婚したら仕事を辞めてほしいと思っている、これに対して絶対に仕事を続けたい手塚は次のように返す。

「じゃあ、あなたは結婚したからって、仕事辞められる？」

「男と女じゃ別だよ」と時任。

「一緒よ」と手塚。

これと同じ議論が俺とこのカウンセラーの間に起きようとしていた。

「じゃあ、あなたは、脱がされることに抵抗がないの？」と俺は問いかけたかった。彼女は、男と女は別。女が脱がされるのは大問題だけど、男が脱がされるのは問題にするべきことでもないと思い込んでいるのだ。

俺が彼女のカウンセリングを受けようと思った一つの理由は、彼女が九州から出てきたばかりのカウンセラーで、九州の女性に憎しみを抱いている俺には九州の女性から自分を理解してもらうことが回復へつながることになるのではと思ったからだ。しかし、それどころか、「やはり、九州の女は」という偏見が俺の中に強まってしまった。「九州の人は社会を受け入れようとする、関西の人は社会を変えようとする」、それが俺がずっと抱えてきた偏見だった。俺みたいな社会に文句をつけるやつことは平気で白眼視して、村八分にしようとする。それが九州の連中だとずっと思ってきた。

九州にはやはり帰らない。帰れない。ある映画で、「人は異質のものを憎む」という台詞があった。俺は思えばみにくいアヒルの子だったのだろう。クラスの中で浮いている異質の存在だった。今でもその時の惨めさは拭えない、恐怖は終わらない、俺は人と付き合うときにいつだって自分の方が付き合ってもらっているという意識で生きてきた。相手が誘っている時であっても、俺の本当の姿を知れば嫌いになるという気持ちで生きてきた。九州にいた 19 年間、俺はジェンダーの呪縛を受け続け、そこから立ち直るのに膨大な年月が

かかったのだ。

俺が女嫌いになったのも、あまりにも辛い少年時代のせいなのだ。毎日学校で女子たちから「気持ち悪い」といわれる日々。それが 3 年も続いた。俺は自分のどこがどう気持ち悪いのかがわからず、女は怖いという感情は日に日に募っていった。結果、高校に入るのと同時に心は壊れたのだった。

2. 同化できる人を求めて。

俺の九州への思いは確かに偏見だろう。俺は京都に来てからはいわゆるインテリ系のひとしか付き合っていない。全然、勉強ができないようなやつはそもそも大学になんかいけない。まして大学院になんて行かない。大学の先生になんかならない。京都は大学がたくさんあるから、インテリが多い街で、急進派の左翼の人も多いのだが、一般の庶民たちはそこまでリベラルではないだろう。一方、九州にいた頃は、市内でも最も柄の悪い、ほとんど少年院のような中学に通っていたのだ。一般に柄の悪いところは悪い意味で男性的になる。これは前に問題を抱えた少年たちの指導員の男性が言っていた。勉強もできず、家庭的にも恵まれず、お小遣いも満足にももらえず、イライラしている彼らには、人を威圧する力しかない。虚勢をはる力しかない。弱い奴をいじめる能力しかない。

俺は京都に来てからそういう層のやつらと付き合っていない。前に専門学校の学生たちに、今の中学生は皆、制服だっておしゃれだし、おっとりしているよねと話した。俺は電車やバスで中学生たちを見かけるといつもそう感じていたのだ。すると学生たちからは、

「電車に乗っているような中学生は私立の中学の子ですよ。ああいう子を基準にして考えるのは違いますよ」と言われたものだった。

俺はもう 20 年以上も心療内科に通っている。俺の周りの人たちは、それくらいは気にしていない。この頃は鬱の人や強迫症の人は大勢いる。しかし、最初についたカウンセラーの先生はうっかり口を滑らして、慌てたものだ。「とんでもないですよ。まだきちがいだという偏見で見る人はたくさんいるんですよ」

そうなのだ。俺は大学で生活をし、インテリさんたちに囲まれ、近所付き合いもなく、電車で通う私立学校の生徒ばかりを見て生きてきたのだ。京都という町のほんの一部しか知らない。したがって、九州が悪で、京都が善だと判断を下すのは明らかに俺の偏見なのだ。しかし偏見だとわかっていながらも、すべて悪いのは九州のせいにして、俺は京都を自分の居場所にしようと頑張ってきたのだ。俺にはそうするしか生きることができなかった。

専門学校で教えていた頃のことだ。専門学校は 1 クラスが 20 人弱なのだが、その 20 人の中でも山が 4 つくらいに分かれる。やんちゃ系の男子、ギャル系の女子、真面目系の女子、そしてどのグループにも属さない孤島組。

俺の目から見ればやんちゃ系の子であっても根は悪い子じゃないし、もう皆 18 歳は過ぎているから、度を越したことをするわけではない。しかし、そういう子達を放任していると、真面目系の女の子たちが教務にクレームを言いに行く。学生たちは些細な性格の違いであっても不快に感じる。同じ日本人、同じ

年代であっても、人によって文化は違っているのだ。どちらの文化にも馴染める柔軟性のある人間ばかりではないのだ。女子学生たちの告げ口には本当に悩まされたが、俺だって若い頃は周りに同化できない子だったから、怒るわけにもいかず、ジレンマに悩まされたものだ。

俺の人生は、自分が同化できる人を探し続ける旅だった。理屈ではなく俺は本能的にそういう奴を求めていたのだ。俺が親しくしている男友達は中学くらいから私立のところに通っていたようなお坊ちゃんが大半である。そういうやつだったら、極端なマッチョ教育は受けていないだろう。暴力教師や人のことをきもいという女子生徒もいないわけではないだろうが、俺の行っていた中学に比べれば、はるかに風紀は良いことは事実のはずだ。親だって、しっかりしているだろう。過酷な環境を生き延びてきたような雑草のような連中には俺は親しみを感じない。俺が私立のところに行っていたら、男子校に行っていたら、彼らのような環境で生きてきたら、俺の人生はあんなことにはならなかったかもしれない。そういう思いを抱かせてくれるから俺はお坊ちゃんに親近感を抱くのだった。

俺はかれこれ今住んでいる界限に 27 年以上住んでいる。その間、近所にはシネコンができ、スポーツクラブもでき、立命館や佛大のキャンパスもできた。俺は見慣れた風景を毎日見ながら生きてきた。しかし、俺は京都の一部しか知らない。インテリしか知らない。

5 年くらい前のこと、「國友さん、自転車で独り言言いながら走っているということ有名みたいです。お客さんが言っていた」と整骨院の威勢のいいお兄さんから言われたもの

だった。思えば、これだけ長くこの境界で生きているから、近所の人たちは皆俺の姿を見たことがあって、俺が自転車で独り言を言っていることも気に留めていたのだろう。近所の噂の笑いものだったのかもしれない。

1年ほど前に二条駅の近くのカレー屋さんが閉店になったのだが、その閉店の1ヶ月ほど前にそのお店に行くと、「来てくださってよかった。一番長く来てくださっていましたものね」と店の人から言われた。俺はこの店が好きで、時々行ってはいたけど、店の人たちと友達だったわけではない。しかし、店の人たちは俺の顔をきちっと覚えていて、一番長いお客さんだとある種の特別な目で見てくれていたのだった。

俺は京都で長く暮らしてきたとは言っても、こういう市井に生きる人たちと生活を共にしてきたわけではない。ずっとマンション暮らしだ。隣の部屋の人の顔すら知らない。やはり、九州のせいにはできない。でも、俺は九州のせいにしてしまいたい。心が壊れた責任を…。俺は社会全体から踏みつけにされた。理不尽に傷つけられた。しかし、社会はそれを理解してくれなかったのだった。

思えば、外国に行った方が良かったのかもしれないと思うことが度々ある。外国だったらどっちにしろ外人だ、違った文化の人という前提で見てもらえる。外人だからある程度のことは大目に見てくれるだろう。しかし、日本人でありながら、普通の日本人の主流とは違った文化を生きてきた俺はずっと孤独な生活を余儀なくされたのである。

この喪失感は、いつまでたっても消えてはいかない。あと27年たったら、俺は80歳だ。もう死んでいるかもしれないなあー。それま

でに、この思いにどうにか決着をつけてしまいたい。

俺は運が悪かったのだ。しかし、俺が心が壊れて、高校に行かれなかったという事実は消すことができないのだった。俺は一生消すことのできない烙印を押されてしまったのだった。

3. 自信について

専門学校をやめる年、「もっと自信を持って授業をしてください」と授業アンケートで書かれた。大学の方ではこんなことは言われないうのだが、専門学校と大学では学生が先生に求める資質が違ってくる。専門学校の場合は予備校に近いので、予備校系の先生のような人が多いし、実際学生もそれを求めている。

権威を持つということ、断定的な口調で話し曖昧な言い方は避けるということ、また授業の予習をしていない時であってもたっぷり準備をしてきたんだというフリをして授業を進めるということが専門学校で授業を進める上でのポイントだった。俺はいつだって自信がなさそうな態度をとるので、学生たちは不安になる。これから編入や就職があるのに、こんな先生について行って大丈夫なのかという気持ちになる。ハタタリをきかすのも一つの技術なのである。

「先生、なんでそれだけ知識があるのに堂々とししないの？」と学生からも言われたこともあった。しかし、俺は自信家にはなれないし、なりたくなかった。これまでの人生、俺を貶め、傷つけてきたやつはことごとく自信家だった。自分が正しいと信じ込むことは暴力や確執を生み出していくのである。

自信を持つと学生が付いてくるのは事実かもしれない。しかし、これじゃあ、ヤンキーと一緒に。「ヤンキーなんて、一番上に親分肌のやつがいて、下のやつはそれに追従しているだけのことだ」と友人から言われたこともあった。そんなのが良いわけ???? もちろん、そういう教育が有効である場合もあることは認めるけども、そうでない先生もいていいんじゃないの? 人によって文化は違うのだから、先生も色々だよ。事実、俺の価値を認めてくれる学生も大勢いたのだ。今でも Facebook でつながり、一緒に食事や温泉やプールまで付き合ってくれる学生が専門学校時代の教え子の中に何人もいるのである。

4. ネタバレ注意 (笑)

『恋妻家宮本』(遊川和彦監督・2017)

この原稿を書いている最中にまるでシンクロのようにこの映画に出会った。まさに神様が与えてくれたような映画だった。

阿部寛の主演である。彼が演じる 50 男は教師なのだが、自分に自信がないタイプで優柔不断、生徒からもいい人だけど頼りないという目で見られている。阿部寛は、昔のモデル時代からシャイで情けない奴というイメージはあったけれど、それが今は彼の持ち味になっていて、なかなか良いのである。

この映画で彼が演じる男は学生時代に彼女を孕ませてしまったため、そのまま結婚し、すでに 27 歳の息子がいる。この息子の名前をつけるときに、「正」と「優人」、どっちにしようかと彼が迷う場面が出てくる。

これは内輪ネタだけど、中村正先生が以前、ある講座で、「なぜ、こんな名前、僕につけた

の?」と親を責めたことがあるとおっしゃっていたことを思い出して、思わず笑ってしまった。

結局、主人公は息子に「正」という名前をつけることになる。そして、この映画ではこの名前が話の一つの鍵を握っている。「正」と「優人」、全くニュアンスの違う名前なのだが、これはこの主人公の葛藤を物語っているのだ。この映画、正しさと優しさの相克のドラマなのである。

すなわち、正しいことをしようとしながらも、優しさ故に迷わざるをえない主人公の性格を物語っているのである。彼が自信がないのは、常に相手のことを考えているため、自分が正しいと思うことを他人に押し付けることができないのである。「正しさは戦争を起こすこともある。しかし、優しさは…」というセリフが出てくる。この台詞はまさに俺の意を得たりだった。

昔は確かに「正」とか「勇」とか戦争につながりそうな名前が多かったように思う。しかし、この頃はめっきり減った。俺は先生なので、たくさんの学生の名簿を見ているが、「翔太」とか「裕樹」とか可愛い系の優しさを感じさせる男の子の名前が増えてきた。こういう名前が増えてきたことは、歓迎すべきことなのだろう。こういって中村先生に失礼のようだが、この映画の主人公が、「優人」にしようかと迷いつつも、息子に「正」という名前をつけるのは、この主人公が純粋に正しいものを求めているけれど、その純粋さゆえに何が正しいか判断できないことを示していて、正しさを否定するという事ではない。それは誤解しないでほしい。

映画自体は、笑わせるコメディで、最後の

方がちょっとダサいのだが、見ていて、飽きさせない。心温まる、楽しい映画に仕上がっている。

この原稿が出る頃、俺は 53 歳になっているはずだ。「あなたもうおじいさんなんだから」と母は電話で言う。俺は阿部寛と同年代なので、27 歳くらいの子供がいて、もう孫がいても不思議ではない。昔だったら、人生 50 年。おじさんからおじいさんへの移行期である。母は、俺が女性恐怖であることはわかっているから、俺が結婚することは期待していない。ただ、「50 にもなった人がコンビニなんかで何もかも済ませるみたいな生活しているのかと思うと悲しくなる」らしい。今の俺は息子代わりの付き合いをしてくれる元教え子やもう 15 年以上の付き合いの大親友もいる。あれこれ相談に乗ってくれる人も大勢いるから、それほど惨めなわけじゃない。コンビニで買い物するのは仕事が忙しくて、他のところに行くゆとりがないからだ。

もうすぐ誕生日だ。母に誕生日のプレゼントは孫の手をくれないかと頼んだ。年取ってきて肌が乾燥してきたせいか、この頃背中が無性にかゆい。「孫の手なんか郵送料の方がかかっちゃうじゃないの」と母。でも家族の贈り物だから、大事に使うよ。家族を持つことはできない男だけども（笑）。



1. ト라우マはなくなるものなのか。

「あれ、この人!？」

二条駅に置かれていたチラシで、岸見一郎さんの写真を偶然初めてみた俺は驚いた。岸見さんといえば、『嫌われる勇気』が大ベストセラーで、ドラマ化もされて、今やスター的な存在の人である。俺自身もこの本を2年前に読んだ。

岸見さんの専門であるアドラー心理学は、トラウマを否定するので、トラウマの真只中にいる人にはあまりお勧めできない。しかし、ある程度トラウマが癒えてきて、一歩前に踏み出そうと思っている人には啓発本になるだろう。普通の人にはアドラーの境地に達することはできないけれど、新しい視点を与えてくれる。俺は色々な本の読み過ぎで、よほどの本でもない限りは刺激を感じなくなってしまっているが、この本に関しては反発を感じながらも、ぐいぐい最後まで読まされたものだ。

アドラーは「トラウマにとらわれる人は、過去から抜け出したくないから、それをトラウマのせいにしてしているのだ」と主張する。確かにこの主張は部分的には当たっていて、俺なんかは耳が痛い。俺は女性と付き合わないことの理由を若い時代のトラウマのせいにしてしまっている。付き合う努力はしていない。ただ、俺がここまで来るのには、凄まじいばかりのトラウマとの葛藤があったことはわかって欲しい。俺は大学に入ってから34年間、トラウマを克服しようと日々頑張ってきた。しかし、トラウマを刺激するものは常に周りに山のようにあり、それが過去を忘れようとする俺の心を妨害するのだった。

『失われた時を求めて』の主人公は、マドレーヌを食べたことがきっかけで、過去を回想する。俺だって、一日に何度も、些細な刺激で過去が蘇ってきて、やるせない気持ちになる。その刺激にかき乱されないくらいの別の刺激がある場所に入るのが一番いいのかもしれない。例えば外国で暮らすとか……。でも、現実的にそれは不可能なのだ。

『嫌われる勇気』の後も、『幸せになる勇気』など、岸見さんの活躍は続いているが、まさかこの人と顔見知りだったなんて！！俺が岸見さんと会ったのは20年ほど前、ある心療内科の女の先生のところだった。そこで受付をなさっていたのが岸見さんだった。他人の空似かと思い、ネットで調べたのだが、やはり間違いない。あの時に白い開襟シャツで受付にいた、小柄で、おとなしい男性。当時、岸見さんは40くらいだったはずだが、俺は岸見さんを見ながら、こんなさやかな仕事で生活ができるのかと思っていたものだ。俺はあの当時、お金がなくて苦労していたので、自分を岸見さんに投影させていた。岸見さんを見ながら、俺もこういう生き方がいいのかと思ったものだった。市井の片隅で生きる人にはそれなりの清々しさがある。岸見さんは、京大の大学院を出てはいるのだが、これまで大学の世界で出世したことはなかった、それは岸見さん自身も本の中で語っている。

とはいうものの、この『嫌われる勇気』のブームが起きたことで、岸見さんは大金を手にしただろうし、大学からもいくらかでも仕事の話が来ているだろう。岸見さんは60になって、大輪の花を咲かせたのだった。俺は53歳だ。岸見さんの年齢に近づいている。これから先にどういう人生が待っているのか。泡よ

くば、岸見さんのように大器晩成でこれまで勉強してきたものを花開かせたいという思いもある。その一方で、そうならなかった場合でも、後悔しない、人生の秋を終えたいのだ。

2. 強迫症との日々

50代になって、持病の強迫症は少しずつ治っている。それは一つには40代の頃ほど意欲的ではなくなってきたからだ。

子供の頃から劣等感の塊だった俺は、それを克服するために仕事や水泳や様々なことを頑張った。強迫症がこれまでの俺のエネルギー源になっていたのだった。これもしなきゃ、あれもしなきゃ、ガンバラなきゃ、まだまだ努力が足りない、そういう思いで生きてきたため、強迫はどんどんエスカレートしていき、とりわけ30代の頃は大変だった。一時期は幻聴が聞こえると感じることもあった。思えば、あれは岸見さんと会った頃、森田療法の病院にまで出かけたものだった。そのあと、強迫が原因で、メンズリブの人たちと喧嘩になり、仕事も減って極貧状態だった頃、関西カウンセリングセンターに通った。そして、そこで出会った先生が優秀な先生で、多少強迫との折り合いはついたものの苦しみは続いた。その先生からも、「酷な言い方だけど、強迫はそっとしておくしかないから」と言われたものだった。ここから俺の第2フェーズの始まりだった。唯識、認知療法、様々な本を読み、強迫の病と暗中模索の闘いの日々が続いた。幸い、40代になって、仕事も増え、収入も増えたので、心にゆとりができた。自分の本も出せて、友人も増え、自分に自信がついた。そして50代、第3のフェーズがやってきたの

だ。もう 53 だし、女と付き合えないこと以外はほとんどの悩みが解決した。もうそこまで頑張ることもないか。もう本も 2 冊出せたし、仕事もたくさんしてきた。俺がこの世に生を受けた証は十分残せた。これからは休むことも考えなくては！ と思うようになり、50 になると気力や体力がぐっと落ちた。そのことが強迫症の治癒にとってはプラスだったのだ。年をとるのは悪いことじゃない。

ゴールデンウィークのイブ。4 月 28 日（金）の夜。俺はまだ 30 代の若い男の先生たちと焼肉を食べに行った。研究者としてまだこれからの年齢の人たちである。こういう先生たちに誘ってもらえるのは嬉しいけれど、20 くらい年齢が違っている俺はなんとなく寂しくもなる。彼らには未来があるしなあ。その一方で、この人たちはまだまだ先が長いから、山あり谷あり、様々なドラマが待ち受けているだろう。それを乗り越えていくのは大変なことだろうと不憫になったりもする。俺の方はもう終活の時期に入ろうとしている。もう俺の役割は終わろうとしているのだという気持ちもあって、ホッとしたりもするのだった。

3. 悶々とした休日

翌日 4 月 29 日（土）は午前中から映画を見た。映画を見る直前に携帯にメッセージがきて、ある男性から屋外焼肉をするから来ないかというメール。しかし、映画は午後 2 時からまで終わらない。それに、彼は俺がケーキを買ってきてくれることを期待しているはずだ。映画が終わった後ケーキ屋まで行って、それから行くというのはしんどい。昨日の夜

の疲れも残っていた。彼が住むところはインテリ貧乏みたいな人ばかりが住んでいる昭和レトロな小さな家が立ち並ぶ界隈である。いくら家賃がかかっているのか。京都は昔から京大生だと安くしてくれる大家さんがあるとは聞いているが、そういうタイプのところみたいで、大家さんは家賃収入がなくてもやっていけそうなおばあさん。善意で気に入った人に貸しているみたいだった。だから、家賃はマンションよりも安いのだろうけど、贅沢できるような経済状態の人たちではない。その代わり生活能力はある人たちなので、自分で美味しいものを作って、それを持ち寄って屋外パーティーをたまに行うのだった。俺は自分では作れないからケーキを買っていく。何年前だったか、初めてケーキを持って行った日。大きな歓声が起きた。ケーキをプレゼントしたくらいで、あそこまで喜んでもらったのは初めてだった。自分でケーキを焼くことはあっても、店でケーキを買うような人たちじゃない。外食はしないし、コンビニにすら行かない人たちだ。店で売っているケーキなんて贅沢品なのである。貧乏だけれど、皆それぞれに個性的だし、世間にとらわれない人たちだから、現実から逃れられて、暇つぶしに行くには楽しい。40 代の頃だったら無理してでも行っていたかもしれない。でも 50 を過ぎた今では、体のことを考えなくては仕事に響いてしまう。前の週、金曜日の午前に休講している。その前の月曜日に仕事が終わった後、友達に会いに大阪に行ったのがまずかったのだろう。火曜日の朝から仕事なのに無理してしまった。そのため、体調が悪化してしまっ、日ごとに悪くなっていき、金曜日の午前は発熱だった。

俺は年の割に仕事をし過ぎている。しかし、俺のような非常勤は能力給ではなく時間給なので、お金のためには仕事をたくさん入れるしかない。あと 5 年くらいは今のペースで頑張らなきゃいけないだろう。

その一方で、春休みや夏休み、週末などは時間を持て余してしまう。映画やスポーツクラブに行っても、まだ時間があって、寝るしかない状況に陥る。平日は仕事ばかりしていて気持ちを張り詰めているため、張り詰めているのが普通の状態になってしまっていて、休日だと時間の潰し方がわからない。起きているのもしんどい。俺の神経は常に緊張していて、何も考えていない時間がないし、いつも何かを心配しているのだ。屋外パーティーは断って、映画が終わった後、俺は家に帰って、大学の名簿にそれまで溜まっていた出席カードから学生の出席状況を転記した。しかし、それでも時間は過ぎない。俺はそういう時、レンドルミンに頼ってしまう。寝た方が心配の中にかまれることがなくなる。1 錠飲むと後が足りなくなった時が困るので、真ん中で割って半錠だけのむのだが、眠れなくてももう半錠、結局は 1 錠になってしまう。

少し眠った後、近所のコンビニまで買い物に行こうと外へ出た。すると隣のマンションの前で運送屋のおじさんとばったり。今日の夜、荷物が届くことになっていた。

「あ、今日の夜、来ますよね？」

「はい、あります、あります。ちょっと待ってください」

おじさんは、ヴァンから荷物を出すとマンションの前で俺に渡してくれた。

「先生は何を教えていらっしゃるんですか」

「英語です」

「どちらの大学で？」

「まあ、あちこちなんですけど」

愛想のいいおじさんである。おじさんに俺が先生だということは話したことはないのだが、出版社から宛名に先生と書かれた荷物がしょっちゅう届くので、俺が先生だということは以前からご存知みたいだった。

まあラッキーだったなあと考えた。午後 7 時以降に配達を頼んでいたのも、夜は外出できないと思っていたのだが、これで外出できる。もう 1 本映画に行こうか。そう思いながらも、結局、俺は映画は思いとどまって、家で寝て過ごした。レンドルミンが入っているので、体はかったるい。特別見たい映画もないし、行っても集中できないだろう。

4 月 30 日（日）は、マッサージに行った。そもそもレンドルミンを飲みすぎているのが、身体が痛くなる一つの原因なのだが、仕方がない。マッサージを受けても効果のない日もあるのだが、この日は当たった人がよくて、十分お金を払う価値はあった。

それにしても、せっかくの休日なのに何を悶々と暮らしているのか。

4. レンドルミンと生きる。

レンドルミンがなかったら、俺は 1 日も暮らせない。俺がレンドルミンを飲み始めて 23 年の月日が流れた。この 23 年間、レンドルミンなしで寝た日はない。

先日、調剤薬局で訊かれた。

「余った分の薬とかないですか」

「ええ、余った分は捨てていますから」と俺は小さな嘘をついた。

いつも俺は早めに心療内科の診察の予約を

取る。薬が少なくなると心配になるということもあるのだが、実は時々多めに飲んでいるのだ。多めに飲む日は大概是休みの日である。そして、仕事場やレジャーの場にも、ある程度は携帯している。家に泥棒が入ったらという万が一のことを心配しているからだ。泥棒が入ったにしても、レンドルミンを盗む泥棒なんて聞いたこともない。レンドルミンが何の薬かすら知らないだろう。だけど、レンドルミンなしで生きれない俺は、とりわけ土日は不安だ。近くに休日診療所があるのだが、前に他の病気でいった時に、休日診療所は普通のクリニックとは違うから最低限のことしかしてくれなかった。休みの日に盗まれたら、どうしよう。眠れないまま過ごして、月曜日の仕事で失敗して、仕事を雇い止めになるのではないか。どうしても眠れない時は、救急車を呼んで、何か理由をつけて、レンドルミンをもらうしかないか。くれるだろうか。行きすぎた心配が走馬灯のように俺の脳裏を走っていくのだ。

レンドルミンは内科の病院でも処方してくれる最もポピュラーな眠剤で、仮に大量に飲んだとしてもそうそういつまでもは残らないと聞いている。多めに飲んでいることは先生に話しておいた方がいいのかもしれない。先生の方ももう 20 年以上もかかっている先生なので、俺の状態は十分わかっているし、もう気づいていらっしゃるのかもしれないけれど。

5. 終活

5 月 3 日（水）は一番仲良しの友達と温泉に行った。

「俺は、後 10 年か、15 年だからね」温泉の中で友人に話した。彼はまだ 40 代だ。40 代の頃はまだ長く仕事をしていかななくてはならないというプレッシャーがあった。しかし、最近はどうも逆算である。死ぬまでの年月を勘定しながら、後何ができるかということを考えながら生きている。もう思い残すことはない。自殺はしないけれど、いつ死んでも悔いは無しだ。後は残る人生を誰にも迷惑をかけずに生きていきたい。落ち着いた心で日々を味わって生きていきたい。

今、一番楽しいことは、かつての教え子と遊ぶことだ。と言っても、遊び相手になってくれるのは男の子たちである。女の子とは一対一では付き合わない。男の子だったら、仮に俺がゲイだったとしても、問題になることはまずない。しかし、女の子は難しい。俺は女性恐怖症なので、元々女の子と付き合いたいとは思わないので、その意味では女性恐怖症であることはいいことである。

しかし、ゲイでもないのに、女と付き合わない。そんな俺を世間は理解してくれない。カウンセラーについても、その部分はわからないのだ。先に書いた優秀な先生からは、俺が女嫌いになった経験は臨界期よりも後のことだから、時間が経てば治らなくはないのだということを言われたが、治る様子もない。でもアドラーが言うように俺は女性と付き合う勇気がないから、それをトラウマのせいに行っているのかもしれない。しかし、大学の頃の俺は女性恐怖でありながら、英文科を選んだ。あの頃は前向きだったから、女性が嫌いだからこそ、それを直さなくてはと思っていた。しかし、そんな単純なものではなかったのだ。またも浮いた存在だった俺は女性たち

の陰口の的となり、言い寄ってくる女もいたけど、彼女たちは男に頼ろうとする女ばかり。利用されているような気分だった。女性にありがちな他人の悪口と噂話、フェミニズムとレディファーストを混同するご都合主義、細かいことにうるさい瑣末主義。俺の女性恐怖はさらに深まっていったのだった。

ずっと長年俺にマッサージしてくれていた友人がこの秋に結婚する。相手の女性もマッサージ師なので、これを機に店を開くことも考えているようだ。男同士の友達の場合は相手が結婚しても付き合えるので、やはり男同士の方がいい。でも彼の幸せそうな様子を見ていると結婚も悪くないのかとは思ふ。だけど、女性に対して理詰めになってしまっている俺には、女性は生身のものではなく、恐怖の象徴と化してしまっている。この思考回路から抜け出せる日が来るのだろうか。来ても、来なくても構わない。人間には自分では変えられない運命があるのだ。

俺は 75 歳で死ぬ予定だ (笑)。俺は京都にこだわって生きてきた。京都の市外局番は 075。75 くらいだったら、まだ身体的自由も効くだろうし、寝たきりやアルツハイマーということもないだろう。綺麗に死ぬには最高の年齢のような気がするのだった。

6. ネタバレ注意

『追憶』(降旗康男監督・2017)

5 月 6 日 (金)。連休もいよいよ終わりのこの日観た映画は『追憶』である。富山を舞台に、少年時代の忌まわしい記憶に悩まされる男たちを描いている。

とりわけ印象深いのは、3 人とも妻がいる

ののだが、男たちの方が妻や子供にこだわっていることだ。これは彼らが家庭的に恵まれない環境で育っているからで、その代償行為ということなのだろう。

俺の人生もそうなのである。少年時代が孤独だったため、その代償を追いかけ続けている。岡田准一と小栗旬の共演でイケメンを主役にしてくれたことは嬉しいことだった。彼らでもトラウマを抱えているのだから、俺がトラウマを抱えているのもカッコ悪いことじゃない。

ネタバレになるのでこれ以上は書けないが、結局、3 人のトラウマはある女性を覗いて、誰にも明かされることなく映画は終わる。俺もトラウマを明かした女性は母だけだ。しかし、母にわかってもらうにも 20 年くらいかかっている。他の女性たちに明かしても女性にわかるような問題ではないので、逆に俺のトラウマは深まる。理解してくれない女性への憎しみも深まる。これは前にも書いたことだけど、これからは女性にわかってもらえないでも構わないと割り切って女性と付き合わなくては！

夜、やよい軒で夕食を食べていたら、突然携帯に電話。誰かと思ったら、東京で就職している教え子だった。京都に来ているから会わないかというのだ。突然過ぎて会えなかったのだが、俺には、こうやって京都に来た時に電話してくれる子がいる。彼は体育会のキャプテンだった子だ。やはり、男同士の方が楽しい。これって、ゲイ??? それはそれでいいか。人間全てを得られるものじゃないもの。女性は得られなかった代わり、俺は本も出せたし、京都での生活もえた。理解ある母や弟もいる。そして、俺と遊んでくれる教

え子の男の子たち。十分幸せを味わってきたのだった。

後は神様にお任せ。これからどういう未来が待っていても、俺はもう不幸じゃないのだ！！ あわよくば、男であるがゆえに傷ついた痛みに折り合いをつけること。それが俺の終活である。



1. トラウマの地への帰還

久々に里に帰った。九州新幹線に初めて乗った。京都から乗り換え込みで4時間弱である。昔は5時間くらいかかっていたから、確かに便利になった。とは言うものの、俺の方は昔に比べると体力が落ちている。4時間は長く感じた。退屈をしのぐために直木賞受賞の『月の満ち欠け』を帰省前に買った。お土産にバームクーヘンを京都駅で買った。車内販売では、シャーベットとアイスコーヒーを買ってしまった。出先から京都駅まで行くタクシー代が2500円くらい。新幹線が着いた後、駅から実家までのタクシー代が1000円くらい。なんかかんかでお金がかかるなあー。新幹線代だけでは済まないのだった。

しかし、1回は帰らなくては、あまりにも親不孝だと思っていた。俺は母とは毎日電話で話し、母は俺のFacebookも見ているのだが「私ももうすぐ80なんだから、たまには帰ってきてくれないと」と日頃漏らしていた。思えばもう3年くらい帰っていない。20代まではしばしば里帰りしていたが、30過ぎてからは少年時代のトラウマが逆流してきて、夏休みや正月であっても帰る機会は少なくなっていった。俺の里は去年地震が起きた街なのだが、地震の時も帰っていない。この連載にも何度も書いてきたけれど、俺にとって故郷はトラウマの地。故郷は遠きにありて思うものではなく、遠きにありて憎むものだったのだ。

「でも、それでよかったじゃないの。こっちに帰りたくないという思いが強かったからこそ、どれだけ辛くても京都に踏みとどまっ

て、ここまで来たんだろうから。」と母は言ってくれている。僕の母は母の鏡みたいな人なので、僕を理解し、受け入れてくれる。亡くなった父は、頼りない人だったが、根っからの善人ではあったのだ。とはいうものの、本当に色々なことがあった家庭だった。俺は15で心が壊れて、不登校になり、あの時は家族全員を戦争に巻き込むことにもなった。母も、俺が不登校だった頃は親戚たちの中でも肩身の狭い思いをしたはずだった。あの当時の不登校児はほとんど犯罪者だったのだ。しかし、その後、他の従兄弟姉妹や親戚たちにも、それぞれ不運や試練は起きて行った。たまたま俺は挫折の時期が早かっただけで、人間、40代、50代にもなってくれば、必ず大きな試練の経験はやってくる。

母はできる限り、昔のことは忘れて、前向きにと考えているみたいだった。去年の地震のことも母は前向きに捉えていた。実家はマンションの11階なので、相当被害はひどく、しばらくは大変だったらしい。被災金もほとんどなかったとのことである。「仕方がないわ。他にもっと大きな被害に遭っている人は大勢いるから」と母は言っていた。あれがあったことで、母が嫁に来る時に持ってきたタンスなどもすべて崩れたのだが、それはむしろ良かったのかもしれない。母は自分が死んだ後のことも考えている人なので、母が死んだ後、あんな要らないものがたくさんあったんじゃ、同居している弟が大変だろうと心配していた。いずれは捨てなきゃいけないと思っていたものが全部なくなった。それに住み始めて25年以上が過ぎて、ちょうどリニューアル時だった。壁紙も全て張り替え、一皮むけたように実家は綺麗になっていた。あの地

震で死んだ人だってたくさんいるわけだから、こんなことを言っては怒られるかもしれないのだが、我が家にとっては、災い転じて福となすというところだったのかもしれない。同じ出来事が起きても、そのことが良い方向への転機になる人と逆の人と両方いるのだ。

俺にとっては少年の頃のジェンダー教育が悪い流れへの大きな転機だった。小学校の時の女教師、中学の時の体育教師、不登校の時のカウンセラー、40年経った今でも、彼らの顔が俺の中に蘇ってきては俺を苦しめるのだ。そして、この長年のトラウマを「あなたが殴られたわけじゃない。脱ぐのが好きな男もいる」と返してきた例のカウンセラー。彼女の顔が思い浮かんで、再び、不快な気持ちが胸に湧き上がってくる。あの女の顔に思い切りビンタを食らわしてやりたいと思った。「同じことが起きても人それぞれ受け皿は違ういるんだよー。なんでカウンセラーが、それくらいのこと分らないんだよー」

タクシーで家にたどり着いたのは夜の11時過ぎ。弟はもう寝ていた。母と深夜までしばらく話した。普段電話で話しているから特別変わった話はない。地震の時の話は気分が悪くなるだけだから避けた。久々にあった母は元気だった。すっかり老けているかと思っていたらそうでもなく足腰も大丈夫だった。弱っているのではないかと心配していたのだが、母の様子を見ると、まだまだ元気でいてくれそうだ。おばあちゃんは92歳まで生きたわけだし、僕のところは父方も母方も女性の方は皆元気だ。男の人は早死にした人も何人もいるけれど、女性はやはりたくましい。

「来年80だから、そろそろ将来、どうするかも考えなきゃいけないわねー」と母は言っ

た。俺は地震が起きた直後、京都に来たらと母に話していた。弟は婚活中。もう40代半ばだからチャンスは少なくてなかなか決まらないけど、パートナーができれば、母はむしろ邪魔になるかとも思っていた。「でも、今更私が友達もいない街で暮らすというのは辛いと思うわよ。もう1回くらいだったら京都まで遊びに行けるかとは思うけど」

おそらく母の事だから、誰にも迷惑はかけずに死んでいくだろう。母は自分のことは二の次で、人の世話だけで生きてきたような人だった。しかし、60過ぎてから、たまたま友人の勧めで始めた仕事が成功して、世界中を旅行する事になった。それまで海外旅行すら行ったことがなかった人なのだが、60代以降は一気に青春時代で、自分の人生をエンジョイしたようだった。苦勞の多かった母が、たくさんのお楽しみを味わってくれたのは嬉しかった。俺の方も普通の人に比べれば大きく遅れはしたものの、徐々に生活は安定して行った。弟は家族思いのできた弟で、母のことは安心して任せられる。そういう母や弟を愛しながら、俺はまだこの町を憎んでいる。この町のお墓に入るのには抵抗がある。50を過ぎた今、真剣にどこに骨を埋めるのか考えている。この町で眠らないのは、弟や母に対して薄情だけど、しかし、この忌まわしい町で眠るのは……。様々なことが頭の中をよぎっていった。

2. なぜ、ジェンダーをわかってくれないの？

夏休みに入る前のことだ。大学の食堂で食事していると、突然ある男の子が俺に話しかけてきた。その子は前に俺の授業を取って

いたことがあるとのことで、ジェンダーの話を聞きたいみたいだった。話していると、たまたま俺と同郷だった。

「向こうはやはり、男が仕事頑張って、女がそれを支えるという考えは強いんです。男は男らしくという伝統が強いから、中学の運動会の時も、男子全員上半身裸にさせられて、踊らされて、ウォーとか言われるんですよ。ガリガリの子だっているのに気の毒だった。服着たまますりゃいいのにと思った」と話してくれた。

やはり偏見ではなかったのだ。

ちなみにこの会話は俺が先導したわけじゃない。俺は授業中にジェンダーの話はしているが、さすがに男の羞恥心の話はできない。この部分は、俺にとっては最もセンサティブなテーマである。レイプ訴訟を描いた『リップスティック』という映画の中で、アン・パンクロフト扮する弁護士が、ヒロインに「訴えたら、あなたは法廷でもう一度レイプされることになるのよ」という場面がある。忌まわしい経験を他人に話すというのはもう一度レイプされるのと同じ屈辱なのである。

夏休みに入る前、大学の控え室ではこういう話が起きた。「鴨川の水辺なんかを上半身裸で歩いている男の人いるけど、あれは女の人、どう思うのかね？ セクハラだと訴えられないのかなー」とある男性の先生が言い出したのだ。その先生はフランスに行かれていた経験のある人なのだが、フランスはヌーディストビーチがある一方で、公共の場で上半身裸になることは禁じられているというのである。へー、ヨーロッパに行ったことのない俺には新たな勉強だった。アメリカの男性だったら、どこでも、上裸になるので、欧米は皆そう

なのかと思っていたのだ。

ちょうど同じ頃、FBでこういうニュースがシェアされた。ある駅の前で、40代の女性が暑いからと下着になって体を拭いていた。これを公然わいせつだと訴えられたのだという話題である。これに対して、ややフェミニストがかった俺の女性の友人たちは「いいじゃないの。それくらい」というコメントをしていた。

なぜ、こういう非対称が存在するのか。女が脱ぐのは禁止される。男は自由に脱ぐこともできるが、強制的に脱がされるケースも出てくる。脱ぎたい女もいるし、脱ぎたくない男もいる。例のカウンセラーの「その時一緒に脱がされた子がいるじゃないですか」というセリフを思い出した。何度も繰り返すが、強姦と和姦では違うんだよ！！！！ ジェンダーに強姦されているのは女だけじゃないんだということ、そのことになぜ社会は気付いてくれないのか????

3. これからの人生

痛恨の思いを抱えたまま、人は一生を終えるのだろうか。

小林麻央さんが乳がんで亡くなって、その後も芸能人たちがステージ4であることを明かすケースが増えてきている。昔は日本ではひた隠しにするケースが多かったのだけど、今は告知を望む人が増えているようだ。

俺はどうだろうか。

やはりステージ4だと言われたら、相当にショックだろう。その一方でこれからの人生で何かすることがあるのかという気持ちも湧いてくるのだ。俺は数年前までは心の中で整

理がつかないものがたくさんあった。それが俺が勉強する原動力となってきた。自分の中のモヤモヤを解き明かすためにありとあらゆるカウンセリングを受け、本を読み、社会活動にも参加して、日々を120パーセントの力で生きてきた。ところが、最近になって気力が湧かないのだ。

思えば、若い頃は悩みの塊だった、不満の塊だった、不幸に紛れて、死ぬことなんて考えなかった。ところが今は幸せだ。俺は、考えてみれば、家族には恵まれている。男の友人にも本当に恵まれている。若い頃の俺からは考えられない。どんなに頑張っても誰からも相手にしてもらえなかった俺だが、今は相手にしてくれる人はたくさんいる。しかも、自分が親しくなりたいと思っている人と親しくなれる。もう10年くらいはそういう状況が続いている。女性嫌いは相変わらず治らないし、セックスレスの日々だが、人間関係は満ち足りている。ほとんど生活に不満はない。

一つだけ不満があるとすれば、男性ジェンダーの問題を誰も認めようとしないことである。これが少しでも社会の人にわかってもらえるのだったら、残された人生で俺は何かしたいと思う。しかし、今でも男性ジェンダーをめぐる状況は20年前と大して変わっていない。俺が70代まで頑張っても、状況は大して変わらないのではないかと諦念の思いを抱かずにはいられないのだった。

4. 断捨離

昔のトラウマは捨てなくてはならないのだろう。社会にそれをわからせることは無理なのかもしれないのだ。

久々の郷里では、マンションの窓から見えていたお城の天守閣がなくなってしまうていた。顔がなくなったような城になっていた。石垣も相当崩れているとのことだったが、天守閣の方はあと2、3年で修復される。しかし、石垣はあと20年以上かかりそうとのことで、「私が生きている間には完全には修復しないわね」と母は話していた。

俺の人生もそうなのだ。不登校から40年ぐらい過ぎて、顔の部分は取り戻したのかもしれない。しかし、裾にある石垣はまだちゃんとしていない。だからこそ、俺は女性と付き合い合えないし、失くしたものを修復するために、同一化できる男性を探し求めているのだ。

しかし、大抵の男性は俺ほど男の規範から外れた男性ではないし、俺ほどひどいジェンダー教育を受けていない、俺ほどジェンダーへの憎しみを経験していない、したがって、俺の気持ちはわかってくれても、それについて語り合うところまではいかない。人間って、孤独だなあー

とりあえず、要らないものは、捨てていこうと今の俺は考えている。断捨離である。

最初に断捨離したのは、日本育英会（日本学生支援機構）の借金だった。俺は博士課程の頃に借りていたので300万くらいの借金があった。払うお金のゆとりが全くなかった時代もあったし、定期的に払い始めてもからも1万2千円ずつくらいしか払っていなかったもので、なかなか返済は終わらなかった。その残金がついに7万5千円になったので、ちょっとでも早く身軽になりたいと7月の27日の引き落とし分ですべてを払った。これで大学にまつわる様々な怨念は終わりにしなくてはならない。

次にクレジットカードも使わないものは整理した。掃除も少しずつやっていて、できる限り、要らないものは捨てた。

そんなある日。突然、大阪に住む友人が俺の部屋に遊びに来ることになった。彼とは15年くらい前からの親友である。まだ一度も俺が今住んでいるところに来たことがないので、一度来ないかとかねてから話していた。その彼が突然来ることになった。俺の部屋は片付いてはいないが、学生の頃みたいにひどい状況でもない。

ところが、である。彼の目から見ると俺の部屋は足の踏み場もないとを感じるらしい。「要らないものを置くからですよ」ということになり、彼は気持ちいいくらいにどんどん捨てていき、靴箱の空いている部分にDVDを入れ、カゴの中に本を入れてベッドの中にしまい、要らない本などは片っ端から捨てて、掃除機をかけ、1時間ほどで部屋は見違えるほどに綺麗になった。

彼と俺は同業なのだが、彼と俺の違いは、彼は要らないと判断したらすべて気前よくゴミ箱に捨てていくところである。俺はというと、いつだって迷う。もっと分別をきちっとしなきゃいけないのではないのか？これは個人情報だからシュレッダーにかけなくてはならないのではないのか？これは将来使うことがあるのではないのか？ そんなことばかり考えるので、掃除は進まない。どんどんモノや紙が増えて、鬱陶しい状況になってしまっている。

部屋が汚いのは、俺の心の混乱のメタファーなのだ。そういえば、学生の頃からそうだった。俺は悩みがあるときは何も掃除なんかできなかった。彼の手際よい掃除を見ている

と、劣等感を掻き立てられた。学生の頃に比べれば綺麗にするようになったと思っていたんだけど、第三者の目から見れば、まだまだカオス。これからは掃除も頑張らなくては！！！！心が落ち着かないから掃除しないのではなく、掃除をすれば心は落ち着くということなのかもしれないのだ。2年ほど前から人間関係のトラブルが相次いでいたのだが、そのおかげで悪い人間関係も整理できた。不要なものは全て捨てていって、最後に残ったものを大事にしよう。全て不要なものを断捨離すれば、さて、何が残るだろうか。

俺が女性と付き合わないのは、女性の前では自然体でいれないからだ。でも、これからは自然体で振る舞おう。そして、それを受け入れてくれない女性だったら、俺の方が断捨離する。そう割り切れば、女性との付き合いも強くなるだろう。

5『ぼくは明日、昨日の君とデートする』 (三木孝浩監督、2016)

この手の映画は苦手だ。女性に縁のない俺だから恋愛ものは基本的に嫌いだというものもあるが、とりわけこの手の恋愛ものは全くのファンタジーなので、ついて行かれなくなる。この頃、日本映画はファンタジー調が主流になってきたような気がするのだが、これは何故なのだろう。

嫌いなタイプの映画だけど、レンタルしたのは、まず何よりも京都が舞台であるということだった。京都がどう描かれているのか、京都在住歴 35 年近くなってきた俺には関心あるところだった。

この映画、京都を舞台にしていながら、京

都である必然性は全くない話であり、ただ京都はバックグラウンドとして使われたのだろう。観光映画というところだろうか。そもそもこの映画の不備は、京都弁、あるいは関西弁をしゃべる人が全然出てこないこと。主役の二人はもとより、脇の人物に至るまで東京弁で話すというのは、どう考えても変である。また主役の二人が三条大橋で待ち合わせして、みなみ会館で映画を見るというのも変(笑)！場所が全然違っている。ただ、こういう不備がわかるのは、俺が京都で長年暮らしているからで、つくづく京都のおじさんになったんだなあと確信して、その意味では満足だった。俺はずっと京都に新しい居場所を見つけようと思って、頑張ってきたのだから。

話は『ベンジャミン・バトン』風で、主役の二人の時間が逆行していく話である。これは男と女のメタファーなのかもしれない。男と女は交われる瞬間もあるけれど、交わっていないのである。あの例のカウンセラーも、男性ジェンダー＝男と見ていた。女性である彼女には、男がカッコつけるために、とりわけ女性の前ではどれだけ無理しているのかわからなくて、自然体で生きる俺みたいな男に会うと逆に面食らってしまったのだろう。

俺は女嫌いだから、たまには女を面くらわせるのもいいかと思おう。そう割り切ってしまえば、腹も立たないのかもしれないのだ。

やはり、男であることは痛いです。